城ノ内遺跡徳島城跡
お花畠地点発掘調査報告書

（県武道館・弓道場に伴う発掘調査報告書）

昭和63年 3 月

徳島県教育委員会文化課

序

本報告書は，昭和68年に本県で開催される国民体育大会に関連した徳島県武道館・弓道場建設工事に伴い昭和61年度に発掘調査を，62年度に整理作業を実施し，その結果を『城ノ内遺跡』としてまとめたものであります。

城ノ内遺跡は，徳島城の通称「お花畠」と呼ばれた徳島城に関係した遺跡であります。この遺跡から出土した遺溝・遺物は，文献資料・絵図との比較や他県との物資の交易関係が数多く判明した貴重な学術資料となるものと思われます。

この報告書を広く活用していただき，考古学の発展や，埋蔵文化財に対する理解を戴ければ幸いと存じます。

終わりになりましたが，徳島城の研究者であります阿波郷土会副会長の河野幸夫先生から玉稿をいただきましたことに厚く感謝申し上げ，序にかえさせていただきます。

昭和63年３月31日

徳島県教育委員会

教育長　松　本　冨　夫

例　　言

1　本書は徳島県武道館・弓道場建設に伴う発掘調査報告書である。

2　発掘調査は徳島県教育委員会体育保健課の要請を受けて教育委員会文化課が実施した。

3　発掘調査は昭和61年６月２日から同年12月27日まで行った。整理作業は昭和62年５月１日から同年10月31日まで行った。

4　収録した資料の実測は全員で行った。写真撮影は松永が行った。

5　本書で用いた絶対高は標高を表し，方位はすべて磁北である。

6　土色の判定に際しては，小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1967によった。

7　第１図の地図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地図『徳島』を転載したものである。

8　今回の調査において下記の方々より御指導，御教示を受けた。

立花博，河野幸夫，大橋康二，岡内三眞，一山典，岡本和之，福原健生，山川浩美，福家清司，菅原康夫

また徳島城に関する絵図・文献については，阿波郷土史学会副会長・河野幸夫氏より玉稿を頂いた。

9　発掘調査はつぎの組織で行った。

調査主体　徳島県教育委員会文化課

課　　長　桝田　努

課長補佐　清水　博

庶務係長　富積忠男（当時），大八木芳子（主事）

文化財保護班長　中田　正

埋文事務担当　後藤忠雄

調査担当　松永住美（社会教育主事）

文化財調査員　大宮恵美子（当時），金光利久（当時），森　弘文（当時），松島件信（当時）

10　整理作業は次の組織でおこなった。

課　　長　桝田　努

課長補佐　清水　博

埋文事務担当　後藤忠雄

庶務係長　天野尊温（庶務係長），大八木芳子（主事）

整理担当　松永住美（社会教育主事）

文化財調査員　松岡　功・麻植宣久・細井康宏・竹治寿人

作 業 員　馬場史子・村上弘代・赤澤恵美・近藤詩恵

11　本書は松永が編集・執筆した。

12　なお予算の都合上，図版，写真は一部割愛せざるを得なかった。

城ノ内遺跡本文目次

1　遺跡の位置・環境・歴史 …… 1

2　調査のいきさつと経過 …… 2

3　基本層序

(1)　的場地点 …… 8

(2)　射場地点 …… 8

(3)　武道館地点 …… 12

4　遺　　構

(1)　門　　跡 …… 15

(2)　築地跡 …… 19

(3)　石垣溝跡 …… 21

(4)　池　　跡 …… 21

(5)　築堤跡 …… 23

(6)　船着き場 …… 24

(7)　護岸用板列跡 …… 28

(8)　その他の遺構 …… 29

5　遺　　物

(1)　的場地点 …… 33

(2)　射場地点 …… 37

1　第1層 …… 37

2　川跡覆土上部 …… 37
3　川跡覆土下部 …… 43
4　築地肩部 …… 52
(3)　武道館地点 …… 58
1　第 1 層 …… 58
2　川跡覆土上部 …… 63
3　川跡覆土中部 …… 82
4　川跡覆土下部 …… 96
5　護岸板列跡 …… 115
6　築堤新段階・船着き場 …… 124
7　築堤中段階 …… 138
8　築堤古段階 …… 140
9　築 地 跡 …… 142
10　石垣溝・池跡 …… 148
11　門　　跡 …… 152
12　攪　　乱 …… 154

6　調査のまとめ …… 160

7　文献からみた徳島城御花畠 …… 168

図　版　目　次

第 1 図　城ノ内遺跡周辺の主要遺跡…… 2
第 2 図　的場地点東壁及び射場地点北壁東部分土層図…… 9
第 3 図　射場地点北壁西部分及び東壁土層図…… 11
第 4 図　武道館地点東壁土層図その 1 …… 13
第 5 図　武道館地点東壁土層図その 2 …… 14
第 6 図　遺構配置図……折り込み
第 7 図　的場地点遺構実測図…… 17
第 8 図　射場地点遺構実測図……折り込み
第 9 図　武道館地点遺構実測図その 1 ……折り込み
第 10 図　武道館地点遺構実測図その 2 ……折り込み
第 11 図　門跡実測図…… 19
第 12 図　築地跡実測図……折り込み
第 13 図　石垣溝跡平面図及び断面図…… 22
第 14 図　池跡実測図…… 23
第 15 図　船着き場平面図及び断面図…… 25
第 16 図　船着き場遺物出土状況図…… 26
第 17 図　護岸用板列平面図及び断面図…… 27
第 18 図　船着き場新段階平面図及び断面図…… 28
第 19 図　的場地点遺物実測図その 1 …… 34
第 20 図　的場地点遺物実測図その 2 ・射場地点第 1 層遺物実測図…… 36
第 21 図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その 1 …… 38
第 22 図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その 2 …… 40
第 23 図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その 3 …… 42
第 24 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 1 …… 44
第 25 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 2 …… 45
第 26 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 3 …… 47
第 27 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 4 …… 48

第 28 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 5 …… 50
第 29 図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その 6 …… 51
第 30 図　射場地点築地肩部遺物実測図その 1 …… 53
第 31 図　射場地点築地肩部遺物実測図その 2 …… 55
第 32 図　射場地点築地肩部遺物実測図その 3 …… 57
第 33 図　武道館地点第 1 層遺物実測図その 1 …… 59
第 34 図　武道館地点第 1 層遺物実測図その 2 …… 61
第 35 図　武道館地点第 1 層遺物実測図その 3 …… 62
第 36 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 1 …… 64
第 37 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 2 …… 65
第 38 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 3 …… 68
第 39 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 4 …… 69
第 40 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 5 …… 71
第 41 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 6 …… 72
第 42 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 7 …… 75
第 43 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 8 …… 76
第 44 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その 9 …… 77
第 45 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その10 …… 80
第 46 図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その11 …… 81
第 47 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 1 …… 83
第 48 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 2 …… 84
第 49 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 3 …… 87
第 50 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 4 …… 88
第 51 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 5 …… 90
第 52 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 6 …… 91
第 53 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 7 …… 92
第 54 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 8 …… 93
第 55 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その 9 …… 94
第 56 図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その10 …… 95
第 57 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 1 …… 98

第 58 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 2 …… 99
第 59 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 3 …… 101
第 60 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 4 …… 103
第 61 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 5 …… 104
第 62 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 6 …… 106
第 63 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 7 …… 108
第 64 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 8 …… 109
第 65 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その 9 …… 110
第 66 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その10 …… 112
第 67 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その11 …… 114
第 68 図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その12 …… 115
第 69 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 1 …… 117
第 70 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 2 …… 119
第 71 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 3 …… 120
第 72 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 4 …… 121
第 73 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 5 …… 122
第 74 図　武道館地点護岸板列遺物実測図その 6 …… 124
第 75 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 1 …… 126
第 76 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 2 …… 128
第 77 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 3 …… 130
第 78 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 4 …… 131
第 79 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 5 …… 133
第 80 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 6 …… 134
第 81 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 7 …… 136
第 82 図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その 8 …… 137
第 83 図　武道館地点築堤中段階遺物実測図 …… 139
第 84 図　武道館地点築堤古段階遺物実測図その 1 …… 141
第 85 図　武道館地点築堤古段階遺物実測図その 2 …… 142
第 86 図　武道館地点築地跡遺物実測図その 1 …… 144
第 87 図　武道館地点築地跡遺物実測図その 2 …… 146

第 88 図　武道館地点築地跡遺物実測図その 3 …… 147
第 89 図　武道館地点石垣溝・池跡遺物実測図その 1 …… 149
第 90 図　武道館地点石垣溝・池跡遺物実測図その 2 …… 151
第 91 図　武道館地点門跡遺物実測図…… 153
第 92 図　武道館地点攪乱遺物実測図…… 155
第 93 図　古銭及び底裏面銘拓本その 1 …… 157
第 94 図　古銭及び底裏面銘拓本その 2 …… 158
第 95 図　御花畠差図写…… 170
第 96 図　御花畠と助任川岸線の変遷…… 174
第 97 図　御花畠庭園絵図写…… 176

表　目　次

第１表　的場地点出土遺物観察表…… 177
第２表　射場地点第１層出土遺物観察表…… 179
第３表　射場地点川跡覆土上部出土遺物観察表…… 180
第４表　射場地点川跡覆土下部出土遺物観察表…… 184
第５表　射場地点築地肩部出土遺物観察表…… 194
第６表　武道館地点第１層出土遺物観察表…… 199
第７表　武道館地点川跡覆土上部出土遺物観察表…… 204
第８表　武道館地点川跡覆土中部出土遺物観察表…… 223
第９表　武道館地点川跡覆土下部出土遺物観察表…… 235
第10表　武道館地点護岸板列出土遺物観察表…… 254
第11表　武道館地点築堤新段階・船着き場出土遺物観察表…… 263
第12表　武道館地点築堤中段階出土遺物観察表…… 276
第13表　武道館地点築堤古段階出土遺物観察表…… 278
第14表　武道館地点築地跡出土遺物観察表…… 281
第15表　武道館地点石垣溝・池跡出土遺物観察表…… 285
第16表　武道館地点門跡出土遺物観察表…… 290
第17表　武道館地点攪乱出土遺物観察表…… 291
第18表　出土陶磁器産地別対比表その１…… 161
第19表　出土陶磁器産地別対比表その２…… 162

写 真 図 版 目 次

1　上・的場地点掘り上げ状況，下・射場地点掘り上げ状況…… 297
2　門跡検出状況…… 298
3　上・築地跡掘り上げ状況（東より撮影），
　　下・築地跡基礎部掘り上げ状況（西より撮影）…… 299
4　上・石垣溝跡検出状況(西より撮影)，下・池跡掘り上げ状況(西より撮影）…… 300
5　上・船着き場掘り上げ状況（東より撮影），
　　下・船着き場掘り上げ状況（西より撮影）…… 301
6　上・護岸用板列検出状況（西より撮影），
　　下・護岸用板列検出状況及び木製品出土状況（北東より撮影）…… 302
7　上・階段状船着き場検出状況（東より撮影），
　　下・階段状船着き場検出状況（北より撮影）…… 303
8　上・的場地点，下・射場地点川跡覆土上部その１…… 304
9　上・射場地点川跡覆土上部，下・射場地点川跡覆土下部その１…… 305
10　射場地点川跡覆土下部その２…… 306
11　射場地点築堤肩部…… 307
12　武道館地点第１層…… 308
13　武道館地点川跡覆土上部その１…… 309
14　武道館地点川跡覆土上部その２…… 310
15　武道館地点川跡覆土上部その３…… 311
16　武道館地点川跡覆土中部その１…… 312
17　武道館地点川跡覆土中部その２…… 313
18　武道館地点川跡覆土下部その１…… 314
19　武道館地点川跡覆土下部その２…… 315
20　武道館地点川跡覆土下部その３…… 316
21　上・武道館地点川跡覆土下部その４，下・武道館地点護岸板列その１…… 317
22　武道館地点護岸板列その２…… 318

23　武道館地点築堤新段階．船着き場その１…… 319
24　武道館地点築堤新段階．船着き場その２…… 320
25　上・武道館地点築堤中段階，
　　中・武道館地点築堤古段階，下・武道館地点築地その１…… 321
26　上・武道館地点築地その２，下・武道館地点石垣溝．池跡…… 322
27　左上・武道館地点門跡，中・攪乱，右下・その他…… 323

1．遺跡の位置・環境・歴史（第1図）

本遺跡は，徳島市徳島町城ノ内6番地の1に所在し，標高61.7mの城山を中心にして北に助任川，南に新町川・旧寺島川，東に福島川に囲まれた吉野川デルタによって形成された三角洲上に立地し，自然の要塞になっている徳島城の西北端の標高2.6mに位置している。以前から徳島城の庭園があったといわれ，通称「お花畠」とよばれているところである。

遺跡の最高位は，標高1.8mであり，それより上は旧徳島刑務所の建設と現在の公園の建設の際に削られているため，徳島城が作られた当時の地面の高さは不明である。

周辺の遺跡は，この城山のふもとに縄文時代後期から弥生時代前期の土器・石器が出土した城山貝塚（註1）が5箇所あります。その後，この付近は河川の氾濫が激しかったのか遺跡の明確な所在は確認されてない。尚，徳島城建設に伴って発展した城下町の名残を示す鷹匠町，寺町，大工町，幟町，紺屋町などの地名が残っており，文献・絵図等によっては解明しているが，発掘調査による実態の解明はなされていない。

文献の上から見ると，平安時代後期に「南助任保」として荘園がつくられたと記録されており，鎌倉時代の建仁年間には春日大社の荘園となっていた記録が見られる。室町時代に入ると，細川頼之により渭山城が築城され，この当時から徳島城における防衛の要として重要な地点としての位置づけがなされていたようである。その後，蜂須賀家政によって天正13年（1585）に徳島城（註2）が築城され，阿波藩の中心として幕末まで繁栄し，明治7年に城が全国に先駆けて取り壊されたが，城下町は徳島市となって本県の中心の都市として現在に至っている。

第1図　城ノ内遺跡周辺の主要遺跡

1.城ノ内遺跡　2.城山貝塚　3.興源寺(蜂須賀家墓所)　4.万年山(蜂須賀家墓所)
5.養老軒(家老別邸)　6.延生軒(家老別邸)　7.大谷御殿(蜂須賀家別邸)

2．調査のいきさつと経過

昭和68年に本県において国民体育大会が開催されることとなり，それに伴って老朽化した武道館と弓道場の建替えを行うことになり，この建替えに先立って徳島城跡である城ノ内遺跡の発掘調査を実施することとなった。城ノ内遺跡の名称は，通称お花畠といわれているが，当該地の字名である城ノ内をそのまま遺跡名とした。

本遺跡は，調査するまでは徳島市公園緑地課が管理する公園であったが，それ以前は昭和48年迄徳島刑務所が建てられていた。

調査はまず幅１ｍのトレンチ調査を行い，その結果に基づいてユンボでもって埋土を除去した。その際に，刑務所の基礎とすぐ南側に建っている体育館建設の際のコンクリートパイル・鉄筋などを埋めた攪乱が数多くみられ排土直後の状態では徳島城に伴う遺構は殆ど壊されている感じであった。

調査は，まず弓道場の的場の部分を行い川跡を検出したあと，射場の部分の調査を行って築堤跡・門跡・川跡を検出し，最後に武道館の部分の調査を行い築堤跡・門跡・船着き場跡・護岸用板列跡・築地跡・溝跡・石垣溝跡・池跡・柱穴跡などを検出した。調査面積は３か所を合わせて約1,500㎡である。

調査の途中，すぐ北側を流れる助任川による湧水が激しく，しかも埋め立ての山土が地表下３ｍを超えるところもあり，途中で１回ユンボによる山土の掘削と排土の除去を行った。更に，土中にはガス管と6000Ｖの高圧電線が埋設されており相当困難な調査であったが，当初の予定どおりの期間に終了した。

なお，ガス管と高圧電線が埋設されている部分は昭和62年に工事の際に立会調査を行った。

そのあと，昭和62年５月から10月にかけて出土した遺物や遺構の図面の整理作業を行い本報告書を作成した。

以下，調査日誌の概略を記する。

調 査 日 誌 抄

昭和61年６月２日　　調査準備開始

昭和61年６月４日　　調査現地視察

昭和61年６月19日	プレハブ建設立会
昭和61年６月21日	資材運搬・プレハブ内の準備
昭和61年６月23日	資材点検・水準点確認
昭和61年６月24日	座標軸設置・サブトレンチ設定及び掘り下げ開始・水準点設定（ＢＭ１・2.262m水飲み場の角）
昭和61年６月25日	サブトレンチ地表下1.55mまで掘り下げ。地表下１m前後で瓦・陶磁器が出土。遺構の所在することが確認された。
昭和61年６月26日	射場部分第一層掘り下げ
昭和61年６月27日	ユンボにて埋土の除去開始
昭和61年６月30日	河野幸夫氏来訪，旧徳島城の範囲について御教示願う。徳島城域と助任川の境が検出される可能性が想定される。
昭和61年７月１日	ユンボ排土・武道館部分第一層掘り下げ。徳島市体育館建設の際の攪乱が激しく入っている。
昭和61年７月３日	四国放送取材・教育次長及び国体準備室長来訪
昭和61年７月９日	武道館部分攪乱写真撮影・的場部分第一層掘り下げ
昭和61年７月17日	武道館地区杭設定・攪乱掘り下げ。的場部分第二層掘り下げ
昭和61年７月23日	射場部分第七層（グライ粘土層）より落ち込みが確認され，川跡と判断した。武道館部分攪乱掘り下げ
昭和61年７月25日	射場部分川跡掘り下げ開始。的場部分川跡掘り下げ及び写真撮影・平面図準備
昭和61年７月28日	的場部分平面図作成
昭和61年７月29日	的場部分平面図及びエレベーション完了
昭和61年８月５日	射場部分攪乱掘り下げ及び刑務所基礎のコンクリート塊取り壊し
昭和61年８月19日	射場川跡上部グライ層掘り下げ・遺物出土状況写真撮影
昭和61年８月27日	唐津・伊万里・瓦などが大量に出土。湧き水が激しくなり，このままでは調査は不可能であり配水対策を考える必要がある。
昭和61年９月２日	松本教育長来訪・徳島新聞取材・射場川跡掘り下げ完了・写真撮影。武道館第一層掘り下げ
昭和61年９月３日	県博物館館長以下課員来訪。射場図面作成準備及び平面図作成
昭和61年９月４日	射場平面図作成及び武道館川跡第一層掘り下げ。ユンボで射場の山砂

利と排土を除去

昭和61年９月５日　大阪府吹田市教育委員会藤原学氏他５名来訪

昭和61年９月９日　朝日新聞社取材

昭和61年９月16日　射場平面図・エレベーション完了

昭和61年９月18日　射場遺物出土状況写真撮影及び遺物取り上げ・図面補足。武道館川跡第一層掘り下げ中

昭和61年９月25日　平板にて地形測量。武道館川跡第一層掘り下げ完了。射場川跡上層掘り下げ

昭和61年９月29日　射場川跡上層掘り下げ完了・写真撮影・平面図準備。武道館川跡第二層掘り下げ

昭和61年10月３日　射場平面図作成中・土層図作成開始

昭和61年10月８日　射場平面図及びエレベーション完了。武道館川跡第二層掘り下げ完了及び第三層掘り下げ開始

昭和61年10月13日　射場土層図完了及び土層図写真撮影

昭和61年10月14日　射場門跡平面図完了及び写真撮影。武道館川跡第四層より湧き水が出てくる。

昭和61年10月17日　滋賀県文化財担当来訪

昭和61年10月18日　読売新聞取材

昭和61年10月24日　武道館部分川跡及び船着き場跡掘り下げ完了・清掃・写真撮影・平面図準備。同部分グライ砂層（川の覆土）掘り下げ

昭和61年10月25日　徳島大学総合科学部岡内先生他歴史学受講生40名見学

昭和61年10月27日　武道館部分川及び船着き場跡平面図作成開始・川跡床面掘り下げ

昭和61年11月６日　武道館部分川床写真撮影（護岸用板列）・船着き場平面図作成中。徳島市教育委員会一山典氏他審議委員来訪。徳島新聞取材

昭和61年11月７日　武道館部分築地部分第二層掘り下げ。読売新聞取材

昭和61年11月８日　徳島市遺跡見学会40名来訪

昭和61年11月12日　武道館部分築地掘り下げ・同部分南側第四層掘り下げ

昭和61年11月13日　武道館部分船着き場エレベーション・護岸用板列平面図作成・築地掘り下げ・門跡掘り下げ

昭和61年11月17日　武道館部分築地掘り下げ・船着き場完掘状況写真撮影・護岸用板列平

面図作成中・6000Ｖ南側第一層掘り下げ

昭和61年11月18日　武道館部分築地清掃及び写真撮影・6000Ｖ南側落ち込み状況写真撮影・ガス管南側第二層掘り下げ

昭和61年11月19日　武道館部分護岸用板列平面図完了及びエレベーション作成・6000Ｖ南側溝及ピット確認状況写真撮影，掘り下げ・ガス管南側第三層（砂層）掘り下げ

昭和61年11月25日　武道館部分川跡下部（古）掘り下げ・築地平面図作成開始

昭和61年11月27日　武道館部分川跡下部（古）掘り下げ及び護岸用板列両側掘り下げ。現地説明会準備

昭和61年11月29日　武道館部分護岸用板列掘り下げ。貞光工業岡本先生・河野幸夫氏来訪「お花畠」の絵図について御教示をいただき，門跡・築地跡が絵図と合うことがほぼ確実となった。

昭和61年12月２日　四国放送取材・阿南市教育委員会阿部里司氏・河野幸夫氏来訪

昭和61年12月３日　武道館部分川跡下部（古）掘り下げ・6000Ｖ南側平面図及び土層図作成

昭和61年12月５日　武道館部分川跡下部（古）掘り下げ完了・清掃・写真撮影・築地平面図・6000Ｖ南側給水溝及び池跡確認。朝日新聞取材

昭和61年12月６日　現地説明会開催200名余りが参加・ＮＨＫ，徳島新聞，読売新聞取材

昭和61年12月８日　武道館部分護岸用板列平面図及び見通し図作成・築地平面図

昭和61年12月11日　武道館部分築地・門跡・船着き場平面図。6000Ｖ南側池跡掘り下げ

昭和61年12月12日　武道館部分築地及び門跡平面図・エレベーション。6000Ｖ南側給水溝及び池跡掘り下げ完了・清掃・写真撮影。ガス管南側掘り下げ

昭和61年12月15日　武道館部分築地南第五層掘り下げ・6000Ｖ南側平面図作成開始・ガス管南側平面図及びエレベーション完了

昭和61年12月16日　武道館部分ガス管南側写真撮影

昭和61年12月18日　武道館部分築地平面図・東壁土層図。6000Ｖ南側平面図

昭和61年12月20日　武道館部分築地基礎平面図・土層図

昭和61年12月22日　武道館川跡・堤掘り下げ。6000Ｖ南側平面図・土層図及び給水溝見通し図作成。的場部分土層図及び写真撮影

昭和61年12月23日　武道館部分川跡（最古）掘り下げ完了・写真撮影。6000南側給水溝見

	通し図及び池跡エレベーション・平板補測
昭和61年12月24日	武道館部分川跡（最古）平面図作成。埋め戻し開始
昭和61年12月27日	埋め戻し完了・資材運搬・現地調査完了
昭和62年５月１日	整理業務開始
昭和62年10月31日	整理業務完了

3．基　本　層　序

的場地点は東壁，射場地点は北壁と東壁，武道館地点は西壁，東壁と北壁があり，南壁は攪乱のため省略した。以下地点ごとに記述をした。

1　的場地点

現地表面より1.9mの深さまでは，徳島城域後刑務所建設のための埋め立て及び刑務所廃棄後，現在の公園を造成するための整地層であり，廃材，山土，レンガ，コンクリートなどが入っていた。１層は灰色砂層であり細かい砂が堆積しており，２層は灰オリーブ砂礫層で石炭ガラ，片岩とともに徳島城存続当時の陶磁器，瓦が混ざって出土している。３層以下８層まではいずれも砂層であり，川の堆積土で無遺物層であり，いずれも中央部にむかって凹んでいることから，川の流れの方向を示している。なお６層の床面から自然の竹が出土しており，いずれも流れの方向にむかって水平に出土している。

2　射場地点

北壁はＬ字形の調査区の為，土層図は一応東西の２枚に分けて図化した。

北壁西側は現地表面から西端で1.2m，東端で2.1mが埋土及び攪乱で，徳島城域の埋土と刑務所廃棄後の整地層であり，攪乱直下の斜めラインが，一応最終的な川の堆積上面を表しているものである。

２層黄褐色砂質土層，３層のオリーブ灰色粘質砂土層，４層の黄褐色粘質砂土層，５層の暗褐色及び黄褐色粘質砂土混合層，６層の浅黄色粘質土層，７層の黄褐色粘質土層は，遺物の項で第１層としたもので，川跡が前方へ後退した時期のものであり，遺物と礫を含んだものである。

８～18層が遺物の項で述べる川跡覆土上部層であり，いずれも遺物を包含している層である。８層～11層は砂質土層であり12・18層は粘質砂土層で築堤の版築土の可能性もある。なお第18層の西端は一部門跡の覆土であるが明確な区別はつけられなかった。

19層の暗褐色砂質土層及び明褐色砂質土層が東壁のグライ層とつながる部分であり川跡覆土下部層と考えられる。多数の瓦と土器を出土した，21～25層がいわゆる築堤肩部に伴う層

的場 東

2.0M

攪 乱

1
2
2
2
5
4
6
7
8

2.0M

攪 乱

2
3
4
6

1.灰色砂層(細砂)
2.灰オリーブ砂礫層
(石炭ガラ，片岩含む)
3.オリーブ褐色砂層
4.暗緑灰色粘質土層
5.暗オリーブ灰色粘質砂土層
6.黄褐色砂層(荒砂)
7.黒褐色粘質砂層
8.暗オリーブ褐色砂土層

射場 北(東)

攪 乱

3.0M

攪 乱

攪 乱

攪 乱

1
2
3
4
5
6
7
7
8
9
10
11

0 2 4M

1.オリーブ灰色粘質砂層
2.灰オリーブ砂質土層
3.黄褐色礫まじり砂層
(遺物包含層)
4.灰黄褐色砂層
5.緑灰色砂土層
6.やや黄色味がかった緑灰色砂層
7.暗緑灰色粘質土層
8.灰オリーブ砂質土層
(遺物包含層)
9.灰オリーブ粘質砂土層
(遺物包含層)
10.明赤褐色粘質土層と灰オリーブ砂層の混合層(遺物包含層)
11.暗緑灰色粘質砂土層

第2図　的場地点東壁及び射場地点北壁部分土層図

であり22層では21層の間層をおいて瓦片，土器片が出土した。この層がいわゆる射場地点最初の築堤とそれに伴う堆積層と思われる。

北壁東側は西端で現地表より2.2m，東端で2.8mが埋土であり，山砂利が厚く堆積しており，途中ユンボにて堀削を行った。

1層及び2層が遺物の項で第1層としたもので，いずれもオリーブがかった土層であり，川跡の最終堆積土層であると思われ，遺物は皆無に近い。

3層の灰黄褐色礫まじり砂層及び4層の灰黄褐色砂層，5層の緑灰色砂土層が，遺物の項で川跡覆土上部としたものであり，3層に多量の遺物が堆積しており，5層の緑灰色砂土層は遺物が少なく間層になると思われる。出土遺物は18世紀代の陶磁器が中心であり，一部19世紀初頭のものが出土しており，この時期に堆積したものと思われる。

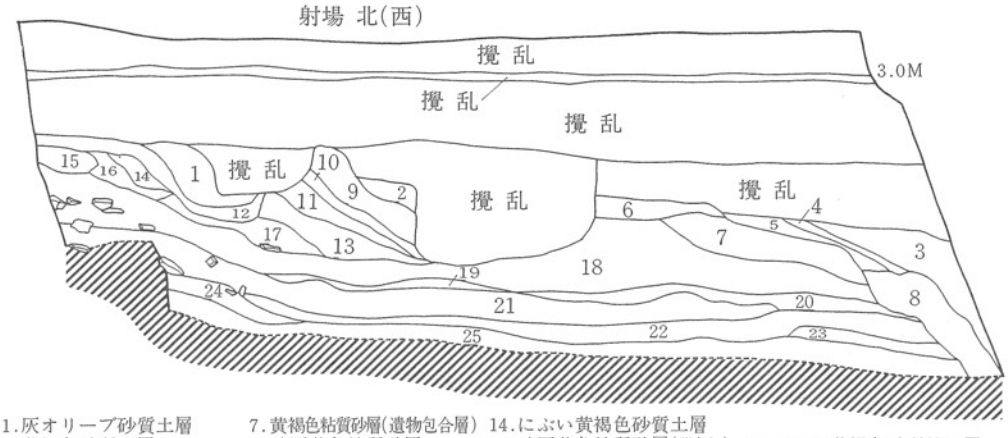
6～11層は緑灰色及び暗緑灰色，灰オリーブ色のいわゆるグライ層の粘質と砂質が交互に堆積した土層で，7層の暗緑灰色粘質土層及び8層の灰オリーブ砂質土層から多量の湧水があり，それより下約30cmで調査を断念したもので，いずれも多量に遺物を包含している。堆積は西から東へ向かって下っており川跡が前方押し出されたことを物語っている。17世紀代～18世紀代のものが大半を占めており，一部19世紀代のものもみられる。

射場東壁は中央部が途中湧水の為壁面が大きく崩落し，土層実測に苦慮した地点であり，北側で現地表面より2.8m，南側で2.7mまで埋土であり，1層のオリーブ黄色砂質土層及び2層灰オリーブ砂質土層で，遺物の項で1層とした層である。

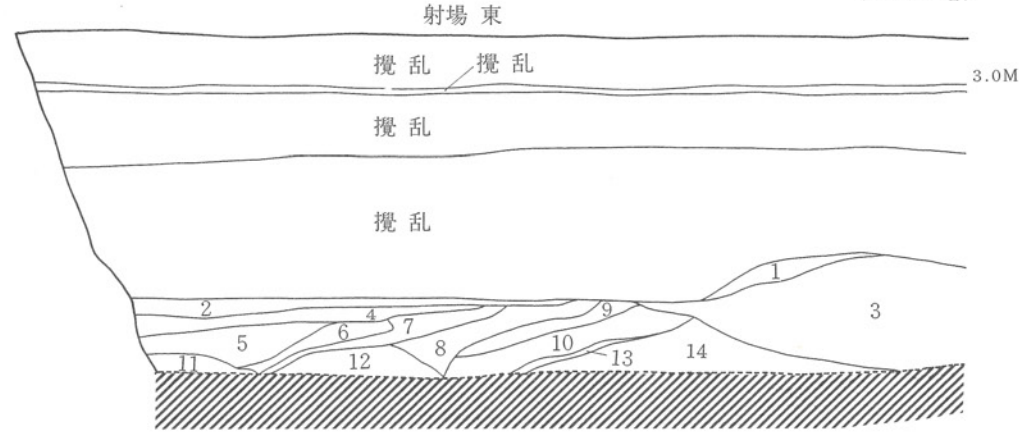
4層～7層は黄褐色を中心とした砂層で，遺物の項で川跡覆土上部とした層であり，北へ向かって傾斜している。

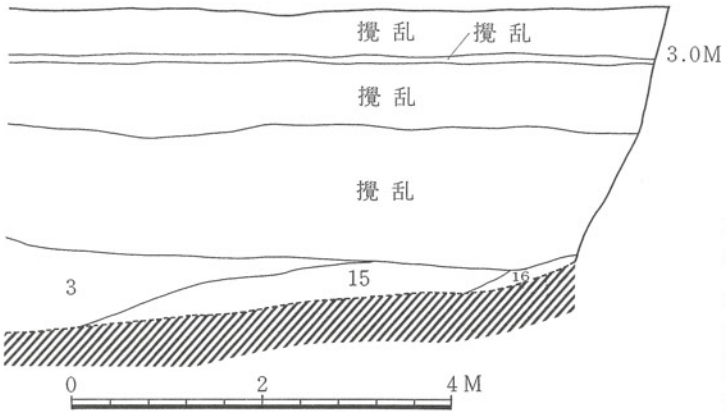
8～16層は暗緑灰色及びオリーブ色を中心とした所謂グライ層で，遺物の項で川跡覆土下部とした層であり，いずれも遺物包含層で多量に出土しており，特に象嵌唐津鉢や，初期伊万里皿（NO. 18）なども含んでおり，徳島城の最盛期のころの堆積土と思われる。

以上射場地点について述べたが，北壁の堆積状況と遺物の堆積状況からみると大きく3回にわたって堆積の時間差をもっているようであり，武道館地点の築堤の変化との対応が考えられる。すなわち川跡覆土上部とした堆積ラインが武道館地点の築堤新段階，船着き場とほぼ一致し，築堤肩部としたラインが武道館地点の築堤古段階とのつながりがあるようであり，北壁第3層～5層が恐らく武道館地点板列跡の項と一致するものと思われる。



1.灰オリーブ砂質土層
2.黄褐色砂質土層
3.オリーブ灰色粘質砂土層（遺物包含層）
4.黄褐色粘質砂土層
5.暗褐色および黄褐色粘質砂土混合層
6.浅黄色粘質砂層(小礫含む)
7.黄褐色粘質砂層(遺物包含層)
8.暗灰黄色粘質砂層
9.灰オリーブ砂質土層
10.黄褐色砂質土層
11.灰オリーブ砂質土層
12.灰オリーブ粘質砂土層（小礫含む）
13.暗灰黄色砂層
14.にぶい黄褐色砂質土層
15.暗灰黄色粘質砂層(礫含む)
16.オリーブ砂質土層
17.黄褐色砂層
18.黄褐色粘質砂層(遺物包含層)
19.暗褐色砂質土層(遺物包含層)
20.オリーブ褐色砂層
21.明褐色砂質土層(遺物包含層)
22.にぶい黄褐色砂質粘土層（遺物包含層）
23.オリーブ褐色砂質土層（遺物包含層）
24.オリーブ褐色粘質砂土層（遺物包含層）
25.オリーブ灰色粘質砂土層（遺物包含層）





1.オリーブ黄色砂質粘土層
2.灰オリーブ砂質土層
3.暗緑灰色砂質土層（遺物包含層）
4.黄褐色礫まじり砂層（遺物包含層）
5.灰黄褐色砂層
6.オリーブ褐色礫まじり砂層
7.にぶい黄褐色砂土層（遺物包含層）
8.オリーブ褐色粘質砂土層（遺物包含層）
9.にぶい黄褐色砂質土層
10.灰オリーブ小礫まじり砂質土層
11.暗緑灰色粘質砂土層（片岩を含む）
12.オリーブ灰色粘質砂土層（遺物包含層）
13.にぶい黄褐色粘土層
14.オリーブ褐色砂質土層
15.暗緑灰色粘質砂土層（遺物包含層）
16.暗オリーブ褐色粘質砂土層

第３図　射場地点北壁西部分及び東壁土層図

3　武道館地点

東壁を70層に分類した。

（東壁）

東壁は現地表面で北側は1.4m，中央部で1.1m，南側で1.4mの攪乱があり，北端より南へ7mは調査の最深の深さよりも深く攪乱が入っており，調査を断念したので土層は省略し，第2層下を斜線で表現している。

1～5層，22・23・52・64層はオリーブ灰色，オリーブ褐色，暗オリーブ，黄灰色，にぶい黄褐色，灰オリーブ等の粘質砂層及び砂層であり，いずれも徳島城廃棄跡とそれに伴う整地層である。

6層～21・24～33層は灰オリーブ，オリーブ褐色，オリーブ灰色，褐色，緑灰色等の砂質と粘質の互層であり，川跡覆土上部の層である。

34・37・38・43～45層は暗オリーブ，灰オリーブ，暗緑灰色，灰青灰色の粘質及び砂質土層でいわゆるグライ層であり，川跡覆土中部にあたるもので，多量の遺物が堆積している。

36・39・40～44，46～51層はにぶい黄褐色，オリーブ褐色，オリーブ灰色，灰オリーブ，褐色，黒褐色等の粘質及び砂土層であり，石垣のある船着き場廃棄後の埋土に伴う層である。

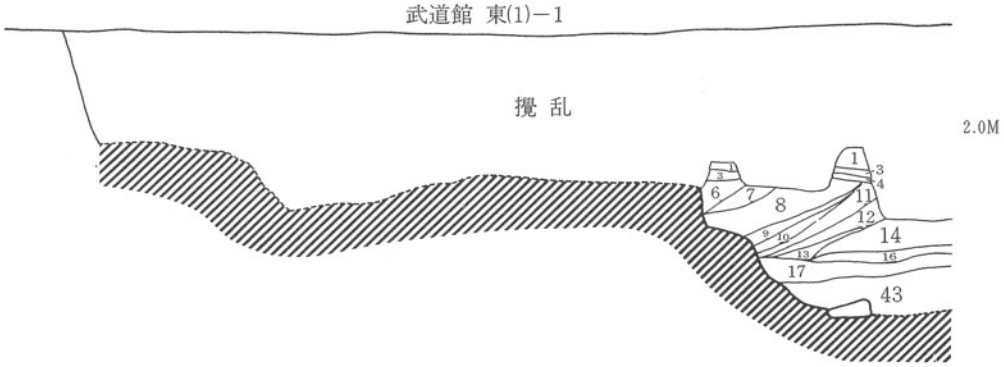
55～60層は築地及びそれより南側の堆積層であり，オリーブ褐色，灰オリーブ，にぶい黄褐色の粘質砂土層である。

54・56層は溝跡の堆積土層であり，オリーブ褐色粘質土層及びにぶい黄褐色粘質土層であり，若干の遺物と炭化物を含んでいる。

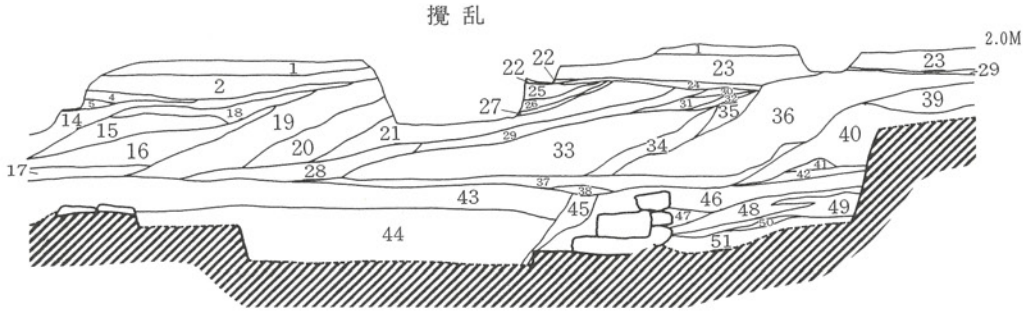
61・65・70層はにぶい黄褐色，灰オリーブ砂層であり，オリーブ砂層いずれも無遺物層である。

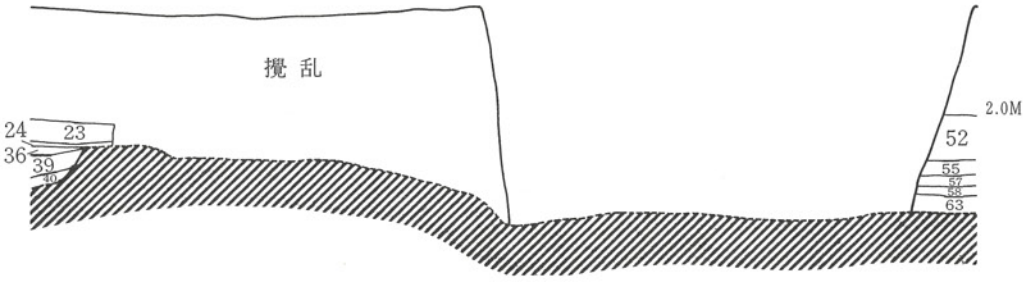
以上武道館地点について述べたが，堆積状況と遺物の堆積状況からみると第1層の武道館廃棄後の堆積を除くと大きく分けて8回の堆積に分類でき，特に築堤の3段階の差及び護岸抗の構築段階は東・西両壁の土層で明瞭に表れており，池跡は東壁の土層の堆積で埋土状況が明瞭に表れている。

武道館 東(1)－1

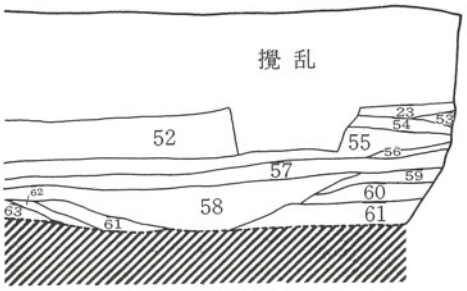


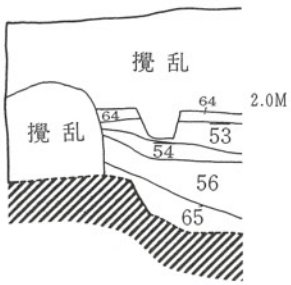
武道館 東(1)－2





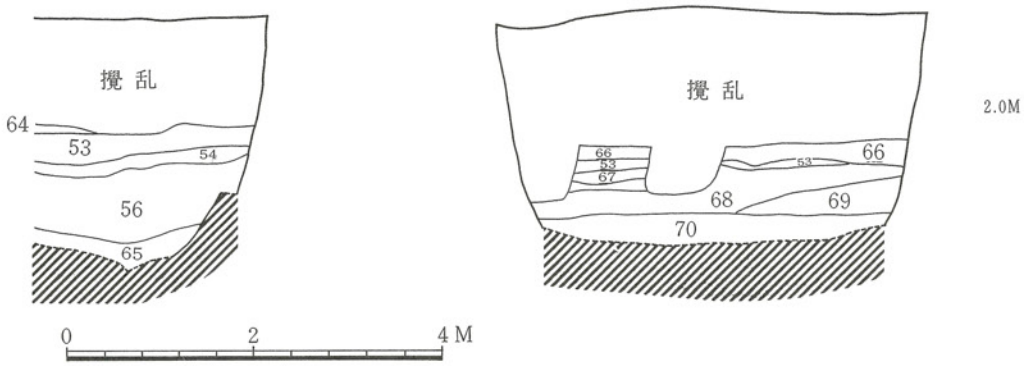
武道館 東(2)





0 2 4 M

第４図　武道館地点東壁土層図その１



1.オリーブ灰色粘質砂層
2.オリーブ褐色粘質砂層
3.暗オリーブ砂層
4.灰オリーブ粘質砂層
5.黄灰色粘質砂層
6.灰オリーブ砂質土層
7.灰オリーブ粘質砂層
8.オリーブ褐色砂層
9.灰オリーブ砂層
10.オリーブ黒色砂層
11.灰オリーブ砂層
12.オリーブ褐色砂層
13.暗緑灰色粘質砂層
14.オリーブ褐色砂層
15.灰オリーブ粘質砂層
16.オリーブ灰色砂層
17.緑灰色粘質砂層
18.オリーブ灰色粘質砂層
19.褐灰色粘質砂層(遺物包含層)
20.にぶい黄色粘質砂層(遺物包含層)
21.灰オリーブ粘質砂層(遺物包含層)
22.にぶい黄褐色粘質砂層
23.にぶい黄褐色粘質土層
24.オリーブ黄色粘質砂層
25.オリーブ褐色粘質砂層
26.オリーブ褐色粘質砂層
27.オリーブ褐色粘質砂層(焼土を含む)
28.にぶい赤褐色粘質土層
29.にぶい黄褐色粘質砂層(焼土を含む)
30.灰オリーブ粘質砂層
31.褐色粘質砂層
32.灰オリーブ粘質砂層(砂を多く含む)
33.褐色砂層
34.灰オリーブ粘質砂層
35.オリーブ褐色粘質砂層
36.にぶい黄褐色砂層
37.暗オリーブ粘質砂層
38.灰オリーブ粘質砂層
39.にぶい黄褐色粘質砂層
40.オリーブ褐色砂層
41.オリーブ灰色粘質土層
42.灰オリーブ粘質土層
43.暗緑灰色粘質土層(礫含む)
44.灰青灰色砂質粘土層
45.灰オリーブ粘質砂土層
46.オリーブ褐色粘質砂層(遺物包含層)
47.褐色粘質砂層(焼土を含む)
48.褐色粘土層
49.黒褐色砂層(荒砂，礫)
50.灰オリーブ粘質砂層
51.オリーブ灰色粘質砂層
52.暗オリーブ砂層
53.オリーブ褐色粘質砂層
54.オリーブ褐色粘質砂層
55.灰オリーブ粘質土層
56.にぶい黄色粘質土層
57.にぶい黄色粘質土層
58.オリーブ褐色土層
59.暗オリーブ砂層
60.褐色粘質砂層
61.にぶい黄褐色砂層
62.オリーブ褐色砂層(焼土を含む)
63.黄褐色砂層
64.灰オリーブ砂層
65.灰オリーブ粘質土層
66.灰褐色焼土層
67.オリーブ褐色砂礫層
68.灰オリーブ粘質砂層
69.灰オリーブ砂層
70.オリーブ砂層

第5図　武道館地点東壁土層図その2

4．遺　　構　（第6～10図）

今回の調査で確認された遺構は第6図のとおりであり，射場地点と武道館地点境に門跡，武道館地点で築地跡，石垣溝跡，池跡，船着き場跡，護岸用板列跡，小穴，溝跡，土坑跡が検出され，射場地点と武道館地点で築堤跡が検出された。

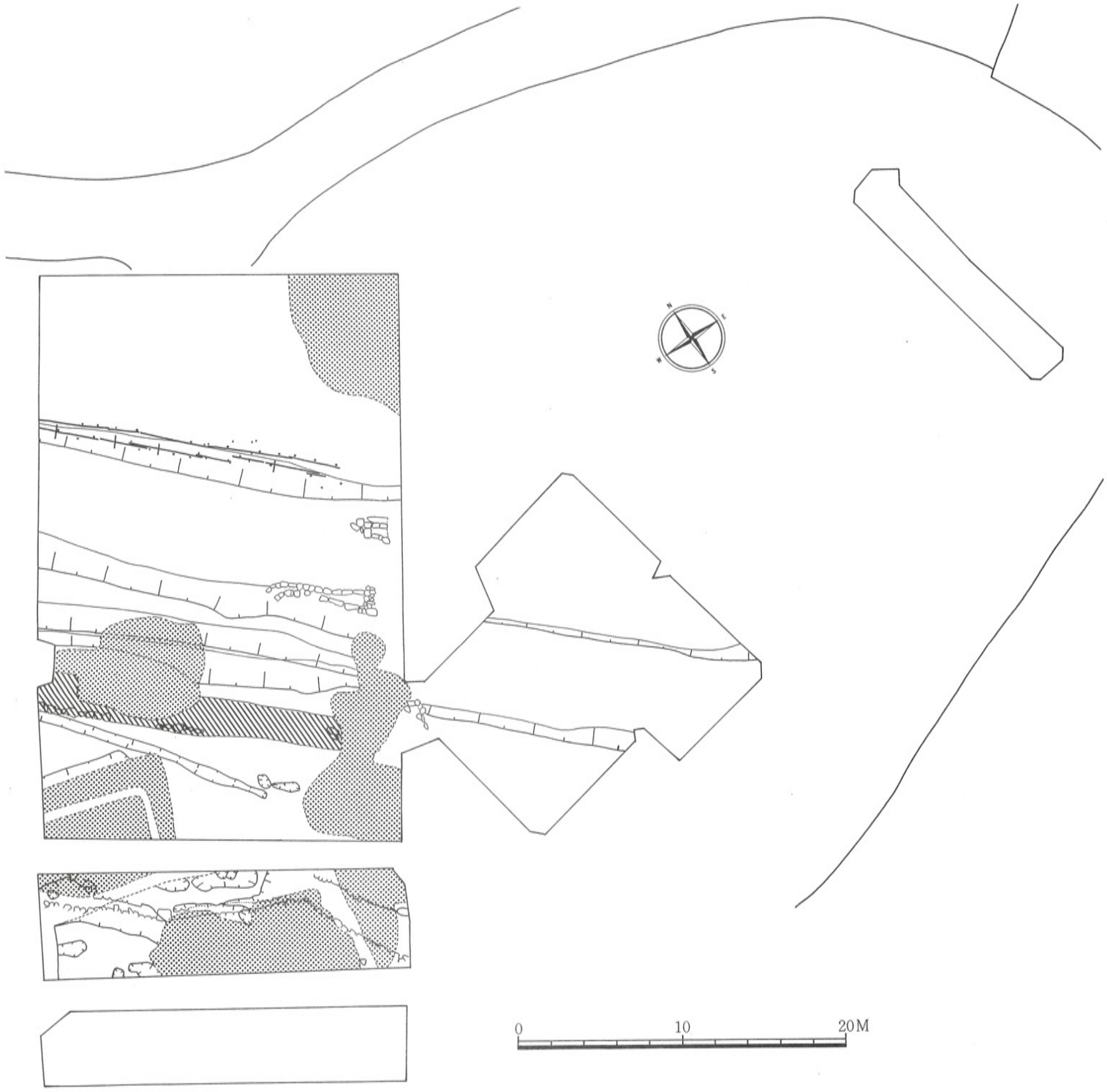
したがって調査区の射場地点と武道館地点の北側はいずれも助任川の中になり，遺構はみられなかった。

以下各項目ごとに述べる。なお築堤は射場地点と武道館地点は相互につながりがある為，一緒に述べることとする。的場地点は助任川の本流の中にあり遺構はみられず，調査区中央部に凹みがみられ，自然竹が流れに沿って検出されていることからみて助任川の川の流れによる緩急の差が凹みとして表れており，出土遺物は上層部の埋土以外は皆無であった。

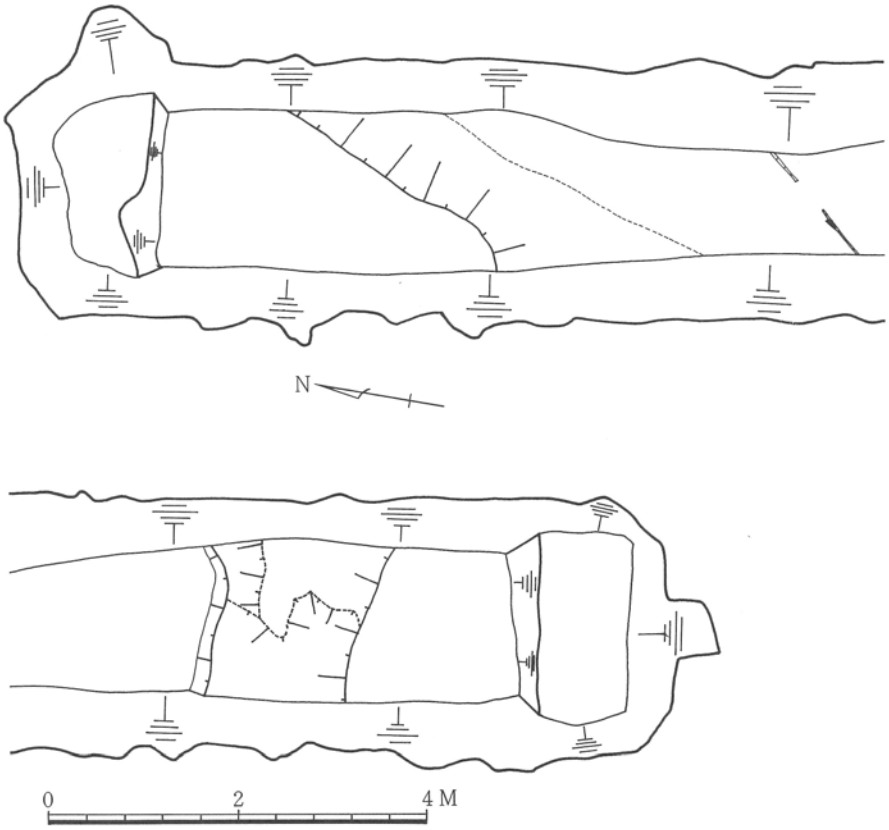
(1) 門　　跡　（第11図）

射場地点と武道館地点との境で検出されたもので刑務所当時の攪乱により大半は破壊されており，門跡の整地層の一角が残存していた。残存している角は，北東端にあたるもので，長さ30cm～1m10cm・厚さ20cm～30cmの結晶片岩製の板石を面を合せた野面乱石積みで3段程残存しており，角の内側は細かい砂岩や片岩を敷いて地固めを行っている。北のコーナー付近は攪乱の為不明で，南西隅，南東端は調査区外であり，全体の規模は分らない。今回確認された築地と最も古い築堤とも一致しており，徳島市史だより第3号(註3)「御花畠差図」〔正保4年（1647年）〕に描かれている門跡とほぼ一致しており位置からみて門跡と断定した。整地面の厚さは約10cm程あり，整地面よりごく僅かであるが碗・皿・鉢・瓦が出土しており，18世紀前半の遺物がみられることからすでにこのころには所在していることが明らかであり，又，射場の築地斜面に多量の瓦が斜面に出土していることから瓦葺き屋根を伴った門と思われる。

この門跡の建築年代であるが，この門跡から西の丸御殿の隅櫓に向ってやや方向をかえて築堤がつながっていることから，「忠英様御代御山下絵図(註4)」［寛永8年～寛永12年（1631年～1636年）］の絵図にほぼ類似するものでないかと思われる。この「御花畠差図」と「忠英様御代御山下図」を合せて考えてみると17世紀中頃にはこの門跡が存在していたことが明らかで

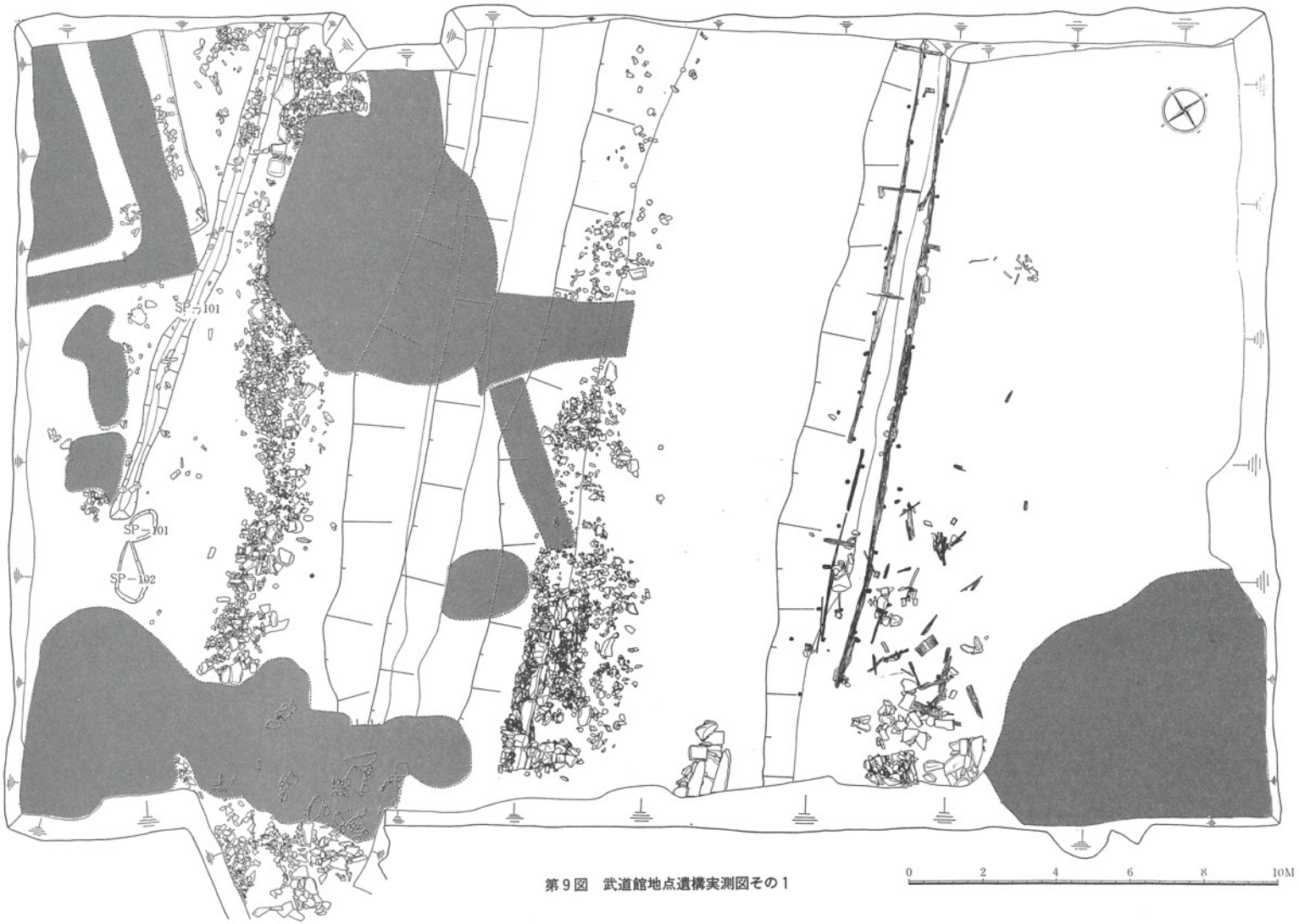


第６図　遺構配置図

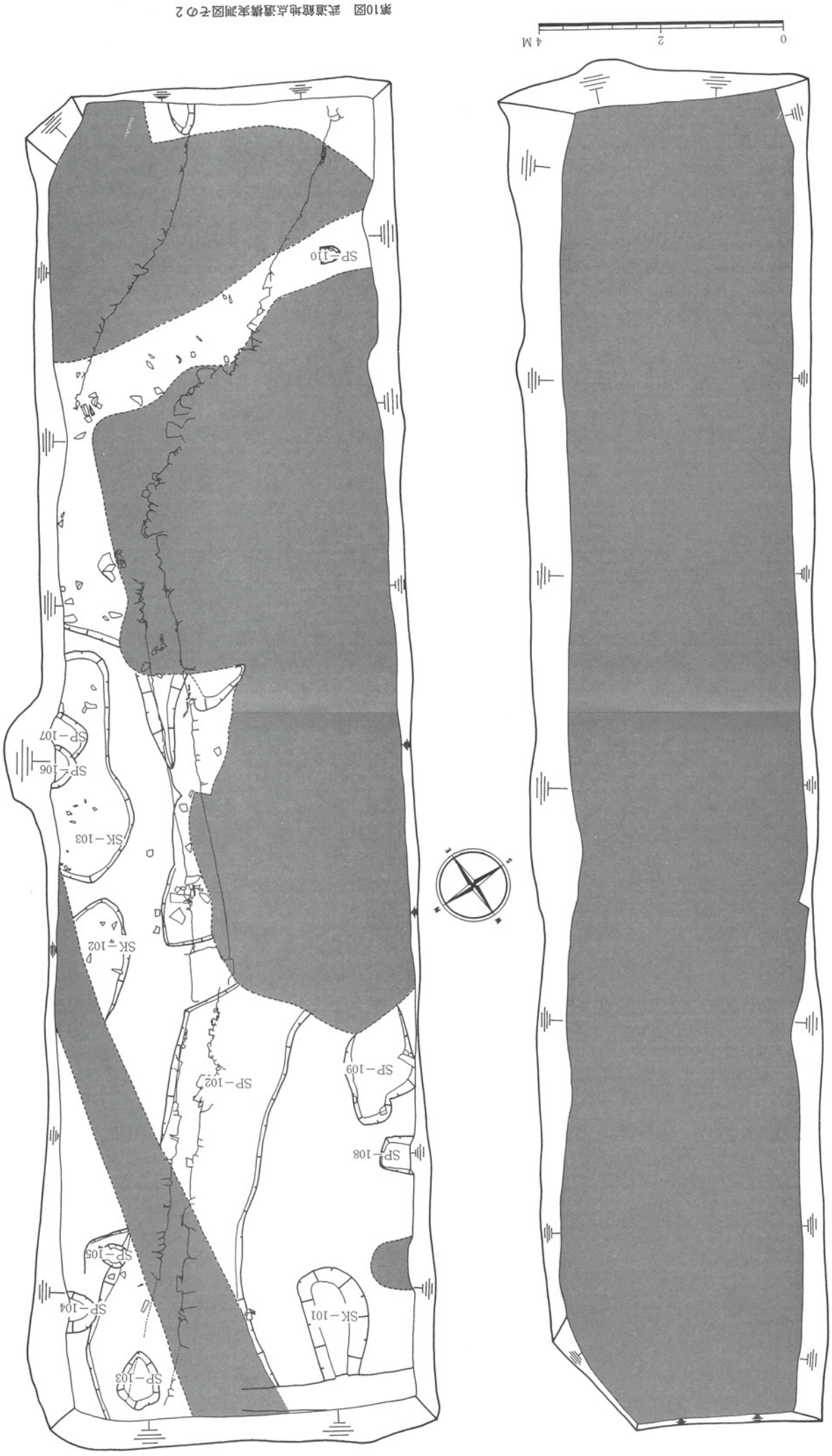


第７図　的場地点遺構実測図

第８図　射場地点遺構実測図



第９図　武道館地点遺構実測図その１



第10図　武道館地点遺構実測図その2

ある。このことは後に述べる築地及び石垣を伴った船着き場との関連も十分考えられ，助任川に向って門が所在するということは，それに伴う船着き場の所在は当然必然的に考えられることである。

第11図　門跡実測図

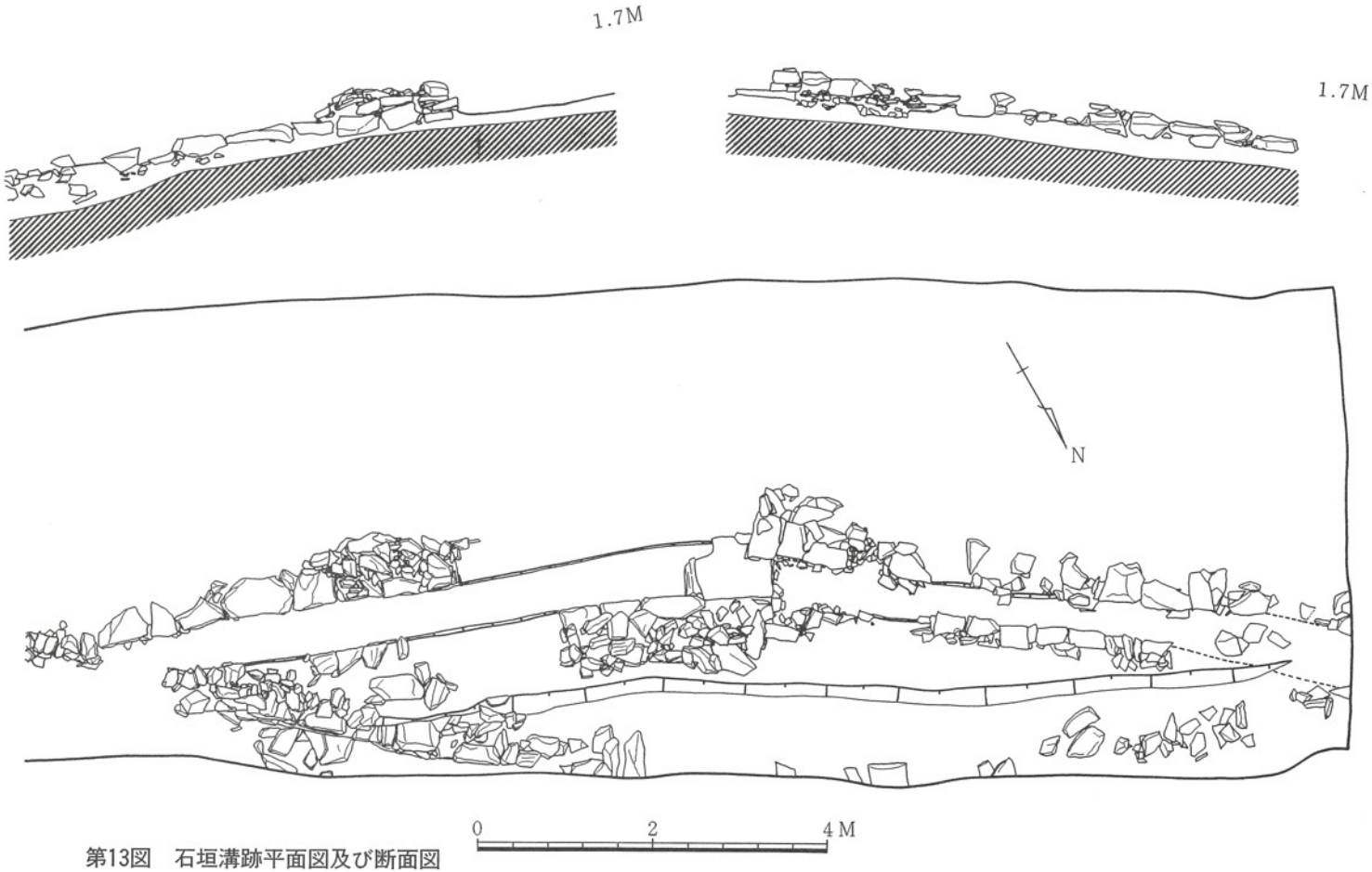
(2) 築　地　跡（第12図）

築地跡は，門跡のすぐ西から西へ向かって延びたものであり，西側では徳島市体育館の建設の際の基礎のコンクリートパイルを埋没した攪乱坑で壊されており，門跡とつながっている部分は刑務所当時の攪乱によって壊されており，全様は分からないが東側で幅1.8m，西側で幅２mであり，厚さは厚い所で30cm，薄い所で20cmの整地層がみられ，南側はゆるやかに傾斜して南へ下っている。したがって，築地は当時の地盤より盛上げて作っていることは明らかである。整地は，瓦や結晶片岩の石とともに土器片が混じっており，丁寧に版築を行っており上面はほぼ水平を保っている。西半分は長さ30cm～70cmの結晶片岩の板石を南に面を合せて約９m程並べており，その片岩の間に和泉砂岩の円礫を用いて途中の一個は欠けるが，真心間２mで柱の基礎と思われる石を水平に配置している。西半分の部分は柱の礎石らしきものがあり，一段ではあるが石垣状の石列が並んでいることからこの西半分に廻廊の所在の可能性が考えられる。築地跡の幅はほぼ１間であったものと想定される。整地層の中に巴文瓦，平瓦が含まれていることからみて，瓦葺きの塀の所在が考えられる。

出土遺物からみると，17世紀後半のものと，18世紀代のものに分類され，18世紀代のものが大半を占めることから一度作り替えられた可能性が考えられる。

この築地の築造年代であるが，門跡との関連があり，門跡と同時期と考えられ17世紀中頃（正保４年・1647年）には作られていたものと考えられ，その後18世紀代につくりかえられたことが考えられる。

第12図　築地跡実測図



第13図　石垣溝跡平面図及び断面図

(3) 石垣溝跡　(第13図)

築地跡より南へ12m離れた場所に位置し，幅40～60cmで，現在の石の高さから深さ50cmであり，ほぼ中央部で長さ１m，幅70cmの結晶片岩の板石を敷き，その地点より東はやや向きを15°北に傾けており後で述べる池跡へ向かってつながっている。

溝は中央部付近が攪乱の為欠落して分からないが，長さ20cm～70cmの結晶片岩製の板石の長軸を面として利用し，溝の内側に向けて現在最大３段にわたって丁寧に積んでおり，結晶片岩の細片と砂岩の小石で幅70～80cm程，裏ごめを行っている。西から東へ向かって傾斜しており，池へ向かって水を流しこんだ給水溝と思われ，中央部の向きを変える地点で一担水を持上げ池の方に流しこんだ庭園に伴う給水溝と思われる。

出土遺物は17世紀中頃から19世紀初頭のものが含まれており，17世紀中頃に近い時期には築かれ，19世紀初頭まで所在していたことがわかる。

徳島市史だより第３号「御花畠屋敷の庭園について」によると「阿波名勝案内」に「御花畠景観目録」及び「御花畠差図」の中で庭園の構造が平庭をベースとした園内に掘り抜き井戸からの湧き水を，高地水取りのカラクリによって水を引き上げ流していると記述しており，この文章による給水溝とも考えられるが，絵図が正確さに欠ける為，これにあたるかどうかには不明である。いずれにしても庭園に伴うものであることは明らかである。

(4) 池　　跡

やはり築地跡より南へ10程離れた地点で検出されたもので，北は6000Ｖの埋没によって壊され，東側は調査区外へ延びている。

結晶片岩の板石と加工した角石でもって最大７段最小４段の内側に向って中程が膨らんだ状態で野面乱石積みを行っており，底部に近づく程大きな角石を丁寧に積んでおり，間を細かい石でもって丁寧に埋めている。上部は大きめの石と小さい石でもって蒲鉾状に丸く積み重ねており，池の幅は西から東へ向って蛇行しながら次第に広くなっており，覆土の中に多量の片岩が崩れこんでおり，本来はもっと高かったものではないかとも思われる。

池の底は西が高く東へ向って傾斜しており，くびれより東側は地下水の湧き水が激しく池底までの完掘は出来ず途中で調査を断念した。したがって東側の池の底の深さは不明である。

先程の石垣溝がこの池跡につながっており，覆土からみても同一の時期に作られたものと考えて支障がない。いずれにしても御花畠の庭園に伴う池と考えられる。この池はこの地が

俗称「ひょうたん島」という地名が残っていることから，この島の取りまく池の可能性もあるが，調査区外へ延びている為確認しがたい。

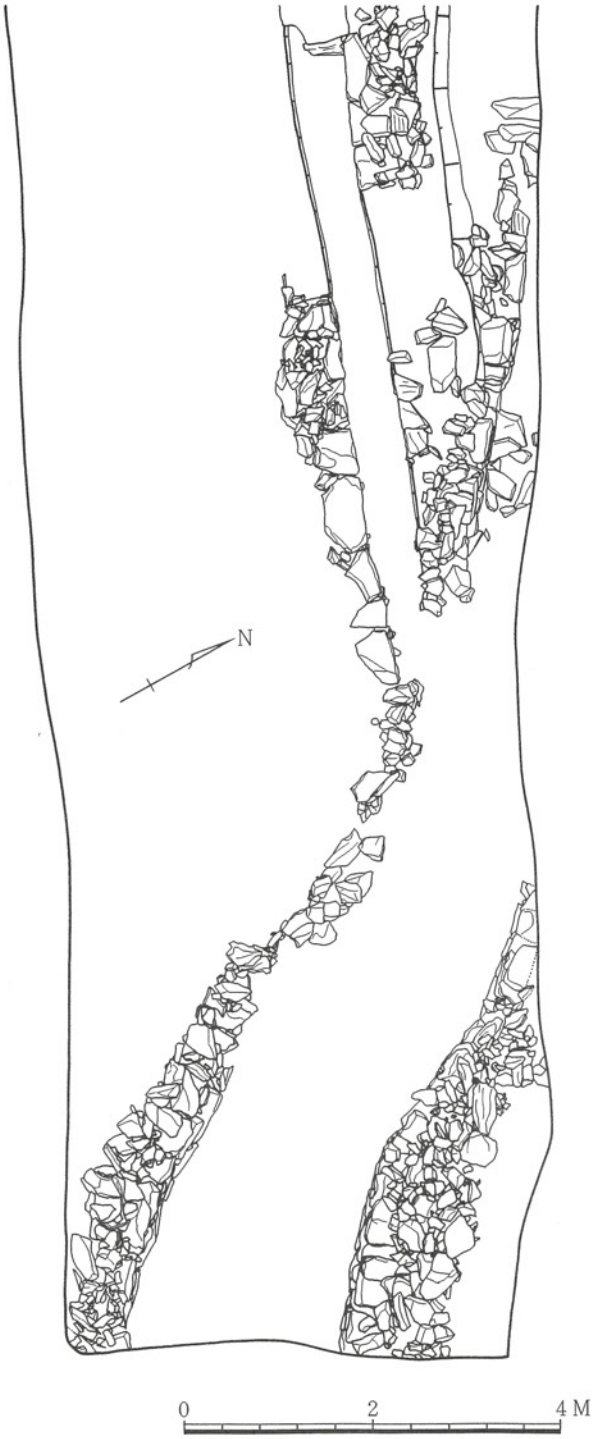
(5) 築　堤　跡

（第９図）

築堤跡は今回の調査で全部で４ヵ所確認されており，内側より次第に現在の助任川に向って前方へ拡張して作りかえられたものである。内側より古段階・中段階・新段階・護岸板列に伴うものを最新段階とした。

最新段階のものは，調査途中で湧き水が激しくなり，膝まで踏みこんだ調査であった為，落ち込み状況は十分つかみきれなかったが西壁第34・37層に比定されるもので確認できた。時期については護岸板列の項で一緒に述べるものとする。

古段階は門跡をはさんで射場地点と武道館地点の両側で検出されたもので，武道館西壁の56層と58層の粘土層であり，築地より北へ広い所で２



第14図　池跡実測図

m程の地点で確認されており，厚さ30cm程で約25°の傾斜でもって下っており，武道館地点の遺物は非常に少なく，短期間の使用ではなかったかと思われる。射場地点は門跡に使用された瓦片が多量に出土している。

出土遺物は17世紀中頃から18世紀前半に限定されており，やはり門跡と同じく「忠英様御代御山下絵図」の築地ラインに一致するものと思われ，17世紀中頃にはすでに築かれたものである。なお築地と築堤の間は約1間（1.8m）程の犬走り状のものがあったことが想定される。

中段階は，射場地点では十分確認しえなかったもので門跡近くでは1.5m，調査区西側では5mと古段階の築堤より北へ拡張された状態で検出され，武道館西壁第55層が版築の上になり，古段階と同じくオリーブ黄色の粘土層であり，肩部で厚さ1m下端部で10cmと次第に薄くなり，約35°の傾斜でもって北へ傾斜しており，非常に丁寧な版築を行っている。出土遺物からみると17世紀後半から18世紀前半に限定されており，古段階とあまり時間差がなく築かれているようである。

新段階は，武道館地点では築地より東側で10m，西端で12m，中段階の築堤より6～7m北へ離れており，的場地点では北東へ12m程離れている。

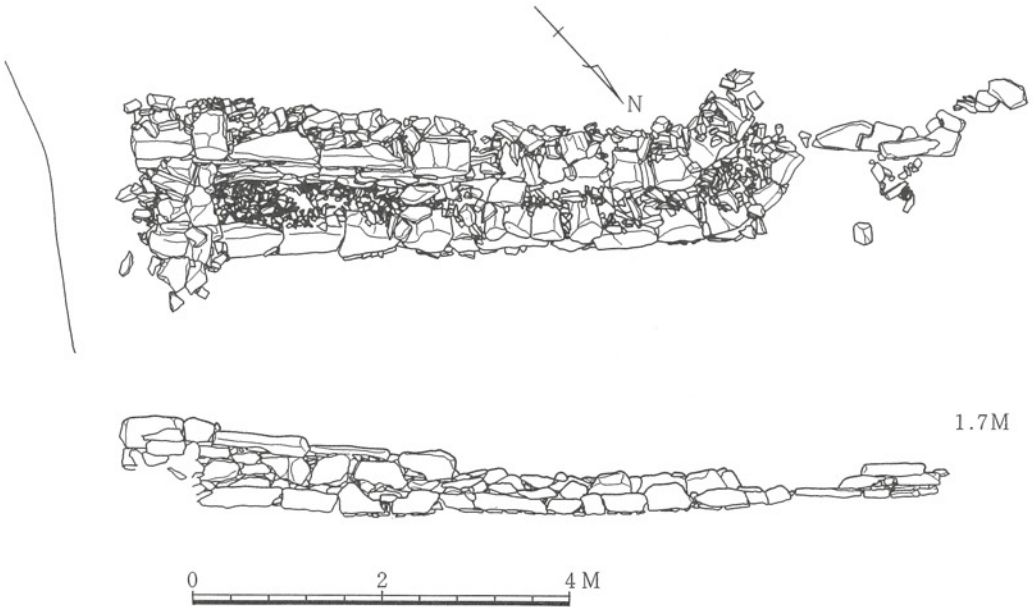
武道館地点東端で石垣でもって築かれた船着き場を伴っているものである。武道館西壁第48層の灰黄色粘土層が版築上層であり，厚さ20cm程で45°の傾斜で下り途中水平面の段をもって更に45°の傾斜で下っている。船着き場付近はやや内側に凹んでおり，的場地点は大きく張り出し，西の丸隅櫓に向って角度を変えてつながっているものと思われる。

出土遺物は大半のものが17世紀後半～18世紀代のものが殆どであり，下限は19世紀初頭に位置づけられるものであり，この期間の間に存続したことがうかがえられる。

この築堤の築造年代は，「綱矩様御代御山下絵図」（註5）と一致するものと思われ，17世紀末〔元禄4年（1691年）〕には築かれていたものと思われ，遺物が多量に出土していることから，相当長期間にわたって使用されたものと思われる。

(6) 船着き場　（第15・16図）

築堤新段階に伴うものであり，結晶片岩製の板石で2列にわたって作っている。上の列は長さ30cm～1mにわたる板石を小さな板石の間に入れ野面乱石積みでもって，東側は4段，西側は2段と西へ向って次第に低く積んで板状に作っており，東側より5mの所で内側に向って斜めに積んでいる。下の列は上の列から東側で幅50cm，西端で幅20cm程の平坦面をお



第15図　船着き場平面図及び断面図

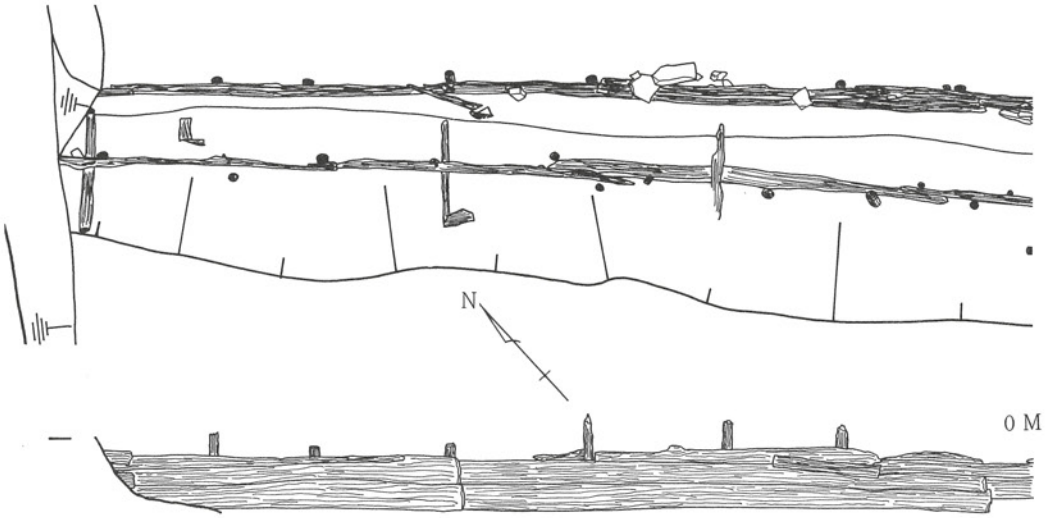
き，幅20㎝～80㎝の板石でもって段を作っており，東端より5.5mの所でやはり内側へ向って斜めに積んでいる。

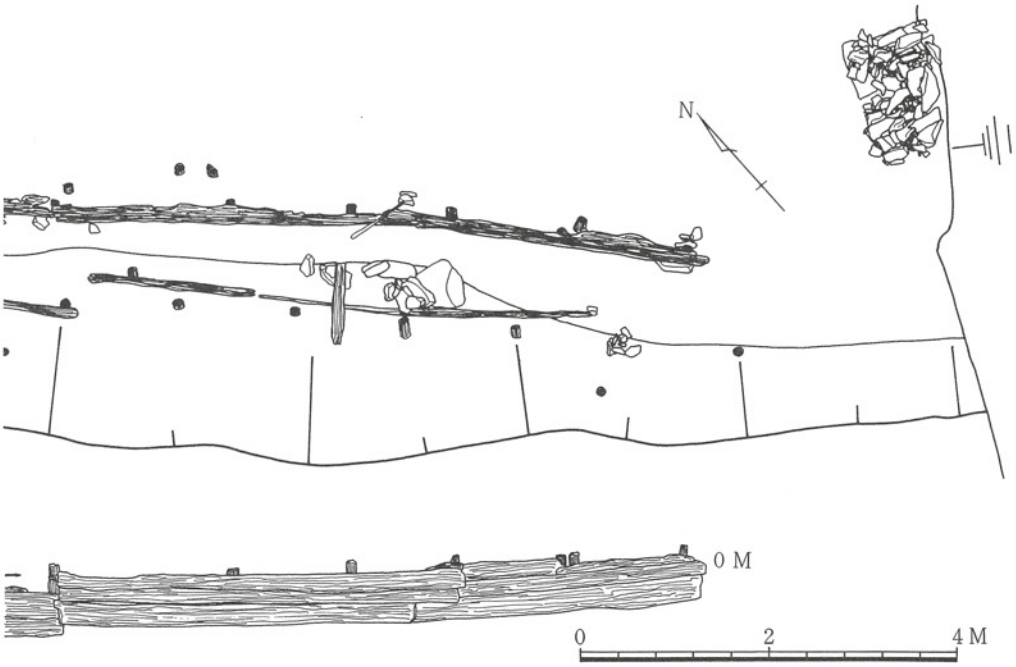
そしてその両側は両方が合わさって現存で3段の石垣が延びている。上の段の後ごめ上段と下段の間の後ごめは円礫と片岩の細片で丁寧に行っており，東端にはいわゆる「ナマコ」と呼ばれる半円状に片岩を積んだ石垣が取りつけられており，石垣を川の流れから守る為の施設をつけている。

上の段は次第に西へ向って下っていることから，内側にまわっている所から船に乗る場所であり，下の段は，上の段を保護する為の護岸石垣としたものと思われる。この石垣面下は多量の遺物が検出され，相当利用期間が長く，門跡と機能しており花畠屋敷への城外からの物質搬入等重要な場所であったと思われる。

なお絵図には，船着き場の表示はないが門があり，当然船着き場の所在は考えられる。

第16図　船着き場遺物出土状況図



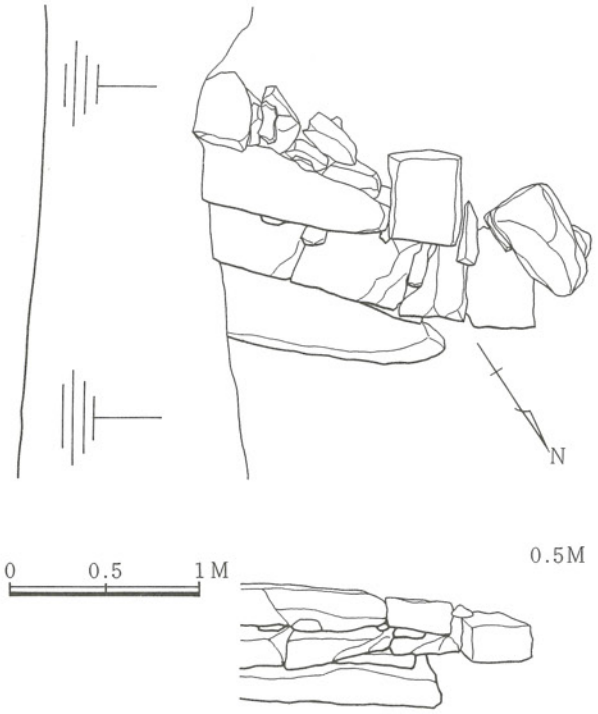


第17図　護岸用板列平面図及び断面図

(7) 護岸用板列

（第17図）

築地より北へ13m離れた所に位置し，徳島城最終段階の人工的な作業であり，川底を掘り直径10～20cmの松杭を打ち，幅20～30cm，厚さ3cmの板を3段にわたって止めており，現長18m程で東は切れている。西は調査区以外へ延びており幅50～70cm離れて内側にもう一列の杭と板列がみられ，外側に板を止め，所々で片岩の石でもって最下段を押えて倒れないようにしており，所々に不規則に丸棒を横にわたして倒れないようにしている。深さが標高0m以下であり，川の中での工事であり，当時の土木工事としては相当な大工事であったものと思われる。杭は先端を尖らせており，板はチョウナによる削り跡がみられ，調査当時も水に浸っていた為，丈夫なものであった。



第18図　船着き場新段階平面図及び断面図

板列が切れた所より東側2mの北側の所に結晶片岩でもって石垣を築き，同じく南側の所に結晶片岩の板石でもって3段の石垣（第18図）を築き石段は東側の調査区外へ延びており恐らく板列に伴う船着き場と考えられる。

この板列及び船着き場には，多量の木製品と陶磁器類が出土した。木製品は日常雑器の桶，樽，漆塗り碗，生活用品の下駄，箱，工具であるタガシメ，砥石台，建築部材などが，船着き場付近に漂着した感じで出土しており，陶磁は18世紀代を中心に19世紀初頭のものまでがみられる。遺物的には前項目の船着き場とそう差はないが土層の堆積状況からみて，当然新しい段階となっており，19世紀初頭段階で護岸作業を行ったものと考えられる。この築堤と護岸は明治7年（1875年）に徳島城が取り壊される時点までは存在したものであり，そ

の後徳島刑務所建設の際に整地され，現在の助任川の範囲まで広げられたものと思われる。

この護岸板列に伴う築堤は，明治２年～３年（1869～1870年）作成された「徳島藩御城下絵図」に対比されるものと思われる。（註６）

(8) その他の遺構

すべて武道館地点での検出であり，6000Ｖ南側の地点のものは石垣溝及び池跡の上層から出土しており，石垣溝及び池跡が19世紀初頭まで存在していることからみて，徳島城廃棄後の掘りこみになる可能性が十分にあるが一応その他の遺構としてとらえた。

溝跡（以下 SD とする。）が２か所，土坑跡（以下 SKとする。）が３か所，ピットが10か所検出された。

SD－101西端は築地にほぼ隣接し，東端は約３ｍ程離れているもので，築地に伴う排水溝とも考えられたが，途中でとぎれており，しかも築地に平行しないことから別のものと考えられる。

幅は30～40cmでやや屈曲した形を呈し，断面はＵ字形で深さ20cmであり，溝の中に築地の整地面に用いた小石が落ちこんでおり，少量の土器片が出土している。皿と仏飯具が出ているが，いずれも溝の落ちこみ上面に混在しており，時期的な決定は難しく，西壁土層図からみると，築地が確認されたと同じ土層から確認されており，築地よりは新しい時期の徳島城存在時期のものには間違いないと思われる。土色は上下２層に分類でき左から第１層・第２層とした。第１層はにぶい黄褐色砂質土層であり，第２層は，同じくにぶい黄褐色砂層である。いずれも小石が溝内へころがりこんだ形で混入している。

SD－102は，石垣溝の上部から検出されたもので，攪乱によって切られており全容は明らかでない。形は西の方で南に向かって曲り，東も南へ屈曲した台形状を呈し，幅は0.8cm～１ｍであり，深さは僅か５cm程で断面はゆるいＵ字形を呈している。出土遺物は非常に少なく，確認された高さより高い位置で桟瓦が一点出土しており，丸部が巴文で尾が非常に短く型押し成形であることから幕末以降のもので明治時代に入る可能性が大きい。土層は上下２層の４層にわけられ，上の層はにぶい黄橙色砂質土層，下の２・３・４はにぶい黄褐色砂質土層であり，小砂利を含んでいる。西壁土層からみると徳島城廃棄後の面の下であり，一応最新の溝と考えた。

SP－101 は SD－101 のすぐ北側で確認検出されたもので，平面が隅を丸くした四角形を呈し，長軸１ｍ，短軸75cmで片方が攪乱を受けており，底部は平底であり，底に小石が混ざっ

ている。土層は一層で黄褐色砂層である。SP－102はSP－101に接するように確認され，平面四隅を丸くした菱形を呈しており，長軸1.8m，最大幅0.9mで断面台形であり，土層は一層でやや赤みがかったにぶい黄褐色砂層であり，底面に1個の石が据えられている。

SP－103は6000V南側の調査区西端にあり隅が丸くなった変形の四角形であり，長軸95cm，短軸70cmで断面U字形を呈している。土層は2層にわかれ，第1層はにぶい黄橙色砂質土層，第2層はにぶい黄褐色砂質土層である。

SP－104はSP－103より約80cm離れた所に位置し，壁面に入りこんでおり半分だけ調査を行ったものである。円形を呈し断面はU字形を呈し，土層は2層に分かれ，SP－103と同じであり，同時期に作られたと思われる。

SP－105はSP－104より南へ70cm程離れた所に位置し直径40cmの円形を呈し断面U字形で，土層は2層に分けられ，第1層はにぶい黄橙色砂質で2層はやや粘性がかった同色である。

SP－106はSP－105より東へ8m程離れSP－107を切った形で検出され，SK－103とも重なっている。平面は円形を呈し半分は壁内に入っており，直径0.7mで断面浅いU字形を呈し土層を大きく分けると2層に分けられ，上層は1～3層に分かれ黄褐色砂層，にぶい黄褐色砂質土層であり，下層はやや白っぽいにぶい黄褐色砂質土層である。

SP－107はSP－106に切られた形であり，平面は円形を呈しているものと思われ，断面は台形を呈しているものか。土層は2層に分かれ上層の一層は炭が含まれている。

SP－108は調査区の南側に接して確認されたもので，平面は四角形を呈し，断面は台形である。深さは45cm程あり，土層は大きく分けると上下2層に分かれ，上層は黄褐色砂質土層，下層はにぶい黄褐色砂質土層で，刑務所整地層の直下になり，新しい時期のものと思われる。

SP－109はSP－108より80cm東側で検出されたもので，やはり壁面に接して確認されたものであり，平面は不整形で断面は台形を呈している。西側は攪乱によって切られている。土層は上下3層に分かれ，いずれも黄褐色砂質土層にであり，多少の粒子の差で区別した。SP－108と同じく新しいものと思われる。

SP－110は調査区の東端で単独で検出されたもので，長軸30cm，短軸25cmの平面不整形で，断面は土層の位置の設定が悪かった為，不明であるがU字形を呈しているものと思われる。上層上下2層に分かれておりオリーブ褐色砂質土層とにぶい黄褐色粘質土層であり，刑務所の攪乱の可能性もある。

SK－101は6000Ｖ南側調査区の西壁付近から検出されたもので西側は西壁と接しており形は不明，現長1.8cm，最大幅１ｍで断面は深さ30cmで浅いＵ字形を呈し，土層は４層に分かれ，大きく分けると３層に分かれ，灰白色砂質土質とにぶい黄褐色砂質である。

SK－102は攪乱によって北側を切られており形及び規模は不明であるが楕円形と思われ断面はＵ字形を呈している。土層は３層に分れているがいずれも西へ傾いており，にぶい黄褐色砂層で中に片岩の小石が混じっている。

SK－103はSP－106・107に切られ，6000Ｖの壁に入りこんでおり，平面は不整形で深さ10cmと浅く断面はＵ字形と思われる。上下２層に分かれておりにぶい黄褐色砂質層とにぶい黄色砂質層であり，床面に片岩の小石が混じっている。

以上ピットと土坑について述べたが，配置に規則性がない為正確は不明である。

5．出　土　遺　物

コンテナで207箱出土した。そのなかよりプリント磁器，土師質土器，瓦類を除いては図化できるものはできるだけ図化した。

的場地点，射場地点，武道館地点の順に分けて記述し，層序及び遺構ごとに分け，更に器種ごとに分類を行った。

肥前系陶磁器のうち陶胎染付けは伊万里焼に含め，京焼風陶器は唐津焼に含めた。

かわらけは土師質土器として分類し，皿類のなかに含めた。煤付着の有無によって煤のついたもののみ，一覧表の備考のなかで灯明皿として記述した。

灯明皿については，灯芯受けのあるものを中心に灯明皿として分類し，他のものは皿の中に含めた。

瓶類には花瓶，水瓶，徳利等のものも総称して含め，明らかに徳利と思われるもののみ徳利として取り扱った。

京焼系等「系」と記述したものは，推定のものを表しており断定し難いものを表している。

美濃焼及び瀬戸焼については，調査者の浅学のため，明確な区別が分からないので，美濃・瀬戸系として分類した。

伊万里焼・唐津焼の年代は，九州陶磁文化館編「国内出土の肥前陶磁器」(註7)・肥前地区古窯跡調査報告「窯ノ辻・ダンバキリ・長吉谷」(註8)・肥前地区古窯跡調査報告書２集「百間窯・樋口窯」(註9)・肥前地区古窯跡調査第３集「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」(註10)・肥前地区古窯跡調査報告第４集「楠木谷窯・小溝上窯」(註11)を使用した。白磁については，九州陶磁文化館「白磁の美」(註12)を使用した。

本文中では〔「肥前陶磁」Ｐ137，NO. 325，「百間窯・樋口窯」Ｐ28，「白磁の美」Ｐ38，NO. 203〕等と略して記述した。

瓦類については郵政省飯倉分館構内遺跡の編年を参考にした。(註13)

大谷焼については，「大谷焼」(註14)及び「阿波の陶磁」(註15)豊田進著によった。

法量については，基本的にcmを使用しているがなかにmmを使用している場合は明記している。

1　的場地点

この地点は当時の何れの絵図からみても，城域からはずれた城外の助任川の中に位置しており，遺物の出土した層のなかに石炭殻や石垣等に使用した結晶片岩を多く含んでおり，徳島城廃棄後の明治時代に入って埋め立てられた埋土の中より出土したものである。したがって，当時の遺構に伴うものでなく，埋め立ての際に付近より運びこまれた二次堆積の遺物である。

これらの遺物は，埋め立て内の出土ではあるが，城構築当時に関係した地点からの搬入物と考えられるものを図化した。出土遺物は第２層の灰オリーブ砂礫層からの出土である。

碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，瓶，猪口，擂鉢，徳利，灯明皿，灯明台などが出土している。

(1)　碗

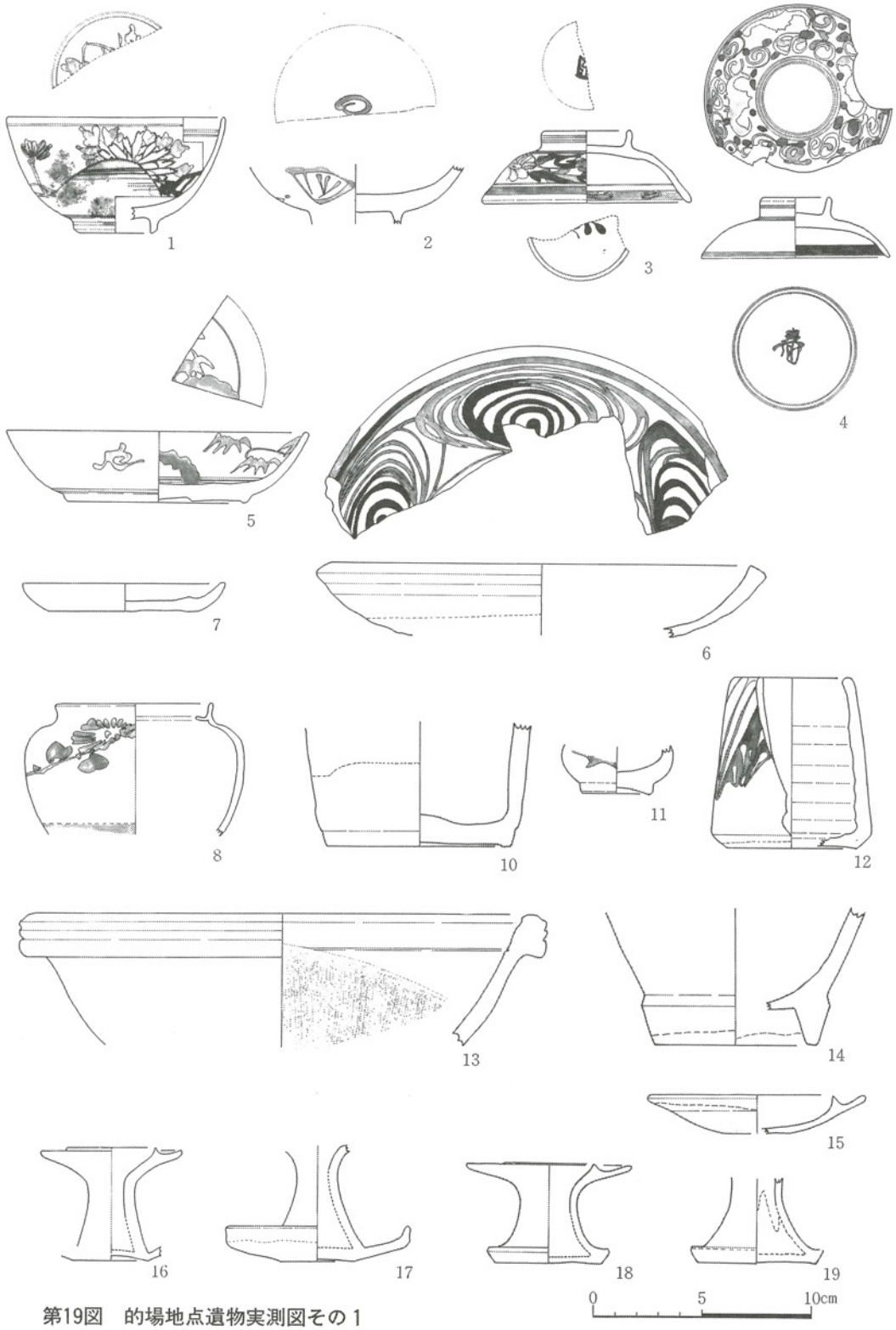
１は呉須の色は原色からやや退色しており，焼次ぎによる二次焼成によるものと思われる。２は呉須は藍色で，扇を描きやや厚手の体部を呈している。いずれも伊万里焼で18世紀代。

(2)　蓋

３はやや群青がかった藍色で草花文。４は藍色でこうもりと唐草文を描き，いずれも伊万里焼で，時期は18世紀末～19世紀前半。

(3)　皿

５は蛇ノ目凹形高台で，内面に笹と雪，外面に退化した唐草文が描かれているが不鮮明。「肥前陶磁」Ｐ137，NO. 199，東京都多摩ニュータウンNO. 424と類似しており，高台の形体から18世紀末～19世紀。６はいわゆる瀬戸焼の馬の目皿とよばれるもので，内面に鉄釉の渦巻文が内面が濃く外側にむかって次第に薄く仕上げている。口唇部に茶褐色の鉄釉をめぐらしており，「郵政省飯倉分館構内遺跡」Ｐ147，NO. 149，150と類似しており18世紀代と思われる。７は通称「かわらけ」とよばれているもので，胎土からみて本県で生産されたものとは思われず，以下述べる土師質皿はいずれも同じである。



第19図　的場地点遺物実測図その１

(4) 壺

胎土からみて京焼系で，口径6.9cmと小さく，内面口縁部と体部境に水平の蓋受けが取り付けられていることから，茶壺もしくは香入れでないかと思われる。

(5) 甕

備前焼で，底径21.9cmありロクロ痕を明瞭に残し，屈曲しながら外上方に開いていることから大甕と思われる。

(6) 鉢

備前焼の底部で，内外面とも釉がありロクロ痕が明瞭に残っている。

(7) 瓶

伊万里焼で，藍色で草を描き，体部は球形を呈しており花瓶と思われる。

(8) 擂鉢

備前焼で，口縁端部に２条の凹線をめぐらし，13条単位の櫛目描きによる擂面をつくっている。

(9) 徳利

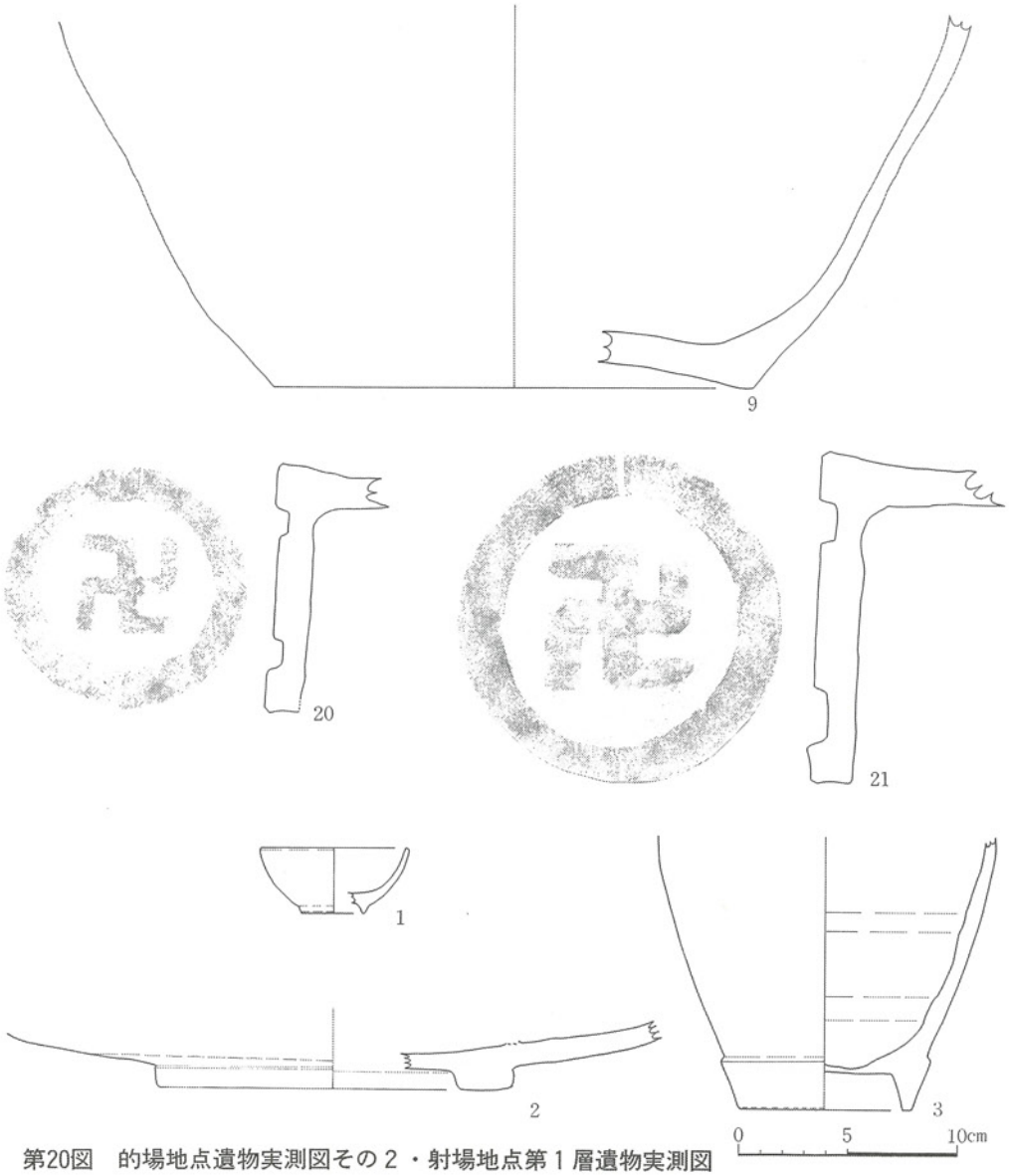
大谷焼の底部で，体部は肩の張ったものと思われる。高台は外側に屈曲させて厚みをもっている。18世紀後半～19世紀前半。

(10) 灯明皿

美濃・瀬戸系と思われるもので，灯芯を受ける部分を内面に持ったものであるが，破片のため脂返しの抉りは不明。

(11) 灯明台

大谷焼，美濃・瀬戸系のものがそれぞれ２点ずつ出土している。いずれも脚部は「ハ」字形を呈しており，上に皿を乗せて使用したものと思われる。



第20図　的場地点遺物実測図その２・射場地点第１層遺物実測図

⑿　軒丸瓦

いずれも徳島城城主の蜂須賀家の家紋である「卍」文で，焼成は堅牢でヘラ切り成形であり，表面に銀粉を塗布している。瓦当の直径が異なっており建物の規模，用途によって使用される瓦が異なっているものと思われる。

以上の資料から見ると，18世紀代より古い資料はなく，徳島城廃棄後に表面の土を埋め立てていたことがうかがえる。

2　射場地点

西の丸御殿の隅櫓より助任川に向かって北に張り出した通称「お花畠」地点と助任川を区画した築地跡及び門跡が検出された地点であり，土層の堆積状況及び遺構の状態から，(1)第1層，(2)川跡覆土上部，(3)川跡覆土下部，(4)築堤肩部に分けた。

(1)　第1層

第1層は，浅黄色粘質土層，灰オリーブ砂質土層，オリーブ灰色粘質土層であり，川が土砂によって堆積し前方へ後退した際の埋土の堆積土である。なお図化できるものは，碗・皿・徳利の3点のみである。

①　碗

伊万里焼で，白磁の小碗であるが時期は不明。

②　皿

胎土からみて美濃・瀬戸系と思われ，内面見込みに砂目跡が見られる。

③　徳　利

大谷焼で，胴部上半に最大径をもち内面にロクロ痕を残しており，肩の張ったものと思われる。

以上わずか3点だけであるので断定はできないが，的場地点と同じく徳島城廃棄後の埋土であると考えられる。

(2)　川跡覆土上部（第21～23図）

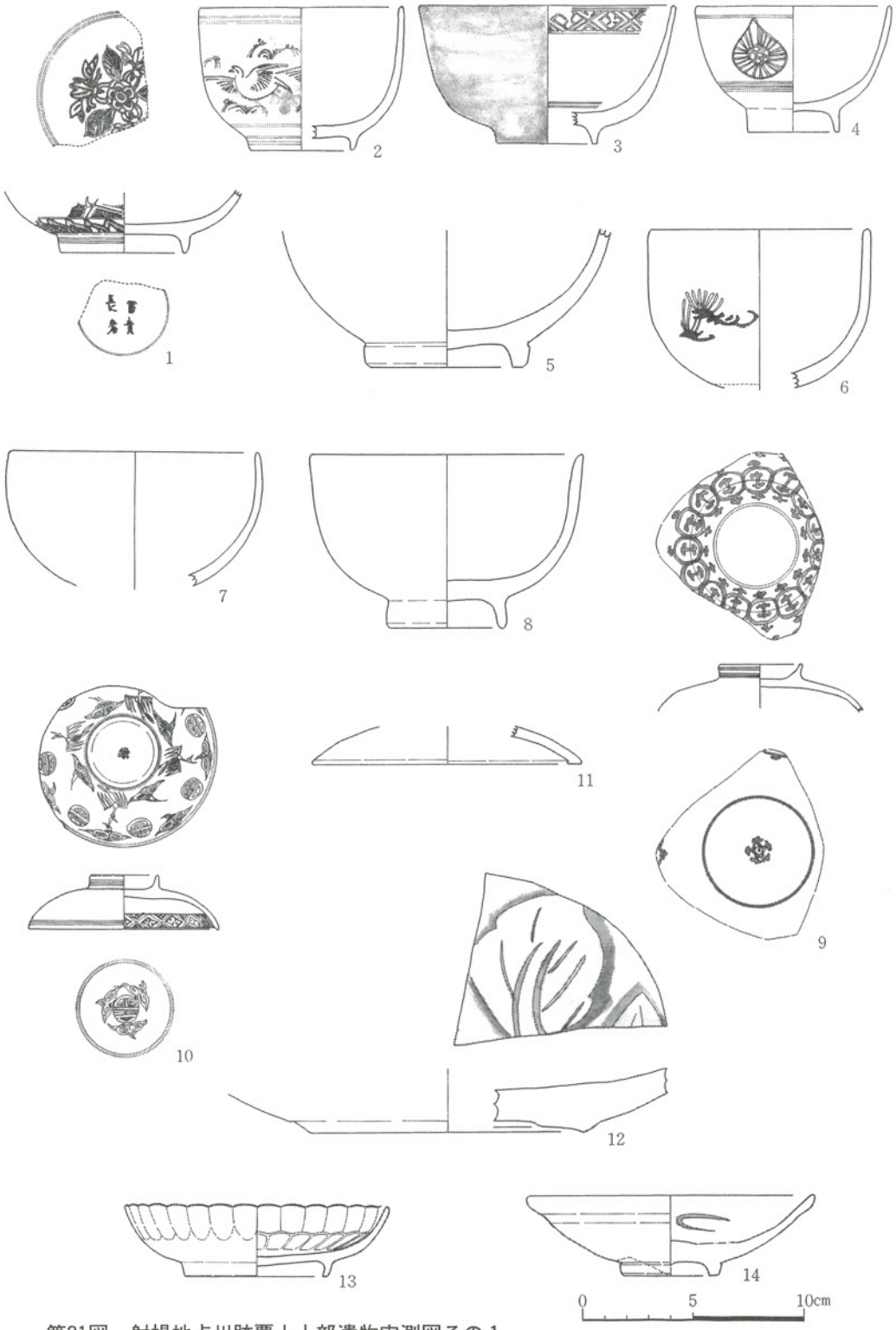
川跡覆土上部は灰黄褐色砂層及び黄褐色礫混じり砂層であり，覆土下部の上に堆積した層で，築堤より助任川よりに離れた層である。湧水のため，完掘はできなかった。

碗，蓋，皿，壺，鉢，猪口，仏飯具，土鍋，焼塩壺蓋，軒丸瓦，煙管，銅銭などが出土した。

①　碗

1～4は伊万里焼，5は唐津焼，6・7は京焼，8は美濃・瀬戸系と思われる。

1は藍色と朱色の呉須を用いたもので，内面見込みに五弁花，外面朱色による蓮弁文が描かれ，「富貴長春」の銘が書かれている。2は体部が直立に近い形を呈し，外面に鳥と草が描



第21図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その１

かれている。1・2とも17世紀後半ないしは末期と思われる。3は所謂青磁染付碗で，外面のみ淡緑色の釉を施しており，18世紀中頃と思われ「南川原窯の辻・広瀬向窯」P. 29の広瀬向窯のものに類似している。4は青味がかった藍色で，宝珠文が6か所描かれており，時期は不明。5は刷毛目碗とよばれるもので，高台は外面ヘラ削りした削り出し高台で18世紀代。6はオリーブ黄灰褐色の釉で，淡黒灰色と黒褐色でもって松が描かれており，7は釉が青みがかった灰白色であり，いずれも内外面とも貫入が見られる。8は高台の高いもので，淡黄色の釉で内外面とも大きな貫入が見られる。

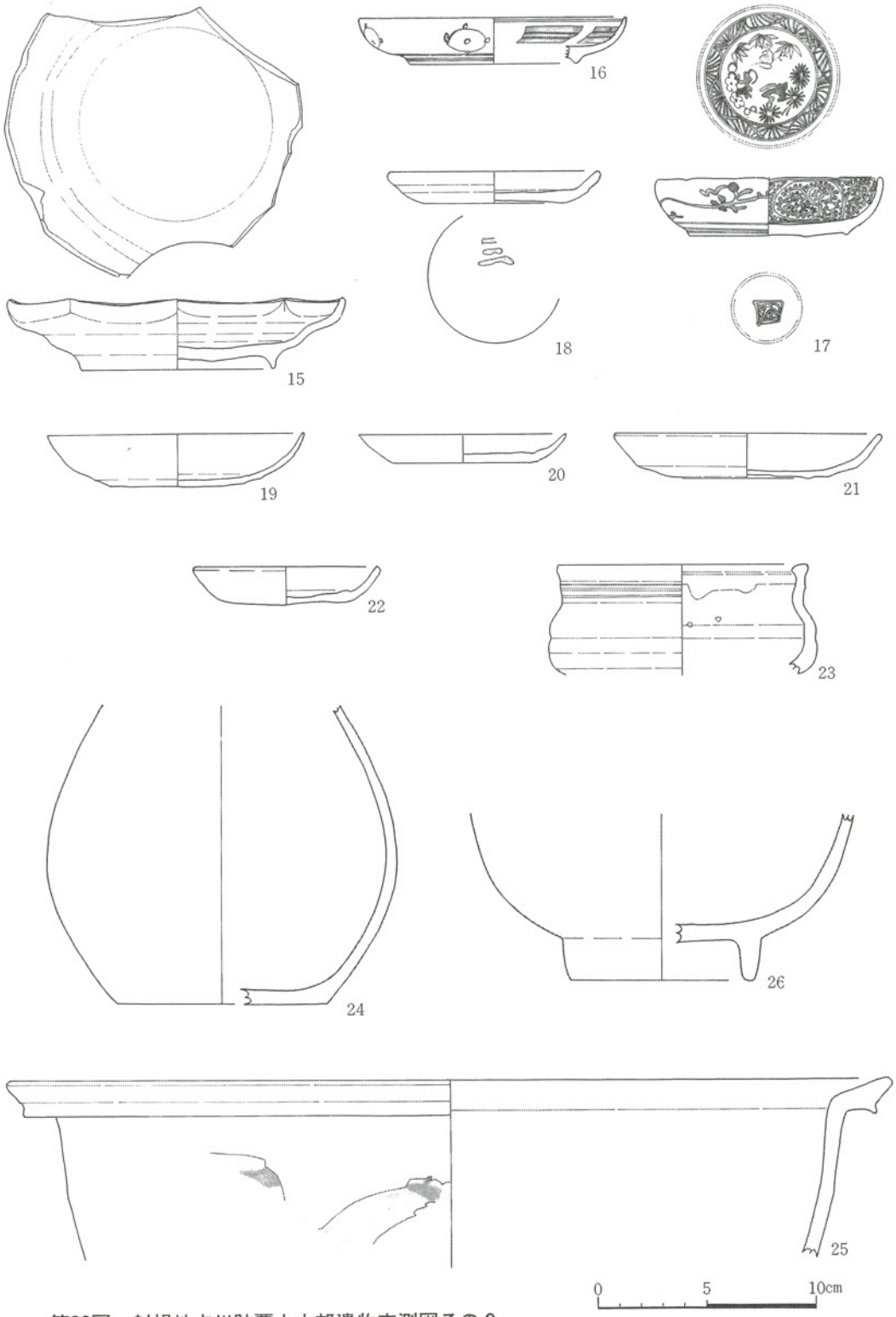
② 蓋

9・10は伊万里焼，11は焼不明である。9は外面に瓔珞文を体部に巡らしており，10は寿字霊雲文を描き，口縁内面に四方襷文が描かれており，「肥前陶磁」P137・NO. 225東京都芝離宮庭園跡のものと類似しており18世紀末。11は，外面に茶褐色の釉が施されており，口縁端部を内側に肥厚させて身部との受部を形成している。東海系のものと思われる。

③ 皿

12～17は伊万里焼，18～22は土師質である。

12は大皿になるものと思われ，青磁染付で内面見込みに木の葉の陰刻文が刻まれている。釉に厚みがなく焼が非常によいので中国産の可能性も考えられる。13は白磁の型押し成形で，口縁輪花の皿で亀甲文状を呈しており，形体的に「白磁の美」P38・NO. 103南川原窯ノ辻窯と類似している。14は削り出し高台で，内面見込み蛇ノ目釉ハギの皿であり，「肥前陶磁」P96・NO. 650岡山県百間川当麻遺跡のものに類似しており，いずれも17世紀後半～18世紀前半に位置づけられている。15は10角形の口縁輪花の青磁で，器種は異なるが「肥前陶磁」P100・NO. 365大阪府堺環濠都市遺跡SKT 20に類似したもので18世紀代。16は内面に八掛文，外面星座文を描き，高台径が口径に比してやや広くなっており18世紀代。17は8角形の口縁輪花皿で，内面側面に蛸唐草文を施し，外面の唐草も非常に簡略化し底裏面に渦福を描き，蛇ノ目凹形高台であることから18世紀末～19世紀初頭。18～22の土師質皿はいずれも水簸した胎土で，底部外面はロクロ糸切り離しを行っており，口径が9㎝内外のものと12㎝内外の2種類あり，19・21は煤が付着しており灯明皿として使用されたと思われ，18は底面に「三」の墨書が見られる。



第22図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その２

④　壺

23は球形を呈し，口縁部を肥厚させた壺で外面黒茶褐色，内面緑がかった褐色釉を施しており，美濃・瀬戸系と思われる。24は焼きのしっかりした壺の底部で，球形を呈しており瓶の底部の可能性もある。

⑤　鉢

25は唐津焼の刷毛目大鉢で，口縁部を外にむかって外反し端部をやや垂下させたもので褐釉の上に白釉の平行刷毛目を施しており，17世紀後半～18世紀前半。26は底部の破片で高台が高く，胎土はやや黒ずんだ灰色で京焼系と思われる。27は釉が光沢のある黒褐釉で，口縁端部に２か所耳を付けていることから，注口鉢あるいは土瓶の可能性が高い。口縁端部からみて蓋がついていたと見られ，美濃・瀬戸系と思われる。28はロクロメを明瞭に残し，口縁部を内外に肥厚させ，２条の凹線を施したもので美濃・瀬戸系と思われる。29は口縁部の受部をもつものであり，胎土からみて京焼系と思われるが焼きは不明。

⑥　猪　口

体部下半のみで，小碗とも考えられるものであり胎土の悪い伊万里系と思われる。

⑦　仏飯具

いずれも伊万里焼で，31は下方にやや開いた筒形の脚を有し，裾部に花弁文を施しており，脚の形体から「肥前陶磁」Ｐ115・NO. 145神奈川県報国寺遺跡と類似しており17世紀後半～18世紀前半。32は身部が球形を呈し，「ハ」字形の短い脚が取りつけられている。

⑧　土　鍋

土師質の口縁のみで，内外面ともナデが施され，外面に煤が付着しており，火を使用した痕が残っている。

⑨　焼塩壺蓋

内面に布目痕があることから型押し成形で，口縁端部が内湾し身部との受部を形成している。渡辺編年18世紀中頃。

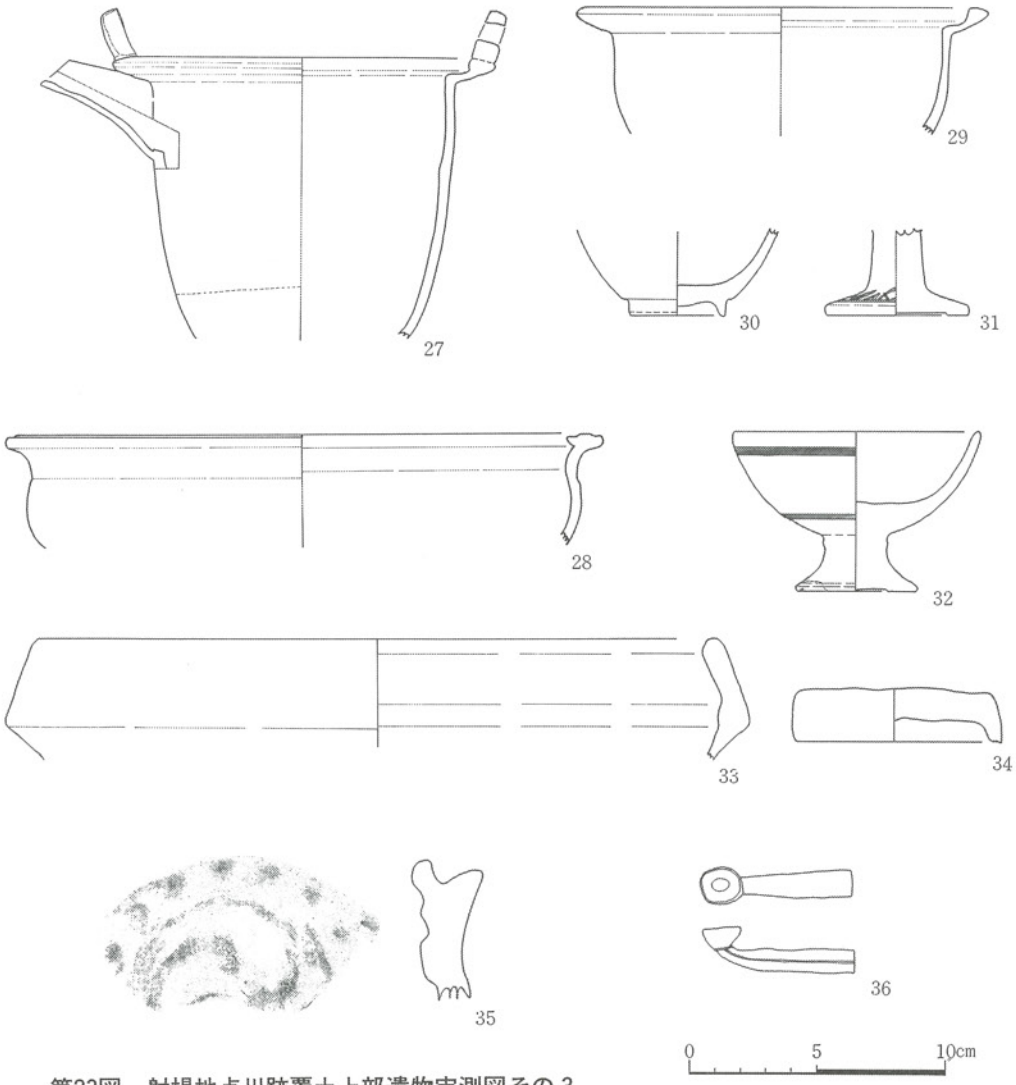
⑩　軒丸瓦

焼があまくやや尾の長い巴文瓦で，蓮珠文は18個並ぶと想定される。時期は18世紀代。

⑪　煙　管

雁首で火皿の下から羅宇まで１枚の銅板を巻いて成形しており，脂返しの湾曲は小さいものであり，古泉編年Ｖ期の18世紀後半。
（註１６）

⑫　銅　銭



第23図　射場地点川跡覆土上部遺物実測図その３

直径2.4cmで，周縁は２mm，穴は角で0.75mmの端取りを肥厚させている。「通」の字の上の作りは「ユ」となっている。

以上の資料からみて，大部分のものが18世紀代に比定され，17及び31のものが19世紀初頭に位置づけられることから，この時期に埋没したことがうかがえる。

(3) 川跡覆土下部　（第24～28図）

川跡覆土下部は，緑灰色粘質砂層及び暗緑色砂質土層のいわゆるグライ層から出土したもので，川跡斜面及び徳島城存続当時の川床近くから出土したものである。

碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，猪口，瓶，徳利，盤，擂鉢，灯明皿，焼塩壺蓋，瓦，煙管，銅銭などが出土した。

① 碗

1～5は伊万里焼，6～8は唐津焼，9～11は京焼風陶器，12～14は京焼，15は不明である。

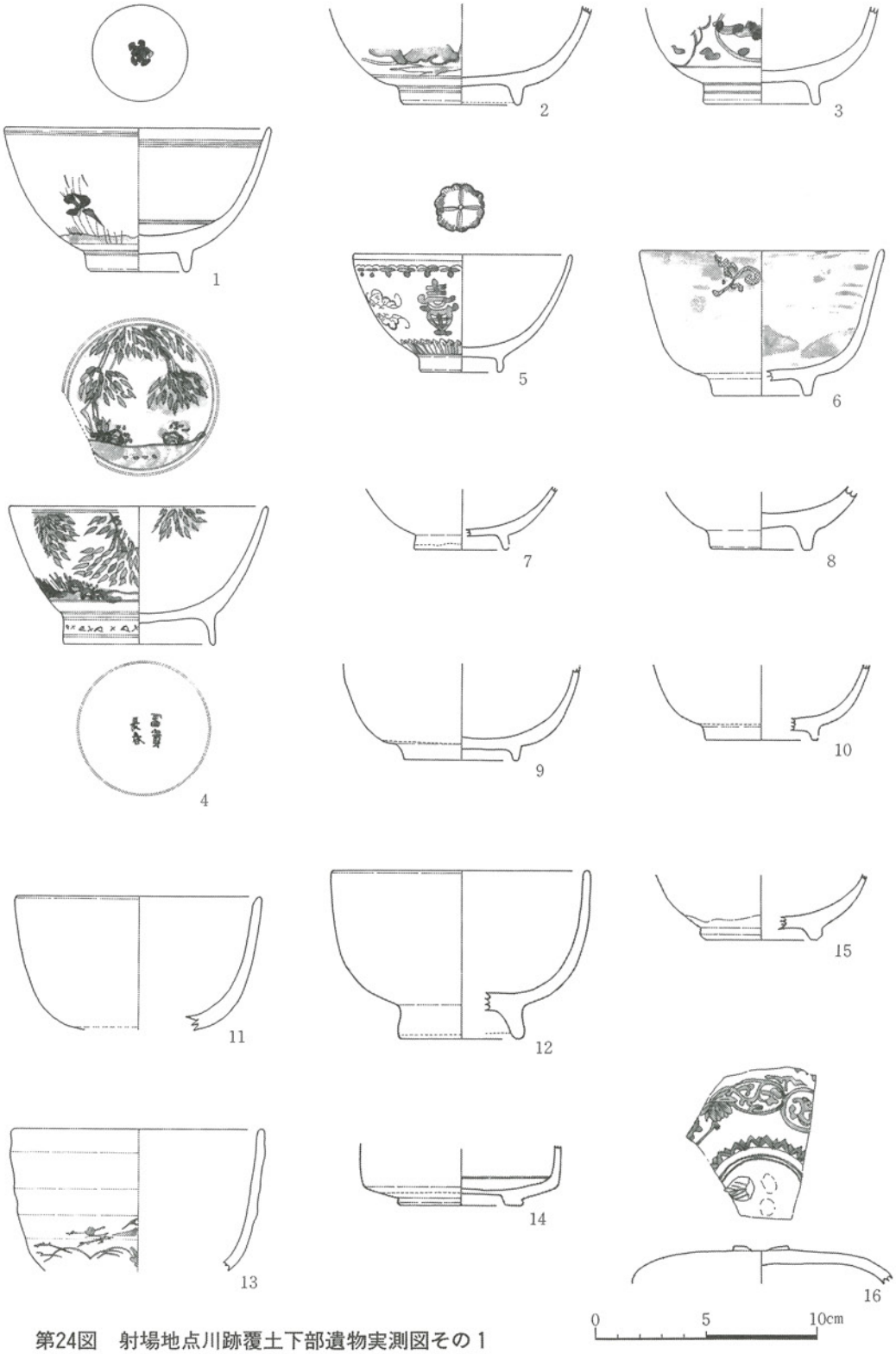
1はくすんだ藍色の呉須で芦文を描き，内面見込みに五弁花のコンニャク判が施されており，「肥前陶磁」P78・NO. 905佐賀県茂手遺跡に類似しており，時期は18世紀前半。2は体部下半のみの破片で，文様構成は十分分からないが，にごった藍色でもって山水図を描いており，釉調からみて陶胎染付と思われ18世紀代。3は灰色の胎土に白釉をかけ流した陶胎染付で，にごった藍色で簡略化した唐草文を描いており，「肥前陶磁」P94・NO. 714福岡県砥石山遺跡のものと類似しており，時期は18世紀代。4は内外面とも連木竹を描き，高台部にO×文，底裏面に「富貴長春」の銘が描かれており，時期は18世紀後半。5は呉須で寿字のくずし文と蝙蝠文，高台境に蓮弁文を描き内面見込みに轡文を描いており，「寿」は「肥前陶磁」P137・NO. 268東京都旧芝離宮庭園跡に類似しており，時期は18世紀後半。6は刷毛目唐津碗で，褐釉の上に白釉の平行刷毛目と明るい青色の唐草文を描いており，「肥前陶磁」P137・NO. 268東京都旧芝離宮庭園遺跡に類似しており，時期は18世紀前半。7・8も灰褐釉の上に白釉の刷毛目唐津碗であり，いずれも18世紀代。9は黄褐釉で貫入があり，底部外面に直径0.8cmの円圏を巡らし「新」の刻印のある京焼風陶器で，17世紀後半の鍋島藩窯のものと思われる。(註17) 10・11も黄褐色釉，黄色味がかった灰白色釉でいずれも貫入が見られ，胎土などから底裏面に銘がないが一応京焼風陶器として取り扱った。12は黄褐釉，13・14は，緑灰白色釉，15はオリーブ黄灰色釉を施しているもので一応京焼系として取り扱った。

② 蓋

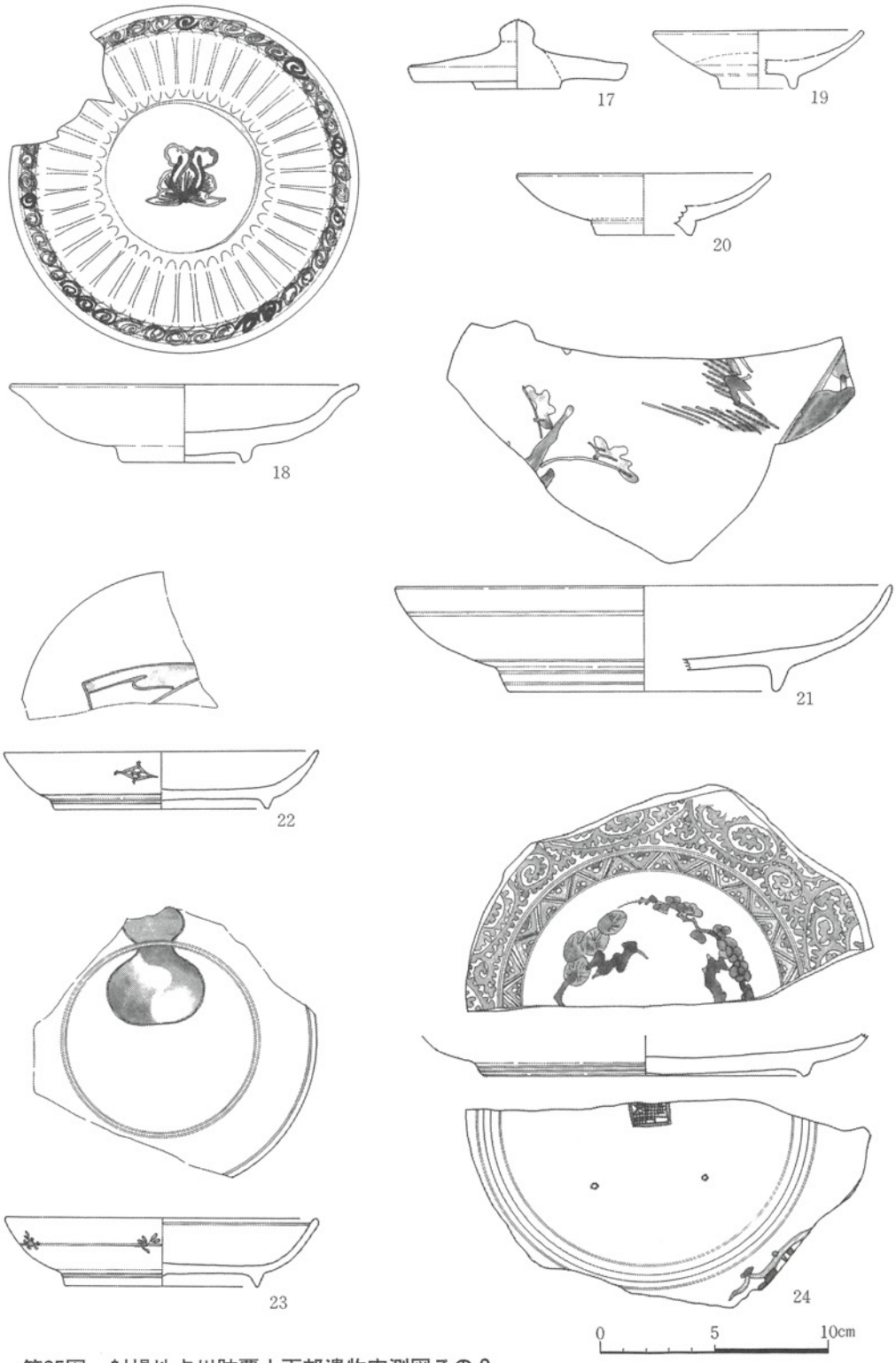
16は木の葉を陰刻したつまみを付け藍色の呉須でもって，非常に丁寧な菊唐草文と花弁を描いている。伊万里焼で時期は18世紀代。17は凝宝子状のつまみを有し，中心部と外部を別作りにしていたもので，その境に割れが見られる。唐津焼で17世紀後半。

③ 皿

18～24は伊万里焼，25～27は唐津焼，28は美濃・瀬戸系，29～40は土師質土器である。



第24図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その１



第25図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その２

18は全体にぼてっとした感じで，底径は口径の３分の１であり，内面は花弁の縞が見られ，口縁内面に渦巻文，見込み中央に牡丹の唐花文様を施している。渦巻文は「伊万里」・日本の陶磁・Ｐ10・NO. 10，Ｐ12・NO. 12と類似しており有田内山窯のもので17世紀前半。19・20は削り出し高台，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，「肥前陶磁」Ｐ105・NO. 408奈良県郡山城跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。21は口径が21.6cmとやや大きめのもので，山水図を描き17世紀末と思われる。22は低い高台，藍色の呉須で流水文，外面に武田菱文を描いており，23は内面にきれいな呉須でひょうたんを描いている。いずれも18世紀代。24は底径14.2cmとやや大きめの皿で，内面は松竹梅と蛸唐草文を丁寧に描き，外面には簡略化した唐草文を描いており，「肥前陶磁」Ｐ130・NO. 958鹿児島県鹿児島城本丸跡と内面見込みの文様が類似しており，18世紀末～19世紀前半。25は削り出し高台の銅緑釉皿で，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台内面に兜巾を残し，「肥前陶磁器」Ｐ77・NO. 893佐賀県板橋遺跡・Ｐ105・NO. 407奈良県郡山遺跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。26・27は内面に褐釉を施し，底裏面にロクロ糸切り離し痕が残っている。26は煤が付着していることから灯明皿として使用している。28は乳白色の釉で貫入があり，二次焼成を受けたもので釉が退色しており，一応美濃・瀬戸系と思われる。29～40はかわらけとよばれる土師質土器で，口径の大きさによって13cm代，11～12cm，９～10cm，５～６cmの４種類に分けられ，13cmのものは体部外面をヘラ削りを行っており，非常に堅牢な焼きであり，９cm及び６cm内外の小さめのものは，ナデによる成形を行っている。30～34，39には，外面に煤が付着していることから灯明皿として使用したものと思われる。

④　壺

内外面とも褐色釉があり，釉ハゼが見られる備前焼の壺の底部である。

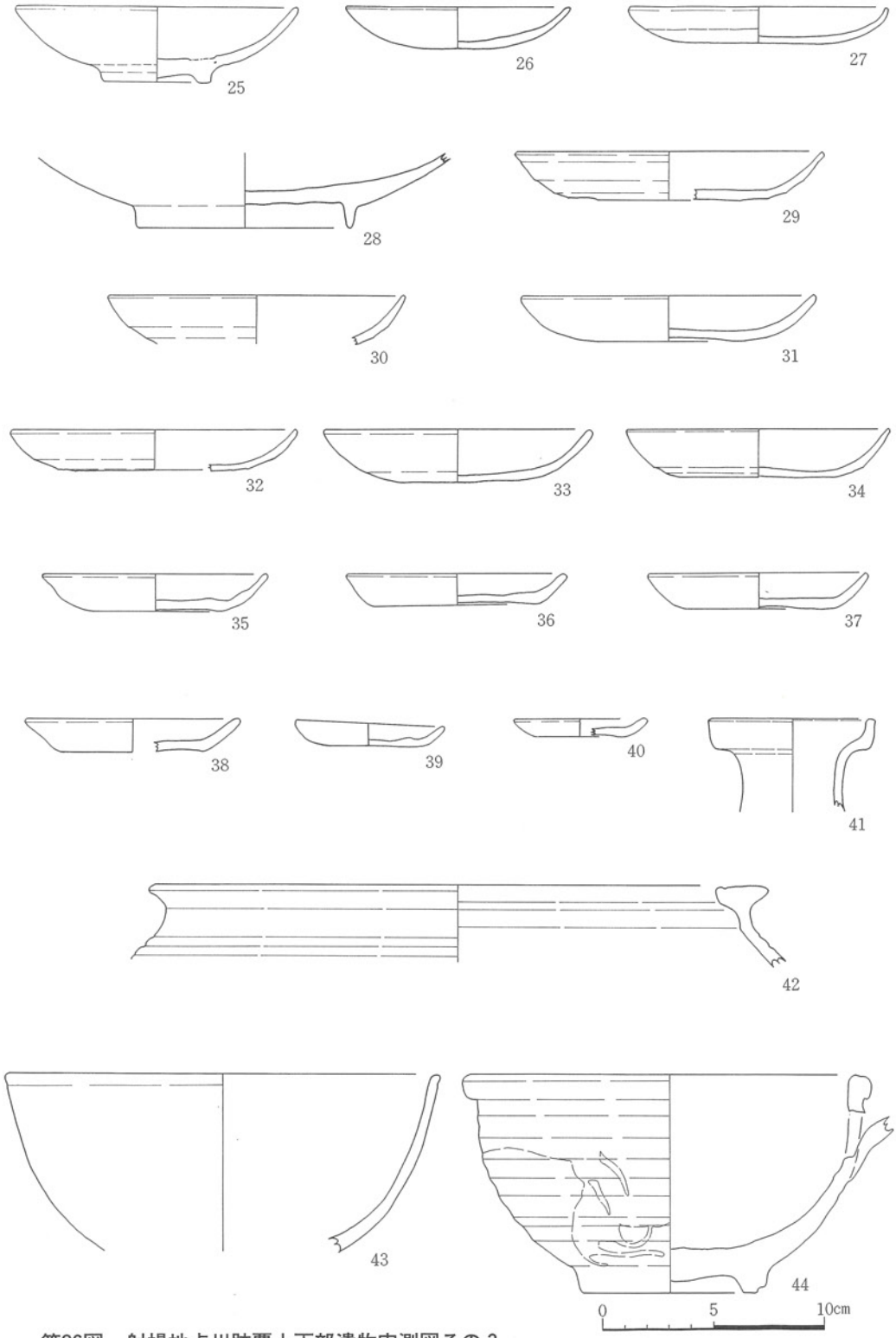
⑤　甕

口縁部を肥厚させ，ロクロ痕を明瞭に残した備前焼の甕の口縁である。

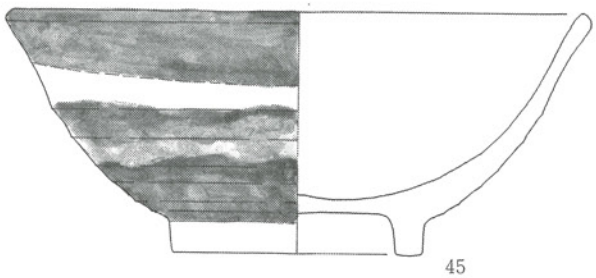
⑥　鉢

43は伊万里焼，44～50は唐津焼，51は不明，52は京焼系，53は美濃・瀬戸系，54は土師質である。

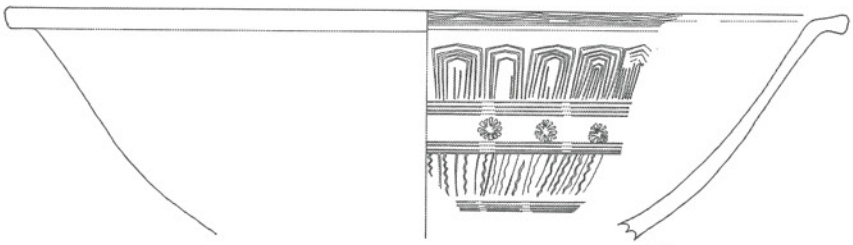
43～45の口縁は体部よりまっすぐに上がっているもので，46～49は屈曲して大きく外反しており，一応２種に分けられる。43は口縁外面に一条の稜線を巡らした明緑白色の青磁鉢である。44は１か所に注口部を付けた鉢で，高台下半に段を持っており，「肥前陶磁器」Ｐ65・NO. 358大阪府堺環濠都市遺跡に類似しており，17世紀後半。45は内面に鉄釉，白釉，銅緑釉



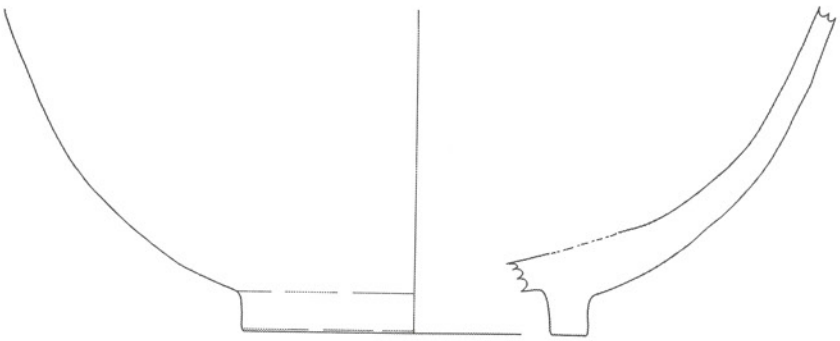
第26図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その３



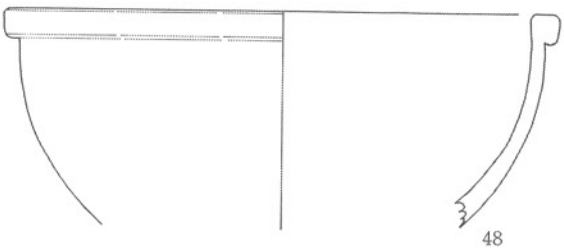
45



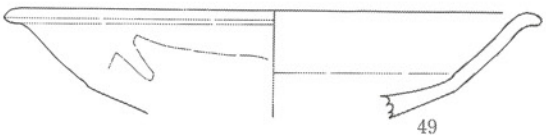
46



47



48



49

第27図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その４

を施した三彩刷毛目鉢で口縁部は外側に折り返して肥厚させたもので，44と同様17世紀後半。46は象嵌三島手の鉢で，蓮弁文，菊文，縦線文を刻んでおり，「肥前陶磁」P56・NO. 338・NO. 340 大阪府堺環濠都市遺跡に類似しており，17世紀後半。47は胎土に黒褐色の刷毛目，48は褐釉の上に白釉の刷毛目，49は黄色みがかった褐釉，50はオリーブ黄灰褐色釉の鉢でいずれも17世紀後半～18世紀代。51は淡緑青色の青磁鉢で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っている。高台畳付けに砂が付着しており胎土からみると伊万里系と思われるが不明。52は胎土はきめ細かく堅牢な焼であり，内面見込み蛇ノ目釉ハギでその部分に波状の墨書を行っており，京焼系か。53は高台の高い削り出し高台で，外面のみ黒褐色釉が施されており，胎土からみて美濃・瀬戸系か。54は体部がやや内湾し，平鉢状のもので用途的には焙烙の一種か。

⑦ 猪 口

すべて伊万里焼であり，55は墨弾き技法で貫入がみられ，17世紀中頃か。56は口縁部を外反させた端反り型で，僅かに青味をおびた灰色の呉須で雁を描いている。57は三角形の高台に球形状の体部の小型碗で，56と同じく17世紀後半～18世紀前半と思われる。58は端反型で，高台は低く砂が付着している。59は底部の小さい碁底高台で下半に松文を描いている。いずれも時期は不明。

⑧ 瓶

いずれも伊万里焼の破片であり，内面無釉で，60には柳が描かれており器形的には，樋口窯物原下層に類似している。

⑨ 徳 利

筒形の頸部で，体部はハ字形に外反しているもので，釉に貫入があり変色していることから二次焼成を受けており，伊万里焼で18世紀代。大きく分けると瓶に含まれるが，形体からみて一応徳利として扱った。

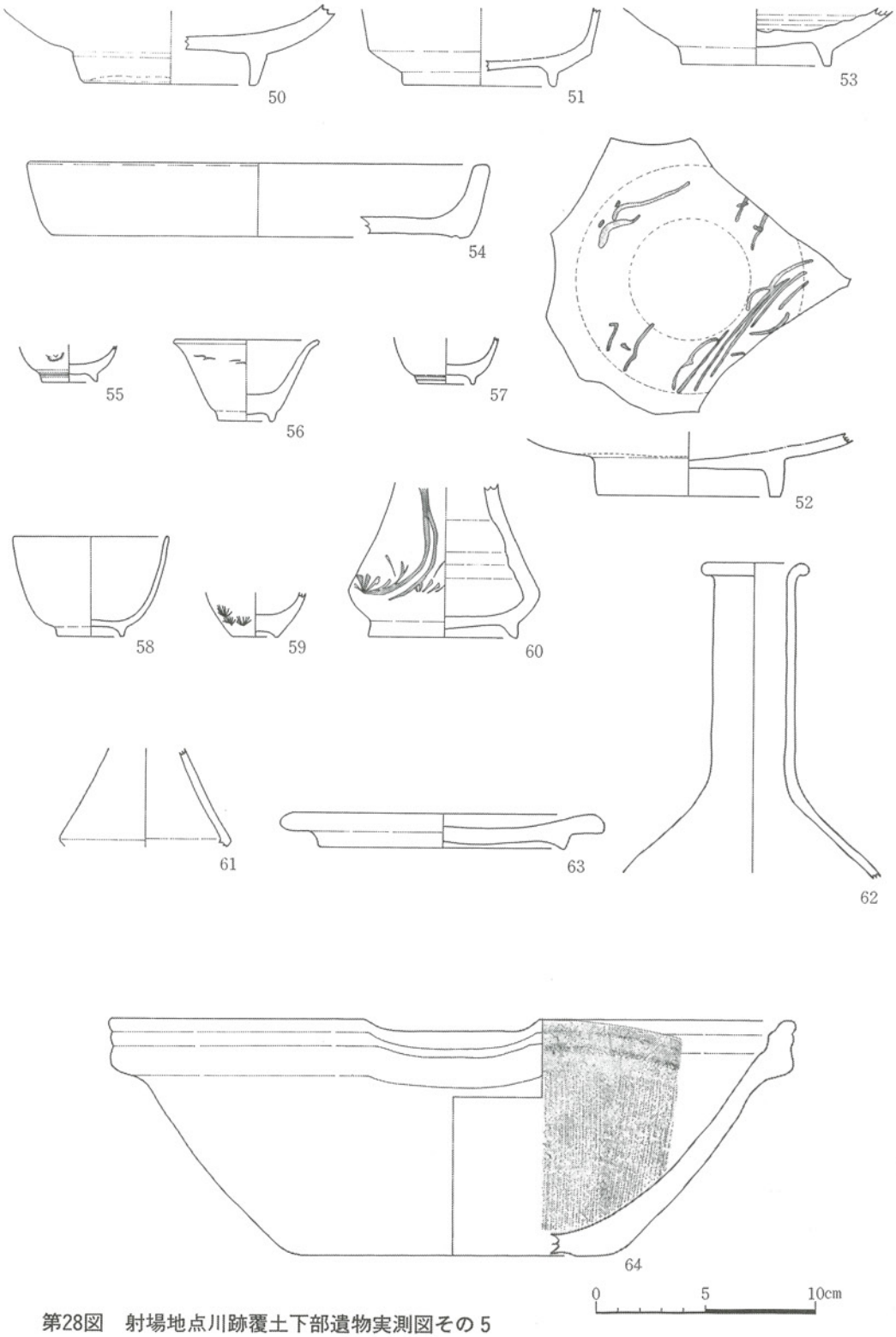
⑩ 盤

器高が非常に低く，内傾した三角高台を付けている。内面中央部を凹ませたもので，ロクロ痕が明瞭に残っており，大きく区分すると皿に含まれるが，一応体部の立ち上がりがないので盤として取り扱った。胎土からみて備前焼。

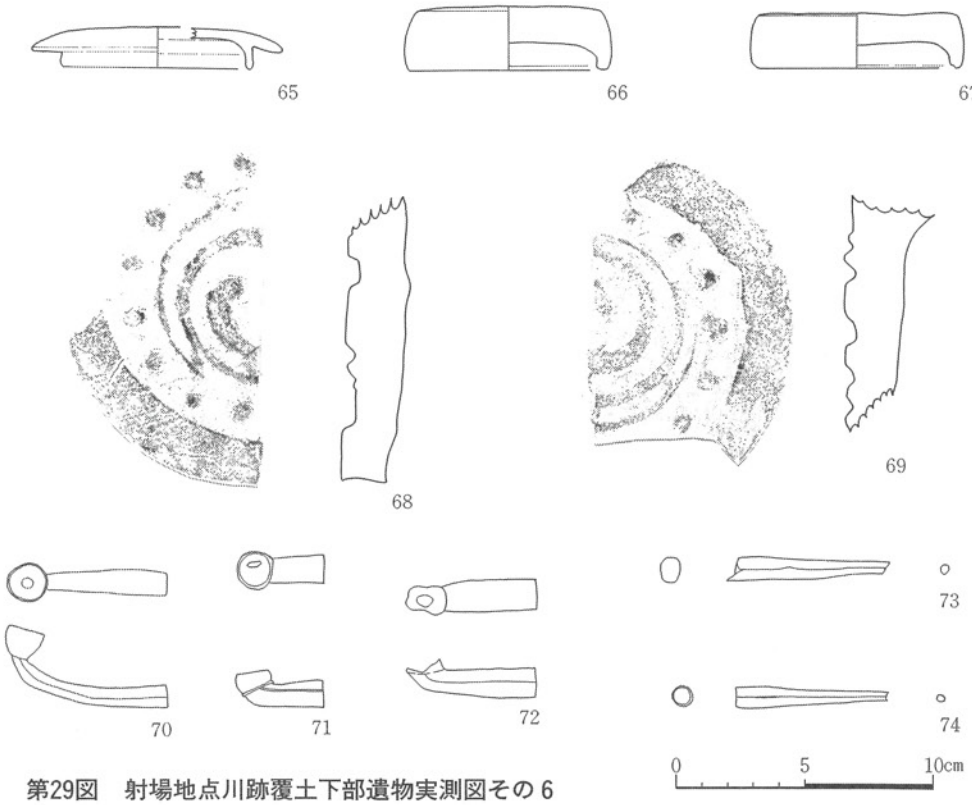
⑪ 擂 鉢

備前焼で，口縁端部を上下に肥厚させ，２条の凹線を巡らしており，内面に10条単位の櫛目描きで擂面を形成している。

⑫ 灯明皿



第28図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その５



第29図　射場地点川跡覆土下部遺物実測図その6

美濃・瀬戸系でロクロ削りが明瞭に表れており，やや高く外反した燈芯受部をつくっている。脂流しの有無は破片のため不明。

⑬　焼塩壺蓋

いずれも内面に布目痕があり，型押し成形で口縁端部に身部との接合のへこみがある。渡辺編年からみて18世紀中頃。（註18）

⑭　軒丸瓦

2点あり直径は15cm前後で，周縁幅1.9cmで尾の長い巴文瓦である。珠文は68が直径0.7cm，69が0.9cmで，いずれも推定で18個と考えられ，時期は18世紀代。

⑮　煙　管

70～72は雁首で，70は脂返しの湾曲は小さく71，72は脂返しの湾曲は殆どない。いずれも火皿の下から羅宇までは1枚の銅板を巻いて成形しており，70は小泉編年Ⅳ期の18世紀前半。71，72は小泉編年Ⅵ期の19世紀代。73・74は吸口で，いずれも1枚の銅板を巻いて成形しており，小泉編年Ⅴ期の18世紀後半。

⑯　銅　銭

いずれも寛永通宝で，75は直径2.45cmで字は鋳くずれが激しい。「通」の字の作りのうえは「コ」になっている。76は錆が激しく銘は不明。直径2.35cmで寛永通宝と思われる。

以上のことからみて17世紀前半のものから19世紀初頭にかけてのものがみられ，築城からあまり経っていない時期から川跡の埋没ごろまでのものが一通りあり，相当長い期間にわたる堆積が見られるようである。

(4)　築地肩部　（第30～32図）

築地より川へ下る斜面にかかる部分のもので，黄褐色砂層，にぶい黄褐色砂層の川跡肩部に堆積したものである。

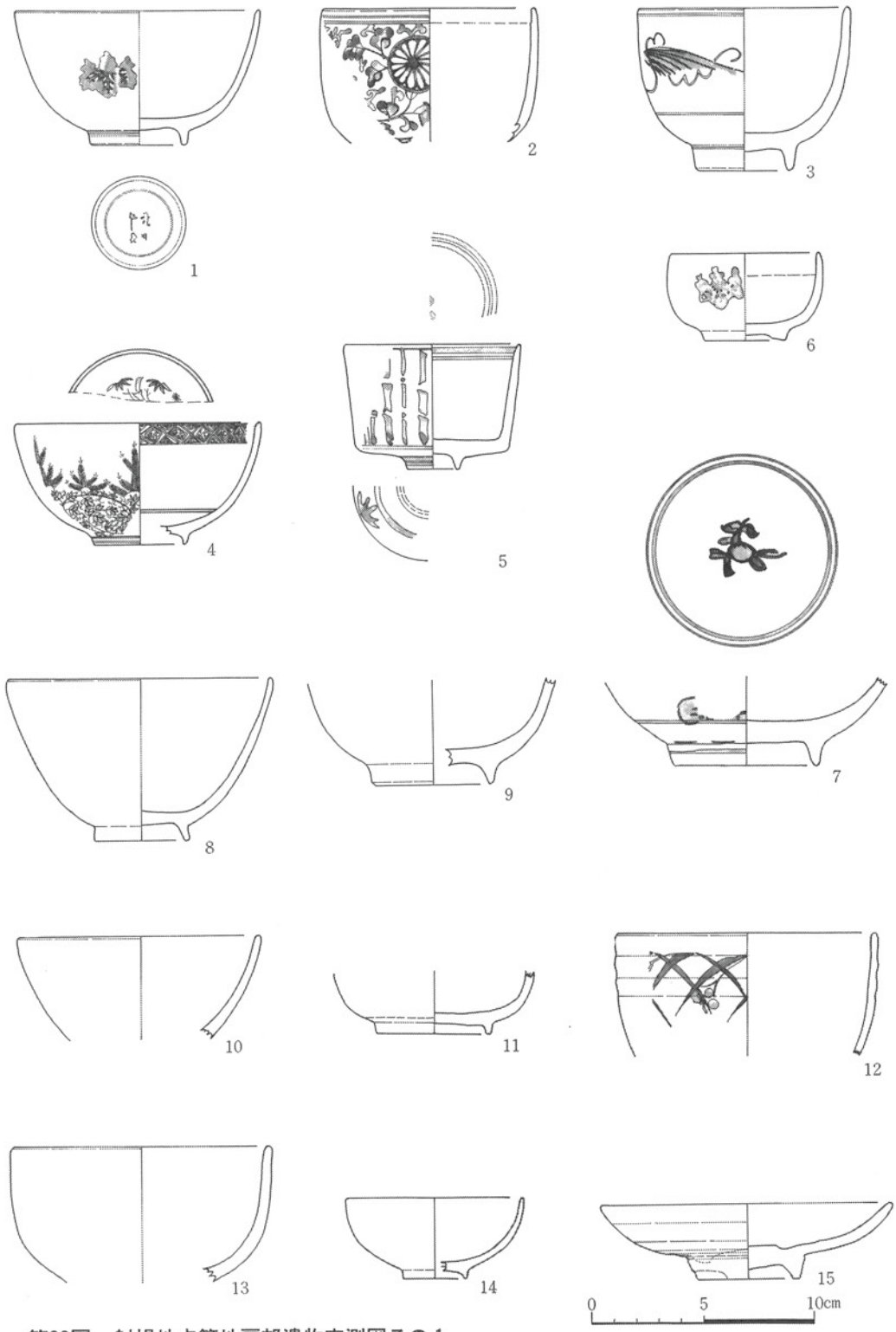
碗，皿，壺，甕，鉢，猪口，香炉，火鉢，灯明皿，ミニチュアの玩具，瓦が出土した。

①　碗

1～7は伊万里焼，8～10は唐津焼，11は京焼風陶器，12・13は京焼，14は不明である。

1はコンニャク判による桐と蘭が描かれ，底裏面に「太明年製」の銘があり，「肥前陶磁」P94・NO. 695山口県大内氏館跡，P100・NO. 534京都府三条西殿跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。2は体部がわずかに内湾した直線状を呈し，菊と唐草文が描かれ「肥前陶磁」P90・NO. 959鹿児島県鹿児島城本丸跡，P96・NO. 635岡山県百間川当麻遺跡に類似しており18世紀代。3はにごった藍色でつる草を描いていると思われるが文様不明。4は薄手で焼きがよく，外面に若松と七草手唐草をすんだ藍色で描いており，唐草文は「肥前陶磁」P90・NO. 706福岡県西屋敷遺跡に類似しており18世紀代。5は筒形碗で，高台径が口径に比して小さいもので18世紀後半か。6は凹形高台の小碗で，コンニャク判の桐文であり18世紀後半。7は底径が6.2cmとややおおぶりで，変形した牡丹が描かれており鉢の可能性もある。8～10は平行刷毛目碗で，全体に貫入があり，8・10は「肥前陶磁」P106・NO. 524滋賀県彦根城家老屋敷跡，9はP123・NO. 208東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており17世紀後半～18世紀前半。11は黄灰白色の胎土にオリーブ黄色の釉を施し，貫入が見られ，底裏面に直径0.8cmの円圏を巡らし「森」の刻印があり，鍋島藩窯の京焼風陶器で17世紀後半。12・13はオリーブ黄色の釉で細かい貫入が見られ，11の京焼風陶器と区別はつかないが，底裏面に刻印が見られないことから一応京焼とした。14は緑がかった灰白色で貫入が見られ，高台は低く焼きは不明。

②　皿



第30図　射場地点築地肩部遺物実測図その１

15・16は伊万里焼，17・18は京焼，19～27は土師質土器である。

15は淡青色釉の青磁鉢で，削り出し高台，内面見込み蛇ノ目釉ハギで「肥前陶磁器」P46・NO. 753 福岡県冷泉遺跡に類似しており17世紀中頃。16は白磁皿で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており「肥前陶磁」P105・NO. 408奈良県郡山城跡と類似しており17世紀後半～18世紀前半。17は底部のみの小破片で，オリーブ淡褐色の釉を施した高台内面に「粟田」の刻印があることから，京焼のなかの粟田焼(註19)である。18は黄色みがかった灰白色の胎土にオリーブ黄色の釉を施し貫入があることから，一応京焼とした。19～27はかわらけとよばれる土師質土器で，口径の大きさによって11～12cm，9～10cm，6～7cmの3種類に分けられ，19・20は体部外面ヘラ削りを行った非常に堅牢な焼きであり，他のものはナデによる成形を行っている。19・20・22には煤が付着していることから灯明皿として使用され，24・25・27には内面に墨痕がみられる。

③ 壺

備前焼で，やや角張った縦長の球形を呈しロクロ痕が明瞭に残っている。細頸壺の底部と思われる。

④ 甕

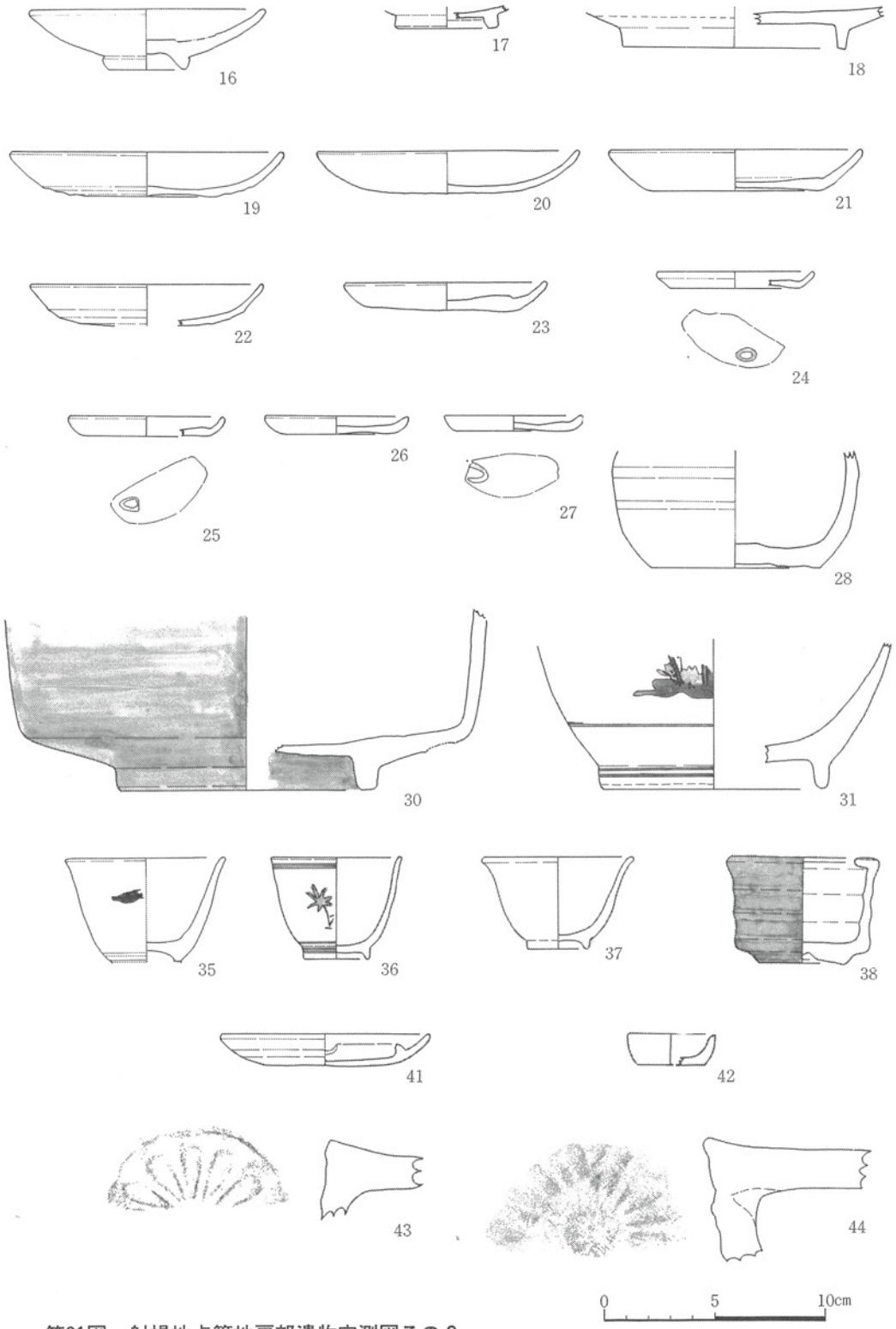
備前焼の大甕の破片で，口縁部を内外に肥厚させ平坦面をつくり，平坦面に3条の凹線を巡らしている。体部はロクロナデによる凹凸を外面に巡らしている。18世紀代か。

⑤ 鉢

30・31は伊万里焼，32・33は唐津焼，34は土師質土器である。30は外面青磁の鉢で，屈曲部外面に砂胎土目痕がみられる。内面無釉で筒形鉢か。31は縦長の球形を呈し，外面に貫入が見られ，竹が描かれている。32は内外面とも鉄釉の刷毛目で，口縁部は外側に折り返して肥厚させた口縁で，台形の高台で17世紀後半。33は白釉の平行象嵌刷毛目で，胴部に獅子頭を付けている。象嵌刷毛目から17世紀後半。34は体部が外上方に直立し，底裏面にロクロ糸切り離しが見られ外面に二次的な加熱した焼け跡が見られることから，焙烙と考えられる。

⑥ 猪口

いずれも伊万里焼で，35は端反り桶型で，藍色で木の葉文が描かれ，器形からみて17世紀後半。36は口縁部が緩やかに外半したもので，上下に呉須による平行線が巡り，あざやかな藍色で紅葉と鹿を描いており，器形からみて17世紀後半～18世紀前半。37は白磁の端反り型で胎土はきめ細かく焼成は堅牢であり，「肥前陶磁器」P66・NO. 405奈良県郡山城跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。



第31図　射場地点築地肩部遺物実測図その２

⑦　香　炉

体部にロクロナデの凹凸を明瞭に残し，口縁を内側に折り曲げて蓋受けを作り，凹形高台でややくすんだ緑色の青磁で時期は不明。

⑧　鉢

いずれも土師質で39は体部上半まで，40は底部のみの破片で，体部は緩やかな球形を呈しているものと思われ，39には体部に窓が１か所，内面突起が３か所付けられており，炭を入れ上面に土瓶等のものを乗せていたと思われる。

⑨　灯明皿

陶質土器で，底裏面にロクロ糸切り離し痕がみられ，内面に燈芯受部があり３か所に脂流しのくぼみが３か所付けられている。焼きは不明。

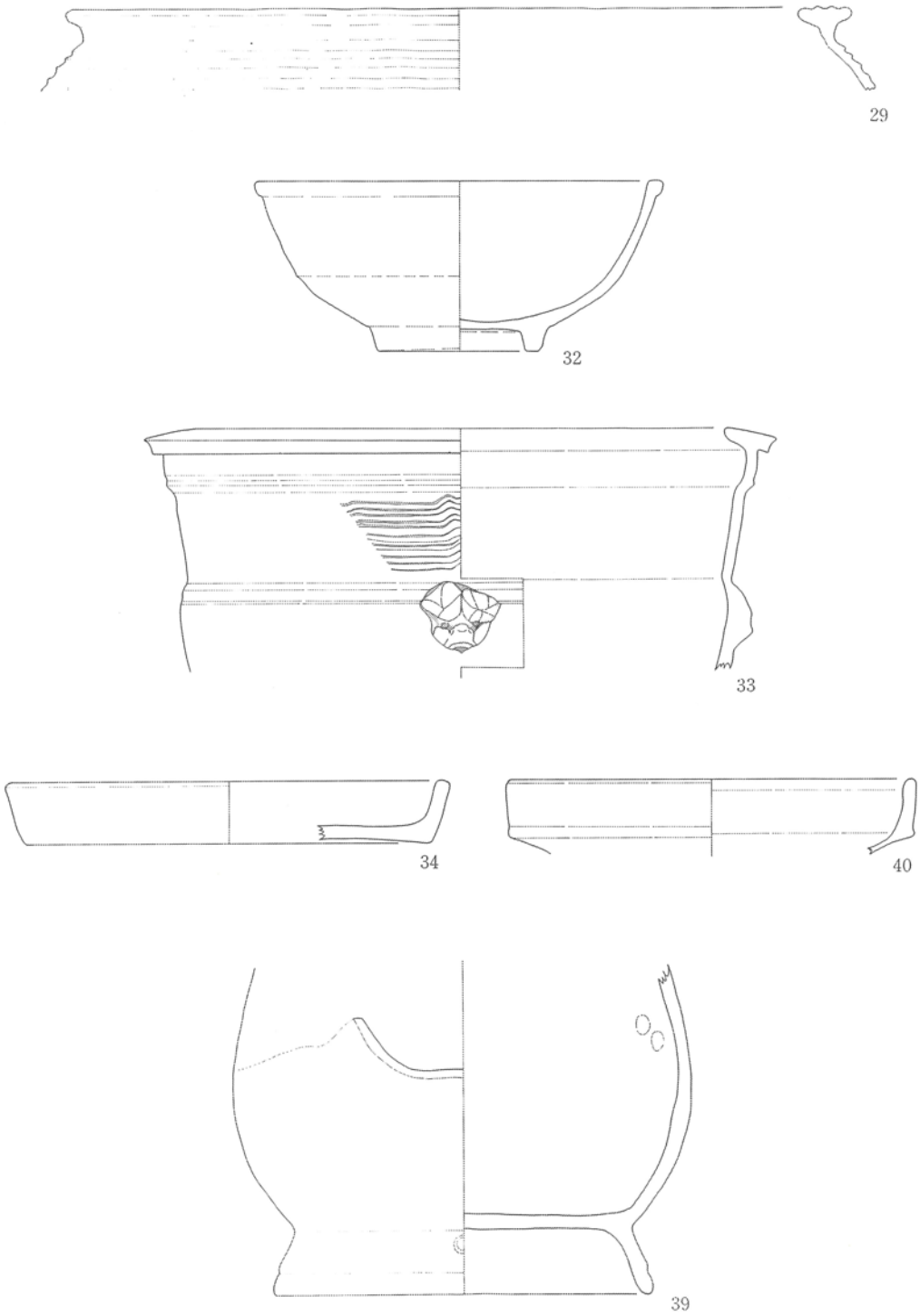
⑩　ミニチュア（玩具）

土師質のもので，焼きはあまく内面のみ黄燈色の釉をかけており，何らかの用途が考えられるが，一応玩具として取り扱った。

⑪　軒　瓦

いずれも菊文12弁の棰木先瓦と思われ，43は直径8.2㎝の型押し成形で，丸部は水平。44は半円のヘラ切り成形で，丸部は水平。45は直径8.0㎝のヘラ切り成形，菊文は21弁である。

以上43点について述べたが，大半の資料が18世紀前半までにあてはまることから，18世紀前半頃にはこの築地は使われなくなり前方へ拡張されたことをものがたっており，築地が前方に作られたものと思われる。



第32図　射場地点築地肩部遺物実測図その３

3　武道館地点

射場地点と武道館地点の境で検出された門跡からやや向きを変え，現在の助任川とほぼ平行に延びた築地，幾度か作り替えられ前方へと張り出していった築堤，築堤に伴う船着き場，護岸杭及び板列，城域内の遺構である給水石垣溝及び池跡に伴って多量に出土した。

土層の堆積状況や遺構の状況から，(1)第１層，(2)川跡覆土上部，(3)川跡覆土中部，(4)川跡覆土下部，(5)護岸杭・板列，(6)川跡新段階築堤・船着き場，(7)川跡中段階築堤，(8)川跡古段階築堤，(9)築地跡，(10)給水溝・池跡，(11)門跡，(12)攪乱，(13)その他に分けた。なお溝跡，築地南の包含層の出土遺物は微量であるのでその他の項目に入れて一覧表の備考の欄にその旨を記述した。

(1)　第１層　（第33～35図）

にぶい黄褐色砂層，褐色砂層の層で川跡及び築地直上の遺物包含層で，一部築地及び川跡の遺物，刑務所当時の整地層とも明確に区別できなかった為，含んでいるものである。

碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，猪口，香炉，仏飯具，擂鉢，土釜などが出土した。

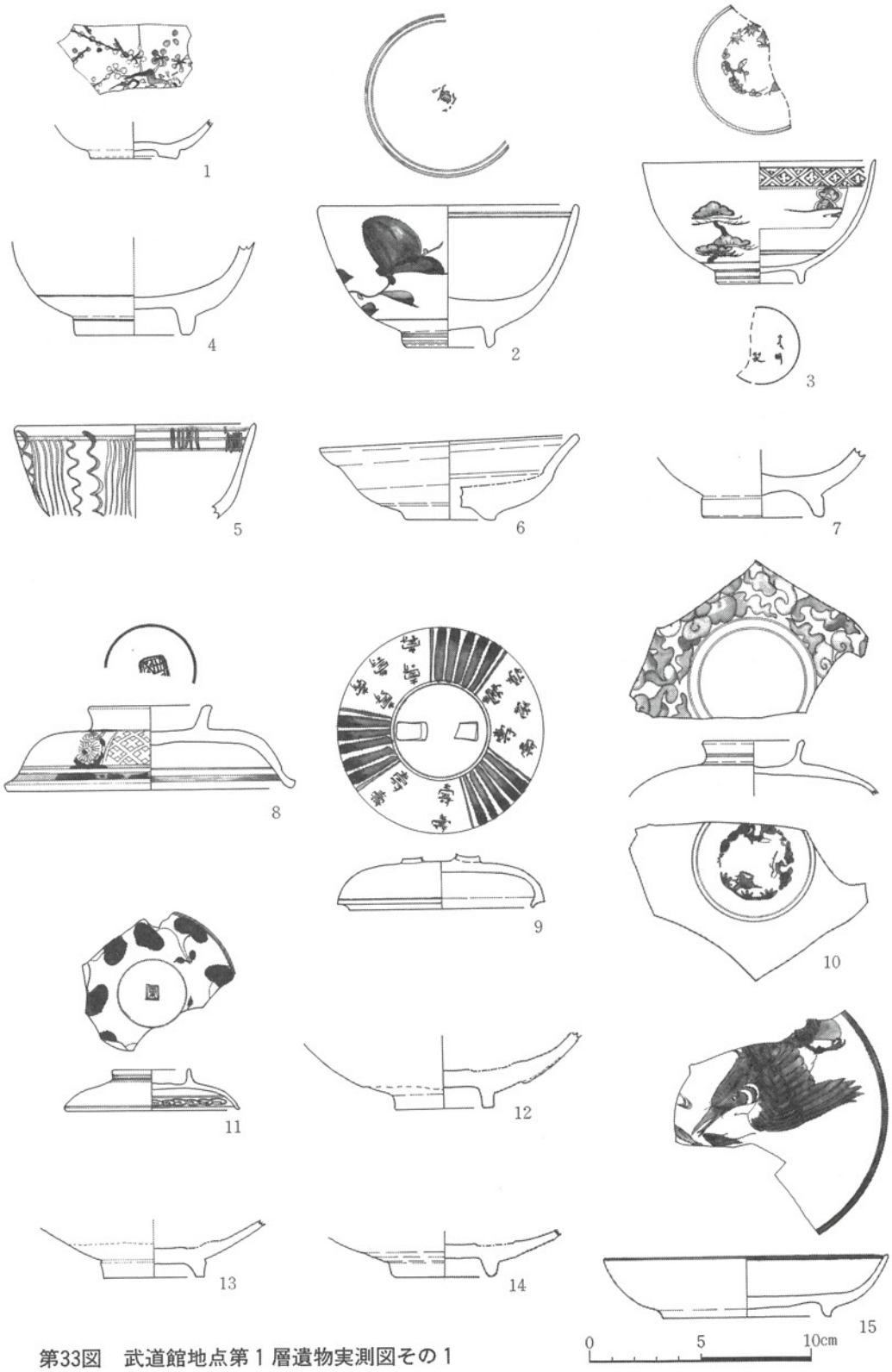
①　碗

１～５は伊万里焼，６・７は唐津焼である。

１は藍色で梅を描き，高台は幅広く低い小碗で蛇ノ目凹形高台。器形からみて18世紀代。２は外面つる唐草文を描き，内面見込みに五弁花コンニャク判を施しており，18世紀前半。３は内外面及び見込みに松竹梅文を描き，口縁内面に四方襷文，底裏面に「太明年製」の銘を描いており，18世紀中頃～後半。４は明緑灰色の釉をかけ，緑がかった藍色で草花文を描いた陶胎染付碗で，18世紀代。５は波状と直線の縦線文を描き，口縁内面に格子文を描いており「肥前陶磁」Ｐ133・NO. 627 鳥取県陰田遺跡に類似しており，18世紀末～19世紀初頭。６は胎土がやや厚く，高台は低く削り出し高台で，体部は２段に屈曲して斜め上方に立ち上がっており，内面に胎土目痕が２か所ある。佐賀県山辺田１号窯・Ｐ25・NO. 29と類似しており，17世紀初頭。７は赤褐色の胎土に白釉をかけ兜巾高台であり，17世紀中頃～後半と思われる。

②　蓋

いずれも伊万里焼で，８は体部が屈曲し身部との受部は外反させて平坦面をつくっており，白，赤紫，緑，青色による色絵で梅に斜格子を描いており，色絵の状況からみて17世紀後半と思われる。９は武道館川跡覆土上部 NO. 111 の蓋で合子蓋であり，つまみ部は欠損し



第33図　武道館地点第１層遺物実測図その１

ているが帯状を呈し，受部は屈曲させて返りをつくっており17世紀後半～18世紀前半。10はやや大きめで大きく外反し，内面松竹梅を描いており，18世紀中頃～後半。11は非常に薄手で小さく，あざやかな藍色でくわい文を描き，つまみ内面に「生田」の銘を描いており，19世紀初頭。

③ 皿

13～15は伊万里焼，16・17は唐津焼，18は京焼風陶器，20～22は土師質土器である。

12・13は明緑灰色及び淡青緑色釉の青磁皿で，貫入があり内面見込み蛇ノ目釉ハギ，削り出し高台のもので，17世紀中頃～18世紀前半。14は白磁皿で内面見込み蛇ノ目釉ハギのもので「肥前陶磁器」P105・NO. 408奈良県郡山城跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。15は褐釉にるロ紅皿で川蟬と魚のプリントを行っており時期は不明。16は底部ロクロ糸切り離しの兜巾高台で浅黄色の釉をかけており，体部が屈曲していることから碗の可能性があり，17世紀初頭～中頃。17は灰褐色釉で内面見込みに3か所の砂目痕があり兜巾高台で，「肥前陶磁」編年Ⅱ－a期にあたり17世紀前半。18は灰黄褐色釉で貫入があり，底裏面に直径1.7cmの円圏を巡らし「小松吉」の刻印があり，鍋島藩窯で17世紀後半。19は浅黄橙色釉で貫入があり，直径1.5cmの円圏を巡らし，字不明の1字が円圏のなかに刻印されており，京焼もしくは京焼風陶器のいずれかと思われる。20～22はいずれも水簸した胎土で，20は底部から体部へ移る境に段を取り，21は底部に一条の凹線を巡らしている。いずれも底部はロクロ糸切り離し。

④ 壺

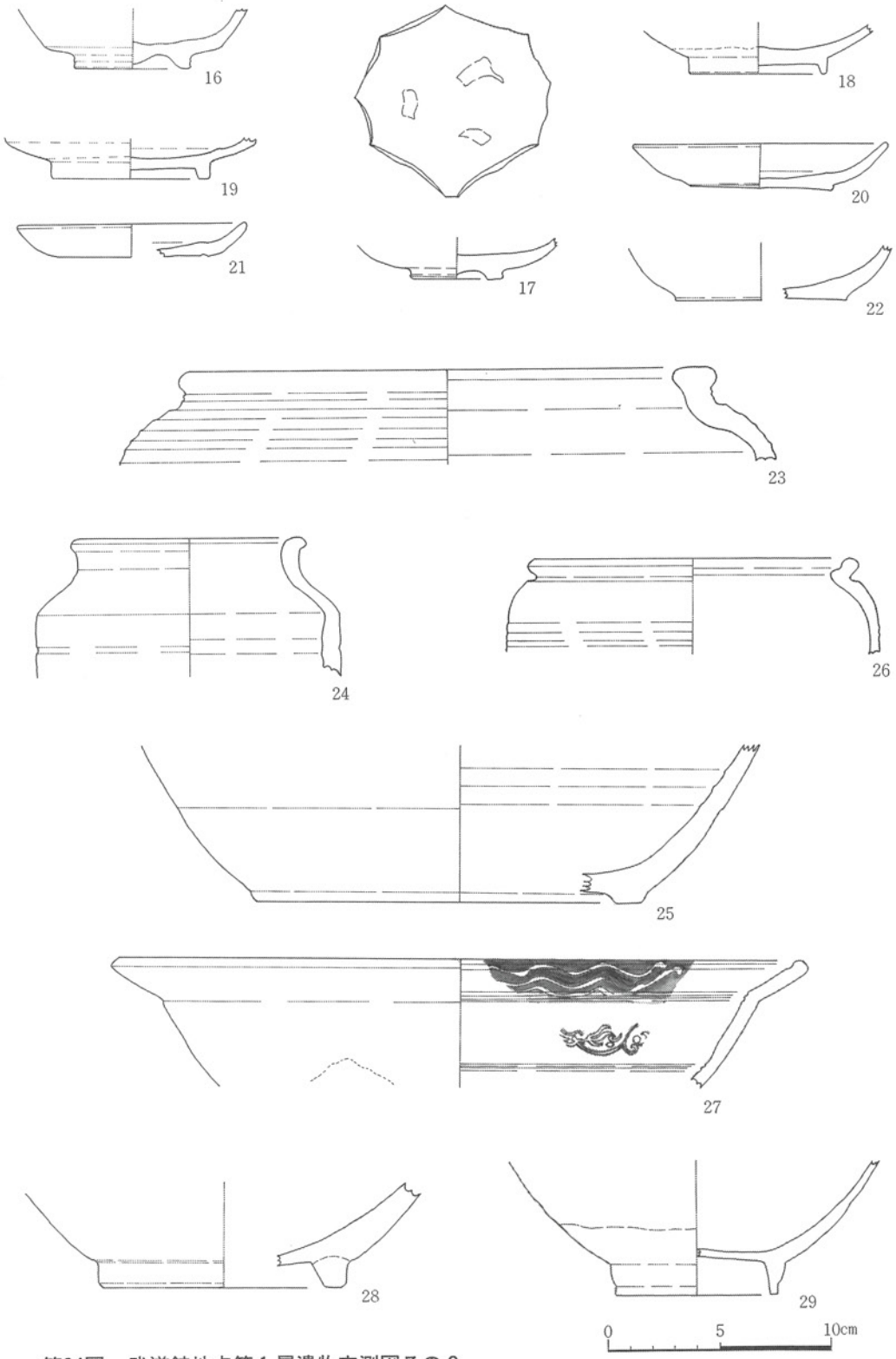
23は備前焼で，内外面ともロクロ成形痕が明瞭であり，頸部は非常に短い形を呈している。24は大谷焼で，体部が垂直で体部中頃に凹線を巡らしており，底部は平底の浅い壺と思われ，19世紀前半。

⑤ 甕

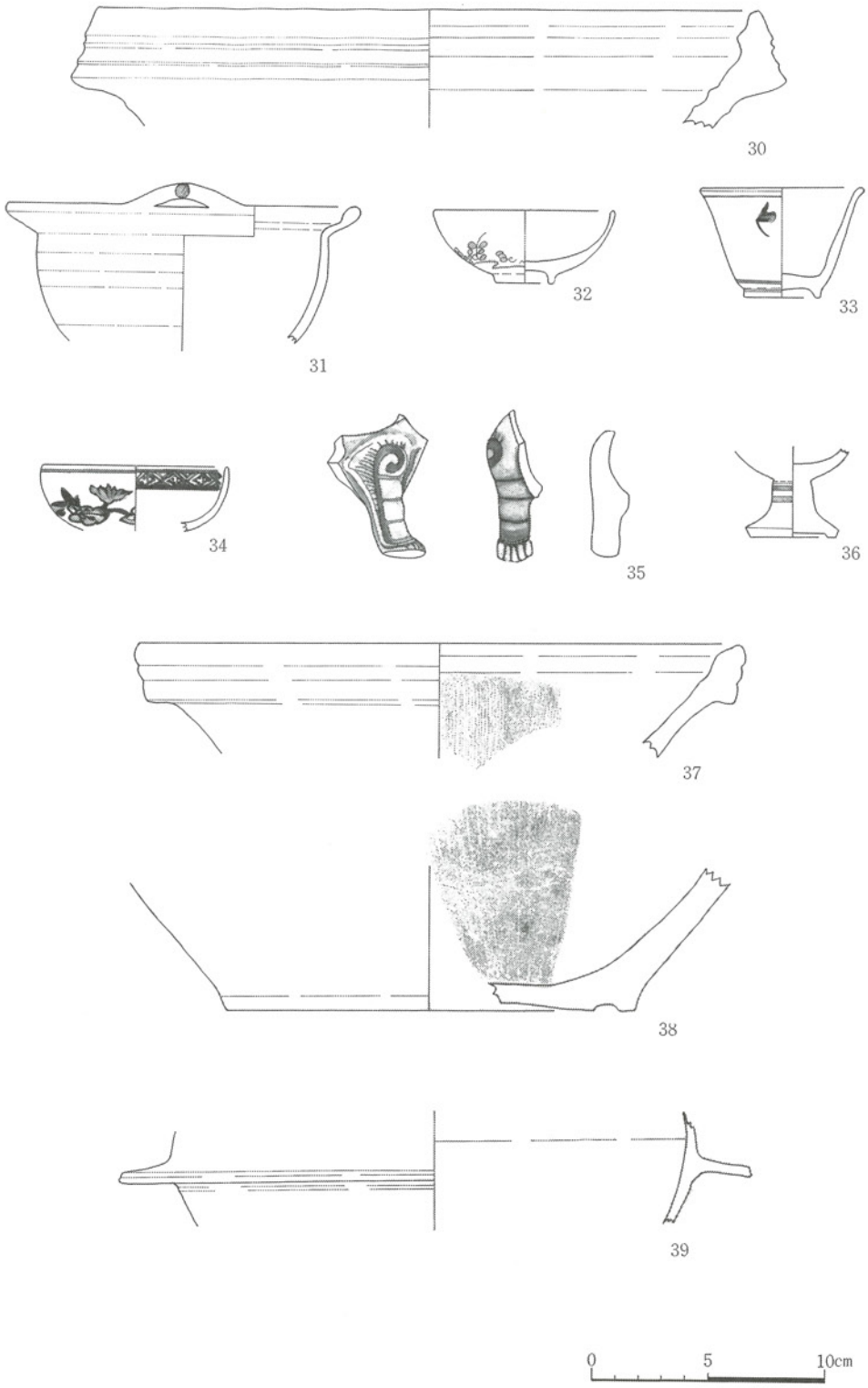
いずれも備前焼で，25は底部がやや上げ底で，26は口縁部が「く」の字形に外反したやや薄手の甕であり，内外面ともロクロ成形痕が明瞭である。

⑥ 鉢

27～29は唐津焼，30は備前焼，31は美濃・瀬戸系である。27は体部から口縁部が外反した象嵌三島手で波文と唐草文の象嵌を施しており，17世紀代。28はやや厚手の貼り付け高台。29はやや薄手で高い高台を有し，いずれも褐釉の上に白釉の刷毛目で17世紀後半～18世紀前半。30は口縁端部に面を施し，3条の凹線を巡らしており，内外面ともロクロ成形痕を明瞭



第34図　武道館地点第１層遺物実測図その２



第35図　武道館地点第１層遺物実測図その３

に残している。31は口縁部に円形の把手が付けられ，内外面とも茶褐色の釉が施され，胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。

⑦　猪　口

いずれも伊万里焼で，32は碗型で口径に比べて高台径が小さく，淡い藍色の呉須で草花文を描いており，17世紀中頃と思われる。33は体部が直線的に斜上方に立ち上がり，口縁部がわずかに外反した端反り型で，17世紀後半～18世紀前半。34は32と同じく碗型の猪口で，にごった藍色で蓮を描き，口縁内面に四方襷文を描いており，18世紀中～後半。

⑧　仏飯具

伊万里焼で，脚部がやや短く「ハ」の字形に外反しており，凹型高台で17世紀後半～18世紀初頭か。

⑨　擂　鉢

いずれも備前焼で，37は口縁部，38は底部の破片である。37は口縁部を上下に肥厚させて面を作り，２条の凹線を巡らし，内面の擂面は11条単位の櫛目描き。底部はやや上げ底気味の平底で，底面に１条の凹線を巡らしており，擂面は11条単位の櫛目描き。

⑩　土　鍋

瓦質土器で，球形を呈した体部に幅2.2㎝の鍔がやや斜めに下がって取りつけられており，鍔端部に１条の凹線を巡らしている。

以上の資料を見てみると，唐津焼のなかには創建当初に近い17世紀のものが含まれているが，18世紀のものが殆どである。古いものが伝世され，壊れて整地の際に入ったものであると思われる。

(2)　川跡覆土上部　（第36～46図）

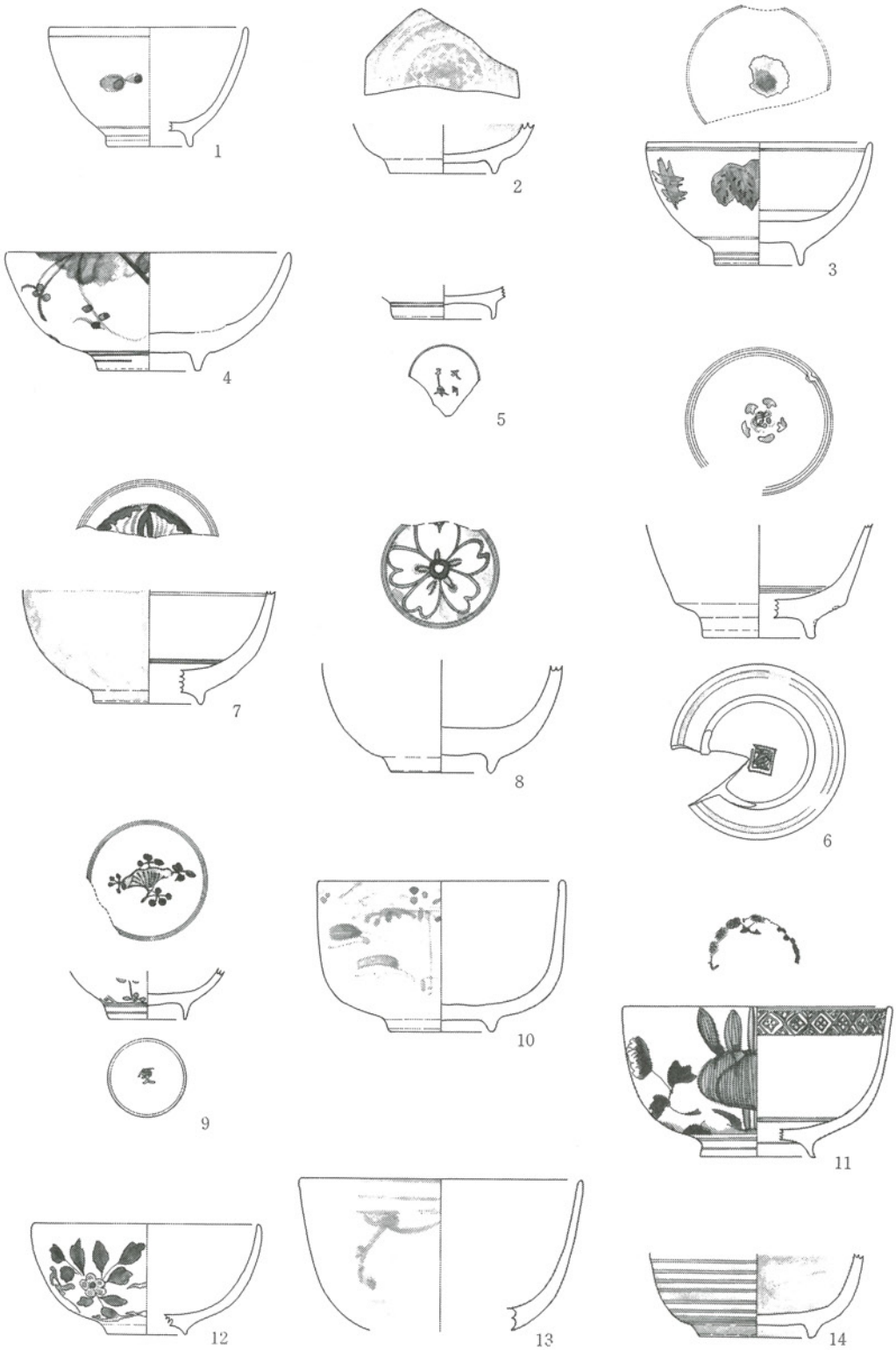
にぶい黄褐色砂層，褐色砂層，暗灰色砂層，灰色粘土層，オリーブ灰色砂層の層で，川跡最終の埋土であり，徳島城の最終段階の川の堆積土と思われる。

碗，蓋，皿，甕，鉢，猪口，瓶，水差，香炉，仏飯具，擂鉢，徳利，火鉢，土鍋，灯明皿，灯明台，焼塩壺，瓦，煙管，銅銭などが出土している。

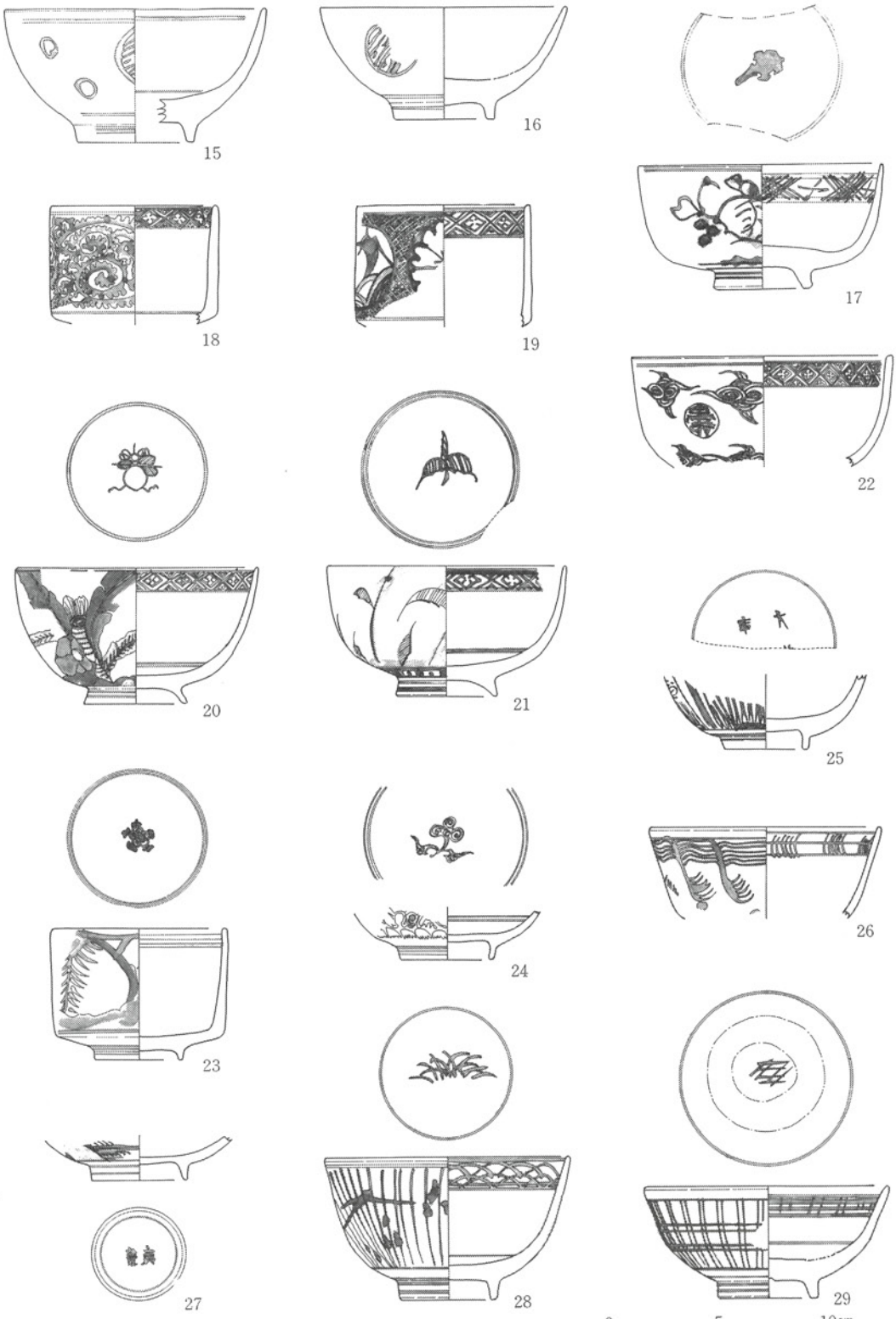
①　碗

１～32・34は伊万里焼，35・36は京焼，33・37～40は不明である。

１は体部がやや狭いもので，ぼてっとした感じをうけ，藍色で梅花文を描いており17世紀中頃か。２はオリーブがかった青緑色の青磁腕で，内面見込みに蓮華文の陰刻文がつけられ



第36図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その１



第37図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その２

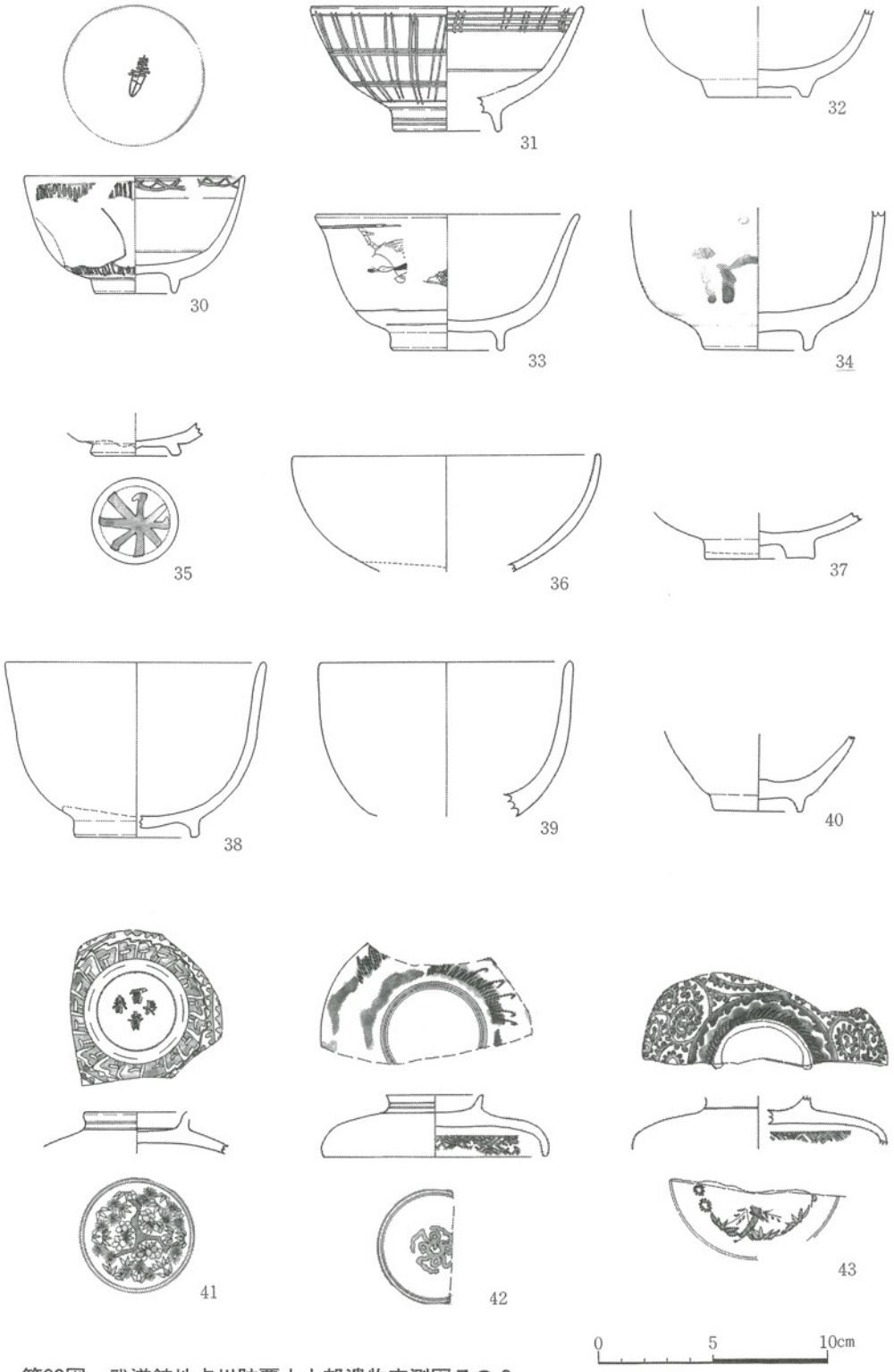
ており，一応伊万里焼と考えた。3は藍色で桐と井桁文，内面見込みに花文のコンニャク判で通称くらわんか手で，17世紀末～18世紀中頃。4は口径のやや大きいもので，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，にごった藍色でつる唐草文を描いており，器形や絵の構成が「肥前陶磁」P84・NO. 953佐賀県金立遺跡のものに類似しており，17世紀末～18世紀前半。5は底部のみの破片であり，底裏面に藍色で「太明年製」のくずし銘が描かれており，18世紀前半。6は外面淡緑色の青磁碗で，体部は屈曲して斜上方に立ち上がっており，内面に五弁花，底裏面に渦福を描いており，形体は「肥前陶磁」P111・NO. 312愛知県岡山病院遺跡，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO. 9・18・26に類似しており18世紀代。7・8も外面淡緑色・緑色の青磁碗で体部は厚く球形を呈しており，内面見込みに7は並銀杏，8は桜を描いており，いずれも18世紀中頃。9は小ぶりの碗で藍色で外面芙蓉手風に区画し，内面立銀杏と露を描き，裏底面に「奔」の字を描いており，18世紀代と思われる。10は陶胎染付で，高台は低く白釉のかけ流しであり，やや黒ずんだ藍色で意味不明の樹木と四方襷文を描いており，18世紀代。11は外面に汚れが多く付いたやや大きめの碗で，藍色で外面牡丹，内面四方襷文と松竹梅文を描いており，内面の文様構成からみて18世紀代か。12はやや薄手のきめ細かい胎土で焼きはよく，藍色で丁寧な唐草文を描いており，高台は低く器形からみて，18世紀代。13は陶胎染付で，釉はにごったオリーブ緑灰色を呈し，藍色で簡略化した草花文らしき文様が描かれており，18世紀代。14は内外面とも淡緑色の青磁で，外面は平行線を巡らしており，内面にハリ支え跡が五か所が見られ，18世紀～19世紀前半の一応伊万里焼とした。15・16はいずれもくらわんか手で外面に丸文のコンニャク判が描かれ，15は内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，「徳島県文化財調査概報・大毛21区遺跡」P55・NO. 48（註20）に類似しており，18世紀後半。17は体部下半で大きく屈曲したやや角ばった碗で，ややにごった藍色で唐草文，内面見込み五弁花コンニャク判を描いており，器形的に「肥前陶磁」P87・NO. 817長崎県岩下遺跡と類似しており，18世紀後半。18はいわゆる筒形碗で外面に蛸唐草文，内面四方襷文を描いており，「肥前陶磁」P120・NO. 246～248東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており，18世紀中頃～末。19も筒形碗で，円形の窓を作り，中に帆かけ船と菊を描いており，「肥前陶磁」P120・NO. 247東京都旧芝離宮庭園遺跡及び，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P20・NO. 13・14と類似しており，18世紀後半。20は内外面とも汚れており，藍色で垣根に芭焦図，内面見込みに瓢単に軍配図を描き，高台は大きく外反しており，蓋付碗で18世紀後半。21は藍色で内外面とも薊文，口縁内面に四方襷文を描いており，18世紀末。22は寿字霊雲文，口縁内面に四方襷文を描いており，「肥前陶磁」P137・NO. 225東京都旧離宮庭園遺跡と

類似しており，18世紀末。23は筒形碗で，外面柳文，内面見込み五弁花を描いており，器形からみて18世紀後半か。24はやや薄手で，やや青みがかった藍色でくずれた唐草・松文を描いており，19世紀前半。25は濃い藍色で草を描き，底裏面にくずれた「太明年製」を描いており，19世紀前半。26はやや薄手でやや紫がかった藍色で外面波文，内面格子波文を描いており，19世紀前半と思われる。27もやや薄手で藍色で流水，裏底面に「？荒」のくずし文字を描いており，19世紀前半と思われる。28は黒っぽい藍色で外面縦線文に笹，口縁内面波文，見込み草文を描いており，19世紀前半。29はやや濁った藍色で外面格子文，内面斜格子文を描いており，内面見込み蛇ノ目釉で，外面文様は「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P23・NO. 28・29に類似しており19世紀前半。30は群青がかった藍色で外面櫛目文，内面見込み寿のくずし文字を描いており，19世紀前半の伊万里焼と思われる。31は29とよく似ており，19世紀前半。32は内外面ともオリーブ緑色釉で貫入のある青磁碗で，畳付け部に4か所砂目痕があり，焼き・時期とも不明。33はやや薄手で口縁部が端反り形を呈し，外面赤褐・黄・黒褐色釉で鶴と花文を描いており，時期・焼き不明。34は陶胎染付で，灰色の胎土に白釉をかけ流しており，にごった藍色でくずれた唐草文と思われる文様を描いており，18世紀代。35は黄灰色の胎土にオリーブ黄灰色の釉で貫入が見られることから，京焼系と考えた。36も黄灰色の胎土にオリーブ緑灰色の釉で貫入が見られ，外面に幅5㎜の白釉の並行線が全体に巡らされており，一応京焼系と考えた。37は黄白色の胎土に黒茶褐色釉をかけており天目風で，高台畳付けに「上△」の刻印が見られる。38～40は京焼もしくは京焼風陶器とも思われるもので，黄灰色もしくは黄白色の胎土にオリーブ黄色，オリーブ褐灰色の釉をかけている。

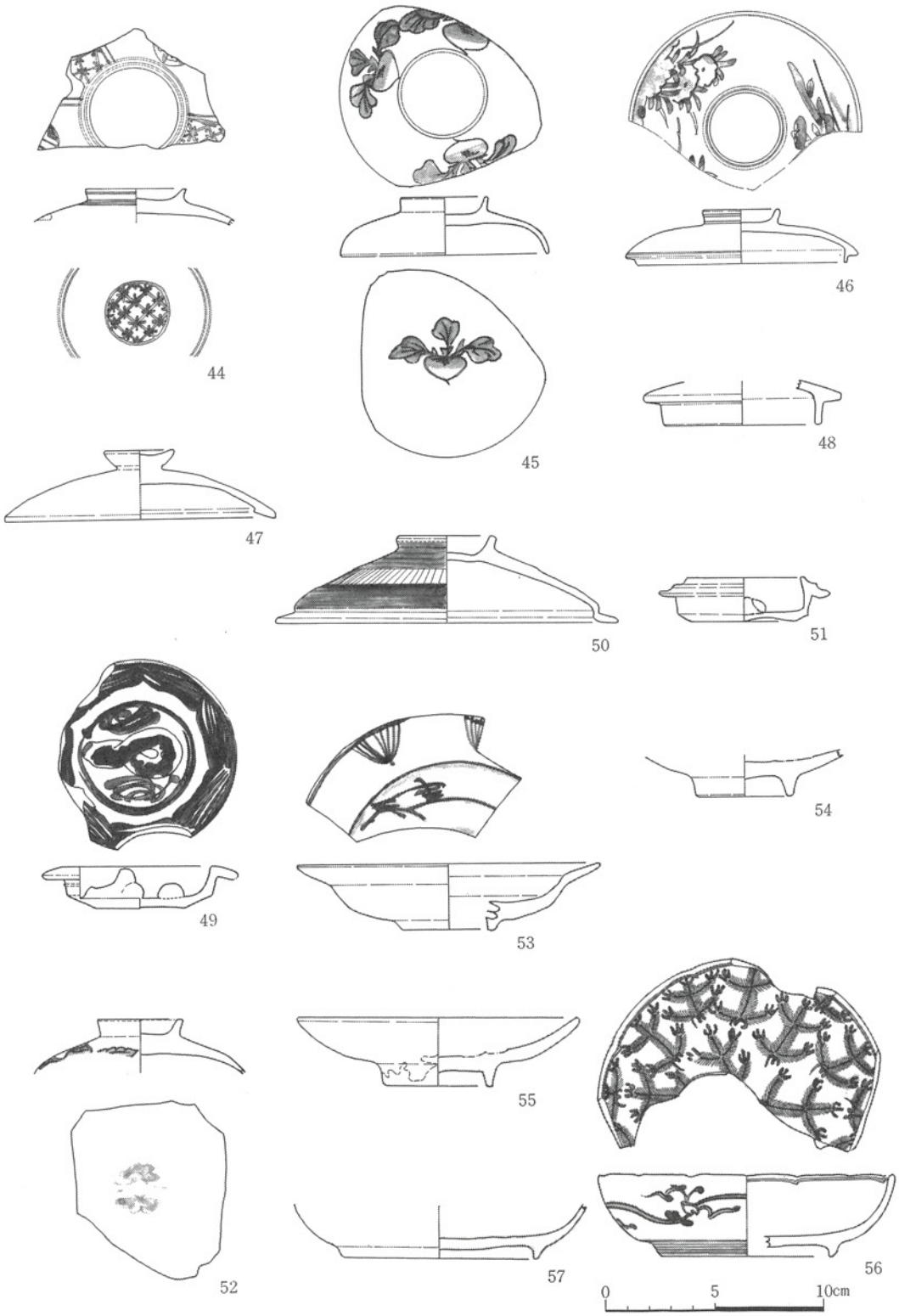
② 蓋

41～46は伊万里焼，47は京焼系，48～50は美濃・瀬戸系，51は大谷焼である。

41はくすんだ藍色で外面蓮弁文と蛸唐草文，つまみ内面「富貴長春」の銘，内面見込みに変わった松竹梅を描いており，18世紀代。42は藍色で外面雲に草文，内面見込みに不明文様，口縁に四方襷文を描き器高の低い形で，18世紀代。43は藍色で外面波頭と唐草文，内面見込み松竹梅文，口縁内面四方襷文を描いており，唐草文の文様形態は「肥前陶磁」P85・NO. 954佐賀県金立遺跡に類似しており18世紀代。44は内外面とも市松文を主文様に描いており，外面には市松文の間に丸文を描いており，器形は異なるが「肥前陶磁」P135・NO. 313愛知県旧紫川遺跡に類似しており18世紀後半。45は藍色で内外面ともかぶら文を描いており，文様は「肥前陶磁」P99・NO. 389大阪府柱本遺跡と類似しており18世紀代。46は体部の低い形態を呈し，身部との受部は返りを有しており，藍色であやめと菊を丁寧に描いてお



第38図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その３



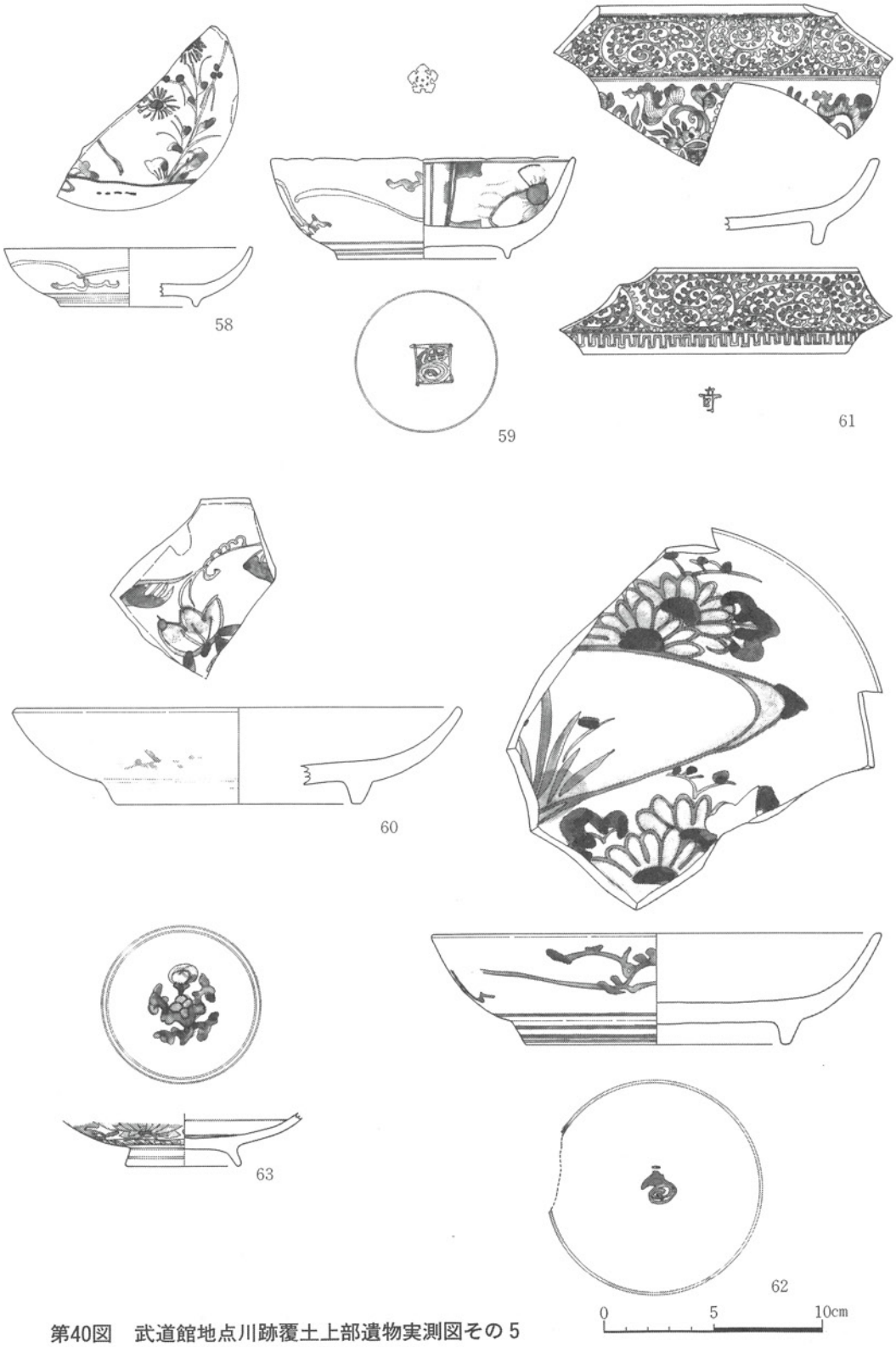
第39図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その4

り，18世紀代。47はボタン状のつまみを有し，外面のみ茶褐色釉を施している。胎土からみて京焼系と思われる。48は受部が垂直に下りていることから，やや小さめの壺と思われ，美濃・瀬戸系。49は落蓋で，底部はやや上げ底気味であり，内面白釉の上に群青色で彩色。胎土からみて，美濃・瀬戸系と思われる。50はやや大きめのもので合わせ蓋と思われ，外面に櫛目描きが丁寧に行われており，美濃・瀬戸系と思われる。51は落蓋で口縁部に2段に段をもっており，内面中央にひねったつまみを付けており，大谷焼で18世紀後半～19世紀前半。52はにごった藍色で外面かぶら文，内面向蝶文を描いており，45の類例から18世紀代と思われる。

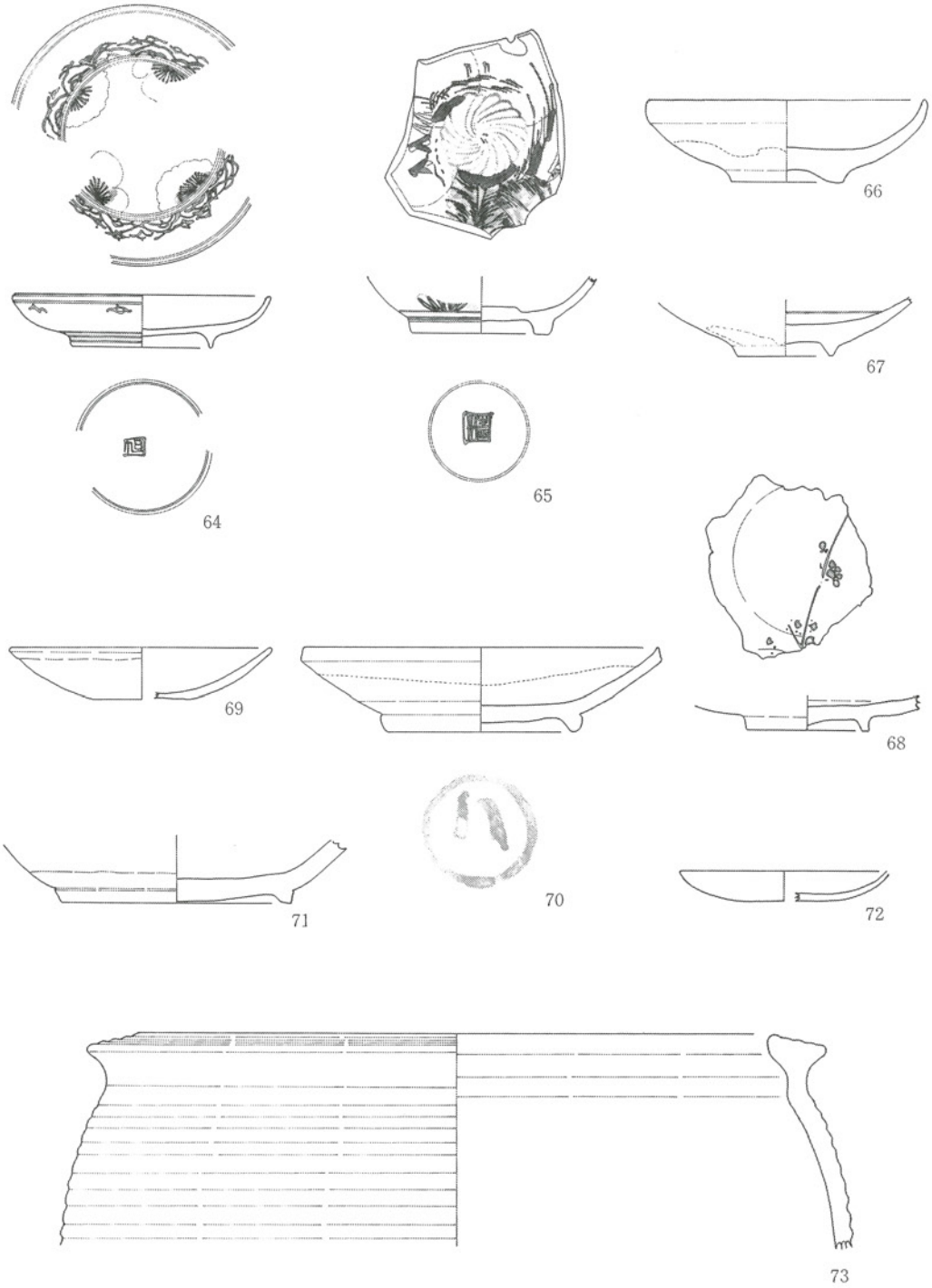
③　皿

53～63は伊万里焼，66・67は唐津焼，68は京焼風陶器，69～71は美濃・瀬戸系，64・65・72は不明である。

53は体部を2段に屈曲させて外反し，ぼてっとした感じであり，濁った藍色で口縁部は蓮弁文，内面見込み山水図を描いており，器形及び口縁文様が「肥前陶磁」P53・NO.581島根県富田川床遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀前半。54は内面見込みが蛇ノ目釉ハギの皿であるが，釉がオリーブ淡緑色と青磁がかっており17世紀後半～18世紀前半。56は口縁がゆるやかな輪花を呈し，内面若松文，外面唐草文を描いており，裏底面の銘は欠損のため不明。「肥前陶磁」P92・NO.748福岡県冷泉遺跡と同じであり，18世紀代。57はやや薄手の白磁皿で18世紀前半と思われる。58は藍色で内面秋草文，外面唐草文を描いており，底裏面の銘はあるが欠損のため不明。器形は異なるが文様構成が「肥前陶磁」P125・NO.113千葉県佐倉城跡と類似しており18世紀代。59はやや器高の高い皿で口縁が僅かに輪花し，内面縦線によって4区画に分け宝くずし文を描き，内面見込み五弁花コンニャク判，外面唐草文，底裏面渦福が描かれており，「肥前陶磁」P125・NO.127群馬県元島名遺跡と同じものであり，18世紀代。60はやや厚手で鮮やかなタッチで内面つる草文，外面簡略化した唐草文を描いており18世紀代。61は角皿で体部内外面とも細かい蛸唐草文を丁寧に描いており，裏底面に「奇……」の銘があり，文様と銘からみて18世紀代。62はやや厚手で，藍色であやめに菊文，外面簡略化した唐草文，底裏面くずした渦福を描いており，18世紀代。63はやや薄手で高台が外反しており，藍色で外面蓮弁文と花文，内面見込みややくずした花文，口縁内面四方襷文が見られ，18世紀末と思われる。64はやや薄手で口紅皿で，群青がかった藍色で七宝文に梅を描き，底裏面に「旭」の銘があり，伊万里系の19世紀代とも思われるが焼きは不明。65は内面見込みに貼り付け突起の渦巻文を呈し，口縁にむかってねじり輪花を付けており，



第40図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その５



第41図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その６

藍色で山水図，裏底面「生田州」の銘があり，焼きは不明。66は底部は平らであり，体部がゆるやかに屈曲しやや厚手のもので，内面及び体部上半はオリーブ濃緑色の釉が施されており，高台は幅広く低いもので裏面に兜巾の痕跡があり，畳付けに砂胎土目痕があり，16世紀末～17世紀初頭と思われる。67は灰色がかった白釉を施し，内面ににごった藍色で円圏を巡らし，体部に文様が見られるが欠損のため不明。底裏面に兜巾の痕跡が見られ時期は不明。68はオリーブ褐灰色の釉で貫入があり，緑黒色，赤紫色でもって梅を描いており，見込み内面に稜でもって円圏を巡らしており，胎土からみて京焼もしくは京焼風陶器と思われ17世紀末か。69は上げ底気味の平底で，ロクロ痕を明瞭に残したもので，オリーブ黄灰色の釉を施し貫入が見られ，外面に煤が付着していることから灯明皿として使用したものである。70は低く丸みをもった高台が取り付けられたもので，口縁端部は斜め上方に内傾し尖りぎみである。オリーブ黄白色の釉を施しており，裏底面に「㋭」の書があり，口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使用したものと思われる。71は内面見込みに重ね痕がみられ，裏底面に「トタ」の墨書が見られる。72は薄手で，ロクロ成形痕が残り茶褐色釉を施しており，焼きは不明。

④　甕

73～75は備前焼，76～78は大谷焼である。

73は口縁部の破片で釉ハゼが見られ，体部外面にロクロによるヘラ平行線が施され，口縁端面を内外に肥厚させ，４条の凹線を巡らしている。74は胴部の破片で球形を呈し，外面にロクロによるヘラ平行線が施されている。75は大甕の口縁の破片で，73と同じく口縁端面を内外に大きく肥厚させ，そのあいだに浅い３条の凹線を巡らしており，体部外面にロクロによるヘラ平行線が施されている。76は薄手で胴部上半に最大径があり，口縁部は「逆L」字形を呈した小甕である。77はやや胴長のタイプと思われ，口縁部に平坦面をもったもので，壺の可能性もある。78は最大系が体部中頃にあり，口縁部は「く」字形に外反したもので小甕である。76～78は18世紀後半～19世紀前半。

⑤　鉢（注口鉢）

79～83は伊万里焼，84～87は唐津焼，88・89は備前焼，90～95は美濃・瀬戸系，96・97は不明である。

79～81はいずれも青磁で，79は口縁部が大きく外反したもので，80は内面に陽刻による菊花文を施し，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており「肥前陶磁」P69・NO.57秋田県鷺沼城跡と文様が類似しており，81は口縁部を内側に波状に折り曲げたもので，蓋が取り付けられ

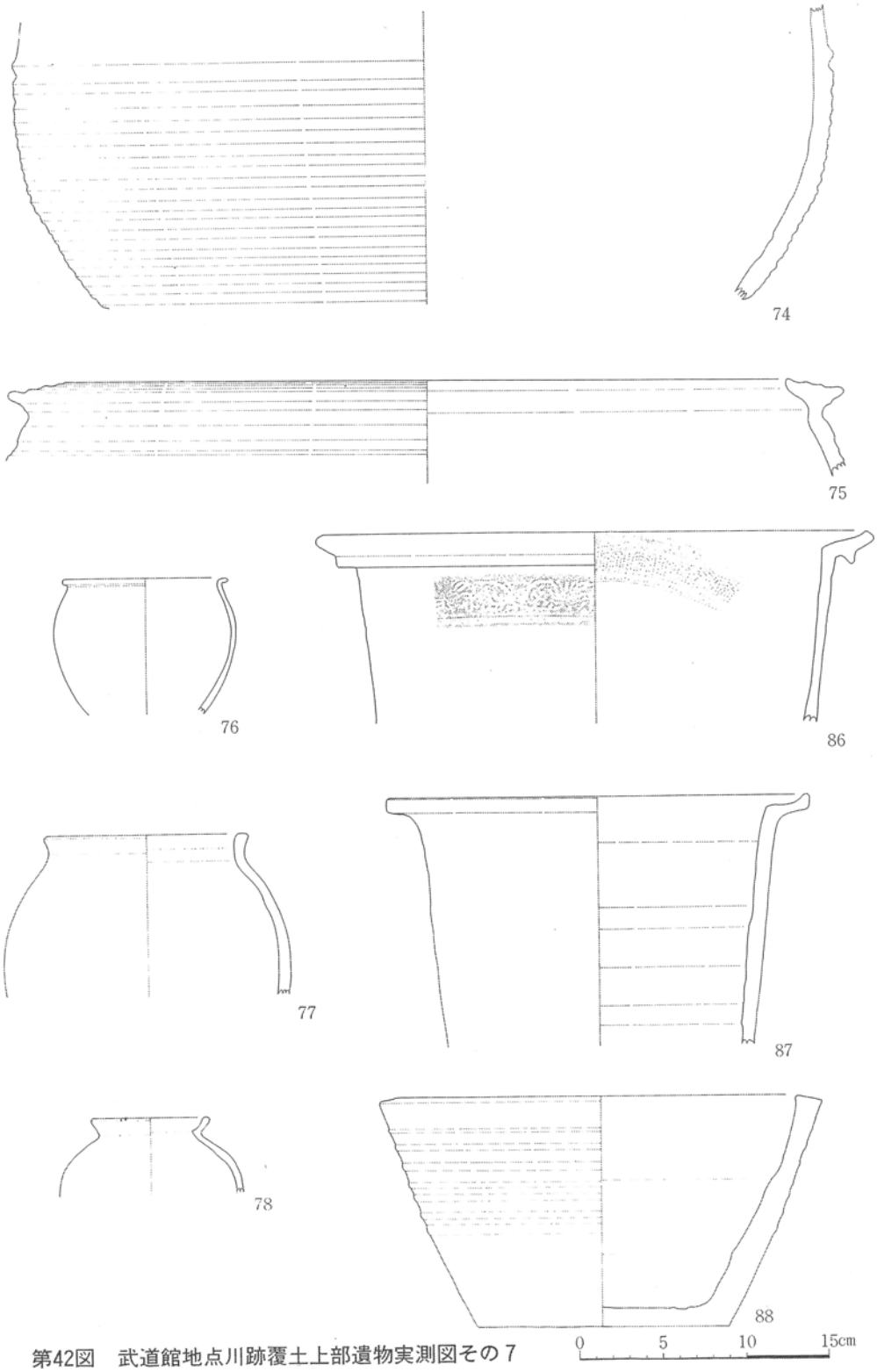
ているものと思われ，外面に陰刻による唐草，縦線，波状文が施されており，いずれも17世紀後半～18世紀前半。82は焼きがよく，口縁端部が平坦で口縁内面を釉ハギを行っており蓋が付いたものであり，淡い藍色で山水図を描いており，17世紀後半と思われる。83は口縁がやや波状がかった輪花で，濃い緑色の青磁。陽刻による菊花文を描いている。釉調からみて他の産地のものかもしれないが一応伊万里系とした。84・85はいずれも台形を呈した削り出し高台で，刷毛目鉢であり17世紀後半～18世紀前半。86は口縁部を屈曲して外反させ，口縁外面を三角形に垂下させたもので体部外面に唐草，口縁部蓮弁文を施した象嵌鉢で，17世紀後半～18世紀前半。87は体部が直線になり，口縁部が「L」字形に屈曲したもので，オリーブ灰褐色の釉を施している。時期は不明。88は体部が直線的に立ち上がり，口縁部平坦で斜上方になった桶型の鉢で，内外面ともロクロナデを明瞭に残している。89は口縁部を上方につまみ上げ，外面に2条の凹線を巡らしており，内面は2段に丸く折りこませて，一条の凹線を巡らせたものである。内外面ともロクロナデがみられる。90は小鉢で蓋がつくものと思われ，体部と底部境はヘラ削り黄灰色の釉を施している。91は底部に直径2㎝の焼成前穿孔があり，高台に2か所半円形の抉りがあることから植木鉢であり，「郵政省飯倉分館構内遺跡」P152・NO. 257に類似しており，18世紀後半。92は濃緑色の釉で外面に陽刻が施されており，胎土からみて一応美濃・瀬戸系とした。93は体部が球形を呈し，口縁部は外側を肥厚させ端部を平坦にしており，黄灰白色釉で貫入がみられる。94はやや厚手で，高台は低く幅広いもので内面に砂目痕がみられ，釉はオリーブ黄緑色。95は体部が2段に屈曲して斜上方に外反する鉢で，黄橙色釉を施しており，器形的に「郵政省飯倉分館構内遺跡」P135・NO. 136と類似している。96・97はいずれも注口鉢で，96は球形を呈し，97はやや縦長の筒形を呈し，口縁部はいずれも屈曲して外反し，端部を肥厚させており，蓋がつくものと思われる。焼きは不明であるが，胎土から見ると大谷焼の可能性もある。

⑥ 猪　口

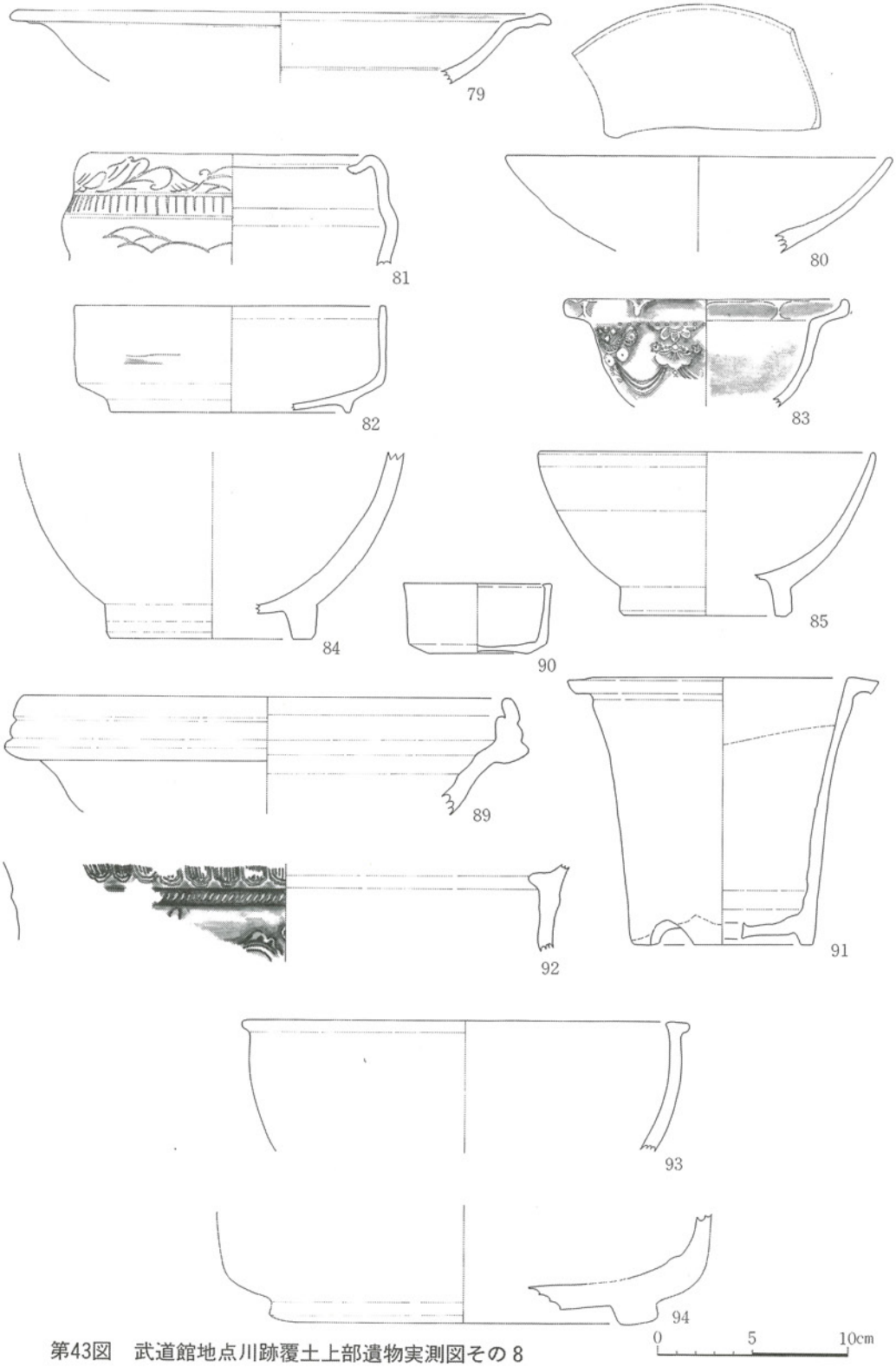
いずれも伊万里焼で，98は非常に器高の低い碗型で，口縁部は端部を外反させ，藍色で内面見込みに草文を描いており，17世紀中頃と思われる。99は体部が直線的に立ち上がった筒形で，にごった藍色で笹を描いており，器形からみて17世紀後半～18世紀初頭。100は桶型で，藍色で瓔珞文を描いており，碁笥底に近い高台で18世紀末。101は碗型で，ややにごった藍色の呉須で本と銀杏を描いており，器形からみて18世紀代。

⑦ 瓶

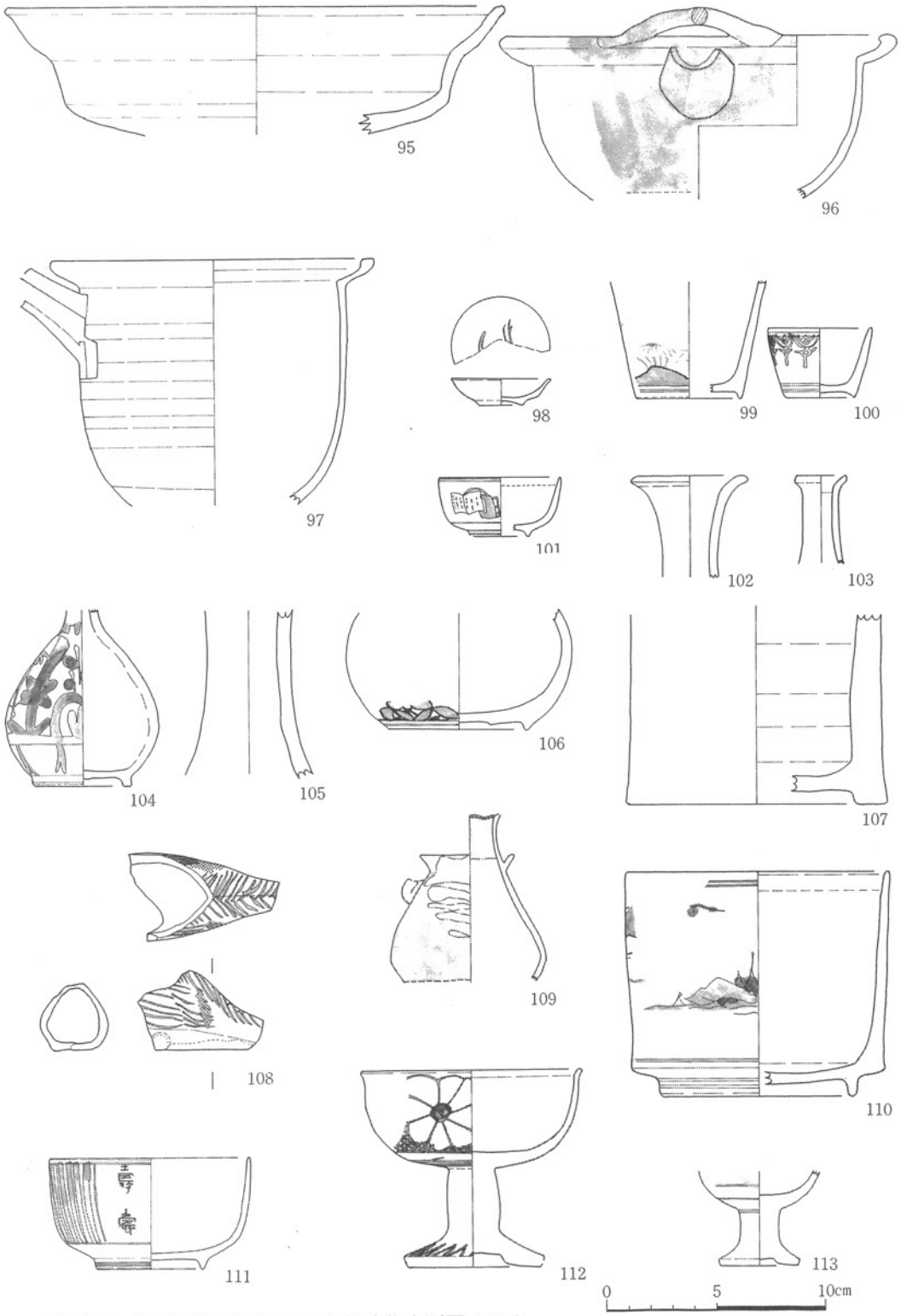
102～106は伊万里焼，107は大谷焼である。



第42図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その７



第43図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その８



第44図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その９

102は青磁の花瓶と思われ，頸部から口縁部にむかって逆「ハ」字形に開いており，17世紀末～18世紀と思われる。103は白磁で非常に細口の瓶であり，口縁部が外反しており，18世紀代と思われる。104は最大径が胴部下半にあり，黒ずんだ藍色で頸部より上は蛸唐草文，胴部は松竹梅文で文様構成・器形からみて18世紀代。105は青磁の頸部の破片で，下に向かってやや開いており，18世紀代。106は体部が球形で，蛇ノ目凹形高台。体部に七宝つなぎ文が描かれており，18世紀後半～19世紀初頭。107は体部が筒形の花生け瓶で，外面を削りとって笹文を表現しており，18世紀後半～19世紀前半。

⑧ 水 差

108は伊万里の色絵で，龍か猪を表していると思われ，赤褐色と緑色で描いている。粘土板を貼り合わせて作っている。109は頸の部分に受部を回しており，注口部は口縁部を1か所折り曲げてつくっている。釉は褐釉の上に白釉のタスキがけを行っており，時期・焼きとも不明。

⑨ 香 炉

110は筒形で口縁内面釉ハギを行っており，蓋がつくものと思われる。胎土・焼き具合もよく，明るいあざやかな藍色で山水図を描いており，底裏面に釉がかかっていないため，呉須の元の色がそのまま表れており，伊万里焼で17世紀後半。蓋付き鉢の可能性も考えられる。111は武道館地点第1層NO. 9とセットになり，寿と平行文を組み合わせて描いており，蓋付碗とも考えられ，17世紀後半～18世紀前半と思われる。

⑩ 仏飯具

112は脚部がやや長く，中央部が膨らんだ筒形を呈し，身部は碗型で口縁部はやや外反させており，高台は蛇ノ目高台。藍色で菊と鋸歯文を描いており，伊万里焼で18世紀後半。113は脚部が短く，高台は蛇ノ目高台で伊万里焼。18世紀後半。

⑪ 擂 鉢

114は備前焼で，口縁部を上下に肥厚させて面を形成し，1条の凹線を巡らしている。内面11条単位の櫛目描きで擂面を形成している。115は大谷焼で，口縁部を肥厚させ2条の凹線を巡らしており，口縁の1か所を外に折り曲げて注口部を形成し，内面7条単位の櫛目描きで擂面を形成しており，19世紀前半。

⑫ 徳 利

いずれも大谷焼で，116は中央部がやや膨らんだ筒形でヘラ彫りによる「延」の字が刻まれている。117は肩の大きく張ったもので「六」と「公」のヘラ彫り。118は体部境に1条の凹

線を巡らした底部の破片である。119は肩の張った胴部で，「金」のヘラ彫り，いずれも18世紀後半～19世紀前半。

⑬　火　鉢

120～123は土師質，124は瓦質である。120は筒形を呈し，５角形の高台が３か所付けられており，内輪部は円筒形のものが取り付けられている。外部に大きな窓が１か所，内輪部に２か所窓が付けられており，外部の外面に「桜湯」のヘラ彫りが見られ，炬燵用の火鉢と思われる。121・122は同様の形態を呈しており，いずれも鍋受けと思われる突起が３か所あり，窓も３か所見られ，口縁内面に煤が付着している。123は火鉢の底部で脚部下半に１条の凹線を巡らし，直径８㎜の穴が穿孔されている。球形状の体部が取り付けられているものと思われる。124は長方形を呈するものと思われ，口縁部は内側を肥厚させ，脚部は四隅に逆台形状に削り出した脚を作り出しており，内面に櫛目描きが見られ，炬燵に使用したものと思われる。

⑭　土　鍋

125はオリーブ黄白色釉で，体部下半は無釉で煤が付着している。口縁部に断面円形の把手が１か所つけられており，美濃・瀬戸系。126は球形を呈し，体部中央に幅２㎝の鍔が付けられており，鍔より下は煤が付着している。

⑮　土　瓶

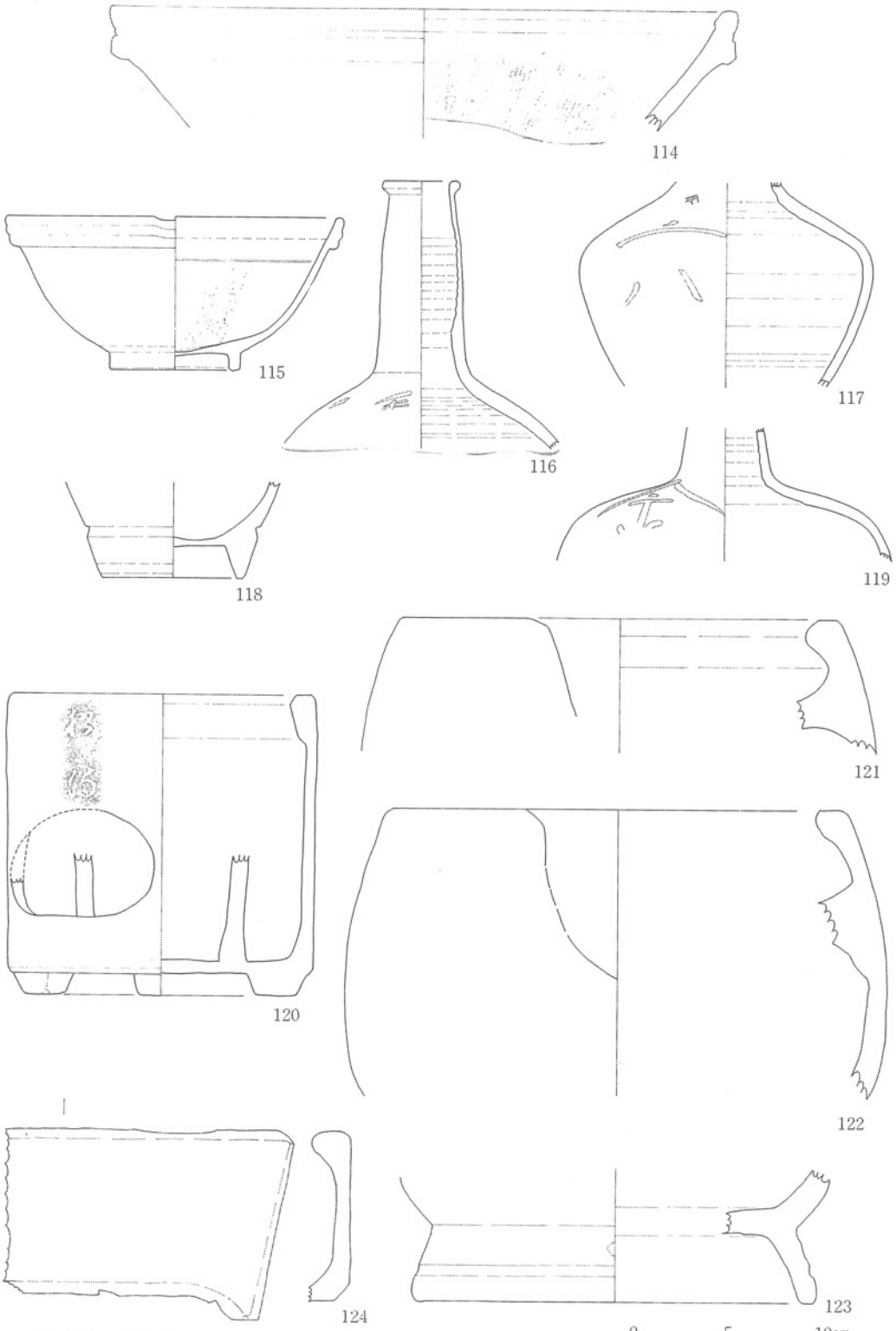
いずれも美濃・瀬戸系で，127は球形を呈した体部に，体部上半に注口が１か所取り付けられており３つの穴が穿孔され，注口部の上に把手が付けられており，体部上半に20条の櫛目平行文が付けられている。128はやや算盤玉に近い球形で，体部上半分に注口が１か所取り付けられており，２つの穴が穿孔され，注口部の上に２か所把手が付けられている。３条の平行文が体部上半分の上下につけられ，その間に刺突櫛目文が施されている。

⑯　灯明皿

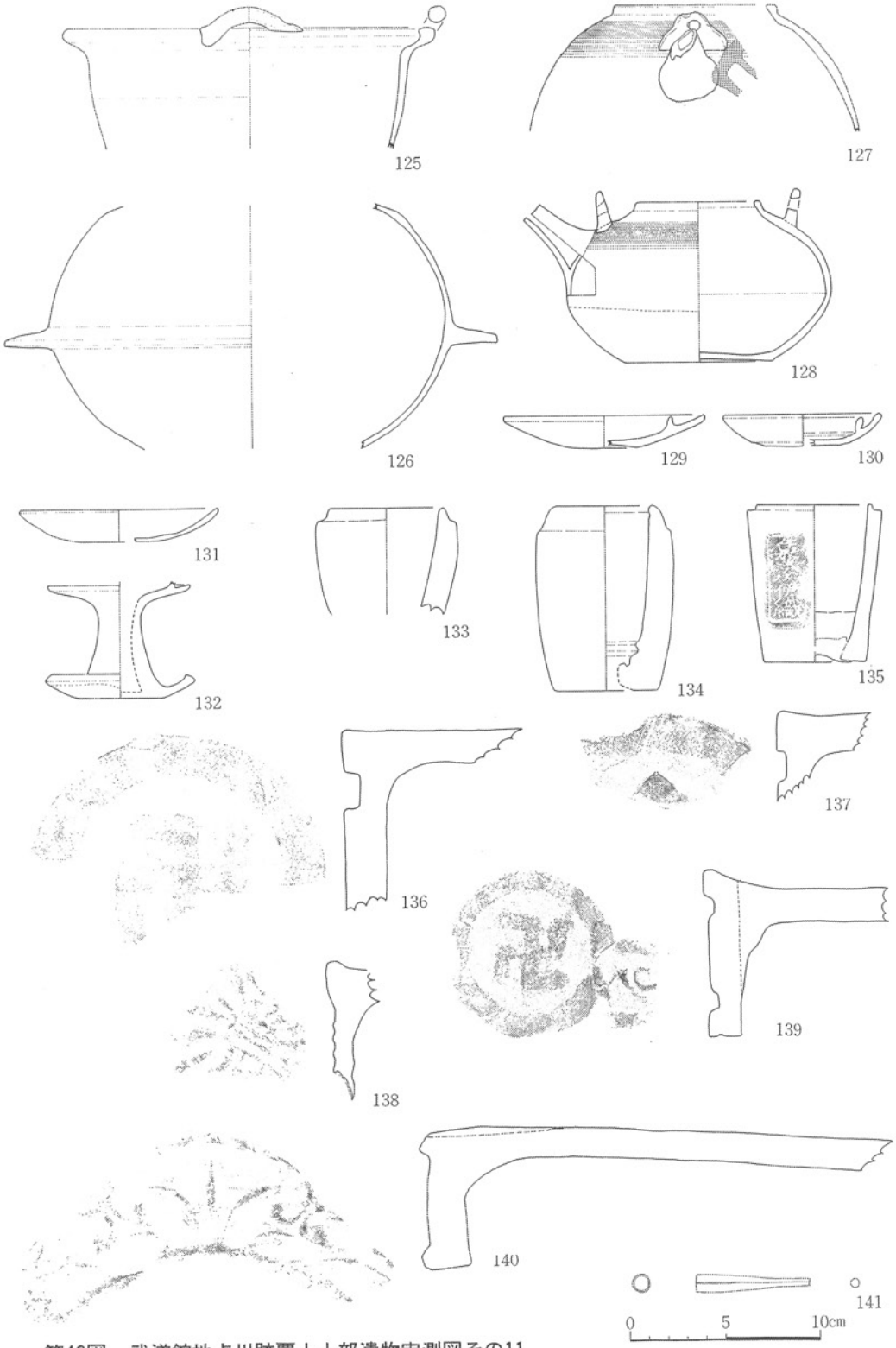
129は底部がやや上げ底で，オリーブ黄褐色の釉で，内面に灯芯受部が巡らされており，美濃・瀬戸系。130はロクロメ痕が残り，ややぼてっとした灯芯受部を巡らしており，焼き不明。131は黒褐色の胎土の素焼きで，口縁内外面に煤が付着しており灯明皿とした。焼きは不明。

⑰　灯明台

脚部は裾広がりで，脚端部を内側に折り曲げており，皿受部は欠損している。大谷焼で18世紀後半～19世紀前半。



第45図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その10



第46図　武道館地点川跡覆土上部遺物実測図その11

⑱　焼塩壺

いずれも内面に布目痕があり丸棒成形で，133・134は口縁部を丸くおさめており，135は口縁端部を抉った状態を呈し，体部中央に「泉湊伊織」の刻印がある。133・134は渡辺編年18世紀中頃。135は18世紀後半。

⑲　瓦

136は「卍」文の押し型成形，137は「卍」文のヘラ切り成形，138は18弁の菊文の棰木先瓦，139は「卍」文と唐草文を組み合わせた桟瓦で18世紀後半以降。140は唐草文を施したいわゆる鳥衾瓦である。

⑳　煙　管

1枚の銅版を丸めて円形に成形。羅宇との接合部は斜めに薄く削平しており形体からみて古泉編年Ⅴ期の18世紀後半。

㉑　銅　銭

いずれも寛永通宝で，142は直径2.3cm，143は直径2.4cmであり，いずれも「通」の字のつくりのうえは「コ」になっている。

以上143点について述べたが，全般に18世紀から19世紀前半のものが多く，碗・皿・鉢のなかに17世紀代のものが僅かに見られ，66の唐津皿は16世紀末に遡ると思われるものもある。徳島城最終段階を示す時期のものが中心であることがわかる。

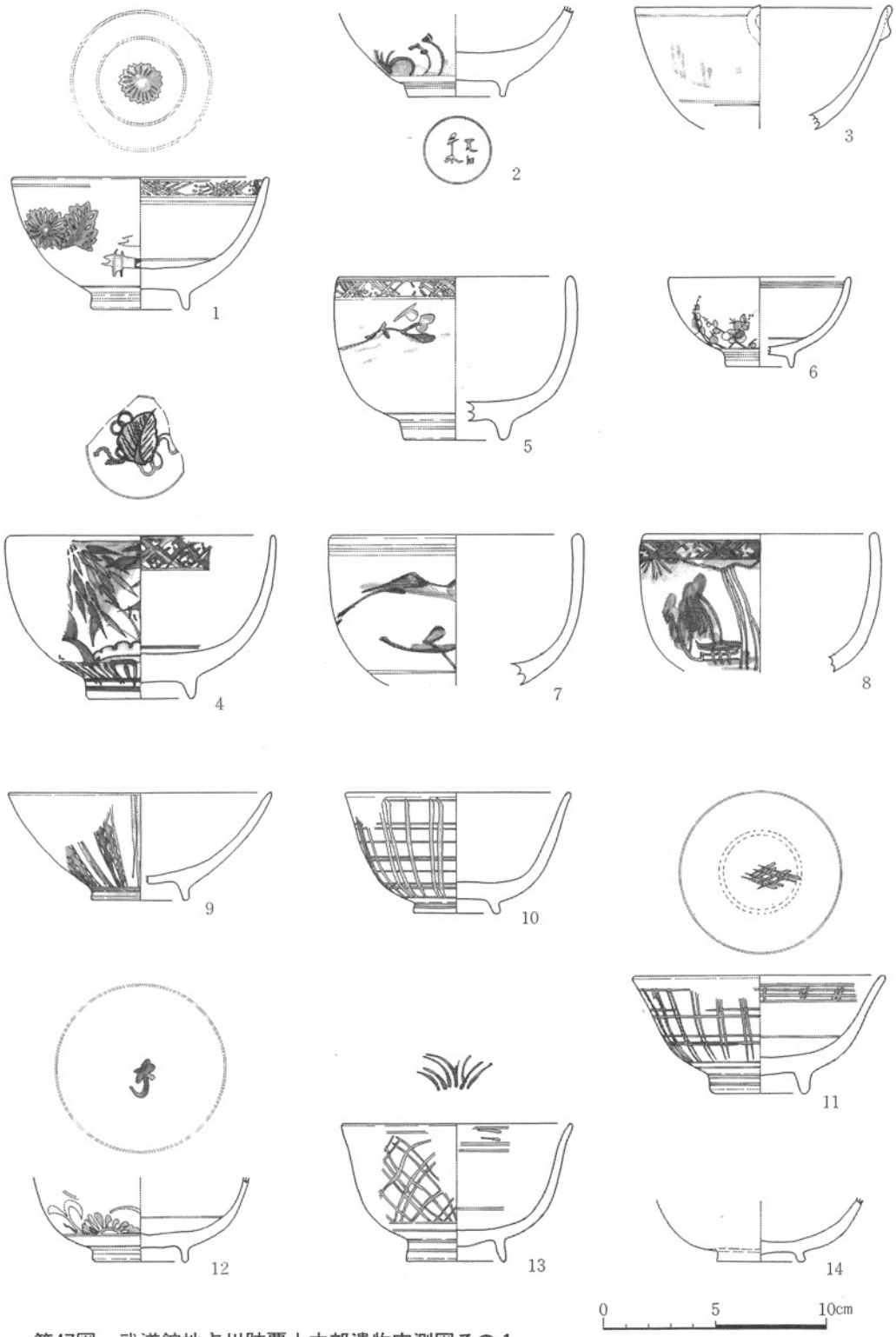
(3)　川跡覆土中部　（第47～56図）

オリーブ灰色粘土層，灰オリーブ粘質土層，暗緑灰色砂層，緑灰色砂層のいわゆるグライ層で，助任川が幾度かの堆積を繰りかえし，築堤を作り替えて拡張を行っている。この拡張最後の埋土で，護岸板列を作った後の埋土と考えられる。湧き水が激しかった為，完掘はできなかった。

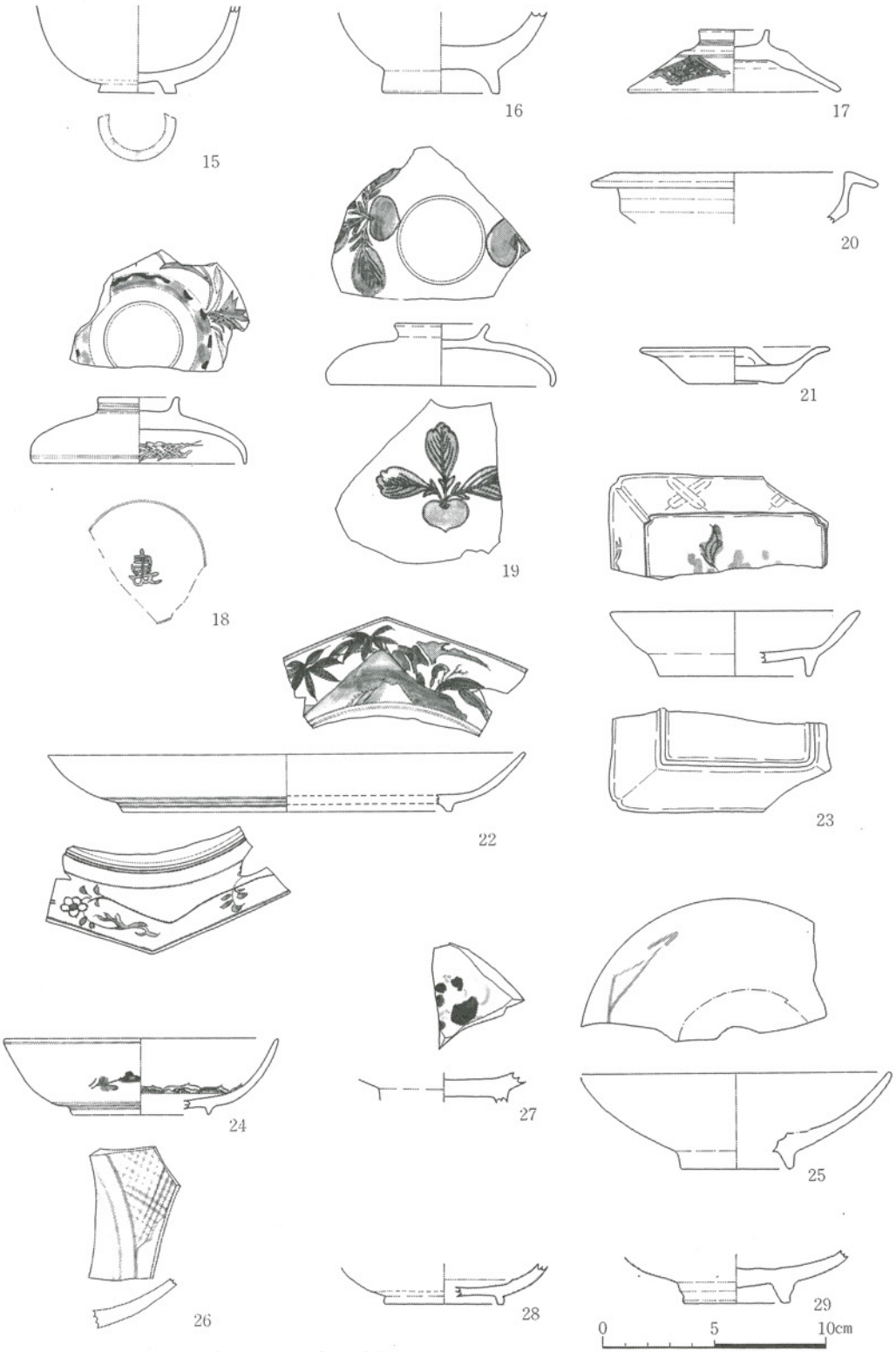
碗・蓋・皿・甕・鉢・猪口・瓶・水滴・徳利・擂鉢・味噌焼皿・灯明皿・土錘・土製品・銅製品・木製品が出土した。

①　碗

1～13は伊万里焼，14は京焼，15は京焼系，16は美濃・瀬戸系と思われる。1は菊と井桁文，内面見込み菊文のコンニャク判で，くらわんか手と呼ばれるもので，文様構成は異なるが「肥前陶磁」P102・NO. 479奈良県奈良奉行所跡と類似しており，17世紀後半～18世紀中頃。2は褐色がかった藍色で草花文を描き，底裏面「太明年製」の銘，「肥前陶磁器」P84・



第47図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その１



第48図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その２

NO. 954 佐賀県金立遺跡に類似しており，17世紀末～18世紀中頃。 3はやや黒ずんだ藍色で浜辺松図を描き，口縁外面に耳状突起が見られるが，釉着の可能性もあり，18世紀代と思われる。 4はやや厚手で，外面連木竹・蓮弁文，内面見込み軍配図を描いており，18世紀代。 5は陶胎染付で，やや濁った藍色で山水図及び四方襷文を描いており，18世紀代で波佐見系か。 6は小碗で，高台が小さく梅文を描いており，器形からみて18世紀代。 7は陶胎付染付で，やや黒ずんだ藍色で山水図を描いており，18世紀代。 8は陶胎染付で，ややにごった藍色で柳下一屋図・口縁外面に四方襷文を描いており，18世紀代で波佐見系か。 9は群青がかった藍色で並草葉文を描いており，19世紀前半。10は外面格子文を描いており，19世紀前半。11は外面及び口縁内面格子文・内面見込み斜格子文を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」広瀬向窯2号窯第3層に類似しており，19世紀前半。12は薄手で，藍色で菊花文・内面見込み寿のくずし文字を描いており，19世紀前半。13は口縁部がやや外反し，藍色で斜格子文，内面見込みに草文を描いており，19世紀前半。14はオリーブ黄灰色の釉で底裏面に「錦光山」の刻印が見られ，京焼のなかの錦光山焼で18世紀後半。15は球形を呈し，高台畳付けに車輪状に墨痕があり，胎土及び釉調からみて京焼と思われる。（註21）16は高台はやや高く，オリーブ黄色の釉で貫入があり，胎土及び釉調からみて美濃・瀬戸系と思われる。

② 藍

17～19は伊万里焼，20は京焼，21は美濃・瀬戸系である。17は体部が大きく外反し，濁った藍色で井桁文のコンニャク判を施しており，「肥前陶磁」P101・NO. 553 京都府折居遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀前半。18は体部が大きく内湾し，やや黒ずんだ藍色で外面あやめ文，口縁内面四方襷文，内面見込み寿を描いており，18世紀中頃～18世紀後半。19は武道館地点川跡覆土上部NO. 45と同一品であり，18世紀代。20はオリーブ緑色の釉で貫入が見られ，中央部につまみが付くものと思われ，胎土からみて京焼と思われる。21は落蓋で，黄緑黒色の釉で山形のつまみがあり，胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。

③ 皿

22～26は伊万里焼，27・28は京焼風陶器，29は美濃・瀬戸系，30は不明である。

22は口縁鉄釉の口紅の八角皿で，焼きは非常によく胎土も緻密であり，明るい藍色で外面唐草文，内面山水図及び笹文を丁寧に描いており，17世紀前半の長吉谷窯系か。23は焼きが非常によく，胎土も緻密で，角に稜をもった角皿で，藍色で草花文，内面肩部に陽刻による「X」文と唐草文を描いており，17世紀中頃の長吉谷窯系か。24は口径のわりに底径が小さく，高台は低く三角形を呈しており，外面草文，内面宝珠を描いており17世紀後半。25は内

面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，藍色で松葉折文を描いており，「肥前陶磁器」P97・NO. 626鳥取県陰田遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀前半。26はいわゆる赤絵皿で，濁った赤色で斜格子文を描いており，時期は不明。27はオリーブ黄褐色の釉に黒色と赤褐色でもって文様を描いており，底裏面に直径0.9cmの円圏を巡らし「木下弥」の刻印が見られ，17世紀後半。28はオリーブ黄灰色の釉で緑色と褐色でもって松竹梅文を描き，底裏面に「清水」の刻印があり，17世紀後半。29はオリーブ黄色の釉を施し，内面見込みに3か所，高台畳み付けに4か所の砂目痕が見られ，胎土・釉からみて美濃・瀬戸系と思われる。30は灰茶褐色の胎土に灰紫褐色の釉で，黒と淡褐色によって山水図を描いており，焼きのあまりみられないものである。

④ 甕

31は備前焼で，口縁部を内外に大きく肥厚させ，端部に4条の凹線を巡らしている。32は土師質のもので，口径は大きく口縁部を大きく外反させ，肥厚させている。

⑤ 鉢

33は唐津焼，34は備前焼，35・36は京焼，37は京焼風陶器，38は不明である。

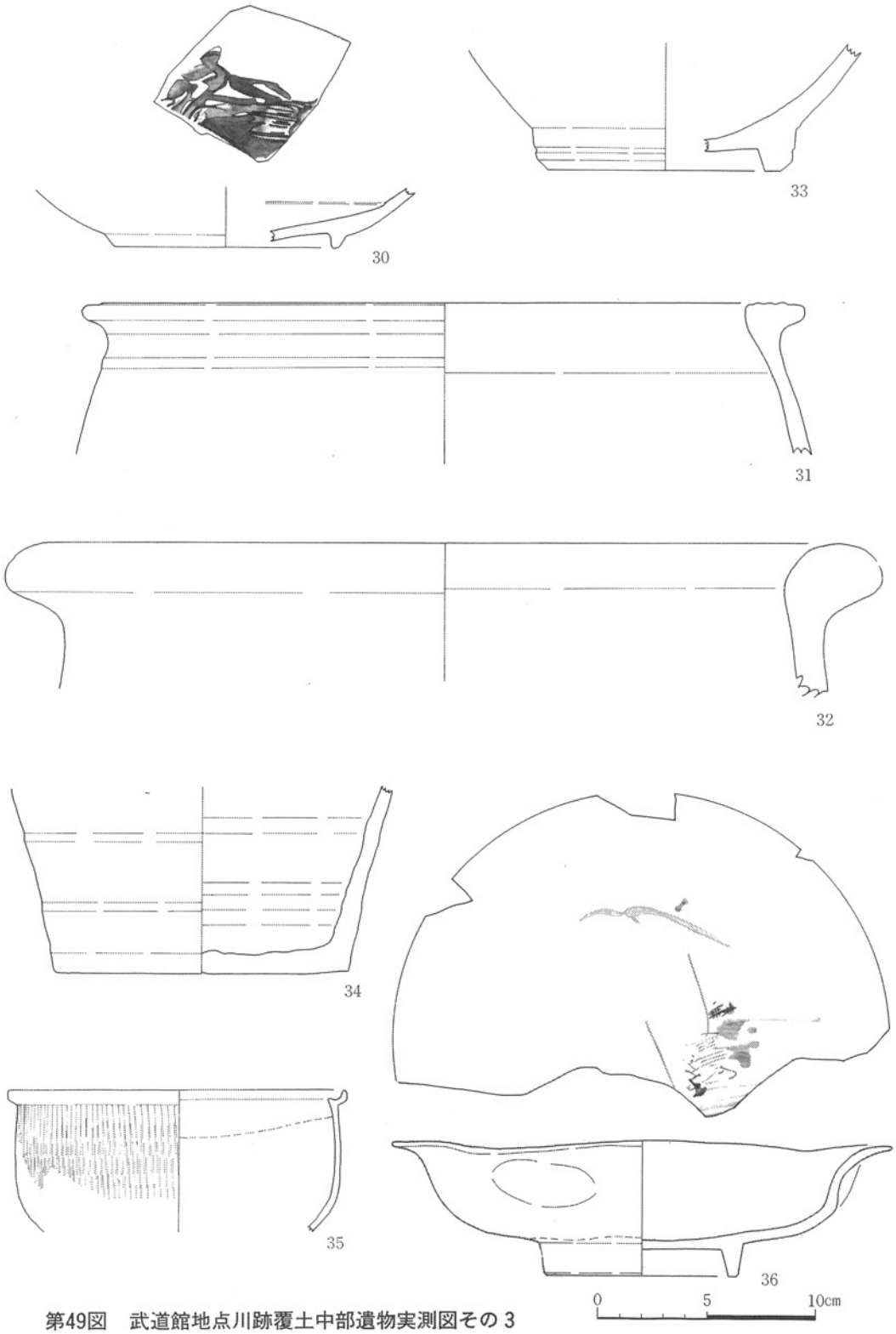
33は内面褐釉の上に白釉の平行刷毛目を描いた刷毛目鉢で，高台は2段に削った削り出し高台で，高台中央に一条の凹線を巡らしており17世紀後半～18世紀前半。34はいわゆる桶型で，ロクロナデを明瞭に残しており，底部外面に穿孔途中の穴があることから植木鉢への転用途中で放棄したものと思われる。35は口縁部を球形に内湾させ，蓋受け部を作っており，体部にヘラによる刻み目文を細かく施しており，一応京焼系と思われる。36は体部に6か所の凹みがつけられており，オリーブ黄灰色の釉に黒緑色で山水図を描いており，底裏面に「新」と思われる刻印の一部が見られることから一応京焼風陶器として取り扱った。38は胎土が黄橙褐色を呈し，褐色釉を体部上半まで施しており，美濃・瀬戸系とも思われるが一応不明とした。

⑥ 猪 口

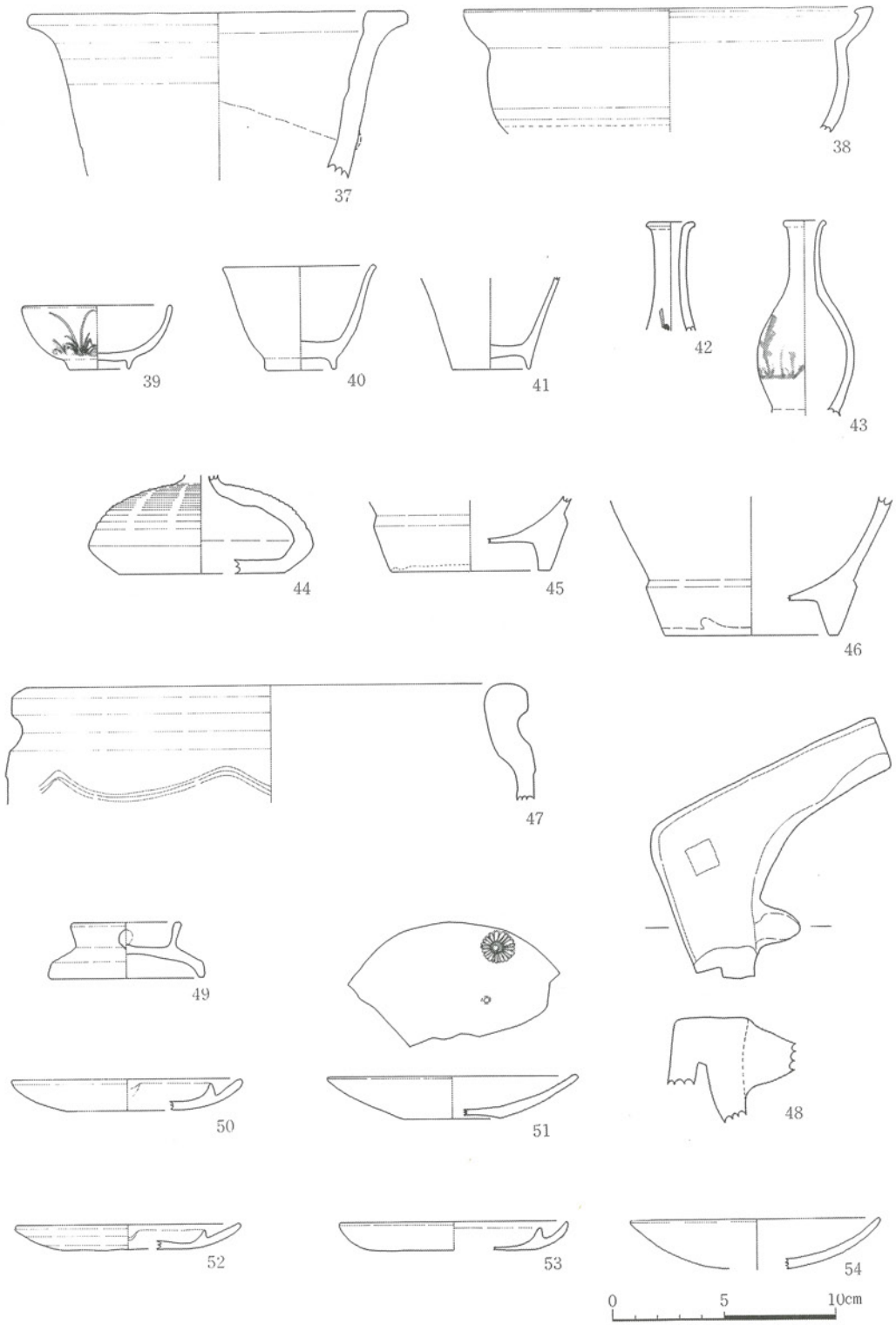
いずれも伊万里焼で，39は碗型であり藍色で草花文を描いており，文様構成及び器形からみて17世紀末～18世紀前半と思われる。40は端反り型で釉は灰色であり，器形からみて17世紀後半～18世紀前半。41は桶型で体部は直線的に上り，白色釉で焼きはしっかりしており器形からみて17世紀後半。

⑦ 瓶

いずれも伊万里焼の細頸で，42は口縁部から頸部までの破片で，にごった藍色で草花文を



第49図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その３



第50図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その４

描いており17世紀後半。43は頸がやや短く，最大径が胴部中央にあり，やや濁った藍色で草花文を描いており，文様構成は「肥前陶磁」P115・NO. 149神奈川県雪ノ下大蔵南御門跡と類似しており，18世紀前半。

⑧　水　滴

備前焼で，体部下半に最大径があり体部上半は非常に細かい櫛目文を描いており，頸部は小さく短いものと思われる。

⑨　徳　利

大谷焼の底部の破片で，外側に段をもって厚みを作ったもので，18世紀後半～19世紀前半。

⑩　火　鉢

47は瓦質の口縁部を肥厚させた円形のもので，体部上半にヘラによる山形文が描かれている。48は土師質の角鉢の一角のみで，内面に鍋かけ用突起が1か所つけられており，内面に平行刷毛目が施され，煤が付着しており上面に文字不明の刻印が見られる。

⑪　味噌焼皿

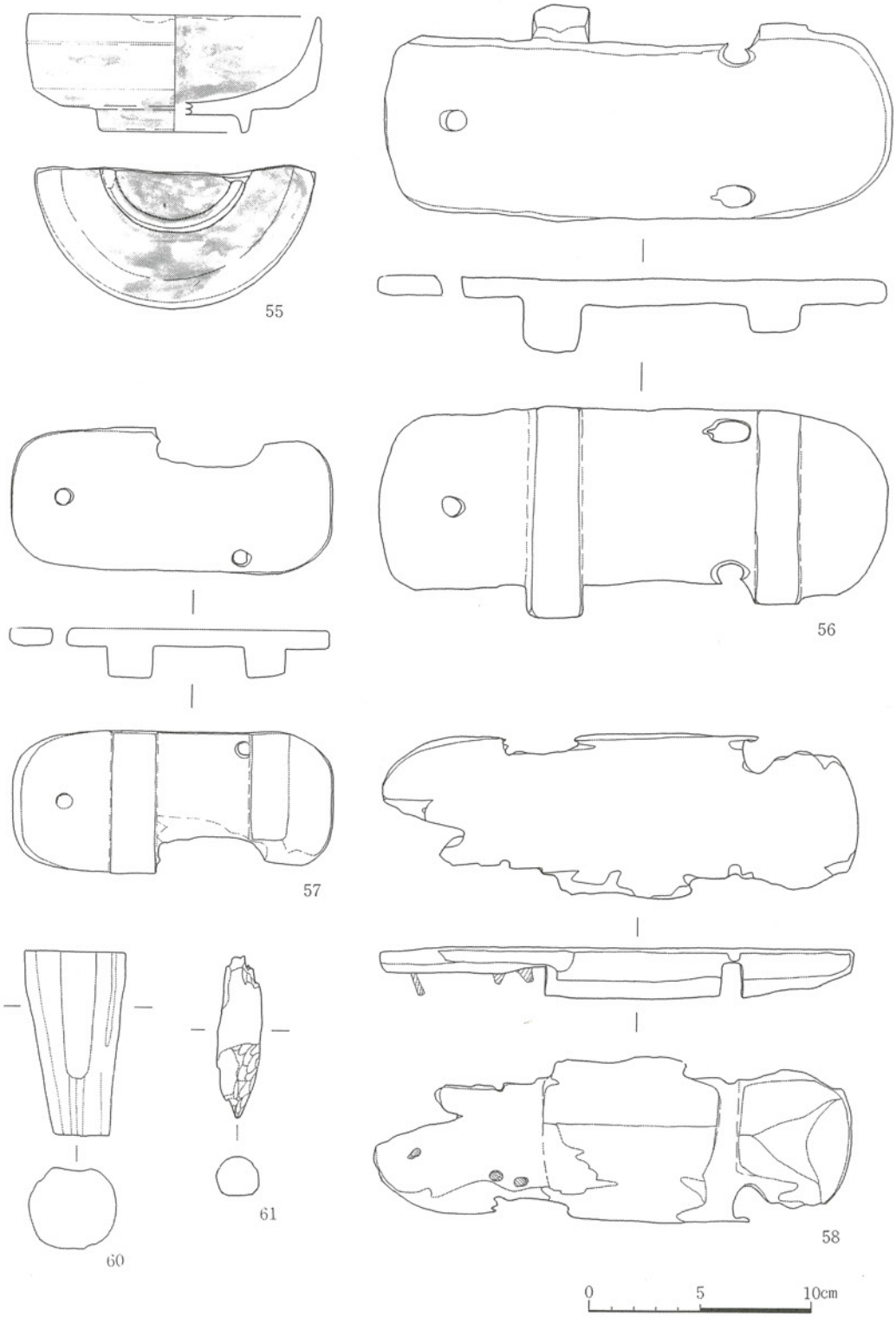
陶質の胎土に黒褐色釉をかけており，内面のやや浅いもので，外面に火箸を差し込んだ穴がみられる。

⑫　灯明皿

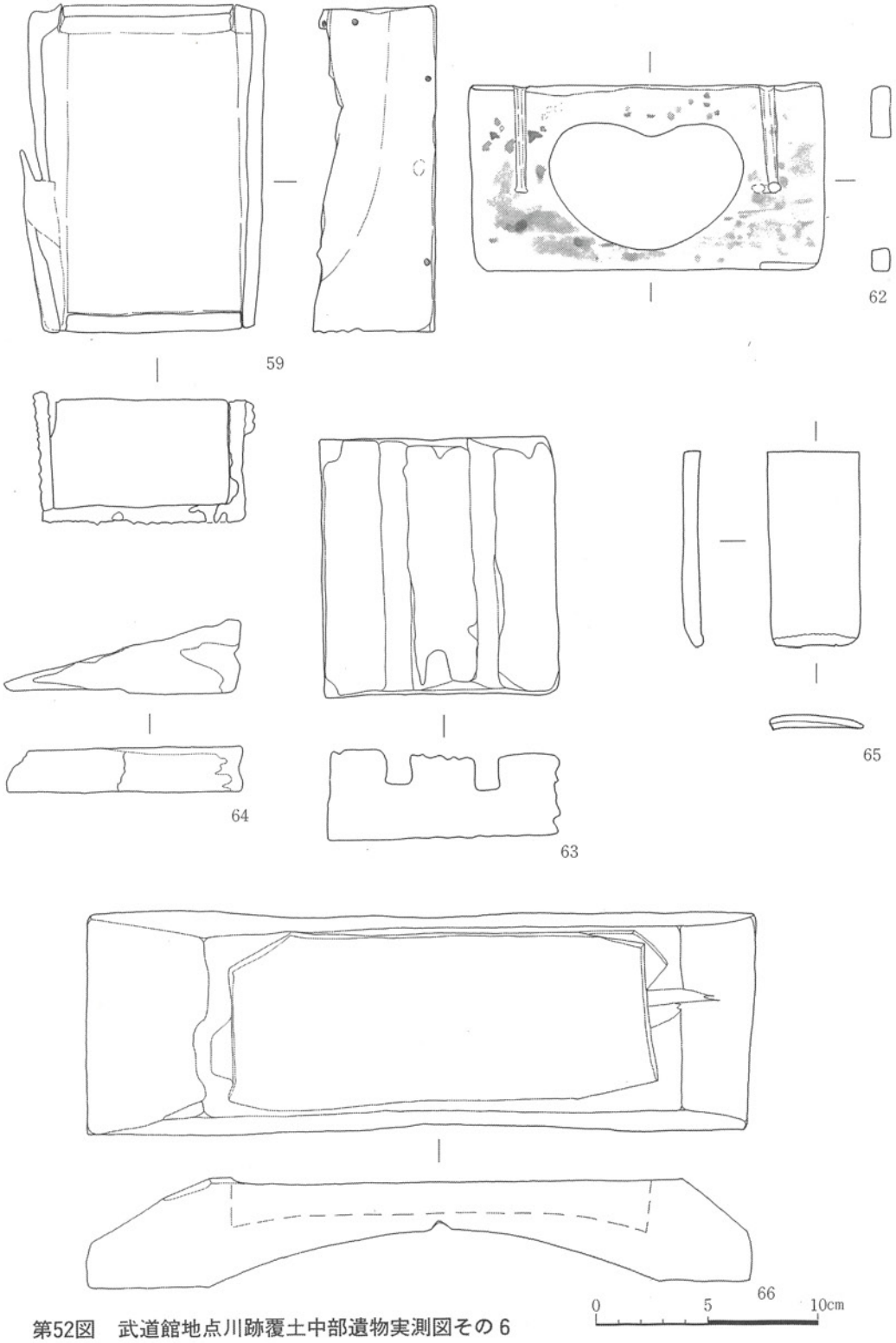
50は平底の底部で，内面に燈芯受部を巡らしており，脂返しの穴が穿孔されている。51はやや上底気味の平底で，内面に1か所菊文が型押しされ，ハリ支えの跡が見られる。外面に煤が付着しており，釉調及び胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。52は器高の低い平底で，灯芯受部を巡らしており，脂返しの穴が穿孔されており，焼きは不明。53は器高が低く，体部が湾曲しており灯芯受部を巡らしており，脂返しの有無及び焼き不明。54は丸底と思われ，別の台に乗せて使用したもので，口縁部に煤が付着しており焼き不明。

⑬　木製品

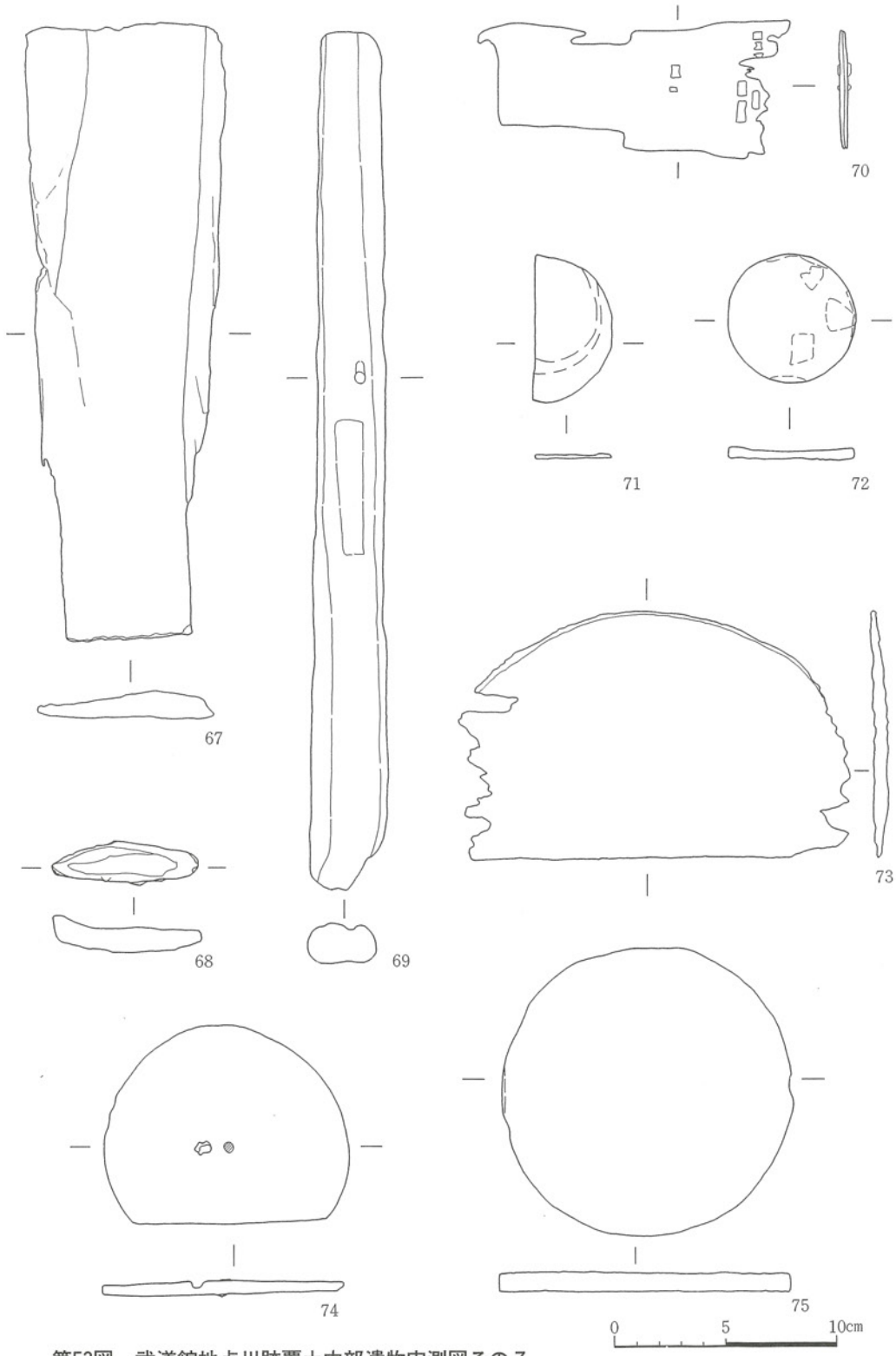
55は漆塗り碗で，ロクロ削り成形で，体部に一段の面をもち，器高はやや低く球形を呈しており，全面に漆が塗られており18世紀代か。(註22) 56・57はいずれも刳り下駄で，四隅を丸く削り込んでいる。57は子供用下駄である。58は差歯下駄で，差歯の部分は外れて不明。(註23) 59は箱であり，互い違いに組んでおり，竹釘で止めている。60・61はいずれも棒状のもので，片方の先端を削って細くした樽あるいは桶の栓と思われる。62は襖か障子の引手と思われ，ハートの窓が付けられ，本来漆が塗られていたと思われ，窓の部分に痕跡が見られる。63は三角形に片方を斜めに削り込んだもので，壁板と柱の間に打ち込んだ楔であり，使用痕の窪みが



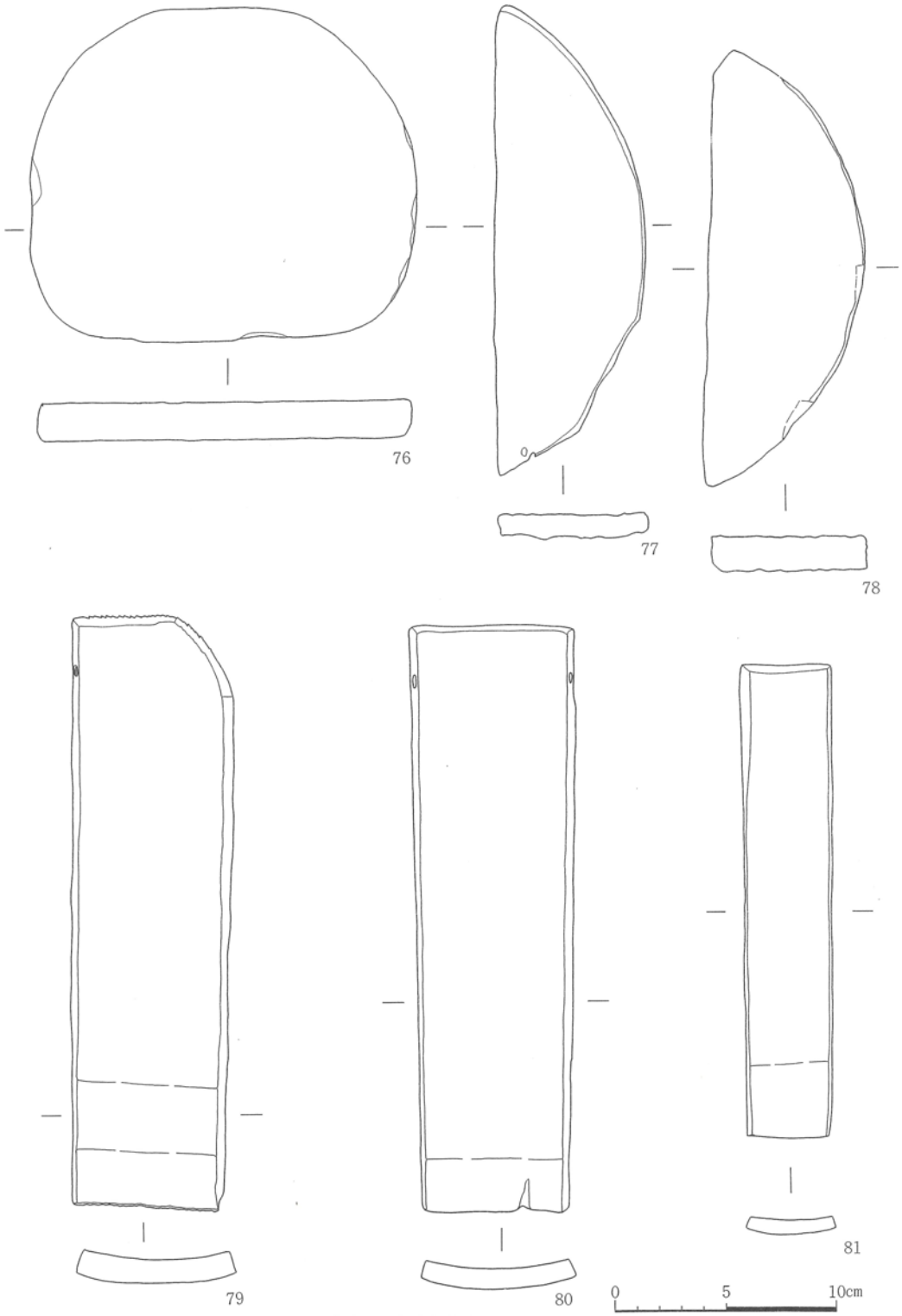
第51図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その５



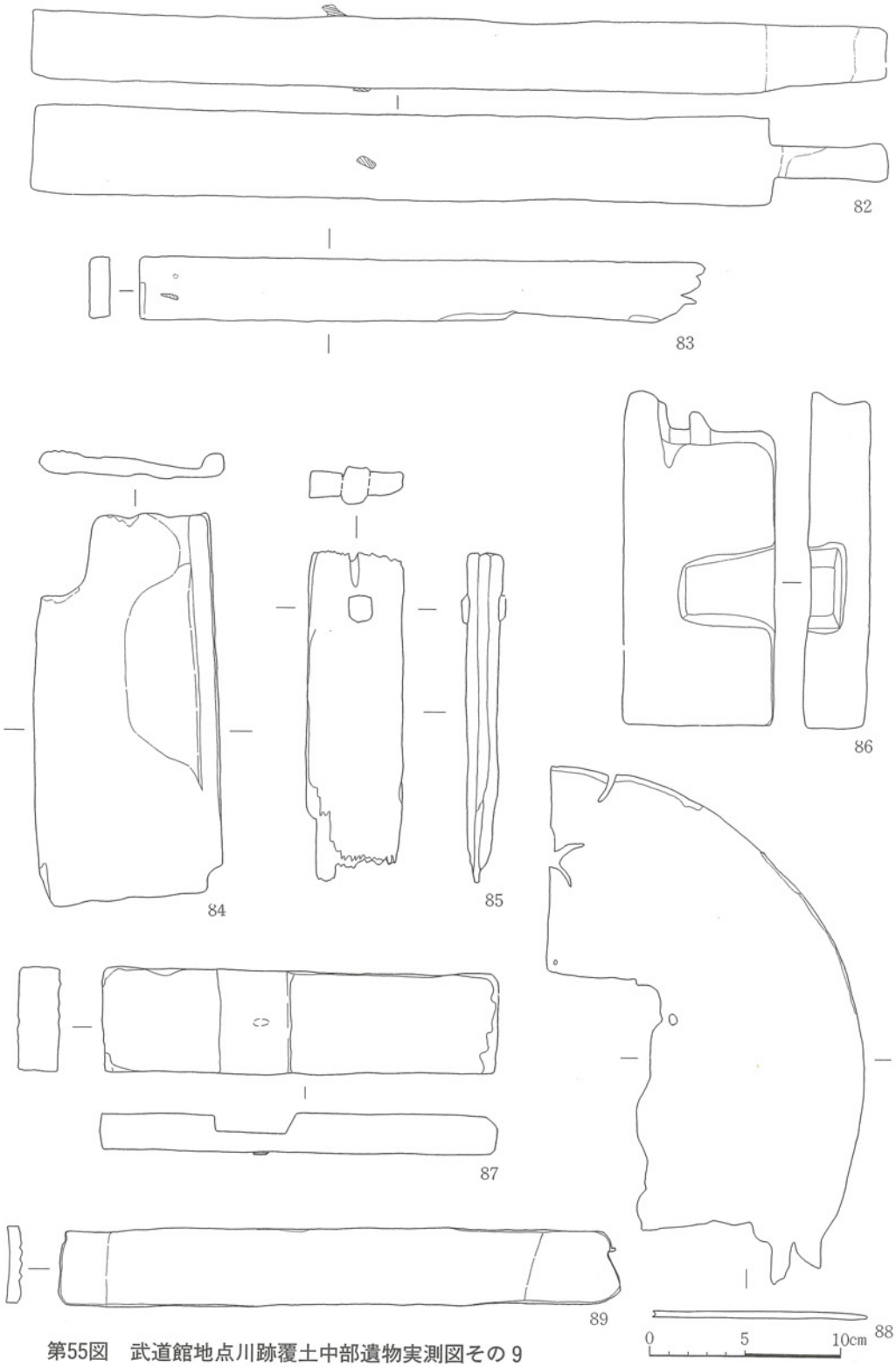
第52図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その6



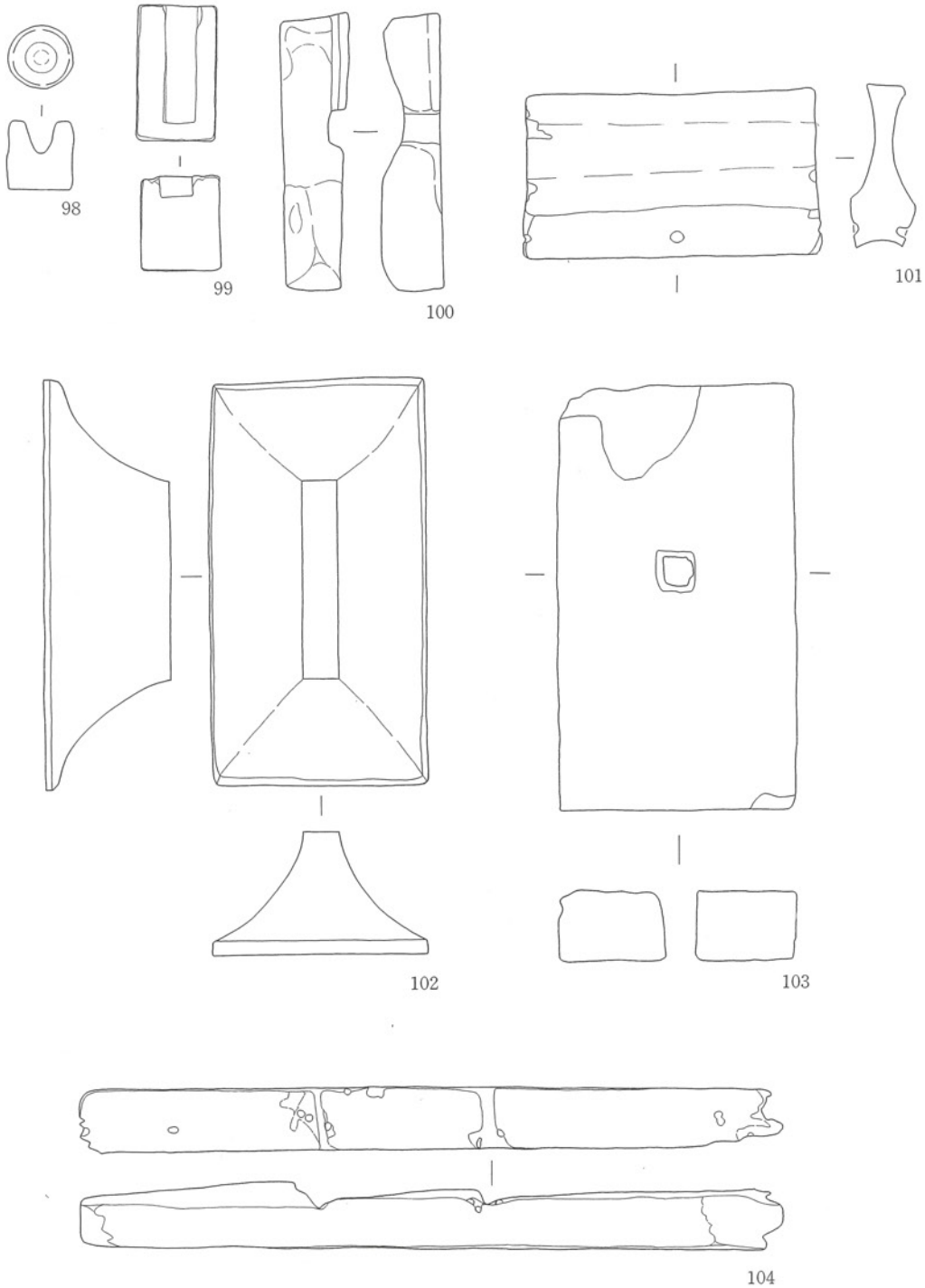
第53図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その７



第54図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その８



第55図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その９



第56図　武道館地点川跡覆土中部遺物実測図その10

見られる。65はたがを締める道具で，先端を桶と密着させるように斜めに削り込んであり，摩滅した使用痕がみられる。66は砥石を固定する台で，上面両端を斜めに削り込み中央部に砥石を固定する長方形の穴を作っている。底面はアーチ状に内面を刳りこみ，中央部に紐で固定するための切り込みが見られる。67は羽子板状を呈し，外面はやや丸みをもっており，壁土を上へ持ちあげるヘラ状工具と思われる。68は棒状の材を半裁し，刳り抜いたもので舳先は両側から削り込み，艫はやや丸くおさめたミニチュアの船である。69は棒状の材を楕円形に削り，四隅を丸く面どりしており，基部は片方を斜めに削り込んでおり，一応木刀と考えた。70は大きく破損しているため原形は分からないが，円周から推定すると直径15㎝内外の大きさで薄板を丸め，桜の皮で止めた柄杓と考えられる。71～73はいずれも針葉樹の薄いもので曲物の底板と思われる。74～78はやや厚みを持っており，桶もしくは樽の底板と思われる。79～81は長方形を呈し，内側を斜めに削り込んで桶材である。82～93はいずれも建築部材と思われ，釘跡やほぞを切り込んだものが見られるが，用途は不明。94～97は棒状の木製品で，いずれも針葉樹の材を削ったものであり，96は枠材か障子等の桟と思われるが，他は用途不明。98～103は不明の木製品で，98は棒状の上端部にU字形の穴が彫り込まれており，99は上部中央に幅２㎝，深さ１㎝の溝がノミ彫りされ，100は弓状に削り込んだ角材に幅２㎝，深さ0.7㎝のコ字形の切り込みがあり，101は断面５角形の両側を弓状に削り込み，102は四方を弓状に削り込み，103は中央部に２㎝の正方形の穴を穿孔したものであるが用途は不明。104は角材で，中程に４㎜とも６㎜の溝が貫通しており，釘を打ち込んだ跡が見られるが用途は不明。

以上104点について述べたが，大半は18世紀代が中心であり，19世紀代もある程度まとまって出土していることから，最後の拡張の後に堆積した土層と思われ，一部川跡覆土上部との混在が見られるものである。

(4) 川跡覆土下部（第57～67図）

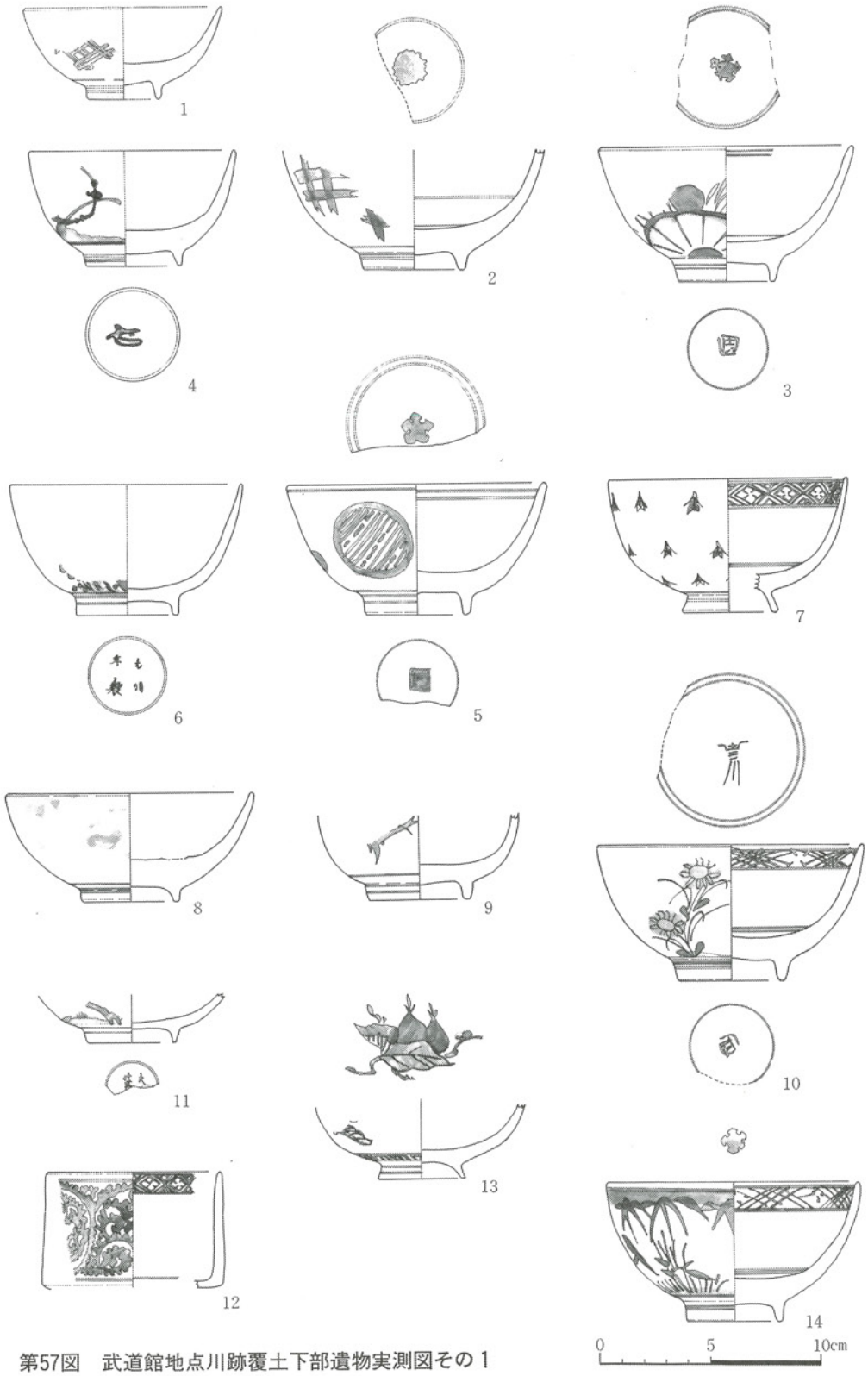
オリーブ褐色砂層，にぶい黄褐色砂層，褐色砂層，黄褐色粘土層で，石垣で作った船着き場廃棄後に伴う埋土のもので，一部はそれ以前の川跡の覆土も含まれている。

碗，蓋，皿，鉢，猪口，香炉，瓶，合子，徳利，仏飯具，擂鉢，土瓶，灯明皿，火鉢，焼塩壺，味噌焼皿，灯明皿，墨壺，土錘，土製品，ガラス瓶，硯，隅金具が出土している。

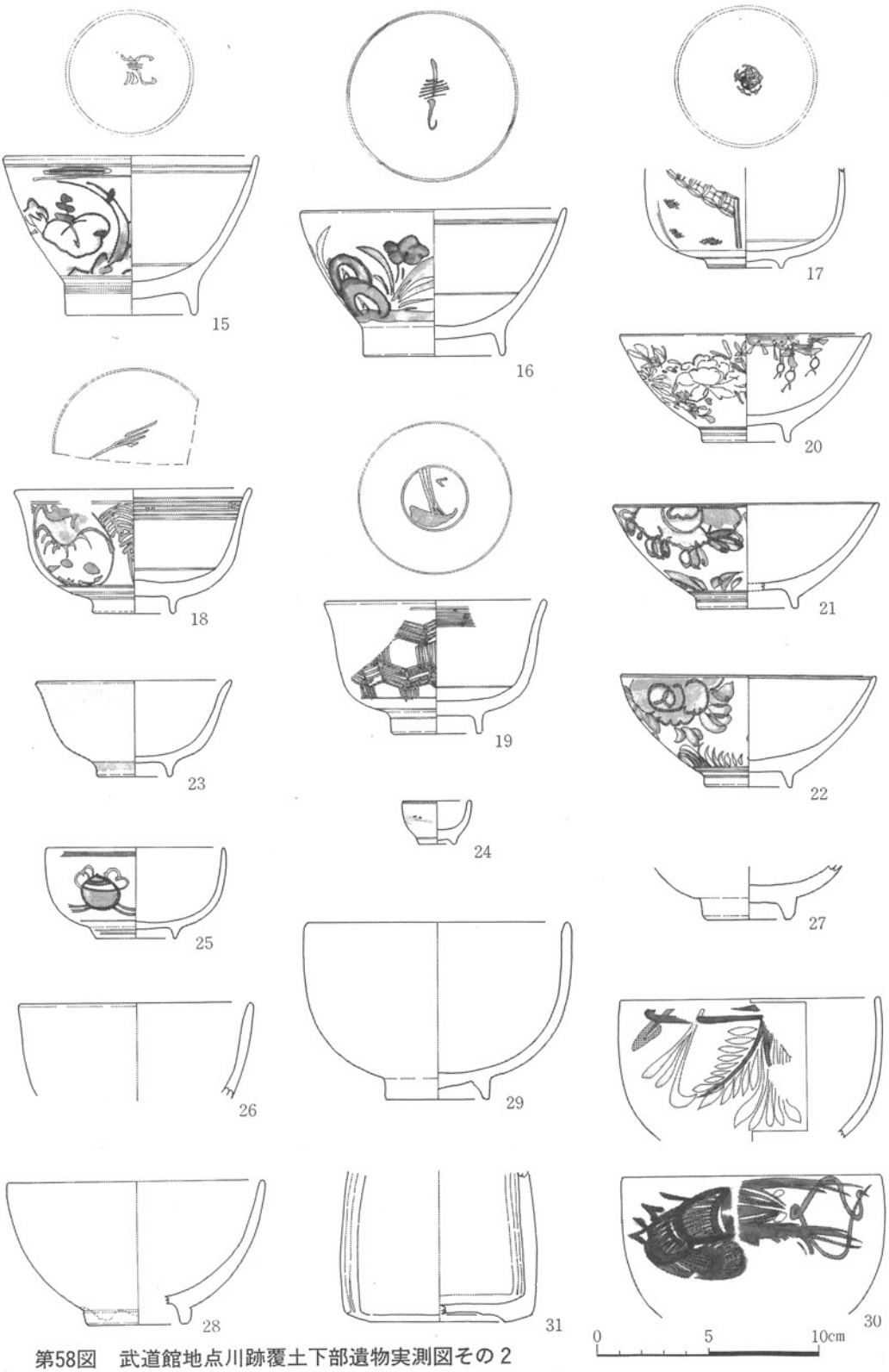
① 碗

1～25は伊万里焼，26～29は唐津焼，30は京焼，31は志野焼，32は不明である。

1はやや厚手の小ぶりの碗で，黒ずんだ藍色で，井桁武田菱文のコンニャク判を描いており，文様手法からみて17世紀末～18世紀前半。2はやや厚手でややにごった藍色で外面井桁文，内面見込み菊文のスタンプ文を描いており，文様手法からみて1と同じく17世紀末～18世紀前半。3は藍色で菊文，内面見込み五弁花スタンプ文，底裏面の銘不明であり，底部に多量の砂が付着しており，18世紀前半と思われる。4はやや体部が直立した厚手のもので，陶胎染付と思われ，にごった藍色で梅文，底裏面，寿か福のくずし文字を描いており，18世紀前半。5はいわゆるくらわんか手で，やや厚手で藍色で外面丸文，内面見込み五弁花コンニャク判，底裏面の銘は不明であり，「肥前陶磁」P97，NO.619鳥取県陰田遺跡に類似しており，18世紀前半。6は澄んだ藍色で山水図，底裏面「太明年製」の銘を描いており，18世紀前半。7はやや薄手で焼きがよく藍色で，くずし寿字蟬文，口縁内面四方襷文を描き，高台はやや外反しており，18世紀代。8はくらわんか手でやや器高の低いもので，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行い，外面梅花文を描いており，文様手法が「肥前陶磁」P82，NO.921佐賀県長尾遺跡と類似しており，18世紀代。9は陶胎染付と思われやや小ぶりで体部のやや直立したもので，黒みがかった藍色で描いるが文様は破損の為不明，18世紀代。10はくらわんか手で淡い藍色で菊花文，内面見込み「荒」の略字と思われる字を描いており，18世紀代。11はやや薄手で焼きがよく，明るい藍色で松文，底裏面「太明成化年製」の銘を描いており，18世紀後半。12は筒形碗で体部がほぼ垂直なもので藍色で外面蛸唐草文，口縁内面四方襷文を描いており，18世紀後半と思われる。13は高台が外反しやや低いもので外面及び内面見込みにクワイもしくは栗が描かれており，18世紀後半。14はくらわんか手で，やや黒ずんだ藍色で笹を描き，内面見込み五弁花コンニャク判を描いており，手法が「肥前陶器」P78・NO.905佐賀県芝手遺跡と類似しており，18世紀代。15・16はいわゆる広東型で藍色で外面蝶と草花文，内面見込み15は「荒」，16は「寿」の略字を描いており，19世紀初頭。17はやや薄手で，藍色でもって七宝つなぎ文と斜斜子文，内面見込み五弁花を描いており器形及び文様構成が「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」の広瀬向窯4層出土のものと類似しており，18世紀末～19世紀初頭。18は端返り型で群青がかった藍色でもって蝙蝠とシュロ文を描いており，18世紀末～19世紀前半。19も端反り型で，外面亀甲つなぎ文，内面見込み舟に島を描いており，19世紀前半。20は器高が低く群青がかった外面牡丹と菊花文，内面なりもの図を描いており，19世紀前半。21，22も20と同様の器形で，牡丹文を描いており19世紀前半。23は端反り



第57図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その１



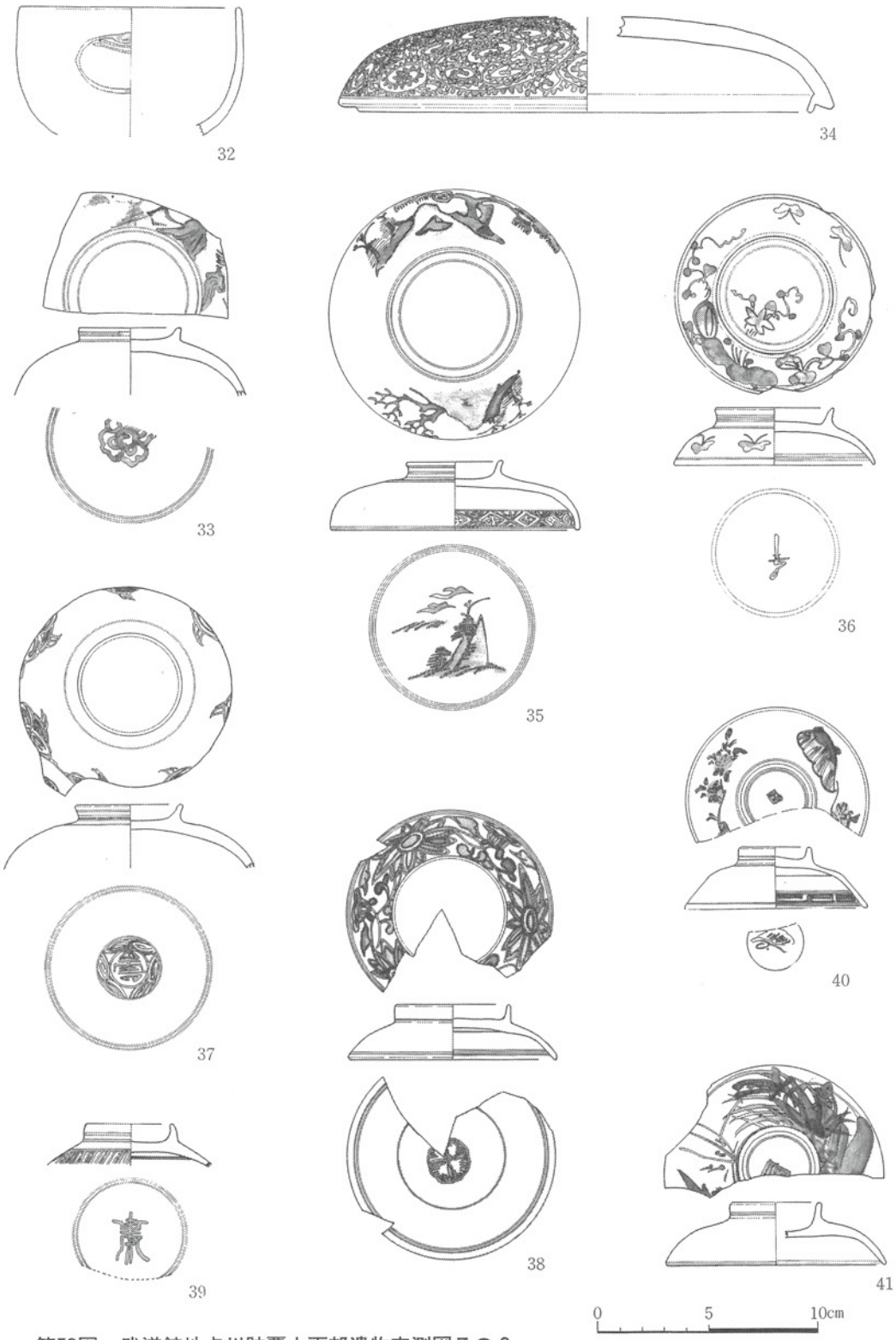
第58図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その２

瑠璃釉の小碗で，高台内面に「キ」の毛彫りを行っており時期は不明。24は碗型の非常に小さい小碗で，緑がかった藍色でもって簡略化した草花文を描いており，紅入れ等の様途が考えられ，18世紀代。25はやや小ぶりの碗で，焼きはよく藍色の宝くずし文を描いており，19世紀初頭。26は外面褐釉の上に白釉の波状，内面褐釉の上に白釉の木ノ葉状の刷毛目を施したもので，17世紀後半～18世紀前半。27は内外面とも褐釉の上に白釉の平行刷毛目を施しており，高台内面も施釉しており，17世紀後半～18世紀前半。28は褐釉の上にこげ茶色の黒釉の刷毛目の天目風で，一応唐津焼として取り扱った。29はロクロ輪積み仕上げで，緑灰色の釉がけを行っており，胎土からみて一応唐津焼とした。30はオリーブがかった黄灰白色釉で，貫入がみられ，やや黒みがかった赤，淡緑色，淡青色でもって海老と海草を描いており，胎土及び文様手法からみて，京焼系と思われる。31は筒形碗で，黄灰色釉で貫入があり，底裏面は円形のくぼみがみられ，志野焼で時期は不明。32は黄灰色釉で細かい貫入があり，黒褐色で宝珠を描いており，焼きは不明。

② 蓋

33～34は伊万里焼，45は唐津焼，46・47は京焼系，48～50は美濃・瀬戸系，51は大谷焼，52は不明，53は瓦質である。

33はつまみが低く外反し，にごった藍色で外面山水図，内面見込み梅文を描いており，18世紀前半と思われる。34は鉢の蓋と思われ，本来はつまみがつくものと思われる。外面に藍色で蛸唐草文が丁寧に描かれており，18世紀代。35はつまみ端部に外反し，黒ずんだ藍色で外面山水図と松梅文，内面見込みと雁と山水図を描いており，時期は18世紀代。36は器高がやや低く小ぶりで，藍色で蝶とつる唐草文を描いており，器種は異なるがつる唐草文の文様が「肥前陶磁」P124・NO.106千葉県佐倉城跡に類似しており18世紀後半。37は胎土及び焼きともよく，外面寿字霊雲文，内面見込みに「寿」の銘を描いており，「肥前陶磁」P 137・NO.268東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており，18世紀末。38は釉がやや黄色味がかった灰白色で，呉須も黒灰色と他のものと趣が異なり，外面鉄線花文，内面轡文を描いており，18世紀末～19世紀前半。39はやや薄手で直線的に開き外面暦文，内面見込み「寿」のくずし銘を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P21・NO.015の広瀬向窯第3層と同一であり，19世紀前半。40は体部中央で屈曲させ，外面に花文，内面に雷文とつる草文，つまみ内面「吉」の銘を描いており，19世紀前半。41はつまみ内面が高く，群青がかった藍色で草文，42も群青がかった藍色で菊花文，内面見込み「大化年製」の銘を描いており，いずれも19世紀前半。43は小さなかぶせ蓋で，赤，青，黄，緑の色によって武田菱と扇文を描いており，



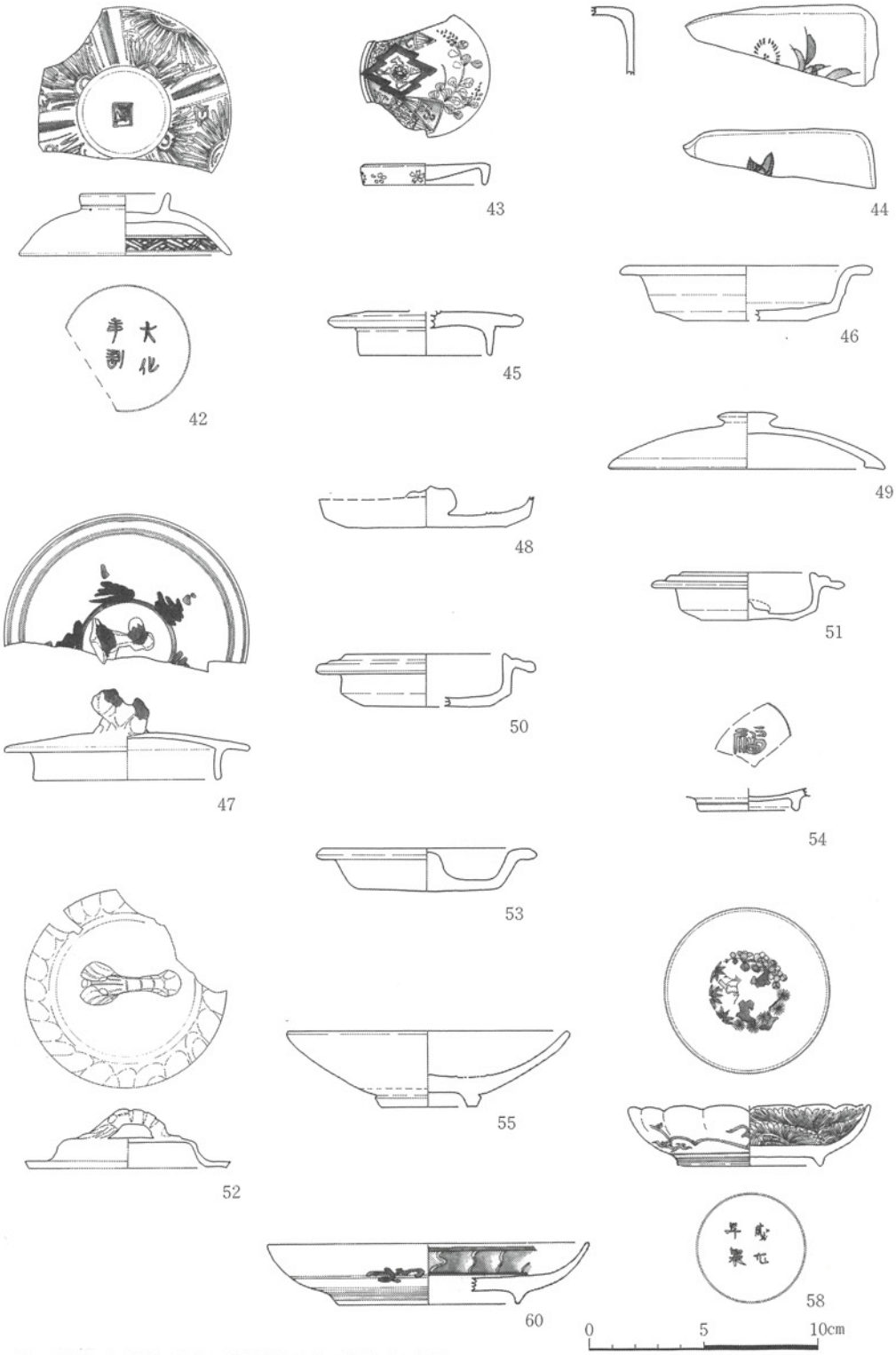
第59図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その３

一応伊万里焼とした。時期不明。44は角形で，群青がかった藍色で野菊文を描いており，時期不明。45は身部・受部とも直線的になっており，つまみは欠損。壺の蓋と思われ時期不明。46は落蓋で，外面ロクロヘラ削りを行い，白釉，緑釉を施している。47は灰色がかった白釉の上に群青がかった青色を施し，つまみは犬を取付けており，いずれも胎土からみて京焼系。48～50は美濃，瀬戸系であり，48は落蓋で宝珠つまみ，49は合せ蓋で，ボタン状つまみ。50は落蓋で口縁を斜下半に開け2段の稜をもったのである。51は50と形体的によく似ており，内面中央に指ひねりしたつまみをつけており，大谷焼。52は内面に布目痕があり，型押し成形で，口縁部は手づくねの指押さえを文様として利用し，海老のつまみを取りつけており，焼き時期とも不明。53は落蓋の瓦質のもので，退化した宝珠のつまみをつけている。

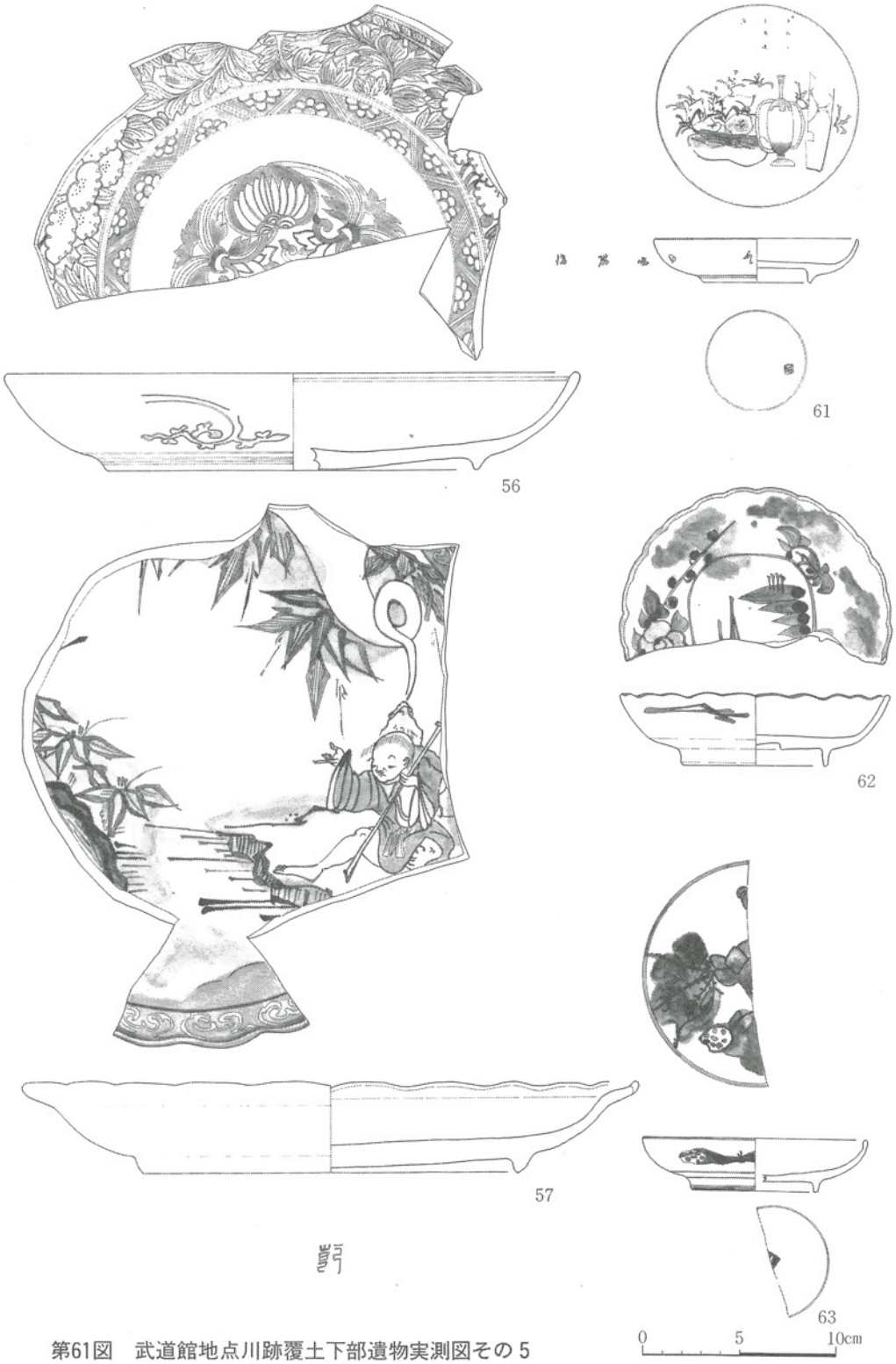
③ 皿

54～64は伊万里焼，65は美濃・瀬戸系，66・67は不明である。

54はやや薄手の底部の破片であり，やや黒ずんだ呉須で底裏面に「福」の銘を描いてあり，17世紀中頃。55は白磁の削り出し高台で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，「肥前陶磁」P105・NO.408奈良県郡山城跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。56は口径が約30cmの大皿で内面に牡丹唐草文，唐草束ね熨斗文，外面唐草文，底裏面「太明成化年製」の銘を描いており，17世紀後半か。57も口縁約32cmの大皿で，口縁輪花で墨弾き技法で雲文を描き内面南画風笹舟人物画を描いており，底裏面「乾」の銘があることから19世紀前半。58は口縁輪花で，ややにごった藍色で内外面とも唐草文，内面見込み松竹梅文，底裏面「成化年製」の銘があり，「肥前陶磁」P102・NO.558京都府園部城跡に類似した文様構成であり18世紀後半。59は胎土，焼きとも非常によく，口縁輪花で内面緑釉で雲文，外面あざやかな藍色で南天図を描いており，18世紀後半の鍋島藩窯か。60は内面墨弾きの波文を描き，外面簡略化した唐草文を描いたもので，18世紀末～19世紀前半。61は薄手で藍色で草と瓶，判読不明の文字が内外面に描かれており，19世紀前半か。62は見込み内面の区画が隅丸長方形を呈し，口縁28弁の輪花でにごった藍色でもって，梅に牡丹図，内面見込み帆かけ船，外面松折葉文を描き，蛇ノ目凹形高台であり，19世紀前半。63は呉須による口紅皿で，群青がかった色で蓮根を描いており，19世紀前半。64は蛇ノ目高台で内面草花をアレンジした熨斗文と銘を描いており，時期は不明。65は凹形高台の底部の破片で内面見込みに砂目積み跡がみられ，胎土・釉調からみて美濃・瀬戸系。65・66は胎土が赤褐色の皿で口縁部に煤が付着していることから灯明皿と思われる。



第60図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その４



第61図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その５

④　甕

68はやや薄手で，口縁部を内外面とも肥厚させて平坦面をつくり，体部外面，ロクロナデ痕による凹凸を残しており，備前焼。69は「く」字形に屈曲した薄手で，口縁端部は内外に肥厚させやや内傾させており，胎土からみて美濃・瀬戸系

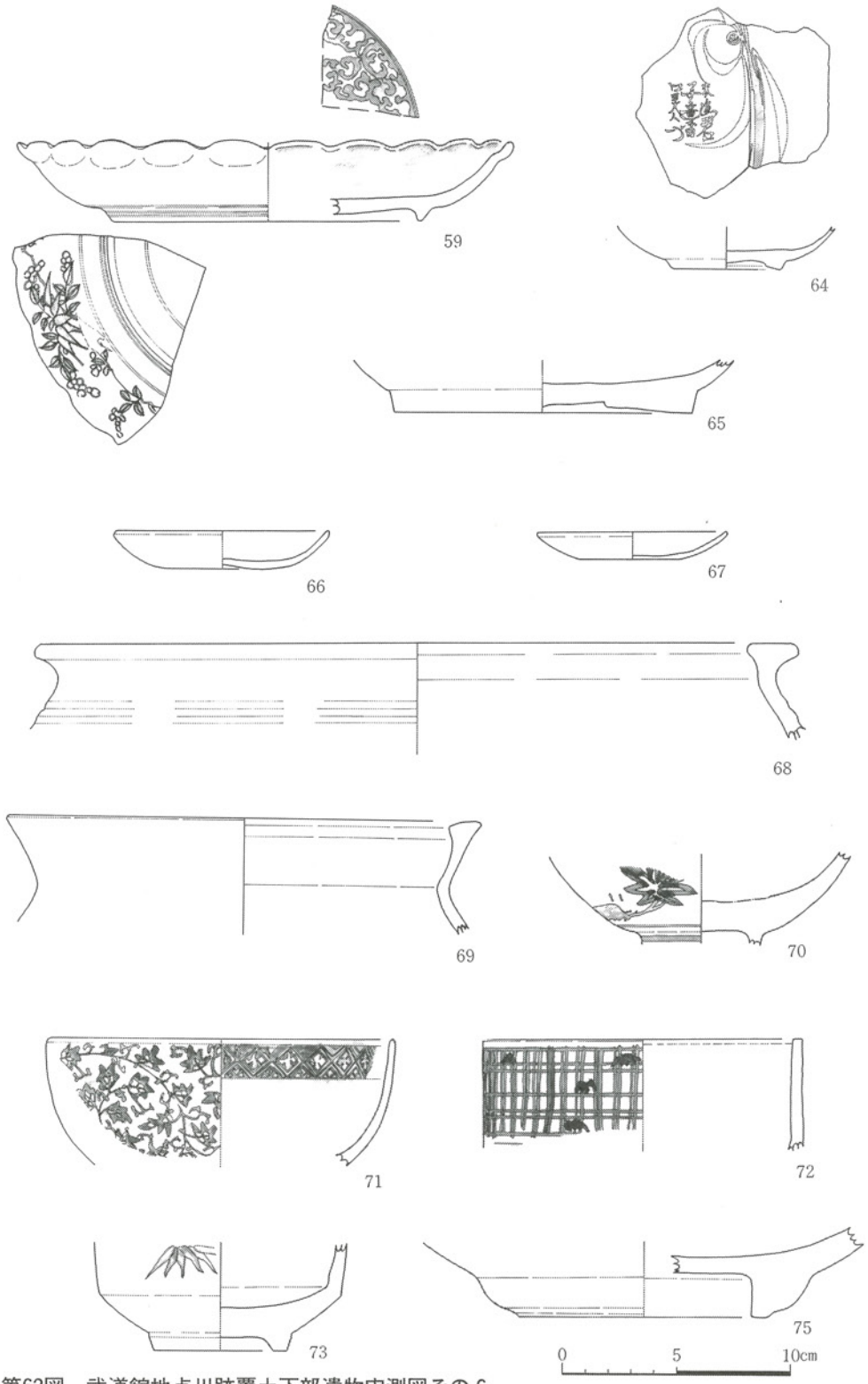
⑤　鉢

70～73は伊万里焼，74～83は唐津焼，84は備前焼，85～87は美濃，瀬戸系，88・89は土師質である。

70はやや厚手で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行い，外面八ッ手文を描いており，71は外面細かい唐草文，内面四方襷文を描いており，器形は異なるが，P82・NO.914佐賀県長尾遺跡のものと類似しており，18世紀代。72は体部が直立したもので，口縁内面釉ハギを行っており，蓋がつくものと思われる。外面格子文に竹の葉が描かれている。73は体部が屈曲して直線的に立ち上るもので，にごった蓋色で笹を描いており時期不明。74は縦線文，蓮弁文の象嵌鉢であり，17世紀後半。75・76はいずれも底部の破片であり，75は内面，76は外面にそれぞれ白釉が施されており，17世紀後半。77は薄手のもので，内面蛇ノ目釉ハギ，外面平行刷毛目，内面平行刷毛目の上に波状刷毛目を施している。78は内面に白釉を施し，重ね積み痕が見られ，高台畳付けに７カ所の砂胎土目跡がある。79は頭部で大きく屈曲した口縁で白釉を施している。80は高台に２条の細かい凹線を施しており，内面見込み重ね積み痕が見られる。81は球形を呈し，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，白釉の波状刷毛目を施している。いずれも17世紀後半～18世紀前半。82は薄手で，内面無釉，外面褐釉を施しており時期不明。83は体部上半最大径があり，体部上半に鉄釉の文様が描かれているが欠損の為不明。84はやや上底で気味の平底の薄手で，体部中央に一条の凹線をめぐらしており，時期不明。85は体部が球形を呈し，口縁は外側へ折り返しており，一部緑釉の流しかけを行っている。86は小型鉢で香炉とも考えられ，高台に４カ所の抉りこみがあり，黒釉と白釉によって梅を描いている。87は体部にロクロナデの凹凸を残し，陰刻による竜を描いており，黄褐色と黒褐色でもって彩色している。88・89はいずれも浅鉢であり，内外面ともナデを行っており，88は底部外面に火を受けた跡がみられる。

⑥　猪口

いずれも伊万里焼で，90は蓋色で芙容手風に区画し，竹草文，底裏面「宣明年製」の銘を描いており，17世紀末と思われる。91は白磁の碗型で高台径が口径に比して小さく薄手のもので，19世紀初頭。92は体部が直立しており，蓋色で外面花草文，口縁内面雷文を描いてお



第62図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その６

り，19世紀前半と思われる。

⑦　香炉

体部はやや内傾したもので，高台畳付部は8カ所の抉りこみが見られ，こげ茶と淡青色で梅文を描いており，京焼と思われる。

⑧　合子

体部が緩やかに内湾し，口縁内側に水平に折り曲げ蓋受けを形成しており，蓋色で蛸唐草文を描いている。伊万里焼で時期は不明。

⑨　瓶

いずれも伊万里焼で，95は最大径が胴下半部にある小型のもので，藍色で，蛸唐草文を描き，底部に多量の砂が付着しており，18世紀後半。96は細い首の頸部で，口縁部は朝顔状に開いているもので，18世紀末～19世紀前半。

⑩　徳利

97は伊万里焼，98～101は大谷焼である。

97はややずんぐりとしたもので，底部の破片で，高台内面は中央部に向って下っており，18世紀代と思われる。98・99は底部の破片で，体部より段をもって外へ開げており，98は体部が直線的，99は湾曲している。100は口縁部の破片で，口縁部を外反させている。101は高台のつかない平底のものである。

⑪　仏飯具

伊万里焼の身部が碗型のもので，脚は短く裾部は「八」の字形に開き蛇ノ目凹形高台，17世紀後半～18世紀初頭。

⑫　擂鉢

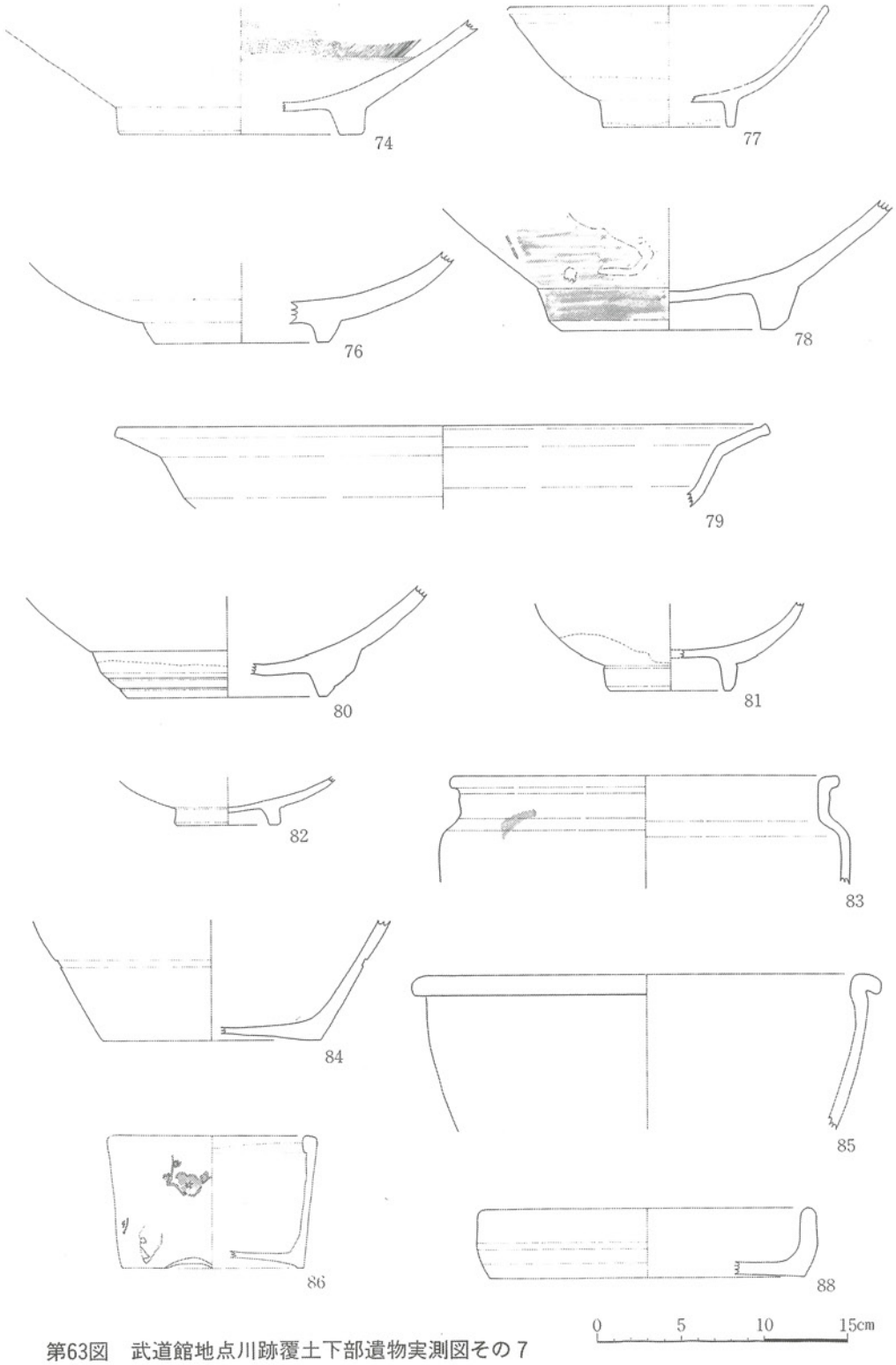
備前焼で，球形の体部に幅の狭い高台を斜めにつけたもので，平底になっている他の擂鉢とは異なっており，10～11条単位の櫛目描きで擂面を形成している。

⑬　土瓶

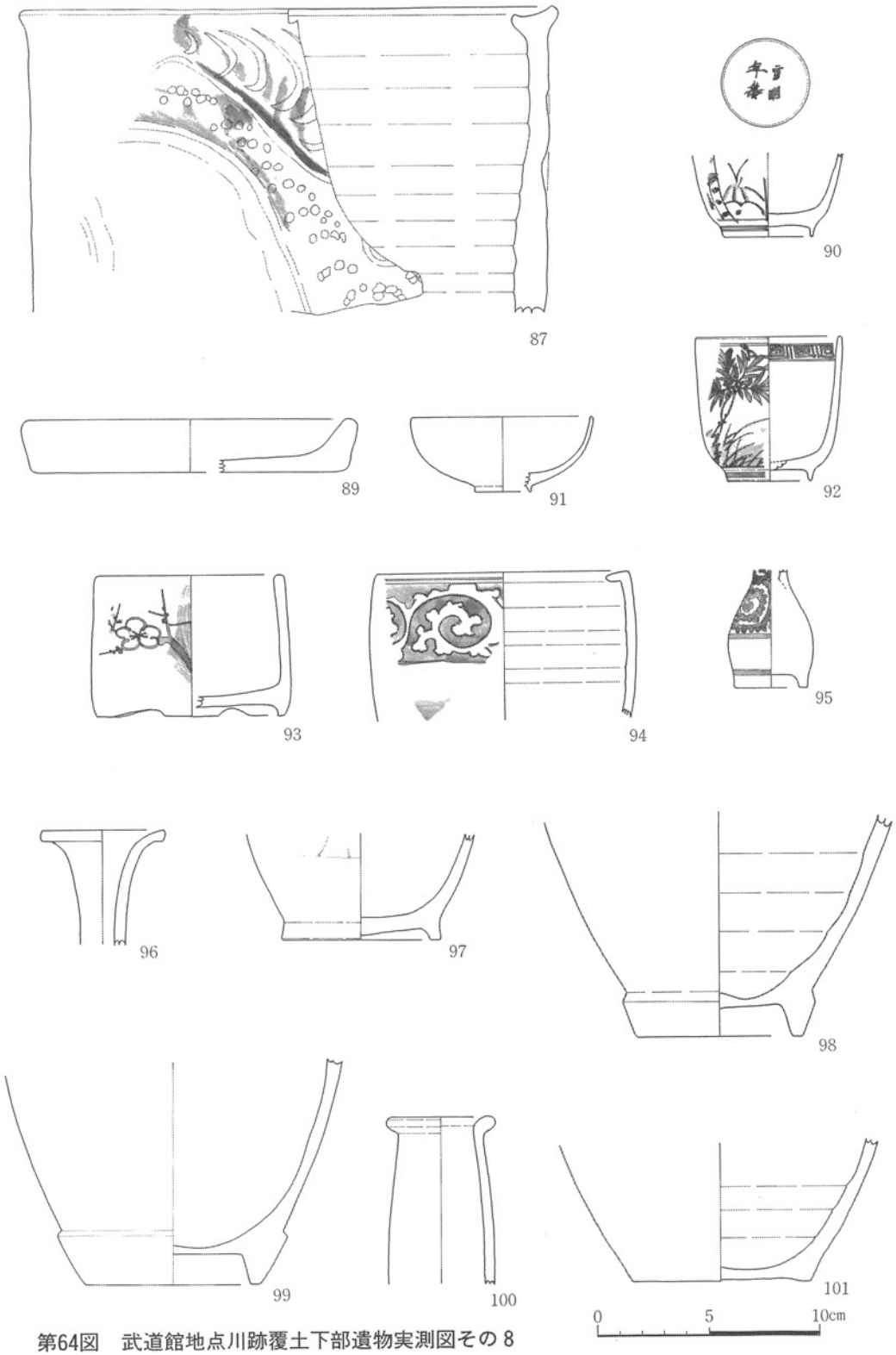
非常に薄手で，底部は大きく上げ底になっており，体部は球形を呈し，オリーブ黄褐色の上に群青がかった藍色で竹を描いており，焼き及び時期も不明。

⑭　火鉢

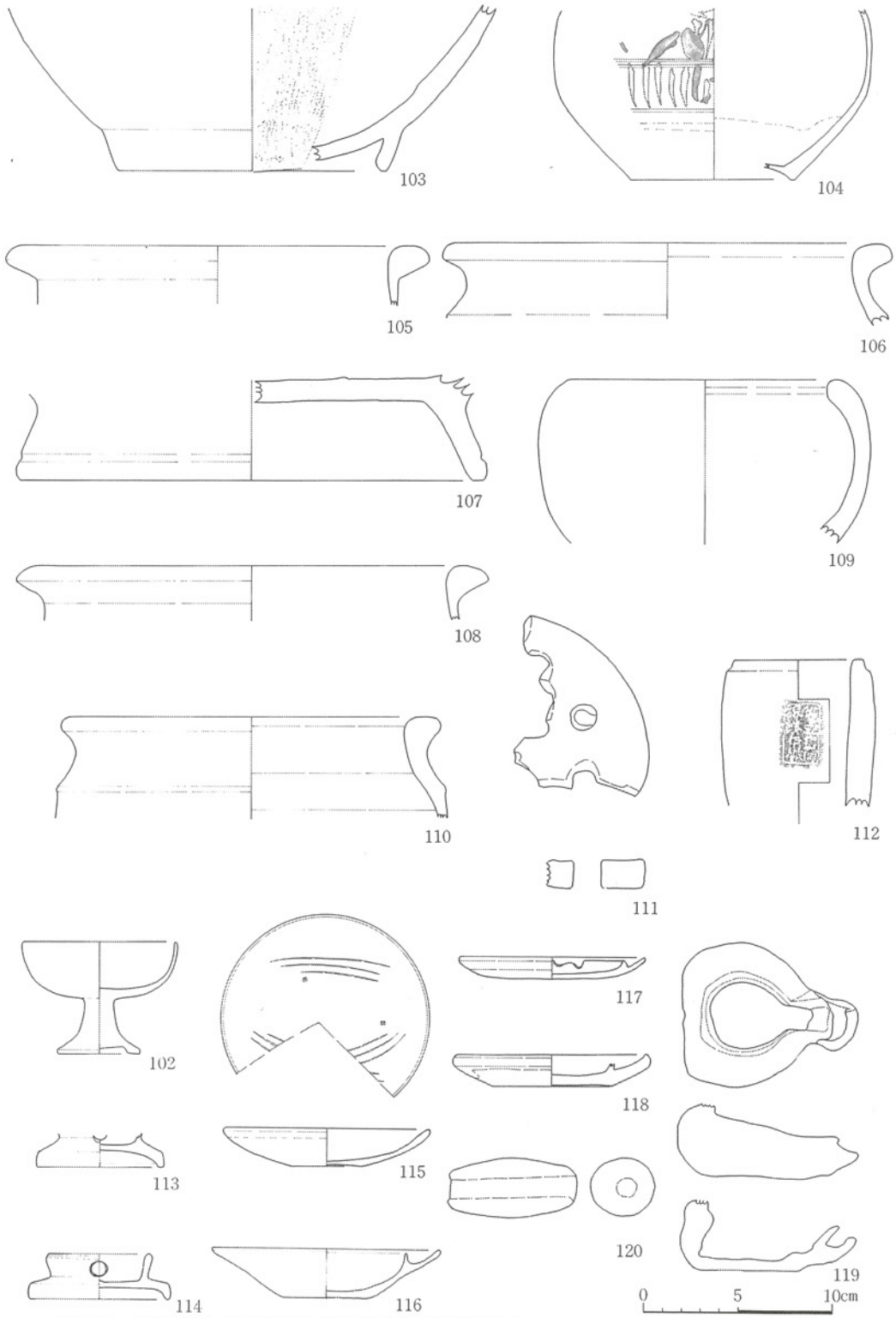
104・105・108・110は瓦質で口縁部の破片で，ナデの後ヘラ磨きを行っており，107は土師質で底の部分のみで，高台下半に一条の凹線を巡らしている。109は球形を呈し，外面に漆の痕跡がみられ，他のものとは異なるものである。



第63図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その７



第64図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その８



第65図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その９

⑮　ロストル

直径14.7cm，厚さ1.4cmで土師質のもので直径1.4cmの孔があけられており，火鉢のロストルとして使用したものであり，二次焼成をうけている。

⑯　焼塩壺

体部は筒形を呈し，内面に布目痕があることから丸棒成形であり，口縁部外面に段をもち受部を形成しており，体部中央部に「御壺塩師堺湊伊織」の刻印がみられ，渡辺編年からみると18世紀前半。

⑰　味噌焼皿

いずれも褐色の胎土に黒褐色及び茶褐色の全面に施釉しており，皿部の深みは浅く，火箸を通す穴が穿孔されており，焼き時期とも不明。

⑱　灯明皿

115・116は美濃・瀬戸系，117は備前焼である。

115は底部が上げ底気味の平底で，体部は内湾気味に外方に開き，燈芯が滑らないように三条の櫛目描きが２カ所つけられおり，ハリ支え跡がみられ，外面に煤が付着。116は平底の底部で体部は直線的に外反し，口縁部はゆるく屈出させており，燈芯受部を巡らしており，脂返し抉りがつけられている。

⑲　燈明台

備前焼で，脚部以上に欠損しており，底部の破片である。

⑳　墨壺

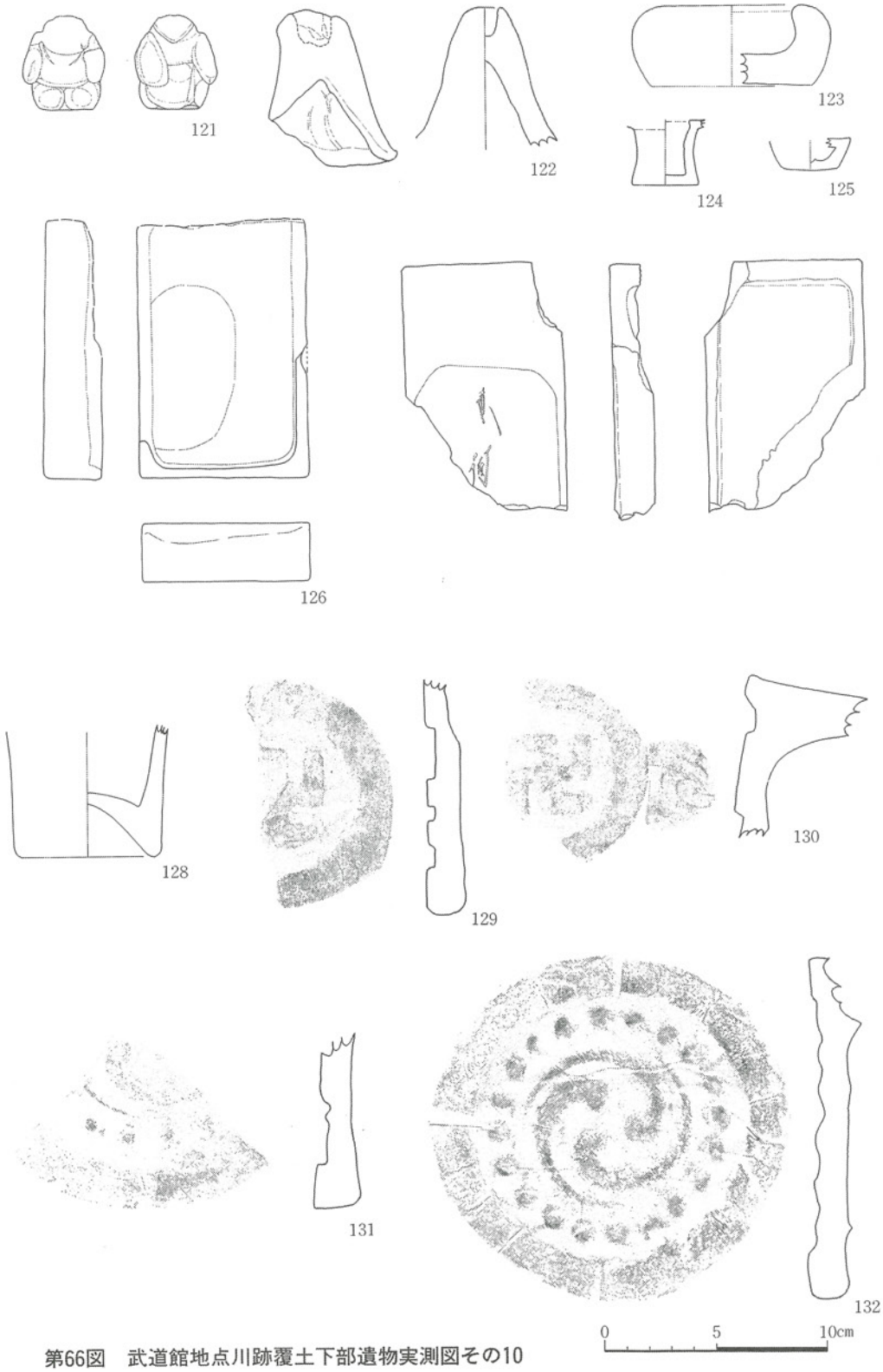
土師質で円形の鐙形を呈し，底面に袋部を重ね合せて形成している。底面は平坦で，壺の部分は大きく内湾して袋状になっており，内面に墨が付着しており，糸を受ける部分は破損。

㉑　土錘

土師質で樽形を呈し，棒状のものに粘土を巻きつけて成形。外面に指おさえとヘラ削りの跡がみられる。

㉒　土製品

121は大黒像で，土師質のもので底部中央に直径６㎜の穴がある。122は下に向かって「ハ」字形に開き，内部はしぼり目が明瞭に残っており，上部に直径1.5cm，深さ1.3cmの円形の孔がつけられている。123は球形の体部で，底部は平底，内外面ともナデが施されており焼塩壺と思われる。124は底部は平底で体部は内傾し口縁部で大きく屈曲して外反したミニチュア土器である。125は赤褐色を呈した陶質で鍋のミニチュアか。



第66図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その10

㉓　硯

いずれも材質不明であり，角を丸くおさめており，126は海の部分は欠損しており，陸部に使用痕がみられる。127は陸部の一部を欠損しており，海部は深さ1.1cmの凹みがつけられている。底部内面を削りこみ，字不明の針書があり，内外面とも墨が付着している。

㉔　ガラス瓶

黒褐色で，直径６cmの底部の破片であり，底部は大きく山形になった上げ底で片方に傾いている。

㉕　瓦類

129～138は軒丸瓦，139は榛木先瓦，140・141は桟瓦，142は軒平瓦である。129は「卍」文のヘラ切り成形。130は「卍」文の押型成形。131は「巴」文で尾がやや長く，珠文は直径0.8cmで18個。132は「巴」文で尾がやや長く，珠文は直径１cmで20個。133は「巴」文で尾はやや長く，珠文は直径0.8cmで数は不明。134は「巴」文で尾がやや長く，珠文は直径1.3cmで13個。135は「巴」文で尾はやや長く，珠文は直径0.6cmで32個。136は「巴」文は尾はやや短く，珠文は直径0.6cmで数不明。137は「巴」文で，尾は短く珠文をつけられていない。136・137は塀等の小建築物に使用されたものと考えられる。138は「巴」文で尾が非常に長く，珠文は直径0.8cmで15個。139は直径７cmで，21弁の菊文を描いている。140・141は押型成形の軒丸部分「卍」文，平部分唐草文であり，瓦当部分と平瓦部分は平行沈線のヘラ描きによって接合しやすくしている。142は押型成形の唐草文を描いており周縁は上が１cmで下が0.7cmで非常に堅牢な焼きである。

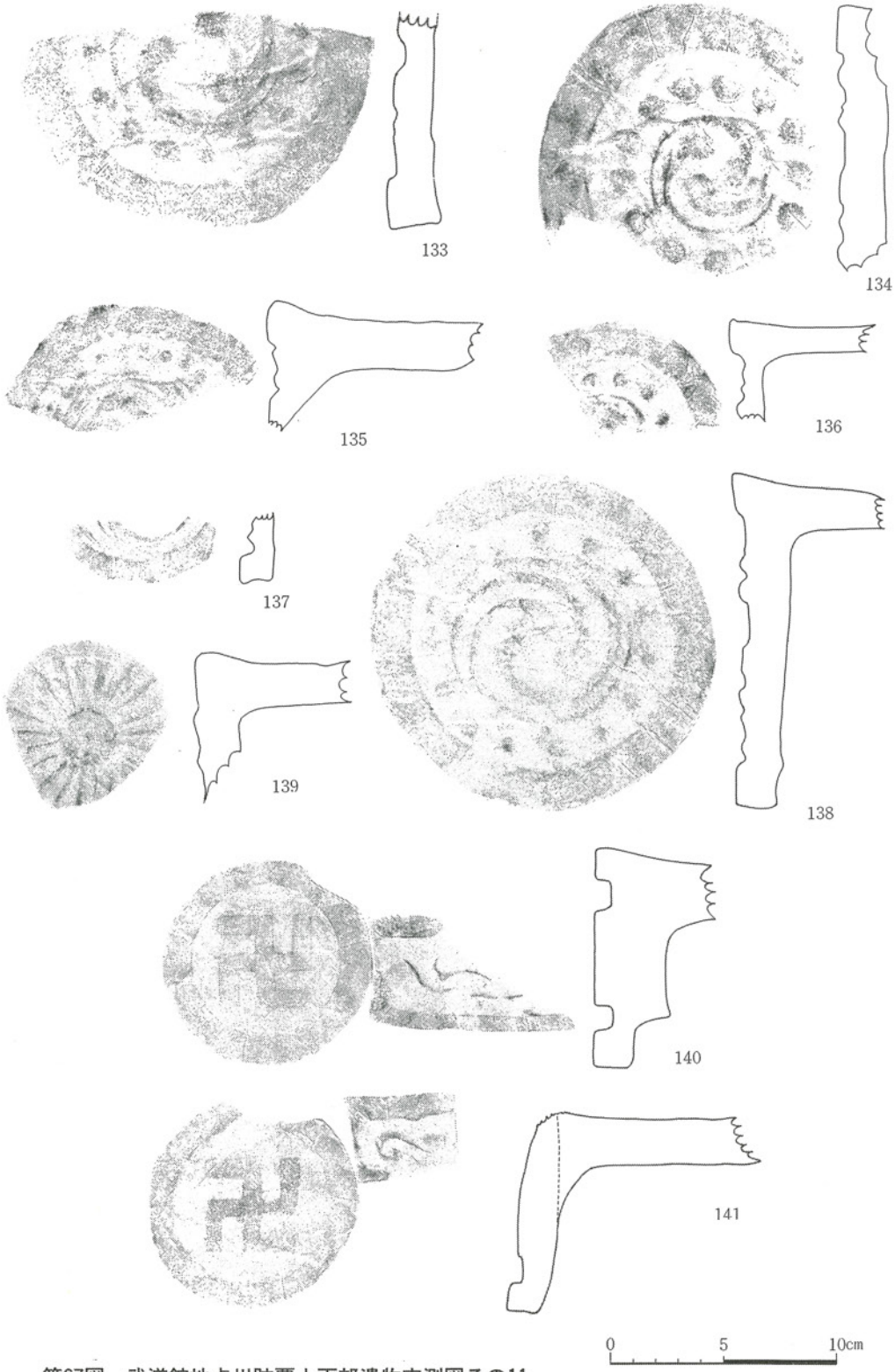
㉖　煙管

雁首で，火皿部分はやや大きく，脂返しが大きく，湾曲した「河骨形」で肩部に帯をつけている。羅宇近くの肩部に「本大仏」のタガネ切りがあり，脂返し部分に金箔が残っている。古泉編年Ⅱ期の17世紀前半。

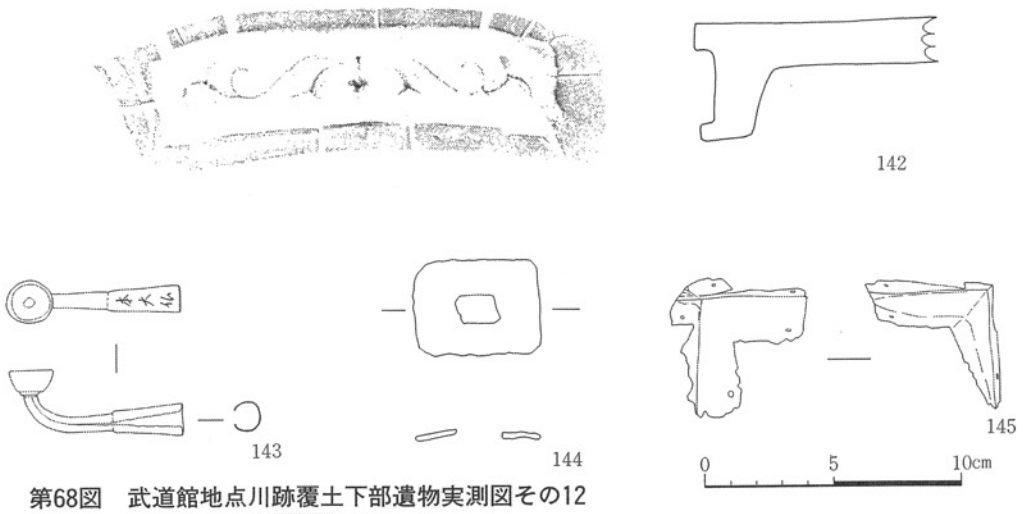
㉗　金具

144は鉄製で，板状のものの四隅を丸く端取りし，長方形の穴を穿孔させており建築部材の金具か。145は一枚の銅板を折り曲げたもので，隅を稜をもたせており，釘穴が２個ずつあり，建具等の隅金具と思われる。

以上145点について述べたが，18世紀末～19世紀初頭についてのものが比較的多いことから，船着き場廃棄跡に幾度となく川の浚渫を行って使用したことを物語っており，江戸末期



第67図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その11



第68図　武道館地点川跡覆土下部遺物実測図その12

まで使用されていたことを裏付けている。

(5)　川跡護岸板列（第69～73図）

灰色砂層，黄褐色粘質砂土層，褐色砂層で，徳島城域最終の拡張の際の段階で，築堤を守るための護岸を行っており，その護岸に伴う覆土及び護岸作成後に堆積した川の覆土から出土したものである。新しい方の階段状船着き場は遺物もこの中に含めた。

碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，猪口，瓶，擂鉢，火鉢，土鍋，焼塩壺，瓦，硯，髪抜，護岸材などが出土している。

①　碗

1～14は伊万里焼，15～18は唐津焼，19・20京焼風陶器，21は京焼，22は美濃・瀬戸系である。

1は薄手の白磁碗で，胎土・釉も白く焼きも堅牢である。高台はやや狭く内湾しており，「白磁の美」P118・NO.3に類似しており，17世紀後半の長吉谷窯のものか。2は器高と口径がほぼ同一の小碗で，やや濁った藍色で上下各3本の平行線を巡らし，その間に南無の字を描いており，17世紀後半か。3は端反り型のやや小ぶりの碗で，やや黒みがかった縦線で区画し文様を描いているが不明。17世紀後半と思われる。4は球形を呈し，明るい藍色で山水図を描き，底裏面に「太明年製」の銘を描いており，17世紀後半～18世紀前半。5～7・9・10はいずれもコンニャク判でもって文様を描いており，5は桐文で「肥前陶磁」P94・

NO.695山口県大内氏館後に類似，6は菊に唐草文，底裏面「太明年製」の銘を描いており，器種は異なるが「肥前陶磁」P106・NO.527滋賀県彦根城家老屋敷跡に類似，7は巴文と唐草文，9は菊花文で底裏面に「太明年製」の銘が描かれ，「肥前陶磁器」P102・NO.479奈良県奈良奉行所跡に類似。10は菊文に丸文，内面見込み五弁花が描かれ，「肥前陶磁」P77・NO.867佐賀県板橋遺跡に類似しており，いずれも17世紀後半～18世紀前半。8は非常に薄手の端反り型白磁碗で，胎土・釉とも精選され，焼成も堅牢であり，17世紀後半～18世紀初頭と思われる。11は球形を呈した緑がかった釉の青磁で，口縁内面四方襷文を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO.10の広瀬向窯10層と類似しており，18世紀中頃。12・13は陶胎染付碗で12はやや厚手で体部はやや直線的に外反した小碗であり，内外面とも白釉をかけ流した上に黒藍色で簡略化した唐草文を描き，13は体部がやや直立し，緑がかった藍色でやはり唐草文を描いており，「肥前陶磁」P94・NO.714福岡県砥石山遺跡に類似しており，18世紀代。14はいわゆる広東形碗で，あざやかな藍色で外面松葉文，内面見込みに鷺図を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P20・NO.22・25に類似しており，18世紀末～19世紀初頭。15～17はいずれも刷毛目碗で，15は褐釉の上に白釉の平行刷毛目，コバルトブルーによる木の葉，ススキ文が描かれており，17世紀後半～18世紀前半。16は褐釉の上に白釉の花弁もしくは火炎文様を内外面とも施しており，「肥前陶磁」P90・NO.825長崎県岩下遺跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。17は褐釉の上ににぶい黄橙色の平行刷毛目，1か所に指押えによる凹みがつけられており，17世紀後半～18世紀前半。19は口縁部を外反させ，底裏面に兜巾を残しており，黒褐色釉が内面及び体部上半まで施された天目風で，18世紀前半か。19・20はいずれも高台が低く，黄褐色釉を施し，細かい貫入がみられ，底裏面に19は直径0.8cmの円圏を巡らし「小松吉」の刻印，20は直径1cmの円圏を巡らし「柴」の刻印があり，いずれも鍋島藩窯のものと思われ，17世紀中頃～後半。21は球形を呈し，オリーブ黄灰色釉を高台畳付以外に施し，細かい貫入が見られ，胎土・釉調からみて京焼と思われる。22は高台が高く外反し，黄色釉が畳付以外施されており，貫入が見られ胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。

② 蓋

23はやや大きめの蓋で，体部は大きく外反し受部を内傾して作っており，乳頭のつまみをつけている。藍色で草花文を描き，伊万里焼で時期不明。24は受部が口縁部より下り，中央部につまみがつくものと思われ，焼き時期とも不明。25は落蓋で，外面ロクロヘラ削り，口縁端部に2段の稜線を巡らしており，京焼系かとも思われるが焼き時期とも不明。

第69図　武道館地点護岸板列遺物実測図その１

③　皿

26～33は伊万里焼，34は唐津焼，35は京焼，36～39は土師質土器である。

26は型打ち成形皿で，型押しは上下２段にわたって行っており，外面に藍色で丁寧な唐草文を描いており，17世紀中頃の長吉谷窯か。27は薄手で藍色の呉須で南画風山水図を丁寧に描いており，底裏面にハリ支えが１か所みられ，17世紀後半～18世紀前半。28は釉が緑がかった青磁皿で，内面見込み蛇の目釉ハギを行っており，17世紀後半～18世紀前半。29は口縁部の破片で，内面に青みがかった藍色で略した草花文を描いており，恐らく内面見込みは蛇の目釉ハギが行われているものと思われ，「肥前陶磁」P109・NO.61秋田県鵜沼城跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。30は口径21.4cmとやや大きく藍色で花唐草文，内面見込み五弁花，外面丁寧な唐草文を描いており，「肥前陶磁」P121・NO.217東京都旧芝離宮庭園跡に類似しており，18世紀初頭～18世紀前半。31はやや器高の高いもので，内面唐草花文，外面唐草文，底裏面渦福を描き，凹形高台で，18世紀後半。32は細かい輪花で，内面蔓唐草文，外面簡略化した唐草文を描き，二次焼成によって呉須に濁りがみられ，「肥前陶磁」P124・NO.107千葉県佐倉城跡に類似しており，18世紀後半。33は白磁の波型打ち皿で，非常に薄手で白色を呈し焼きのしまったものであり「白磁の美」P37・NO.99の１に類似しており，17世紀後半と思われる。34は，ぼてっとした感じの厚手で，高台は兜巾を残した削り出し高台で，灰褐色の釉を施し，17世紀初頭。35はやや薄手で，高台は削り出しでシャープに作られており，胎土からみて京焼と思われる。36～39はいわゆるかわらけとよばれるもので，36・37は体部外面をヘラ削り，38・39はナデによる成形を行っている。36・37は口縁部内外に煤が付着していることから灯明皿として使用。

④　壺

唐津焼の小さいもので，体部下半に最大径をもち球形を呈し，底部は平底であり，オリーブ茶褐色の釉を施している。18世紀代と思われる。

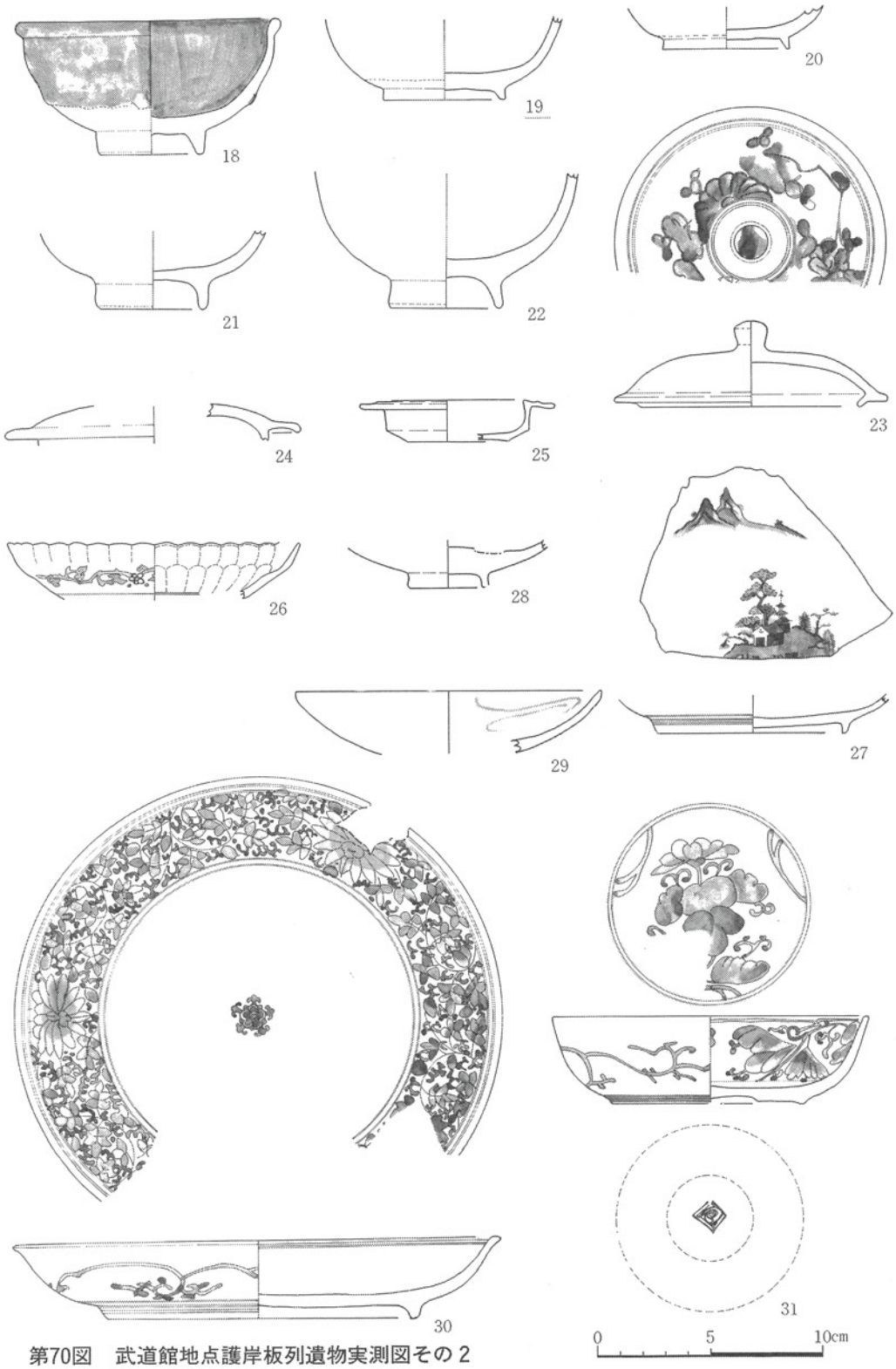
⑤　甕

いずれも備前焼の口縁破片で，41は口縁部を「く」字形に外反させ，内外に肥厚させて端面をつくり３条の凹線を巡らしており，外面にカキメの凹凸をつけている。42は頸部を直立させ口縁部を外側に肥厚させ平坦面を作っており体部外面にカキメの凹凸をつけている。

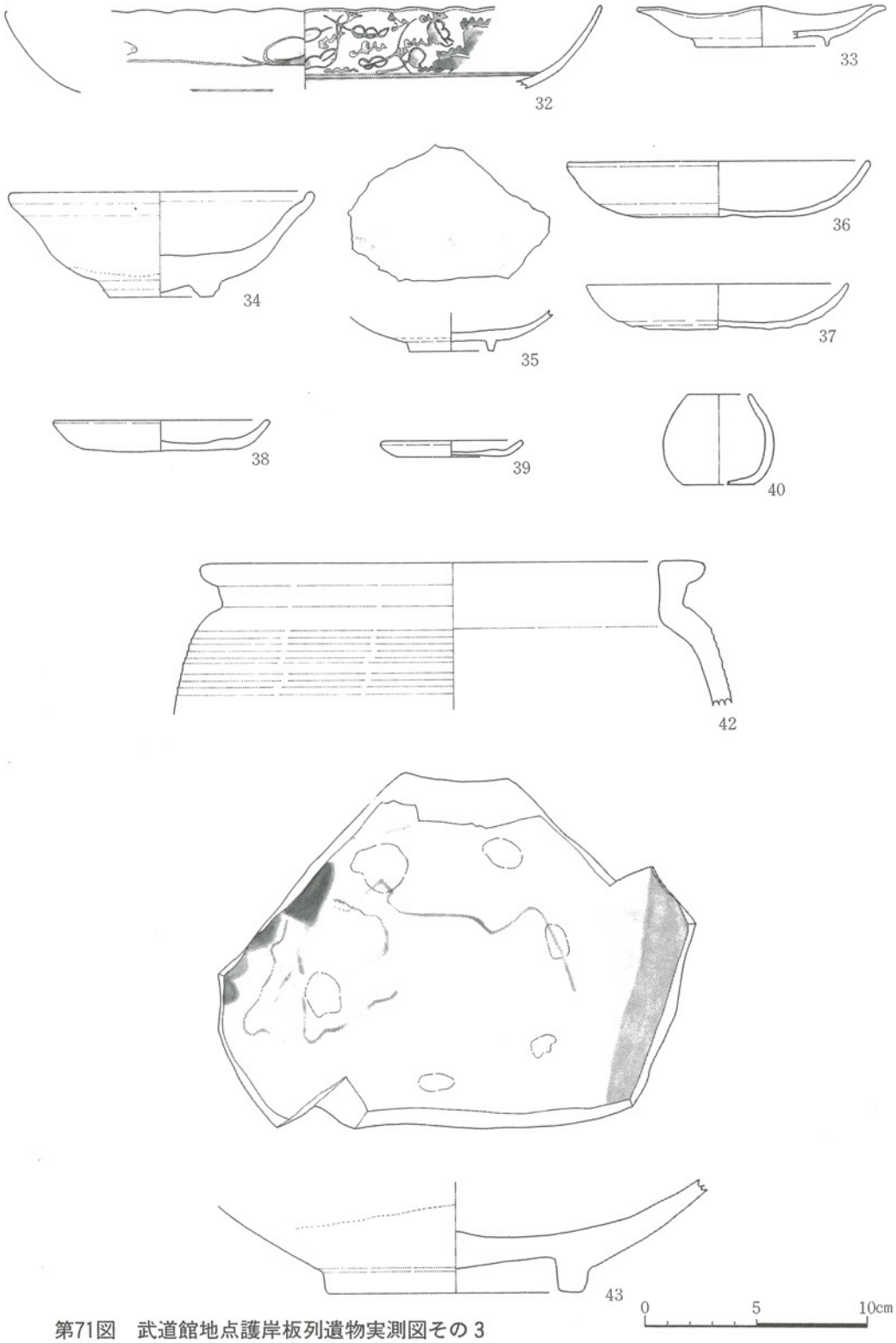
⑥　鉢

43～47は唐津焼，48は備前焼，49は美濃・瀬戸系，50は土師質土器である。

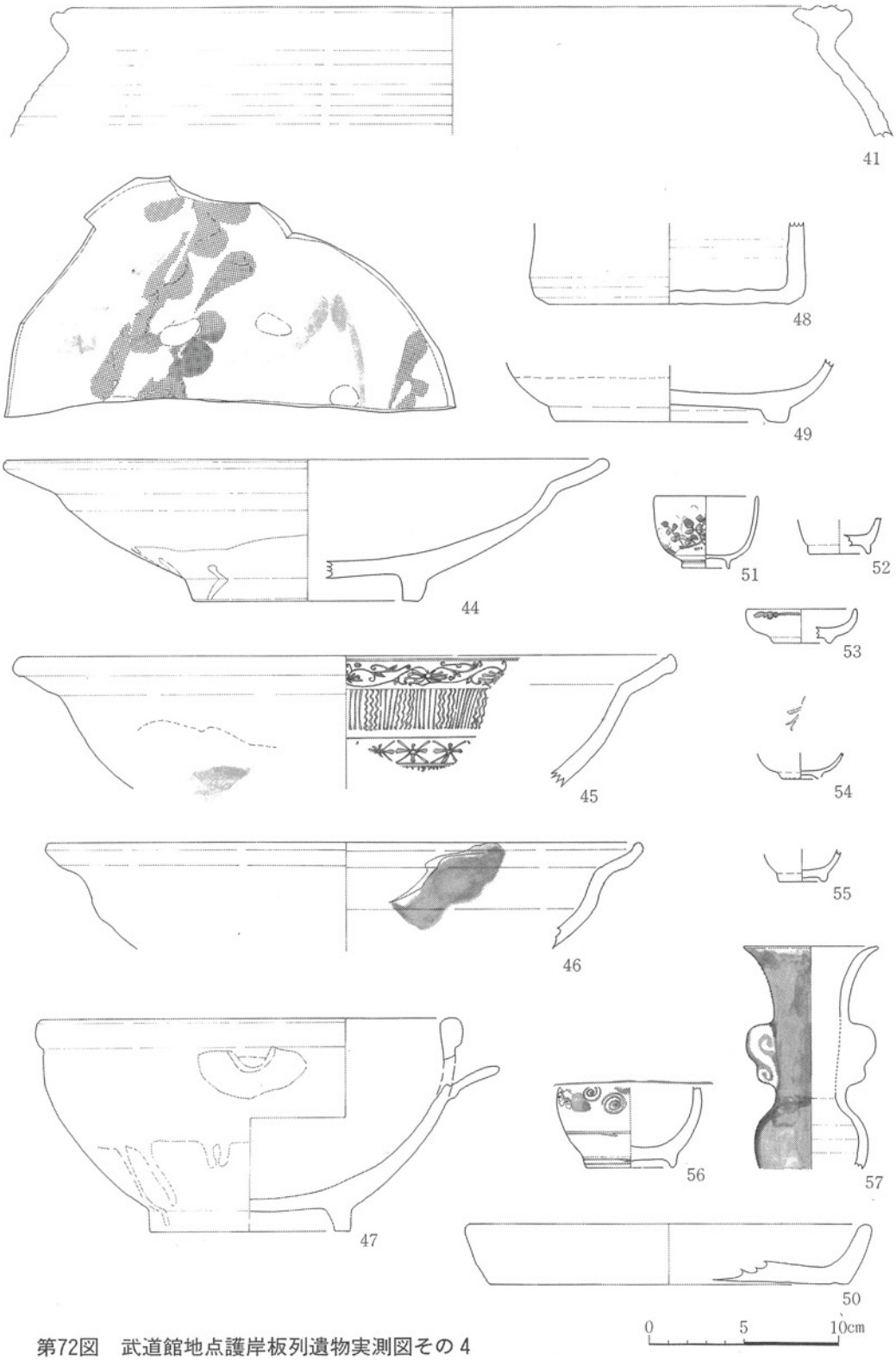
43は緑釉と黒釉による二彩唐津で高台は削り出しで台形を呈しており，17世紀後半。44は



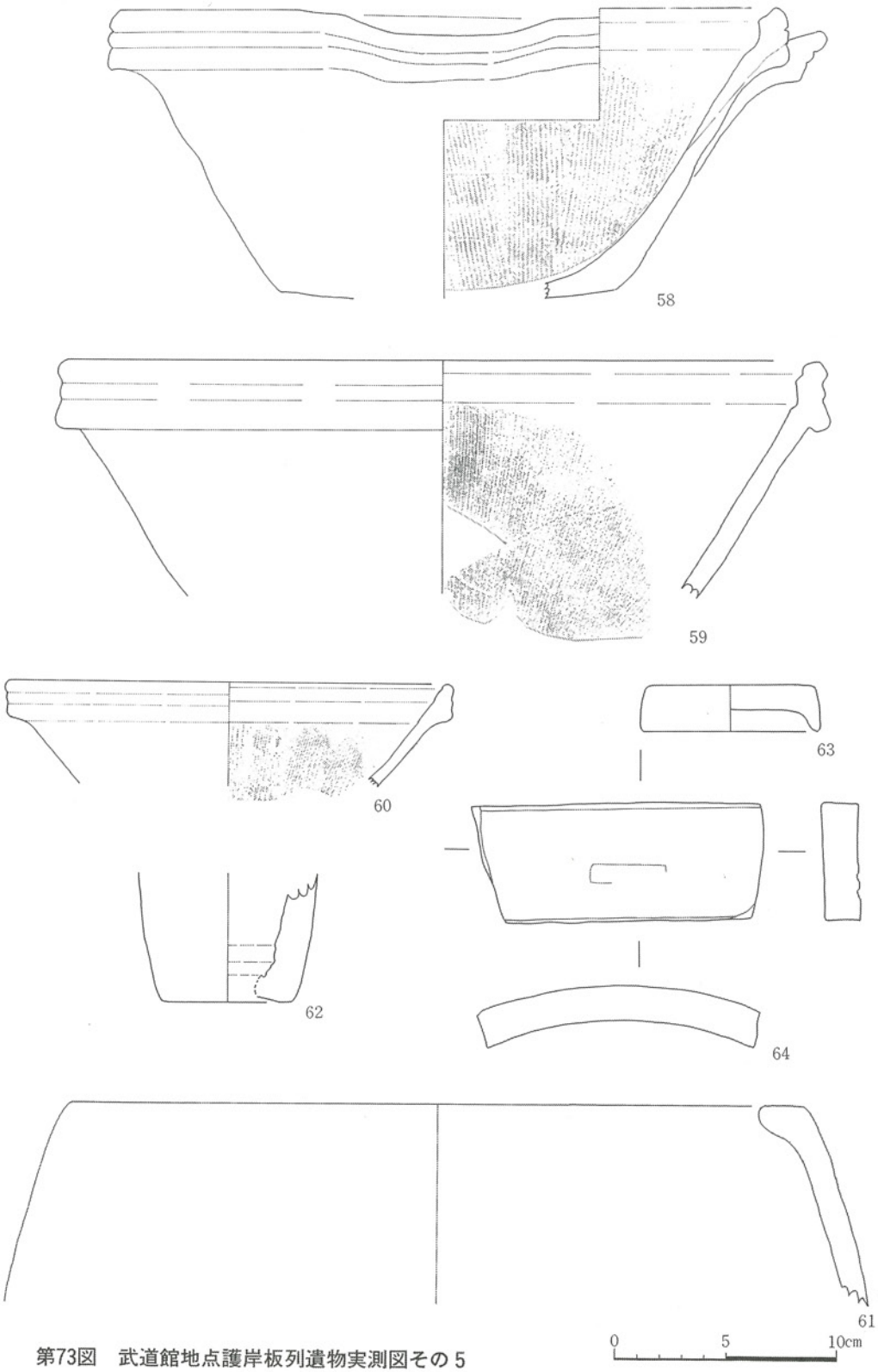
第70図　武道館地点護岸板列遺物実測図その２



第71図　武道館地点護岸板列遺物実測図その３



第72図　武道館地点護岸板列遺物実測図その４



第73図　武道館地点護岸板列遺物実測図その５

口縁部が体部から屈曲させて外反し，内面褐釉の地に白釉と緑釉による二彩唐津で「肥前陶磁」P71・NO.12北海道瀬田内チャシ跡に類似しており，17世紀～後半18世紀初頭。45は頸部で屈曲し外反した口縁で，内面に１条の凹線を巡らし，唐草・縦線・菊花の象嵌であり，17世紀後半～18世紀初頭。46は器形は44によく似ており，内面褐釉に緑釉の二彩で松と斜格子を描いており，17世紀後半～18世紀初頭。47は体部が球形を呈し，口縁は外側に折り返して肥厚させ，体部上半に注口部が１か所付けられた片口鉢で，褐釉の上に白釉の平行刷毛目を施しており，「肥前陶磁」P97・NO.656岡山県百間川当麻遺跡と類似しており17世紀後半～18世紀前半。48は底部が平底で体部が直立した筒形を呈しており，備前焼。49はオリーブ黄色釉を施し，内面に砂目痕があり，底部は低いもので，胎土・釉からみて，美濃・瀬戸系と思われる。50は土師質で底部外面に１条の凹線を巡らしている。

⑦　猪口

すべて伊万里焼で，51は碗形で薄手であり，すんだ藍色で草花文を描いており，17世紀末～18世紀前半と思われる。52は端反り桶形の底部で胎土・釉とも白く焼きがよいもので，18世紀代。53はくらわんか手の碗形でぼてっとした感じであり，外面にくずした草花か笹を描いており，18世紀末か。54は薄手の碗形で高台は低く三角形を呈しており，時期不明。55は白磁の端反り桶形の底と思われ，時期は不明。

⑧　瓶

いずれも伊万里焼で，56はやや厚手で球形を呈し，ややにごった藍色で渦巻と唐草を描いており，17世紀中頃。57はオリーブ緑色の青磁の頸部はやや太い筒形を呈し，両側に渦巻状の耳を取り付けてあり，18世紀代と思われる。

⑨　擂鉢

いずれも備前焼で，58は口縁を外側に開き上下に肥厚させて平坦面を形成し，２条の凹線を巡らしており，内面12条単位の櫛目描きで擂鉢をつくっている。59は口縁部を上下に肥厚させ２条の凹線を巡らしており，８～10条単位の櫛目描きで擂面をつくっている。60も口縁部を上下に肥厚させて２条の凹線を巡らしており６条単位の櫛目描きで擂面をつくっている。

⑩　火鉢

土師質で口径32.9cmと大きく端面が水平で，煤が付着しており，一応火鉢としたが，かまどの可能性もある。

⑪　焼塩壺

内面布目痕があり，丸棒成形で，体部中央が最大径の筒形で，底部円盤充塡部が欠損して

おり，渡辺編年18世紀中頃。

⑫　焼塩壺蓋

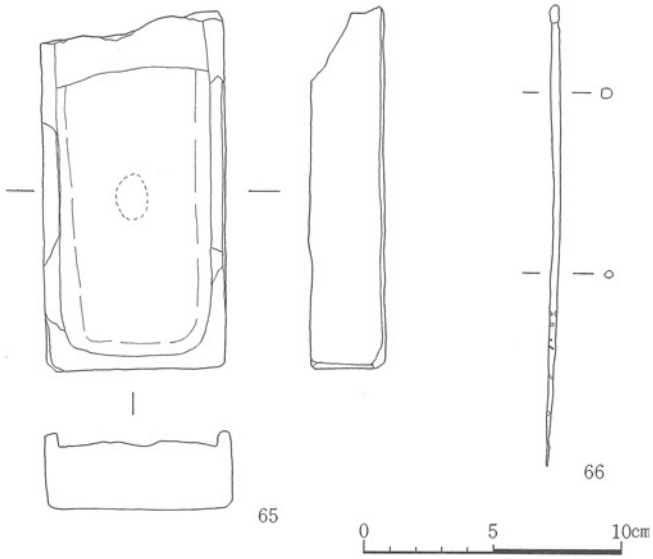
内面に布目痕があり，型押し成形で，頂部は平坦，渡辺編年18世紀中頃。

⑬　平瓦

ゆるく内湾した平瓦で，裏面にヘラによる刻みがあることから，他のものと接合を行っていたと思われ，外面に「直右衛門改」の銘がある。

⑭　硯

林質は不明であり，黄橙褐色を呈し，四隅を面取りした長方形で，陸部は約0.5cmの深さで削り込んであり，中央部に使用痕の凹みがあり，海部分は欠損している。



第74図　武道館地点護岸板列遺物実測図その６

⑮　髪抜

鉄製で断面角ばった円形を呈し，先端は鋭く尖らしており，基部は１つの稜をもち玉止めを作っている。一部に金箔がみられ，金箔を付けていたと思われる。

⑯　護岸材

一応サンプル的に杭を１本と板を１枚図化した。板はチョウナのあとが明瞭に残っており，杭は片方を尖らせており，途中に半円の切り込みがあることから，他の材からの転用と思われる。

以上68点について述べた。出土遺物の大半が17世紀後半～18世紀代にあてはまることから，護岸作成の際に古いころの川の埋土を切り込んで使ったことを物語っており14の広東形碗の19世紀初頭がみられることからこの時期に埋没したものと思われる。

(6)　築堤新段階・船着き場（第75～82図）

調査で確認できた一番前に張り出した築堤と石垣の船着き場に伴うものである。一部築堤中段階の遺物も流れの凹凸によって含まれているが，一応このなかに入れた。

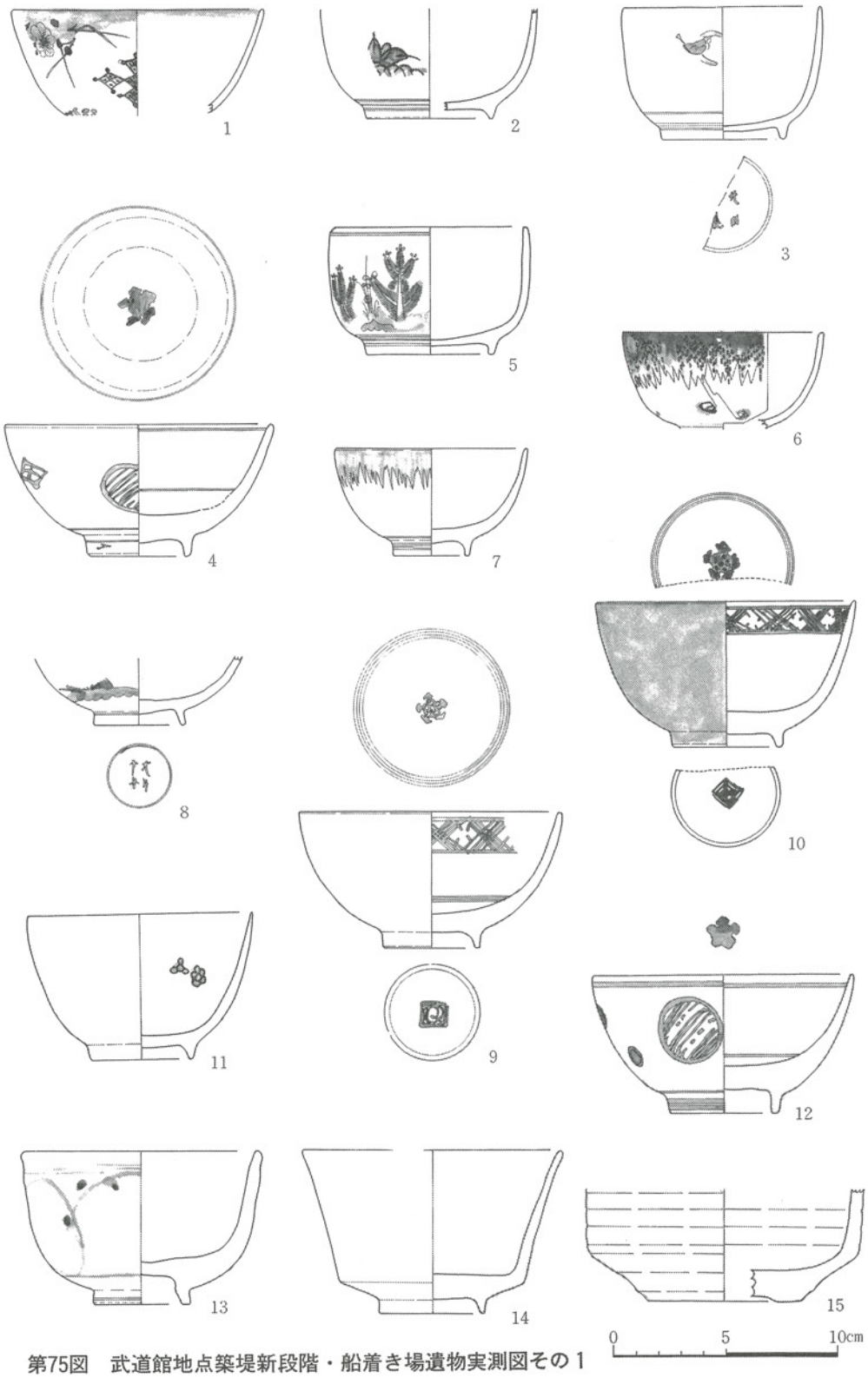
碗，蓋，皿，甕，鉢，猪口，瓶，擂鉢，徳利，火鉢，土鍋，灯明台，焼塩壺，焼塩壺蓋，

玩具，瓦，煙管が出土した。

① 碗

1～25は伊万里焼，26～29は唐津焼，30は京焼，31は美濃・瀬戸系，32は土師質，33は不明である。

1は薄手のもので藍色で，内外面とも体部上半を釉がけしており，外面松，格子文を描いており，17世紀後半と思われる。2は体部がやや直線に上がり，高台が低く三角形を呈し，藍色で草花文を描いており，17世紀後半。3も体部がやや直線的に立ち上がり薄手で，鮮やかな藍色で鳥を描き，底裏面「太明年製」の銘を描いており，17世紀後半～18世紀初頭。4は厚手のくらわんか手で，濁った藍色で外面丸文と菱形を描き，内面見込み五弁花のコンニャク判，内面見込み蛇ノ目釉ハギを施しており，「肥前陶磁」P97・NO.619鳥取県陰田遺跡と類似しており，18世紀後半。5は体部がやや直線的に立ち上がっており，淡い藍色で若松と草文を描き，底裏面に呉須で一条の円を巡らしており，「肥前陶磁」P108・NO.44富山県正印所遺跡と類似しており，17世紀末～18世紀中頃。6・7は薄手で球形を呈し，6は藍色で雨降り柳と雷，7は雨降り柳の型紙摺りを行っており，「肥前陶磁」P81・NO.920佐賀県長倉遺跡・P105・NO.529滋賀県彦根家老屋敷跡と類似しており，18世紀前半。8は体部が球形を呈し，高台は幅が狭く，藍色で源氏車文，底裏面「太明年製」のくずし銘を描いており，18世紀前半。9・10は外面淡緑色の青磁で，藍色で口縁内面四方襷文，内面見込み五弁花，底裏面渦福を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO.8と同じであり，18世紀中頃。11は口径の割に器高が高く，外面淡青緑色の青磁で，内面藍色で梅花文を丁寧に描いており，18世紀中頃。12はくらわんか手で，体部は球形を呈し厚手で，緑灰色の丸文，内面見込み五弁花文のコンニャク判を施しており，「肥前陶磁」P97・NO.619鳥取県陰田遺跡と類似しており，18世紀後半。13は陶胎染付の厚手で，体部は直線状に上り，口縁部付近で1つのゆるやかなくぼみをもっており，淡い藍色で簡略化した唐草文を描いており，「肥前陶磁」P94・NO.714福岡県砥石山遺跡と類似しており，18世紀代。14は白磁で，体部が屈曲して直線的に立ち上がり，口縁部をわずかに外反させており18世紀代。15は淡緑色の青磁で，体部にロクロメの凹凸を残しており，高台は幅広く低い蛇ノ目凹形高台で，内面に針支えがあり，18世紀代。16は色絵で，藍色，赤褐色，黄橙色，淡黄緑色で彩色しているが文様は欠損の為不明，内面見込み藍色でシダを描いており，18世紀代。17はやや薄手で体部上半は直線状を呈し，黒っぽい藍色で外面蓮弁文に窓絵の龍文を描き，内面見込み松竹梅，口縁内面四方襷文を描いており，18世紀代。18はくらわんか手で，口径に比べて器高が低く，やや黒ず

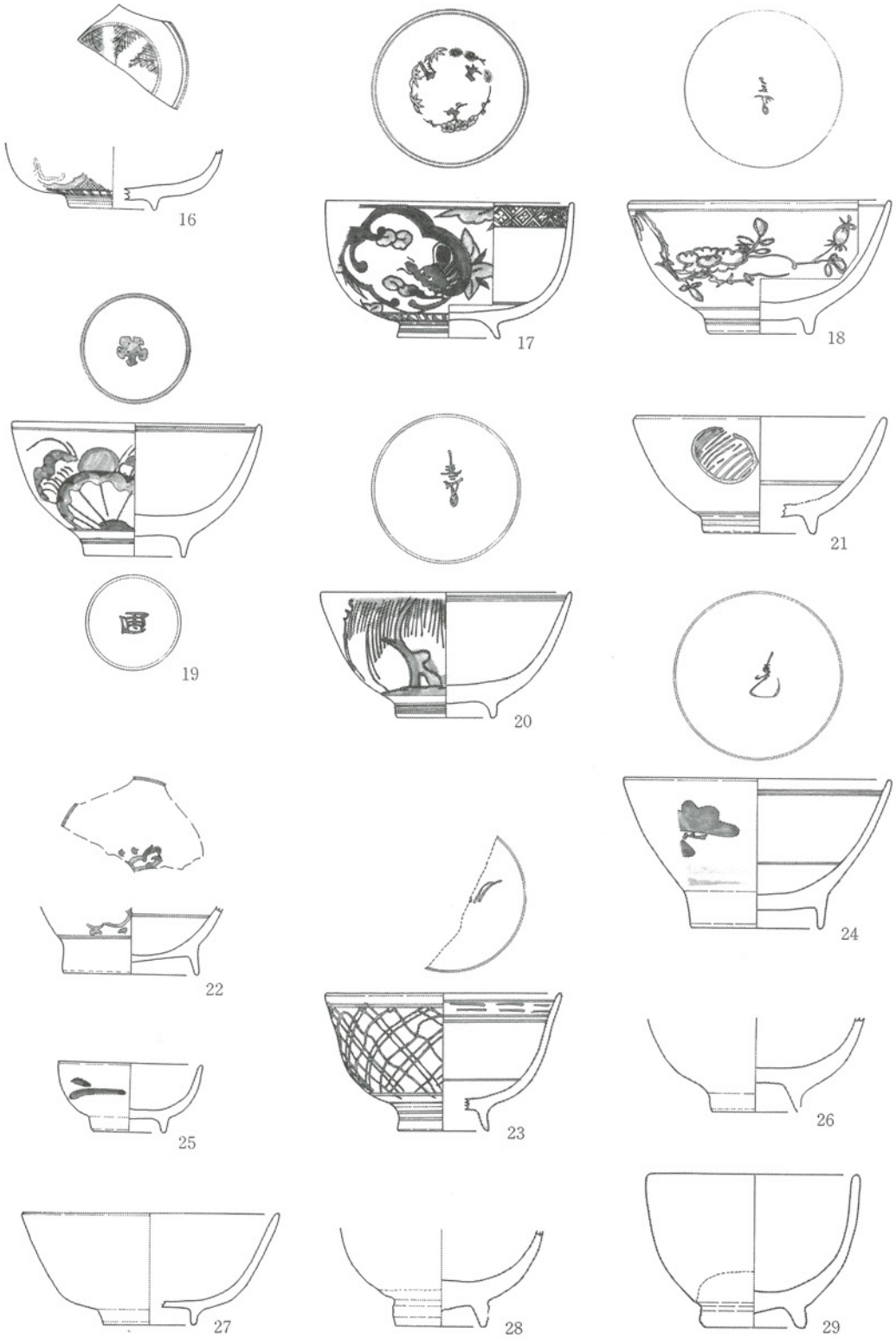


第75図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その１

んだ藍色でバラかくちなしと思われる絵を描き，内面見込み五弁花のコンニャク判，底裏面に福らしき字のくずし文字を描いており，18世紀前半か。20は体部が球形を呈し，濁った藍色で柳を描き，内面見込み「寿」のくずし文字を描いており，18世紀後半。21は12と同様で18世紀後半。22は広東形碗で，やや黒ずんだ黒藍色を呈し文様は欠損のため不明，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P20・NO.26広瀬向2号窯第4層出土のものと類似しており，19世紀初頭。23は口縁がやや外反した端反りで，高台はやや高く，濁った藍色でよろけ斜め格子文，内面見込み草文を描いており，器形的に「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P23・NO.12と類似しており19世紀前半。24は22と同じく広東形碗であり，藍色で山水図，内面見込み「寿」のくずし文字を描いており，19世紀初頭。25は猪口に入れてもよいほどの小碗で，黒ずんだ藍色で草花文を描き，「肥前陶磁」P115・NO.142神奈川県報国寺遺跡に類似しており，18世紀代。26，27は刷毛目碗で，26は外面平行，内面渦巻状平行，27は火炎か木の葉状の刷毛目を施しており，26は「肥前陶磁」P106・NO.524滋賀県彦根城家老屋敷跡，27は同書P89・NO.824長崎県岩下遺跡と同じであり，17世紀後半～18世紀前半。28，29は天目風で，やや細長い体部であり，底裏面兜巾を残したものであり，17世紀後半～18世紀前半。30は体部が球形を呈し，ややにごった緑色の釉を施し，底裏面に「朝日」の定印があることから京焼系の朝日焼(註24)であり，18世紀代。31はやや器高，高台の高いもので，オリーブ黄色の釉が畳付以外に施しており，美濃・瀬戸系と思われる。32は浅鉢形の土師質で，内外面ともミズビキナデを行っている。33は体部が直立したもので，内面淡緑色，外面淡褐色釉を施し，外面にヘラか櫛により刺突した縄目状文様を描いており，京焼系とも思われるが，焼き，時期とも不明。

② 蓋

34～39は伊万里焼，40は備前焼，41は瓦質である。34は淡藍色で外面唐草文と蓮弁文，つまみ内面「太明年製」の銘，内面見込み松竹梅文が描かれており，器形は異なるが「肥前陶磁」P90・NO.706福岡県西屋敷遺跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。35・36・37は外面淡緑色の青磁で，35は内面見込み唐花文・つまみ内面渦福，36は内面見込み五弁花・つまみ内面渦福，37は内面見込み唐花文，つまみ内面渦福を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO.19と類似しており18世紀中頃～後半。38はつまみがやや高く，藍色で鷺と沼・葦文を描いており，19世紀初頭。39は受部をもち，つまみがつけられたものと思われ，にぶい藍色で，扇と花文を描いており時期不明。40は体部が円形を呈し，頂部がへこんだつまみをつけ，受部がやや高く，時期不明。41は瓦質の落蓋で内面に凝宝子状のつまみがつけられ外底面に「へ」か「L」の押し型をつけている。



第76図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その２

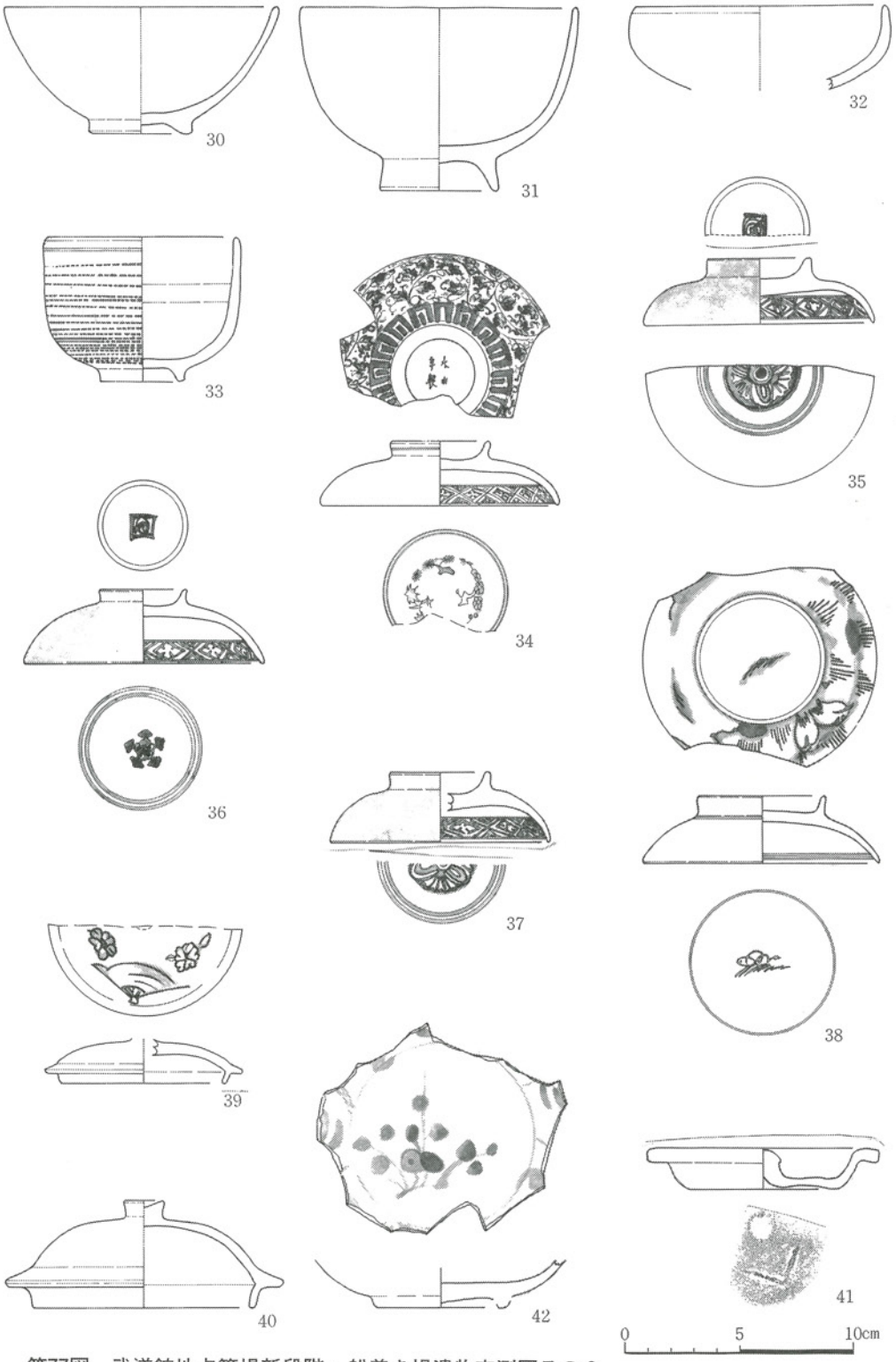
③　皿

42～46は伊万里焼，47は京焼風陶器，48～50は唐津焼，51・52は美濃・瀬戸系。53は京焼系，54は不明，55～58は土師質である。42はぼてっとした感じであり，高台は幅広く低い削り出し高台で，やや黒ずんだ藍色で，梅技折文を描いており，「肥前陶磁」P47・NO.741福岡県冷泉遺跡，P56・NO.359大阪府堺環濠都市遺跡と類似しており，17世紀前半。43は変形型打ち皿で内面を２つに分け，呉須による濃みの斜格子文と陽刻の唐草文を描き，底裏面「太明」の銘があり，中国祥端の影響をもった長吉谷窯産で17世紀中頃。44は高台径が広く，断面三角形で明緑灰色でひょうたんを描き，底部にハリ支えがみられ18世紀代。45・46は内面見込み蛇の目釉ハギの皿で，45はにごった藍色で簡略化した草花文を描き「肥前陶磁」P109・NO.61秋田県鵜沼城跡に類似し，46は明青灰色で簡略化した唐草文を描き「肥前陶磁」P109・NO.24北海道上ノ国漁港跡，P114・NO.156神奈川県雪ノ下大蔵南御門遺跡と類似していることから，17世紀後半～18世紀前半。47は黄灰色の釉で貫入がみられ，底裏面に直径１cmの円圏を巡らし「木下弥」の刻印があり，17世紀後半。48・49は銅緑釉皿で，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，削り出しの兜巾高台で，「肥前陶磁」P114・NO.157神奈川県雪ノ下大蔵南御門遺跡などと類似しており，17世紀後半～18世紀前半。50は黒褐色と褐色釉の刷毛目を施し，底部外面ロクロ糸切り離しを行っており，口縁部に煤が付着していることから灯明皿。51は内面及び外面口縁部は黄白色釉を施しており，内面に燈芯受の３条の櫛目と陽刻の菊文があり，口縁部に煤が付着していることから灯明皿。52は緑がかった灰白色釉を施しており，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っている。53はオリーブ黄色釉を施しており，内面見込みに３か所，高台畳付け４か所の砂目痕がみられ京焼系。54はオリーブ褐色の釉で貫入があり，内外面とも重ね積み跡がみられ，焼き・時間とも不明。55～58はいわゆるかわらけで，55～57はロクロナデ，58は体部外面ヘラ削りを行っており，57・58は口縁部に煤が付着していることから灯明皿である。

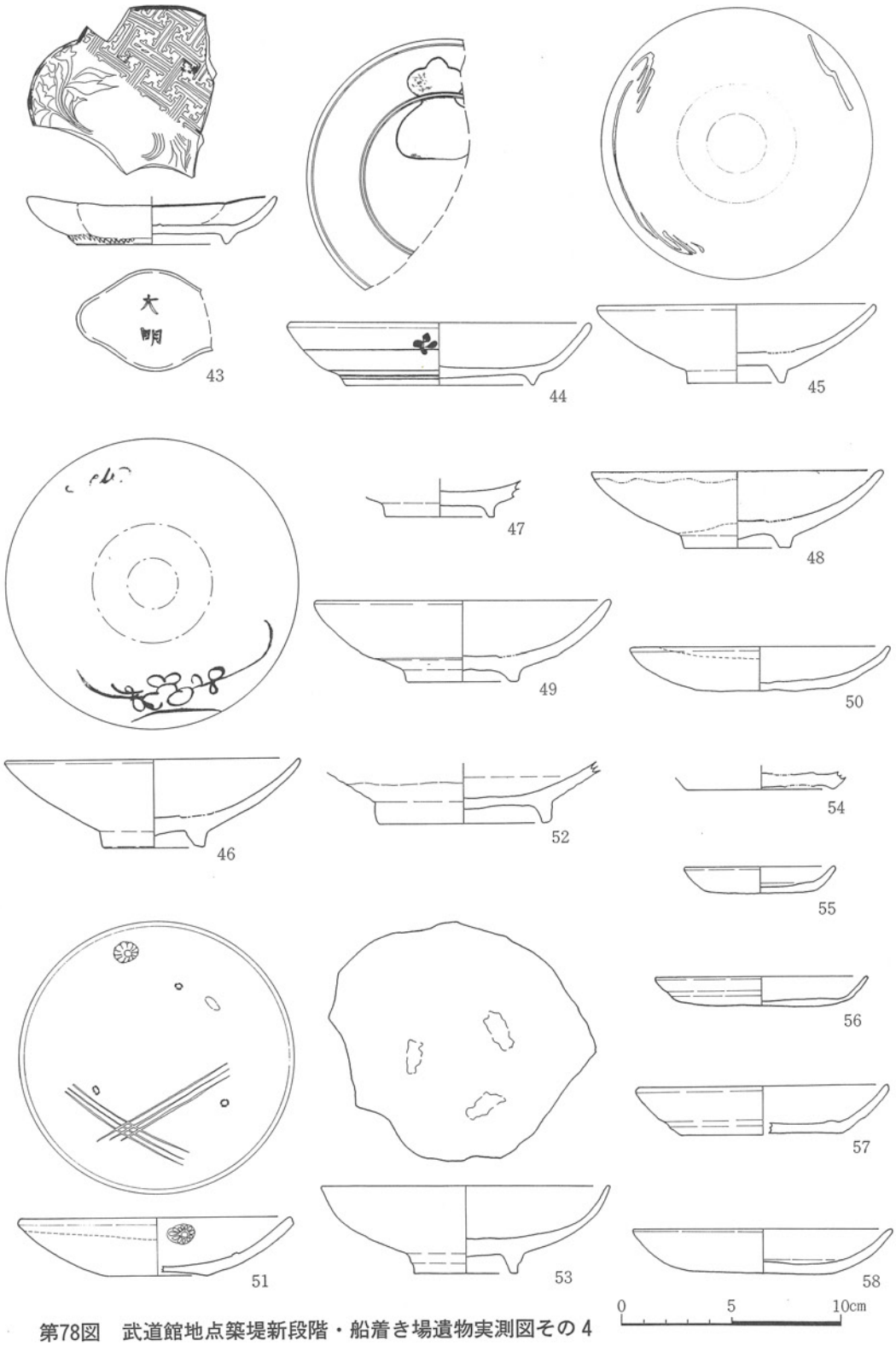
④　甕

59は備前焼，60・61は美濃・瀬戸系である。

59は底部の破片で，内外面とも褐釉を施しており，高台と体部境に１条の凹線を巡らしており，高台は削り出しで２段に面取りを行っている。60はロクロ痕が明瞭に残り，内外面とも黒褐色釉を施している。61は，口縁部を外側に肥厚させ，体部は直線的に下がり，外面にハケもしくは櫛目によるロクロナデ痕の凹凸を残しており，いずれも美濃・瀬戸系と思われる。



第77図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その３



第78図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その４

⑤　鉢

62～64は唐津焼，65～69は備前焼，70～73は美濃・瀬戸系，74は不明である。

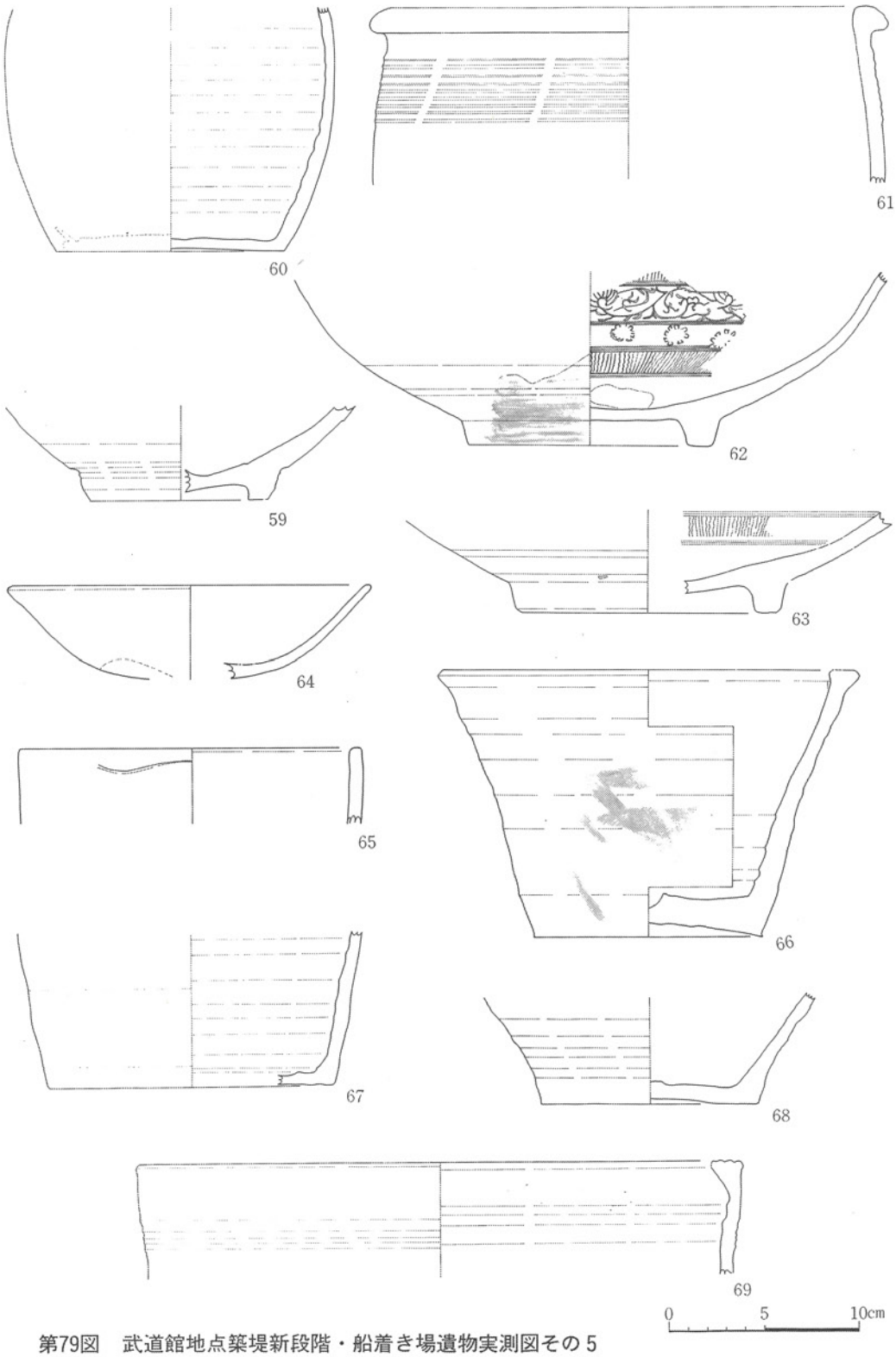
62・63は象嵌鉢の底部で，62は縦線，菊，唐草文を描いており，「肥前陶磁」P74・NO.260東京都旧芝離宮庭園遺跡に類似し，63は彫りの浅い縦線文を描いており17世紀前半～後半。64はやや薄手で，外面褐釉・内面褐釉の上に白釉の波状刷毛目を施しており，17世紀後半～18世紀前半。65は口縁部に平坦面をもち体部がまっすぐの筒型を呈し，外面の波状のヘラ彫りがみられる。66は底部がやや上げ底の桶型で，口縁部を内外に肥厚させ端部に平坦面をもたせ，体部中央に「芝」の横書きの墨書がみられる。67・68はいずれも薄手で，内外面ともロクロナデ痕が明瞭にみられ，67は体部が直線的，68は外反している。69は口径31.6cmと大きく薄手で，口縁部を内側に肥厚させ，口唇部に２条の凹線が巡らされ，体部外面にハケもしくは櫛によるロクロナデによる凹凸がみられる。70は体部がやや内湾し口縁部が「L」字形に外反しており，底部に直径1.8cmの円孔がみられ高台に３か所の半円形の彫りがみられることから植木鉢である。71は口縁部を外側に折り曲げたもので，オリーブ黄灰白釉を施している。72はやや薄手で体部が緩やかに内湾して立ち上がり口縁部は大きく外反させた浅鉢である。73は口径35.6cmと大きく，こげ茶色の釉を施し，口縁部は内外に大きく肥厚させ，外面に１条の凹線をめぐらしている。74は体部が斜上方に直線的に立ち上がり，内面見込みにオリーブ緑色で山水一屋図を描いており，美濃・瀬戸系とも思われる。

⑥　猪口

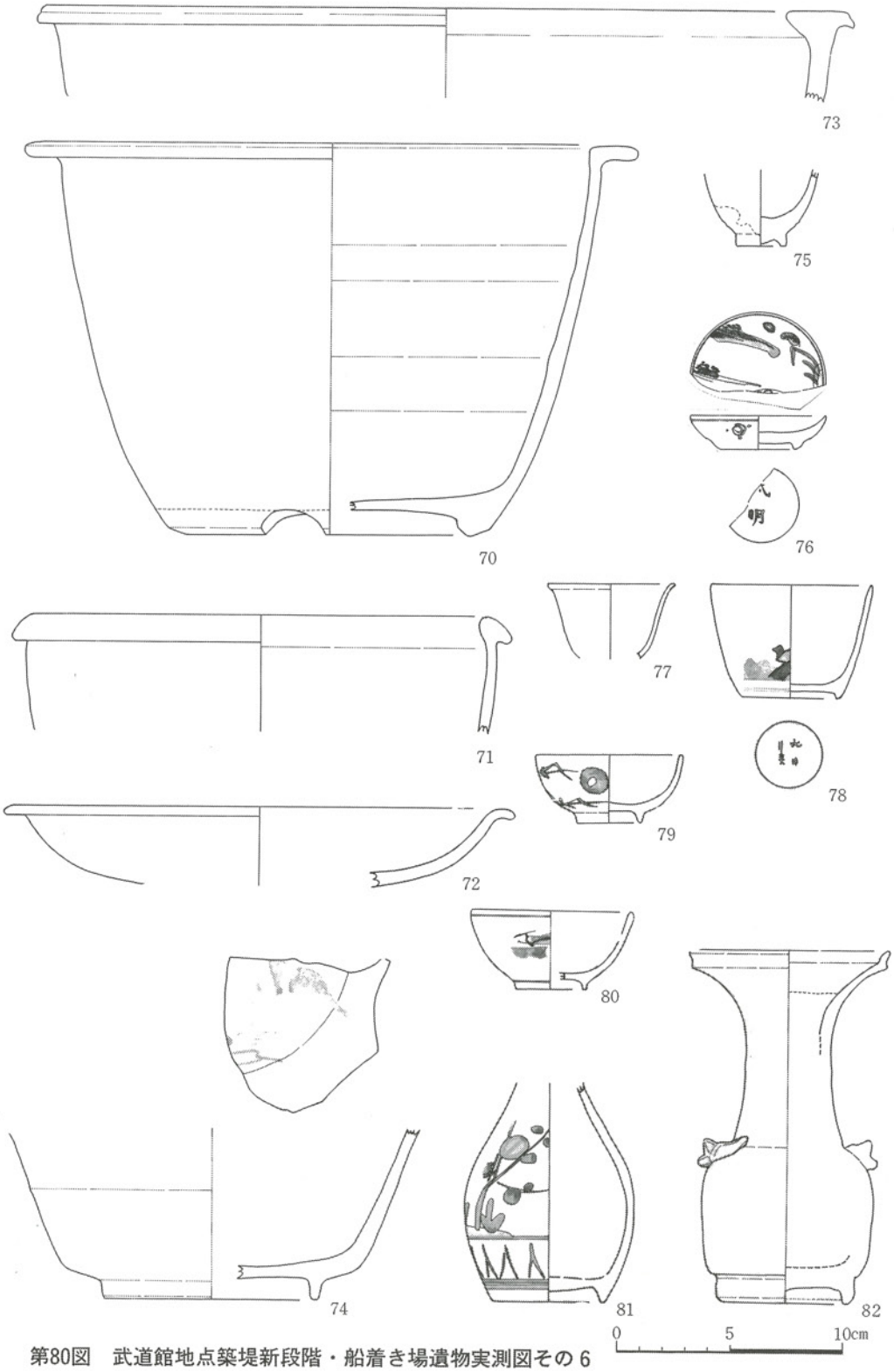
いずれも伊万里焼で，75は体部が卵形を呈し，兜巾高台で，やや緑色をおびた灰白色釉を施しており，17世紀前半。76は厚手の器高の低い碗型で，淡い藍色で荒磯・秋草・月・外面こうもり，底裏面「太明」の銘があり，器形は異なるが表現方法が「肥前陶磁」P61・NO.452奈良県奈良奉行所跡に類似しており17世紀中頃。77は端反り型で灰色がかった灰白色釉で，17世紀後半か。78は薄手で，体部がやや内湾した筒形で，明るい藍色で鳥，底裏面「太明年製」の銘を描いており，17世紀後半～18世紀前半。79は碗形で，藍色で菊のコンニャク判，手書きの松葉文を描いており，施文方法から18世紀代。80はやや器高の高い碗形で，濁った藍色で山水文を描いており18世紀代。

⑦　瓶

81～85は伊万里焼，86は備前焼である。81は最大径が胴部上半にあり，濁った藍色で松葉くずしに松竹梅文を描いており，17世紀末で徳利とも考えられる。82は淡緑色の青磁で口縁部が朝顔形を呈し，体部と頸部境に退化した耳がつけられており，18世紀代。83は体部が球



第79図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その５



第80図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その６

形を呈した小形で，やや灰色がかった灰白色釉で18世紀代。84は器形的には82とよく似ており，最大径が口縁部にある。灰緑色で葦を描いており，体部と頸部境に退化した耳がつけられており，「肥前陶磁」P93・NO.728福岡県大博通り遺跡と類似しており，18世紀末～19世紀初頭。85は球形を呈したやや大きめのもので，藍色で草花文を描いており，花瓶と思われ，時期は不明。86は底部が平底で，最大径が体部下半にあり，頸部に双耳がつけられており，内面の粘土が取り除けない為，厚さは不明。

⑧　擂鉢

いずれも伊万里焼で，87は体部がやや内湾したやや上げ底気味の平底で，口縁部を外側に肥厚させ，外面に２条の凹線を巡らしており，擂面は幅3.8cm内に11条単位の櫛目描きであり，外面底部付近に「久喜」の刻印が施されている。88はやや薄手の口縁部の破片で，口縁部を斜上方を肥厚させ，口縁部に２条の凹線を巡らしており，擂面は10～11条単位の櫛目描きを施している。89は口縁外面を肥厚させており，外面に２条の凹線を巡らしており，擂面は５条単位の櫛目描きである。

⑨　徳利

伊万里焼で瓶とも考えられるもので，体部は緩やかな球形を呈し，藍色で縞蓮弁文を描いており18世紀中頃～後半。

⑩　火鉢

土師質で体部は内湾しながら立ち上がり，高台はやや高く外反しており，下半に１条の凹線を巡らしている。

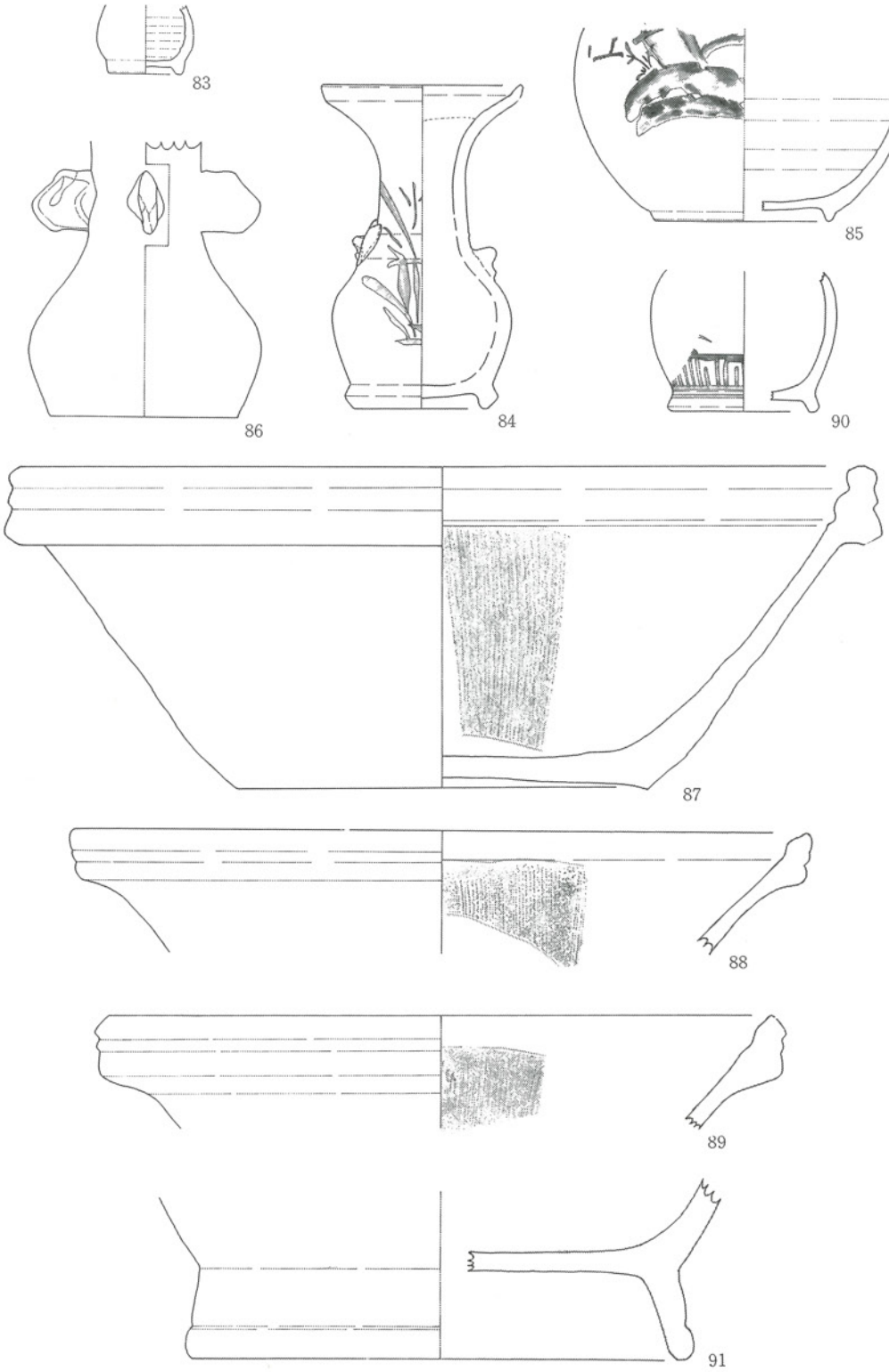
⑪　土鍋

92・93は瓦質で94は土師質である。

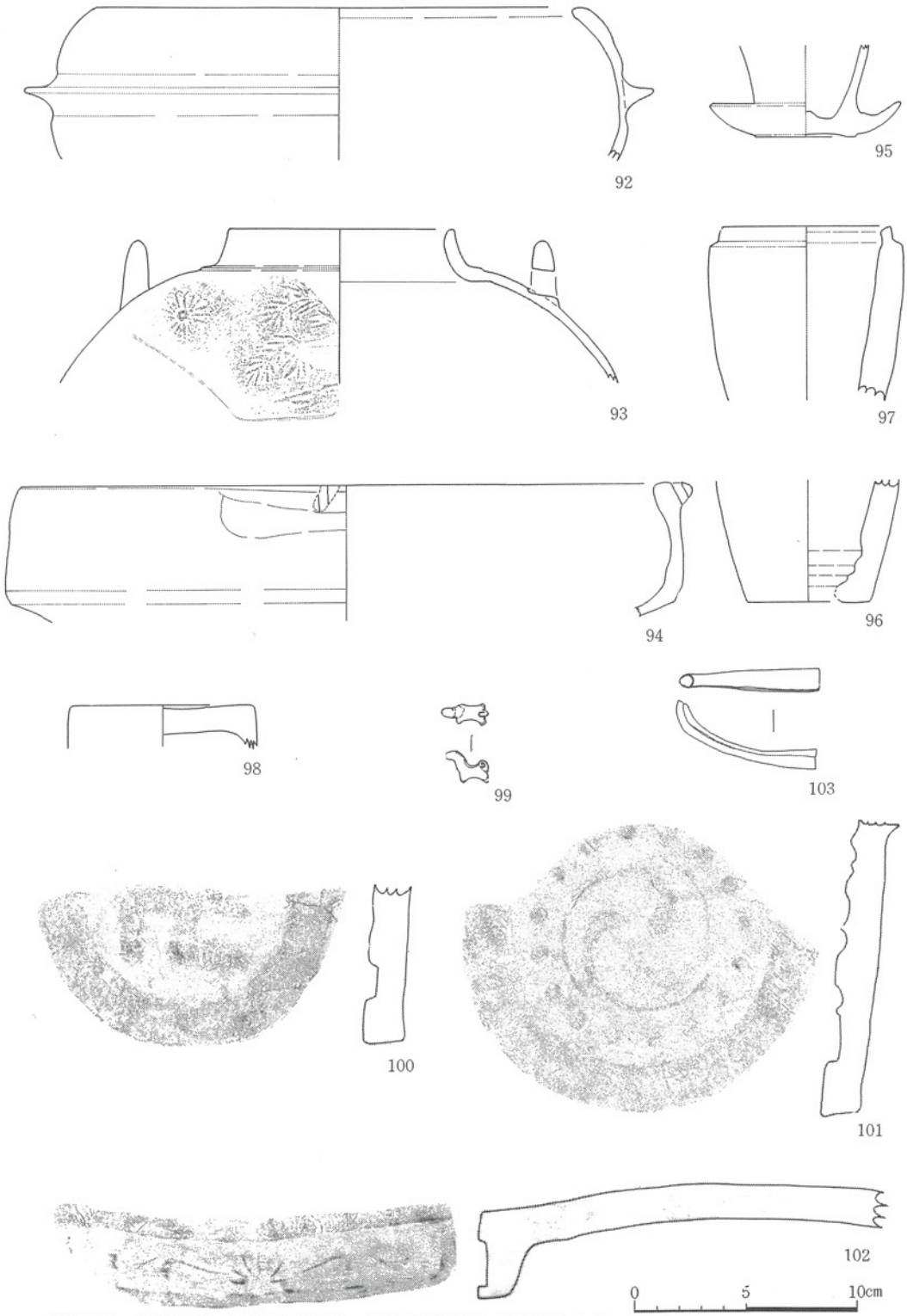
92は口縁部から体部に向って球形を呈し，最大径の所に長さ1.2cm，厚さ0.3cmの鍔を取り付けている。93は口縁部が斜上方に内傾し，体部は屈曲させ球形を呈しており，肩部に把手が取り付けられており，肩部に菊と竹文を型押ししており，茶釜の可能性もある。94は口縁部を外側に肥厚させ，１か所に直径４mmの穿孔がみられ，体部はやや内湾してまっすぐに立ち上がっている。内面に煤が付着しており焙烙の可能性が強い。

⑫　灯明台

唐津焼で，体部はやや薄く直線状を呈しており脚部下端を外反させて脂受部をつくっており，底部外面ロクロ糸切り離し痕がみられる。



第81図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その７



第82図　武道館地点築堤新段階・船着き場遺物実測図その８

⑬　焼塩壺

96は体部下半，97は体部より上半部の破片で，内面布目痕があり丸棒成形で，渡辺編年18世紀中頃。

⑭　焼塩壺蓋

頂部はやや中央部が凹んでおり，内面布目痕があり，型押し成形で渡辺編年18世紀末～19世紀初頭。

⑮　玩具

ミニチュアの犬で，伊万里焼と思われ手びねりで作っており，非常に丁寧なつくりである。

⑯　瓦類

100は「卍」文の軒丸瓦で型押し成形を行っており，101はやや尾の長い「巴」文軒丸瓦で，珠文は16個で型押し成形。102は唐草文軒平瓦で，唐草は簡略化しており，瓦当部両側面ヘラ切りの後ナデを行っている。

⑰　煙管

雁首で，火皿部分は欠損し，脂返しの部分の湾曲がやや小さい「河骨形」で，１枚の銅板を巻いて作成しており，古泉編年Ⅳ期で18世紀前半。

以上103点について述べたが，大半のものが17世紀後半～18世紀代のものが殆どであるが，碗の中に19世紀初頭のものがみられ，この時期に船着き場は埋没したものと思われ，その後は護岸板列近くの三段の階段状になった船着き場を使用したものと思われる。なお42，43の皿や76の猪口など17世紀前半～中頃にかけてのものも含まれている。

(7)　築堤中段階（第83図）

オリーブ褐色砂層，にぶい黄褐色粘土層で，２回目の築堤の部分に伴うものである。碗，皿，鉢，徳利，土鍋，銅銭が出土している。

①　碗

伊万里焼で，体部は球形を呈し，高台は低く三角形を呈し，藍色で内外面とも牡丹唐草文を丁寧に描いており，18世紀前半。

②　皿

２は伊万里焼，３～５は土師質土器である。

２はやや緑がかった灰白色の白磁皿で，削り出し高台，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行って

おり，「肥前陶磁」P105・NO.401奈良県郡山遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀初頭。3～5はいわゆるかわらけと呼ばれているもので，内外面ともナデが行われており，底部はロクロ糸切り離しを行っている。

③　鉢

6は美濃・瀬戸系で，体部はやや内湾し口縁部を「L」字形に外反させ，肥厚させ蓋の受部を形成している。7は土師質の底部の破片であり，内外面ともナデ成形。

④　徳利

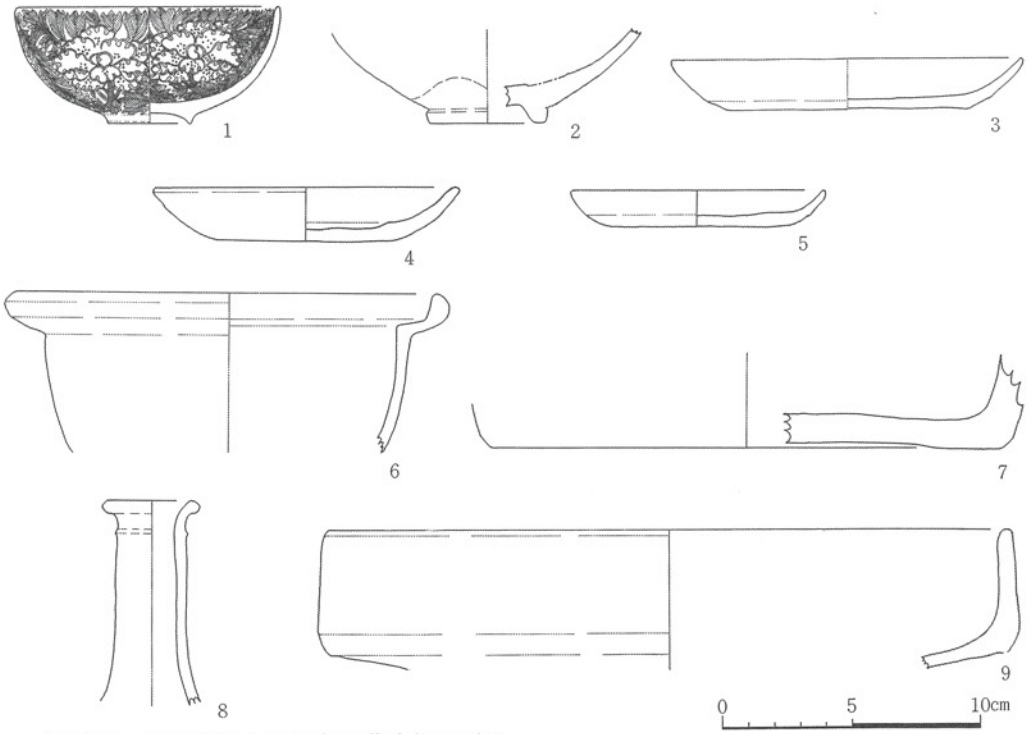
備前焼で細口の頸部であり口縁部は外反させ肥厚させており，頸部に一段の稜がみられる。花瓶の可能性もある。

⑤　土鍋

土師質で体部が垂直に近いもので，内外面ともナデを行っており，外面に煤が付着しており焙烙と思われる。

⑥　銅銭

寛永通宝で2つに欠損しており，直径は2.4cm。「通」の字の作りの上は「ユ」になってお



第83図　武道館地点築堤中段階遺物実測図

り，細目の字である。

以上10点について述べたが，出土遺物が極端に少なく，しかも17世紀後半～18世紀前半に限られている。短期間の使用であり，しかも18世紀代前半に限定されるようである。

(8) 築堤古段階（第84～85図）

暗褐色粘質土層，オリーブ褐色粘土層で，今回の調査で一番当初の築堤と思われるものである。

碗・皿・鉢・猪口・仏飯具，水差・焼塩壺蓋が出土している。

① 碗

1～5は伊万里焼，6～8は唐津焼，9は不明である。

1はやや薄手で球形を呈し，青灰色で桐文のコンニャク判を施しており，桐の文様は異なるが「肥前陶磁」P84，NO.695山口県大内氏館跡と類似しており，18世紀前半。2は非常に薄手で体部が直線になったもので，淡い藍色で紅葉のコンニャク判を施しており，18世紀前半。3はやや大ぶりの陶胎染付で，緑灰色と青灰色で唐草文を描いており，18世紀代。4はやや薄手で体部がやや外反するもので，淡い藍色で梅と草文を描いており，18世紀代。5はやや厚手の陶胎染付で，にごった藍色で山水図を描いており，18世紀代。6は口縁部がやや外反し，兜中高台で内外面とも赤黒色釉を施した天目風で，17世紀中頃。7，8はいずれも平行刷毛目を施しており，7は口縁部がやや端反りになっており，8は球形を呈しており，「肥前陶磁」P106，NO.524滋賀県彦根家老屋敷跡と類似しており，17世紀後半～18前半。9は体部が球形を呈し，高台のやや高い白磁碗で，焼き時期とも不明。

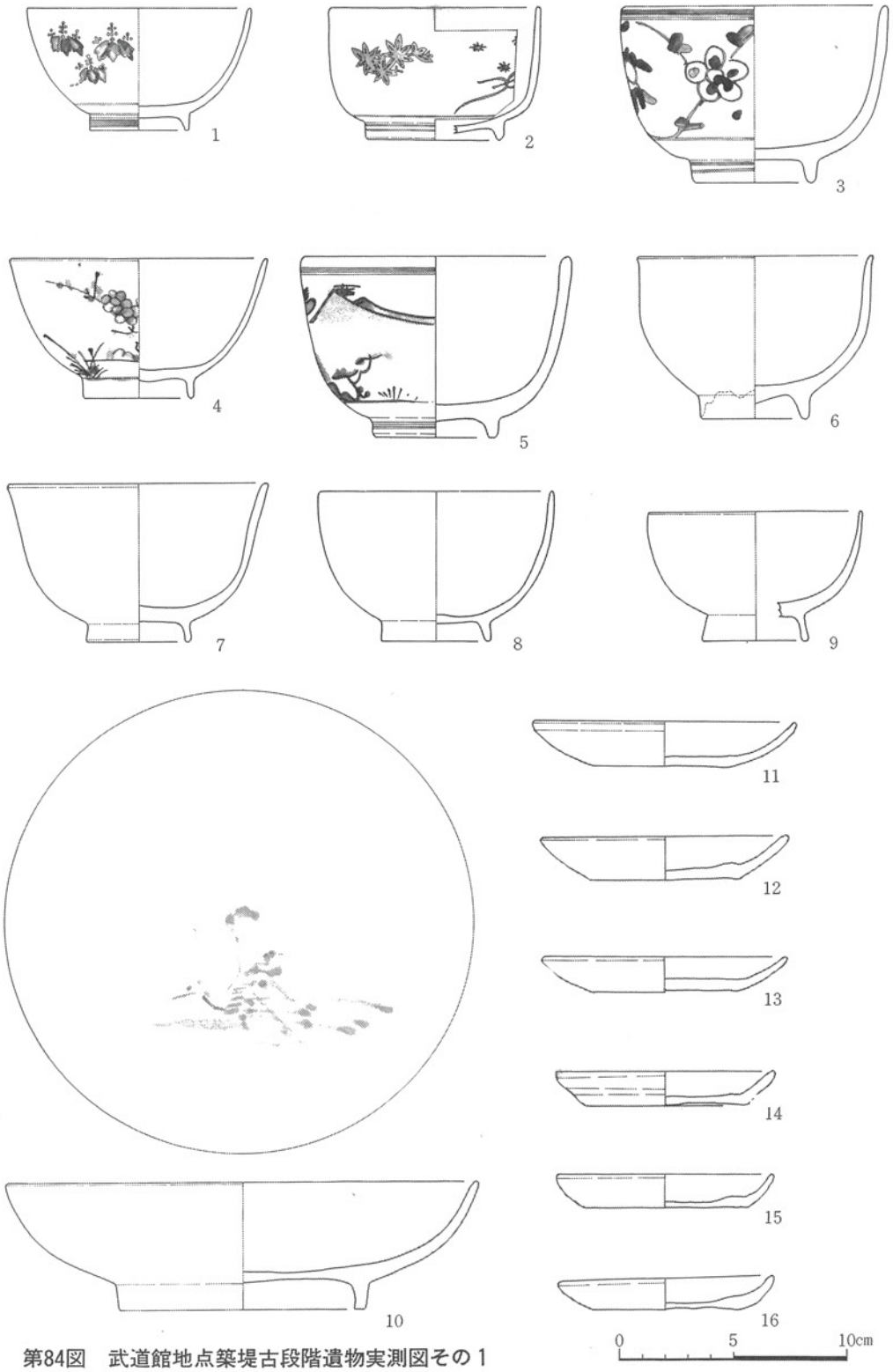
② 皿

10は焼き不明。11～16は土師質土器である。

10は口径が20.4cmとやや大きめであり，高台は内傾し高く緑灰色で山水図を描いており，胎土からみて京焼，もしくは京焼風陶器と思われるが，一応焼き不明とした。11～16はいわゆるかわらけといわれるもので，いずれも内外面ともロクロナデ，底部外面ロクロ糸切り離しであり，12は口縁部に焼きが付着しているので灯明皿と思われる。

③ 鉢

備前焼で，体部は球形を呈し，口縁部が屈曲して外側に肥厚させており，口縁部に重ね焼き跡がみられることから逆さにして焼いたものと思われる。



第84図　武道館地点築堤古段階遺物実測図その１

④　猪口

いずれも伊万里焼で，18はやや器高の高い碗型で，明青色で芙容手風の区画をして草原文を描いている。「肥前陶磁」P67・NO.522滋賀県彦根城家老屋敷跡と類似しており，17世紀後半～末。19は口径のやや大きめ端反り型で，淡い藍色で雲文らしき文様を描いており，17世紀後半～18世紀前半か。

⑤　仏飯具

いずれも伊万里焼で，20は体部がわずかに内湾し，直線状に外反しており，脚部は短く「ハ」字形を呈した凹形高台で，時期不明。21はやや厚手で，体部は球形を呈し，脚部は厚く高い高台状を呈しており，断面三角形で暗青灰色の平行線が描かれており，18世紀中頃か。

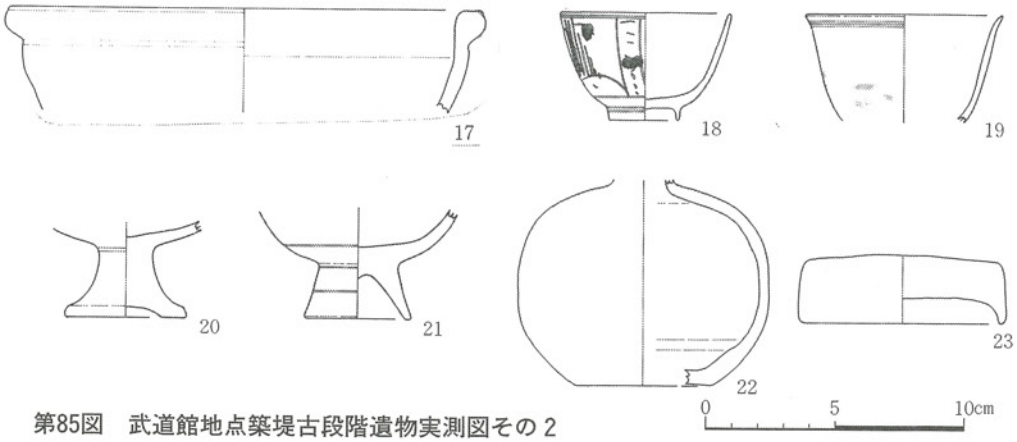
⑥　水差

備前焼で，体部は球形を呈し，底部は上げ底気味の平底で頸部は細くて小さいものがつくものと思われる。外面は暗赤色，赤黒色，浅黄色の釉を施しており，焼きのよいものである。

⑦　焼塩壺蓋

頂部がやや丸みをもち，内面布目痕があることから，型押し成形であり，渡辺編年の18世紀前半。

以上23点について述べたが，いずれも17世紀後半～18世紀前半に限定された遺物であり18世紀前半には埋没し前方へ拡張され築堤が作られていたことを物語っている。



第85図　武道館地点築堤古段階遺物実測図その２

(9)　築地跡（第86～88図）

徳島城と助任川との境につくられた塀に伴う築地跡で，築堤はある程度拡張されて前に広

げているか，この位置に所在していたものと思われる。

これらの遺物は築地の整地層か出土したものと，築地廃棄跡の取り壊された時期のものも含まれている。

碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，猪口，瓶，水差，花生け，仏飯具，土鍋，焼塩壺，瓦が出土した。

① 碗

1～4は伊万里焼，5は京焼風陶器，6，7は京焼，8は美濃・瀬戸系である。

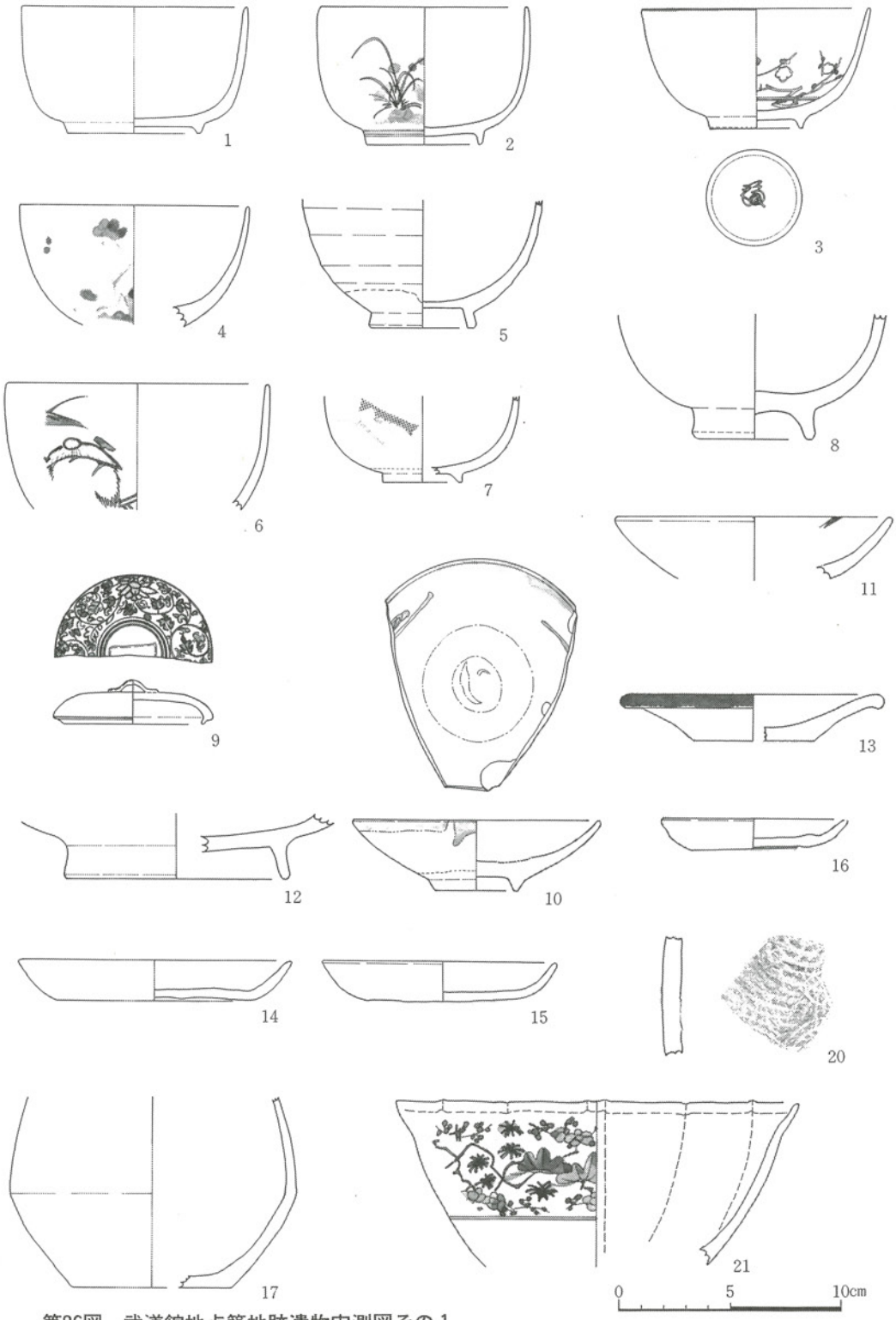
1はやや薄手で，高台は低く台形であり，灰色がかった灰白色の白磁碗で，17世紀後半。2は1と同じ形体を呈し，藍色で草花文，底裏面「太明年製」の銘が描かれており，器形は異なるが「肥前陶磁」P84・NO.953佐賀県金立遺跡と類似しており，器形，文様のタッチからみて，17世紀後半。3は青味がかった緑色の青磁で，やや黒ずんだ藍色で，内面竹梅文，底裏面に渦福を描いており，18世紀中頃、4はくらわんか手で，にごった藍色で簡略化した草花文を描いており，18世紀代。5は体部が球形を呈し，黄灰色の釉を施し貫入がみられ，底部に銘はないが胎土及び釉からみて京焼の可能性があるが京焼風陶器とした。6はやや大ぶり内湾した碗で，オリーブ黄灰色の釉で貫入があり，褐色と白色で雪中出舟の図を描いており，京焼と思われ時期は不明。7はやや薄手で球形を呈し，黄白色の釉でにごった藍色と若緑色で松文を描いており，京焼と思われる。8はやや厚手で球形を呈し，高台はやや高く黄色釉を内外面ともに施し，大きな貫入があり，美濃・瀬戸系と思われる。

② 蓋

伊万里焼で，やや小ぶりのもので香炉等の蓋と思われ，内傾した受部をもち，つまみは帯状の山形で，藍色で菊唐草文を描いており，器形は異なるが「肥前陶磁」P121・NO.217東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており，18世紀代。

③ 皿

10，11は伊万里焼，12は美濃・瀬戸系，13は不明，14～16は土師質土器である。10，11は削り出し高台で，内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，10は藍色，11は褐色で草花文を描いており，「肥前陶磁」P96・NO.650岡山県百間川当麻遺跡，P97・NO.626鳥取県陰田遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀前半。12はやや大きい底部の破片で，高台も高く，釉及び胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。13は底部は平底でロクロ糸切り離し痕を残しており，体部はやや外湾しながら外上方に開き口縁部は折曲げてやや下方に下っており，茶色がかった黒褐色を呈し，蓋の可能性もある。14～16はいわゆるかわらけといわれるもので，内



第86図　武道館地点築地跡遺物実測図その１

外面ともナデを行っており，15は口縁部に煤が付着しており灯明皿と思われる。

④　壺

備前焼でやや薄く，体部は中央部で屈曲した算盤玉を呈しており，底部は平底でロクロ糸切り離しを行っており，時期は不明。

⑤　甕

いずれも備前焼で，18は直径46.6cm大甕の口縁で，口縁端部を内外に肥厚させ３条の凹線を巡らしており，19は底径24.8cmの大甕の底部であり，ロクロナデ痕を明瞭に残している。20は須恵器の甕の破片で外面タタキメ，内面青海波文のタタキメであり，整地層に伴って他の所から搬入されたものと思われる。

⑥　鉢

21は伊万里焼。22，23は唐津焼，24は美濃・瀬戸系である。

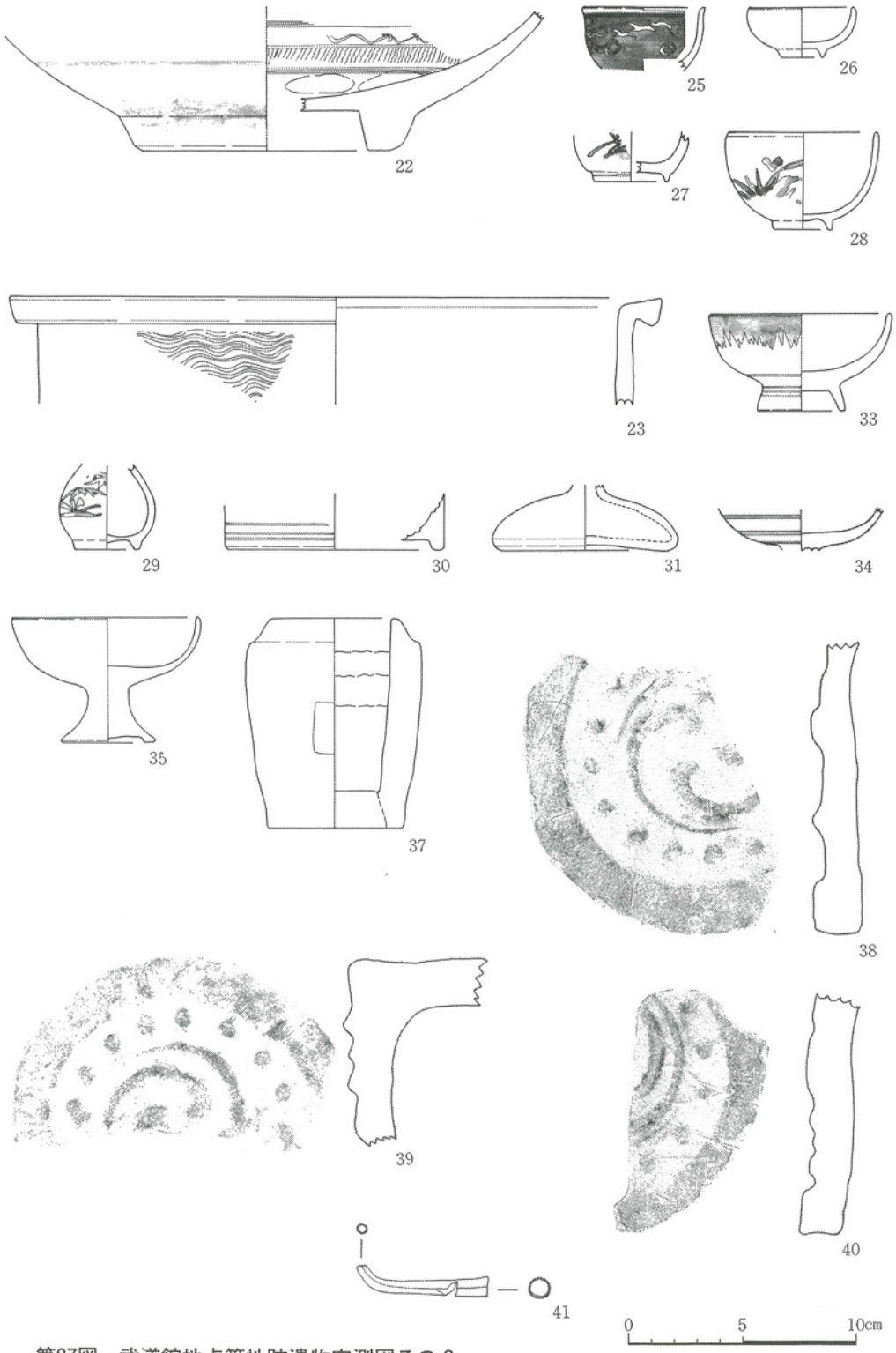
21は口縁輪花で口縁部がやや外反したもので，体部に縞がみられ，藍色で草花文を描いており，17世紀後半。22は象嵌鉢の底部の破片で，外面褐釉をかけ，内面縦線と波状の象嵌を施しており，「肥前陶磁」P74・NO.261東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており，17世紀後半。23は口縁部がL字形に外反した刷毛目鉢であり，17世紀後半～18世紀初頭と思われる。24は高台が口径に比して広く，口縁部が内湾して蓋の脚を形成しており，黄緑白色の釉を施しており，貫入がみられ，胎土と合わせて考えみると美濃，瀬戸系と思われる。

⑦　猪口

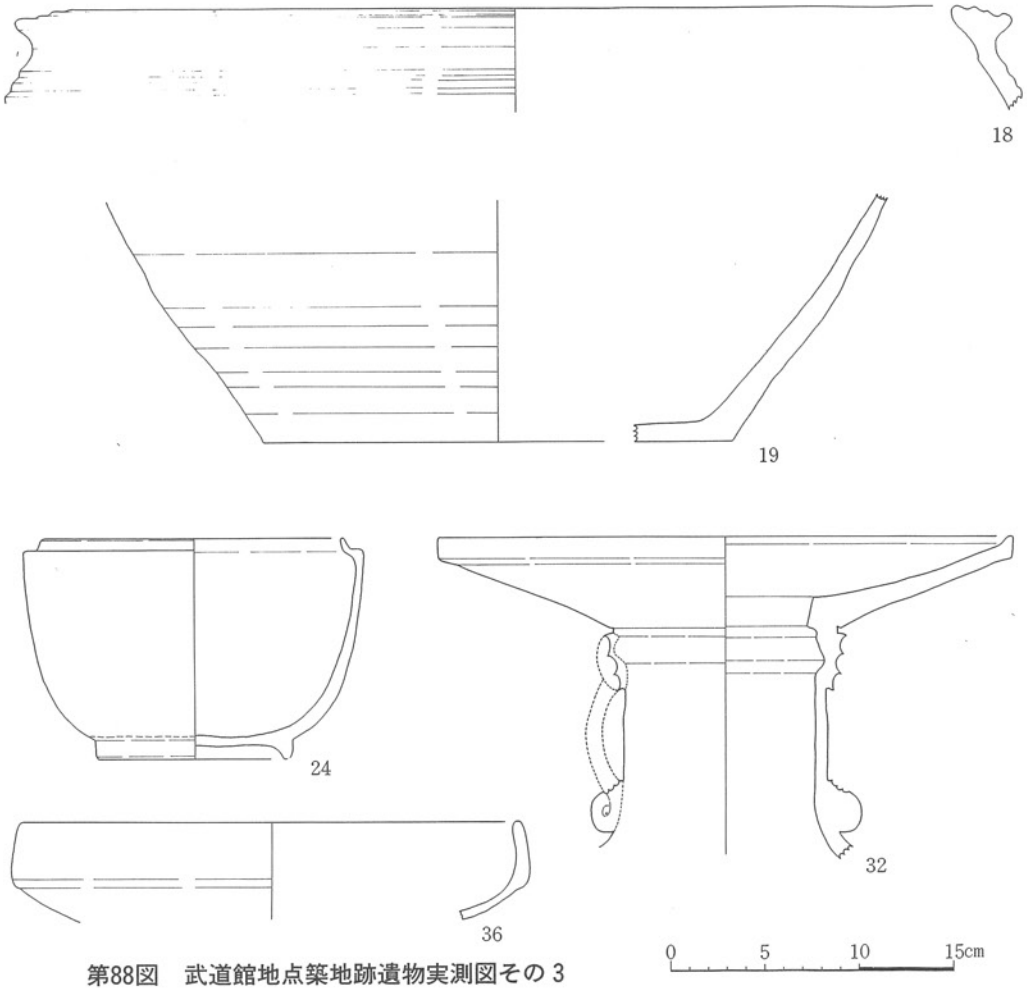
いずれも伊万里焼で，25は口縁部がやや外反した端反り，体部下方は球形を呈しており，藍色の呉須の墨弾き技法であり，雁図と渦巻文を描いており，17世紀前半の長吉谷窯系のものか。26は底径の小さい碗型で，やや緑がかった白色の白磁で，17世紀中頃～後半の長吉谷窯系のものと考えられる。27はやや厚手で三角形の狭い高台を有し，やや黒みがかった藍色で草花文を描いており，17世紀後半～18世紀前半。28は体部が球形を呈し底径が口径に比して小さい碗型で，小碗に含まれる可能性もあり，やや黒味がかった藍色と灰色で草花文を描いており，時期は不明。

⑧　瓶

いずれも伊万里焼で，29は非常に小さい瓶で，仏事が神事に用いるものではないかと思われ，にごった藍色で笹文を描いており，17世紀後半と思われる。30は体部が垂直に上り台形の凹形高台で，ややうすい藍色で３条の平行線を巡らしている。用途的なことは分らないが一応瓶の類に含めた。



第87図　武道館地点築地跡遺物実測図その２



第88図　武道館地点築地跡遺物実測図その３

⑨　水差（水滴）

備前焼で，底部は平底でありロクロ痕を残し，体部は球形状に内湾し，小さい頸部を取り付けたものと思われる。

⑩　花生け

唐津焼であり，直線的に斜めに外反した皿と，垂直の筒形を呈した頸部を別づくりし，接合しているもので脚部以下は欠損の為不明。頸部下半に渦巻状の耳をつけており，外面褐釉の刷毛目，内面皿の部分のみ釉を施しており，17世紀後半。

⑪　仏飯具

いずれも伊万里焼で，33は高台は１cmと低く碗とも考えられるが，一応仏飯具に含めた。

体部は，球形を呈し，青味がかった藍色で柳を描いており，18世紀代か。34は皿部下半のみの破片で脚部との接合痕が残っており，黒ずんだ藍色で３条の平行線が巡らされており，18世紀代か。35は薄手でやや皿部が直立し，脚部は短い「ハ」字形凹形高台を呈しており，18世紀後半～19世紀初頭。

⑫　土鍋

土師質の浅鉢風で，体部は薄く，口縁部は薄く内湾しており焙烙の類と思われる。

⑬　焼塩壺

土師質で体部がやや厚く，内面布目痕があり丸棒成形。底部は円盤充塡で板状圧痕がみられ，受部は段を有し内傾いており，体部中央に刻印がみられるが剝落の為不明。渡辺編年18世紀後半。

⑭　瓦

いずれも軒丸瓦で，「巴」文の押し型成形。珠文は18個であり，38.39は巴の尾がやや長く，40は尾が非常に長く接合部に指押えの跡が明瞭に残っている。18世紀前半～後半と思われる。

以上40点について述べたが35を除いてはいずれも18世紀代に含まれることからのこの時期近くまで築地が所在したことを物語っている。

⑽　石垣溝・池跡（第89～90図）

池に給水する溝の覆土及び池の覆土から出土したものである。

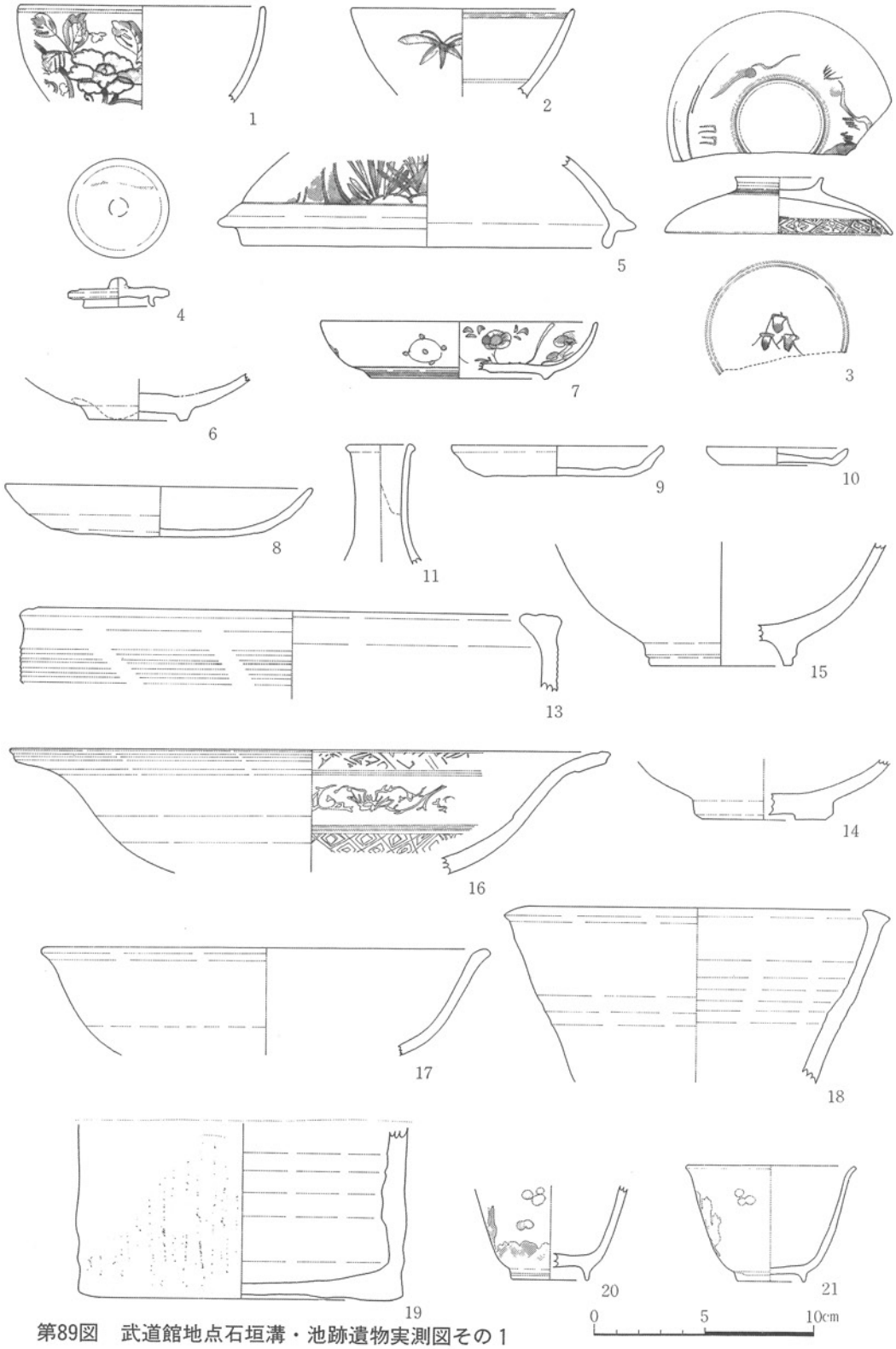
碗，蓋，皿，壺，甕，鉢，猪口，瓶，土鍋，灯明皿，焼塩壺，焼塩壺蓋，砥石，銅銭，鉄砲玉が出土している。

①　碗

いずれも伊万里焼で，１はやや薄手であり藍色で牡丹唐草文を丁寧に描いており，器形は異なるが「肥前陶磁」P122・NO.252東京都旧芝離宮庭園遺跡と類似しており，18世紀代。２は体部がやや内湾し直線的に斜上方に立ち上がったもので，ややにごった藍色で花文を描いており，19世紀初頭。

②　蓋

いずれも伊万里焼で，３はつまみが低く外反し，体部も器高の低いものであり，藍色で松に帆かけ船，内面見込み帆かけ船図を描いており，18世紀後半。４は口径の小さいもので，



第89図　武道館地点石垣溝・池跡遺物実測図その1

ボタン状のつまみを有し，緑がかった褐色で松葉文を描いており，小壺等の蓋と思われ，時期不明。５は体部が球形を呈し，受部が内斜したもので，やや黒ずんだ藍色で草木文を描いており，鉢等の蓋と思われ，時期不明。

③　皿

６・７は伊万里焼，８～10は土師質土器である。６は灰色がかった灰白色の白磁皿で，削り出し高台で内面見込み蛇ノ目釉ハギを行っており，「肥前陶磁」P105・NO.408奈良県郡山遺跡に類似しており，17世紀後半～18世紀前半。７はやや薄手で蛇ノ目凹形高台で，藍色で内面草花立湧文，外面星座文を描いており，形体からみて19世紀前半。８～10はいずれもかわらけといわれるもので，胎土は水簸しており，８は体部外面ヘラ削りを行っており，９・10は内外面ともナデを行っており，８・９は煤が付着していることから灯明皿と思われる。

④　壺

備前焼の細い頸部の破片であり，頸部中頃がやや細くなり，口縁部が外反し肥厚している。

⑤　甕

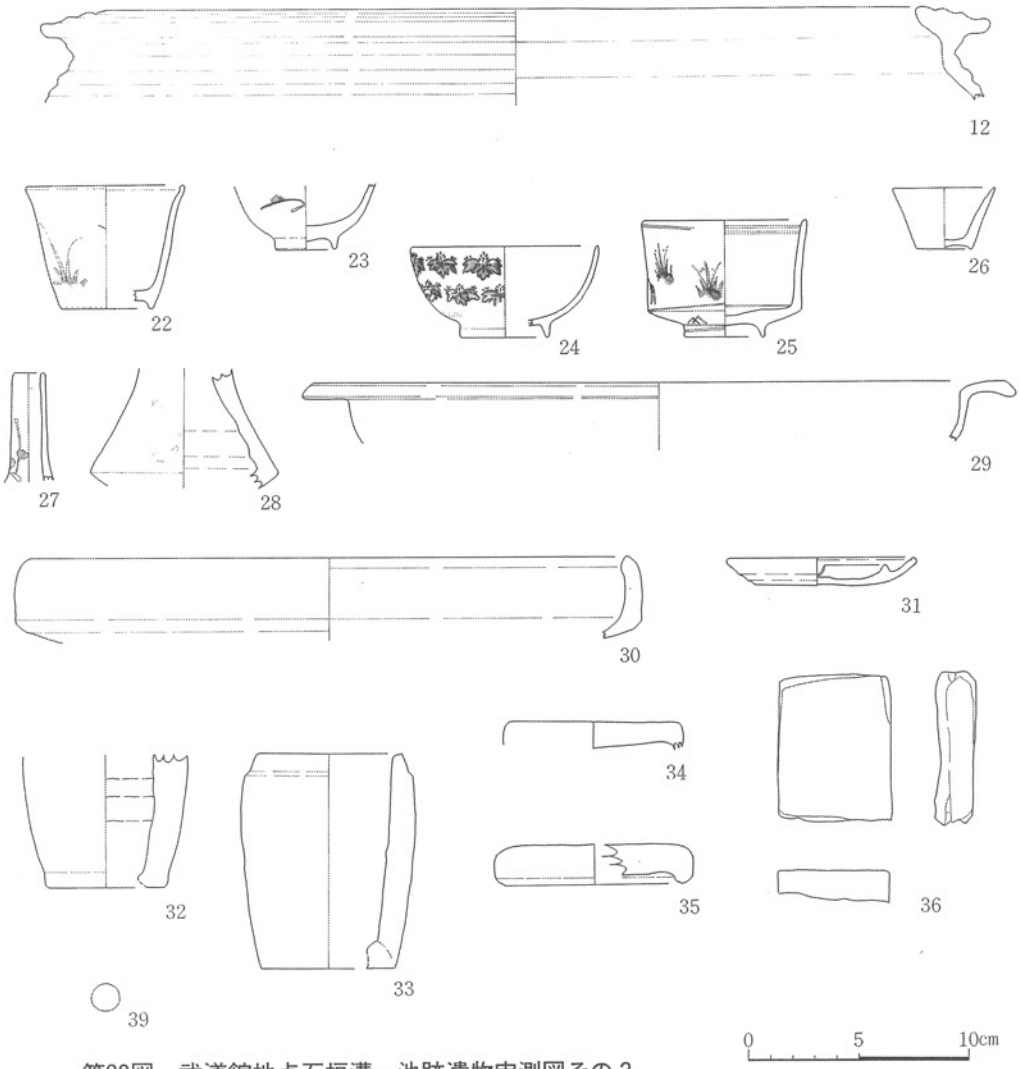
12は口径43cmで口縁部を内外面に大きく肥厚させ，口縁端部に３条の凹線を巡らし，体部を大きく外反させロクロナデの凹凸を明瞭に残した備前焼の大甕の破片である。13は体部が垂直を呈し，口縁部はやや外反し内側を肥厚させて端面をつくり３条の凹線を巡らしており，体部外面に櫛目による平行線を施しており，焼き時期とも不明。

⑥　鉢

14は伊万里焼，15～17は唐津焼，18・19は備前焼である。14は外面緑色の青磁で，高台は幅広く蛇ノ目高台で18世紀代。15は外面褐色，内面黒褐色釉の刷毛目で高台は２段に屈曲した削り出し高台で，17世紀中頃。16は口縁部が屈曲して外反し，体部はやや内湾して斜上方に立ち上がっており，四方襷文を上下に入れ，間に唐草文を象嵌した鉢であり17世紀後半。17は薄手で口縁部をやや外反させ，深緑褐色の釉を施しており，18世紀代。18は桶型で，口縁部を内外に肥厚させており，体部にロクロナデ痕を施している。19は体部が直立した筒形を呈し，外面ヘラによって木の表皮肌を表現している。

⑦　猪口

いずれも伊万里焼で，20・21は端反り型で，ややくすんだ藍色で草花と松を描いており，「肥前陶磁」P41・NO.930佐賀県長尾遺跡と類似しており，17世紀後半～18世紀前半。22は桶型で口縁部がやや内湾しており，すんだ藍色で草花を描いており，器形からみて17世紀後半～18世紀前半。23は碗型で，やや厚手で球形を呈し，藍色で草文を描いており18世紀代。



第90図　武道館地点石垣溝・池跡遺物実測図その２

24は薄手で小碗に含まれるもので，藍色で丁寧に桐を描いており，18世紀代。25はやや大ぶりの筒形で，高台径が口径の２分の１以下である。やや濁った藍色で外面アヤメ文を描いており，18世紀末。26は桶型で直線状に斜上方に立ち上がっており，灰色の釉を施したもので，18世紀末～19世紀初頭と思われる。

⑧　瓶

いずれも伊万里焼で，26は細口の頸部の端部を丸くおさめており，やや濁った藍色で草文を描いており，18世紀中頃。27は体部が「く」字形に内傾した胴部の破片であり，やや薄い藍色でおもとらしき草を描いており，18世紀代。

⑨　土鍋

29は非常に薄手の瓦質で，体部は球形を呈し，口縁部は水平に外反させて端部はやや肥厚させてやや下方に下げており内外面ともナデを行っている。30は口径33cmとやや大きめで口縁部が内湾しており，内外面ともナデを行っており外面に煤が付着している。焙烙の部類に入るものと思われる。

⑩　灯明皿

土師質のもので，底部外面ロクロ糸切り離しを行っており，体部内面中頃に燈芯受部を巡らしており，半円の抉りを３か所行って脂返しを作っている。

⑪　焼塩壺

32・33とも内面に布目痕があり丸棒成形で，外面はナデを行っており，底部は欠落しているが，円版充塡があったものと思われ，33は段をもった受部を形成し，18世紀中頃。

⑫　焼塩壺蓋

34・35とも内面に布目痕があり型押し成形で，頂部はいずれも平坦で34は内面中央部がやや厚くなり，35は全体に厚手のものであり，34は18世紀後半，35は18世紀末～19世紀初頭。

⑬　砥石

粘板岩製のきめ細かい胎土であることから仕上げ砥石であり，折れており外面も剝落しており，表面に使用痕がみられる。欠損しているため，全体の大きさは不明。

⑭　銅銭

37は直径2.3cmで錆が激しく銘は不明。38は「寛永通宝」の通の部分を欠損，裏面背に「文」の字がある。

以上38点について述べたが，一番古いものがNO15の17世紀中頃の唐津鉢で，一番新しいものが19世紀初頭であり，この間，石垣給水溝と池跡の存在期間が考えられるのである。

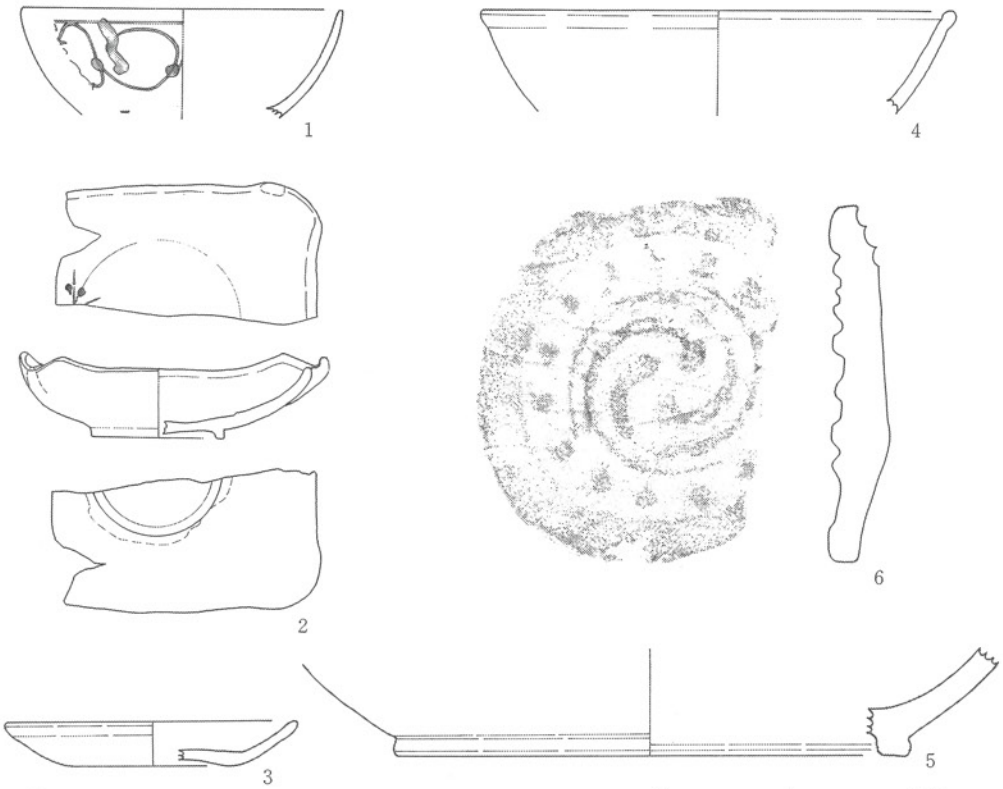
⑾　門跡（第91図）

門跡の整地層の覆土から出土したものであるが，殆んどが攪乱を受けているため出土遺物は少なく，時代を比定する資料は，射場築地肩部と合わせて考える必要がある。

碗，皿，鉢，瓦が出土している。

①　碗

やや薄手の口径のやや大きくくらわんか手で，ややにごった藍色で簡略化した唐草文を描



第91図　武道館地点門跡遺物実測図

いており，18世紀代と思われる。

② 皿

2は角皿で角はつまんで広げられており，高台は円形でこげ茶と淡青色で梅文を描いており，胎土と釉からみて京焼系と思われる。3は土師質のいわゆるかわらけであり，胎土は水簸されており底部は上げ底で，内外面ともナデを施している。

③ 鉢

4はやや薄手で外面褐釉の上に白釉の平行刷毛目，内面褐釉の波状刷毛目を施しており，唐津焼で17世紀後半～18世紀前半。5は甕か壺の底部で，高台は低く台形を呈した貼り付け高台で備前焼。

④ 瓦

直径14.4cmの軒丸瓦で，巴文で巴の尾は長く，型押し成形であり，珠文は15個で18世紀前半か。

以上６点について述べたが，攪乱が激しく入っているために，整理層の遺物から門跡の創建年代及び存続年代を考えることはできない。

⑿　攪乱（第92図）

徳島城廃棄後から発掘調査以前までの攪乱で，刑務所当時，徳島大空襲による火災，徳島市体育館建設の際の廃棄物，公園整備のものと幾重にもなった攪乱が数多くあり，これらの攪乱土壌内から，レンガ，コンクリート塊，廃材，鉄筋，石灰ガラと一緒に出ており，その中で城と関係のある遺物を図化したものである。

碗，蓋，皿，鉢，瓶，香炉，仏具，徳利，灯明皿，瓦が出土している。

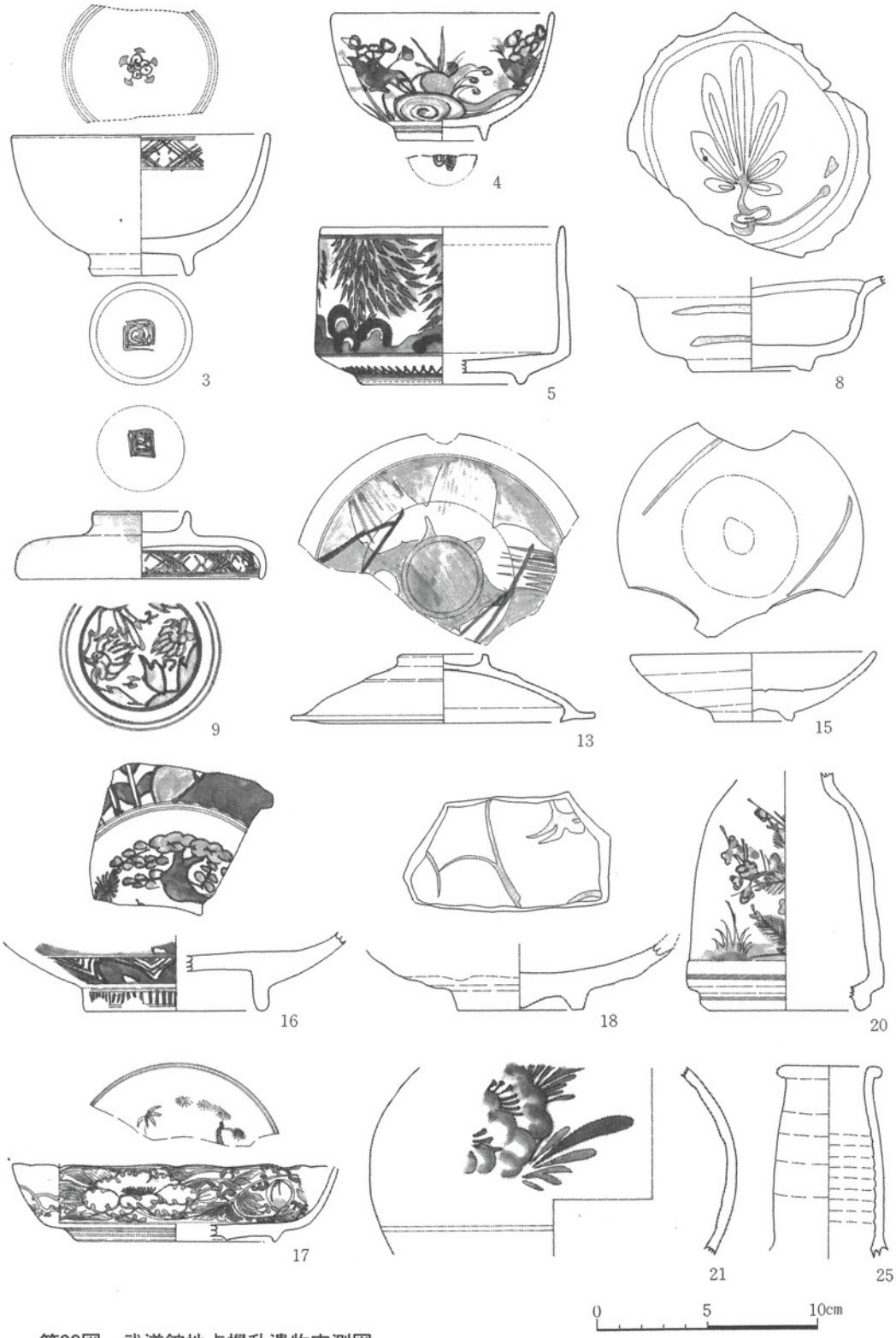
①　碗

１～６は伊万里焼。７は唐津焼，８は志野焼である。

１はやや薄手の底部のみの破片であり，にごった藍色で底裏面に「太明成化年製」の銘が描かれており，17世紀後半。２，３はいずれも青磁碗で，２は高台径の小さいもので，淡青色釉の青磁で，藍色で口縁内面四方襷と平行線文を施しており，「肥前陶磁」P84・NO.949佐賀県金立遺跡に類似しており，３は球形を呈したくらわんか手で，淡緑色の青磁で，にごった藍色で口縁内面四方襷文，内面見込み五弁花，底裏面渦福を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO.16広瀬向２号窯第９層に類似しており，いずれも18世紀中頃。４はやや薄手で体部上半はやや直線的に近い形であり，藍色で流水文と花文，底裏面に渦福を描いており，18世紀代。５はやや大ぶりの碗型で小鉢の可能性もあり，口縁内面が釉ハギされていることから蓋がつくものと思われる。藍色で連木竹と花文らしき絵が描かれ，高台付近に山形文が描かれており，18世紀後半。６は灰色がかった胎土に白釉のかけ流しを行っており，暗い群青で雲文と四方襷文を施しており，18世紀代。７は高台が低い兜巾高台で，体部は「く」字形に屈曲したもので，体部上半にオリーブ淡緑色と白色釉を施しており，17世紀後半。８は楕円がかった四角形を呈し，口縁は屈曲して外反し，高台は低く作り出したもので，褐色釉で軍配文を描いており底部外面に４か所胎土目痕があり，二次焼成をうけており，16世紀代。

②　蓋

９～10は伊万里焼，12は美濃・瀬戸系，13，14は不明である。　９は外面青緑色の青磁でやや低く，体部は屈曲し口縁に向って内湾し，藍色で内面唐花らしき文様，つまみ内面渦福を描いており，「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」P19・NO.19広瀬向２号窯第９層と類似してお



第92図　武道館地点攪乱遺物実測図

り18世紀中頃。10は外面青緑色の青磁で，体部は球形を呈しそのまま丸くおさめている。藍色で意味不明の文様，口縁内面四方襷文，つまみ内面不明の銘が描かれており，18世紀中頃。11は体部が屈曲して口縁部が内湾しており，藍色で外面並草葉文，内面見込み「太明年製」の銘，口縁内面雷文を描いており，19世紀初頭。12は落蓋で，体部は水平で，受部はやや高く僅かに外反し，凝宝子状のつまみをつけており，緑青色釉をかけ流し，一部に釉だまりがみられる。胎土からみて美濃・瀬戸系と思われる。13は体部がやや内湾し，直線的に外傾し，受部が小さく内傾したものでロ縁部は鍔状に外方へ開いたもので，群青がかった藍色で松葉文を表現している。焼き，時期とも不明。14はやや厚手の落蓋で，陶質で受部は短く外反しており，凝宝子状のつまみを有し，外面赤茶褐色釉を施しており，備前か大谷焼と思われるが，一応焼き不明とした。

③　皿

15～17は伊万里焼，18は唐津焼である。

15はやや薄手の削り出し高台の内面見込み蛇ノ目釉ハギで，オリーブ緑色の草文を描いており，「肥前陶磁」P109・NO.61秋田県鵜沼遺跡と類似しており17世紀後半～18世紀前半。16はやや厚手で高台がやや高く，藍色で蓮弁文，内面見込み松竹梅文を描き，櫛目高台であり鍋島藩窯と思われ，時期不明。17はやや薄手で，蛇ノ目凹形高台で，ややにごった藍色で内面牡丹唐草文，内面見込み松竹梅文，外面唐草文を描いており，「肥前陶磁」P108・NO.34富山県豊原寺華蔵院跡と同一で18世紀代。18はやや厚手で兜巾高台，暗緑色釉の上に鉄釉の草文を描いており，「肥前陶磁」大橋編年Ⅰ期の16世紀後半。

④　鉢

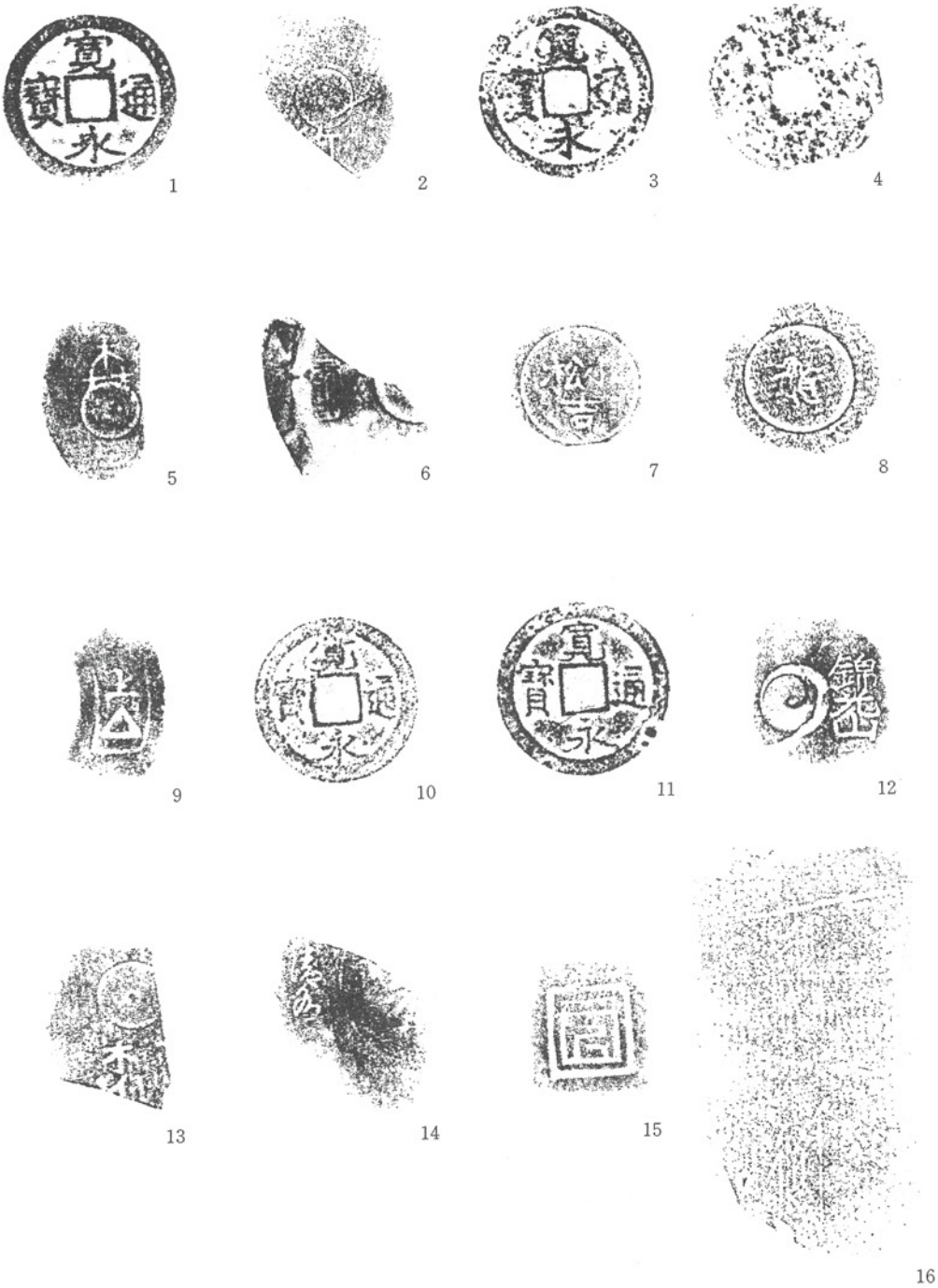
唐津の刷毛目鉢で，体部はやや薄手で球形を呈し，高台はやや高く三角形を呈し，内面見込み蛇ノ目釉ハギを施しており，外面平行刷毛目，内面平行の上に波状の刷毛目を施しており，17世紀後半～18世紀前半。

⑤　瓶

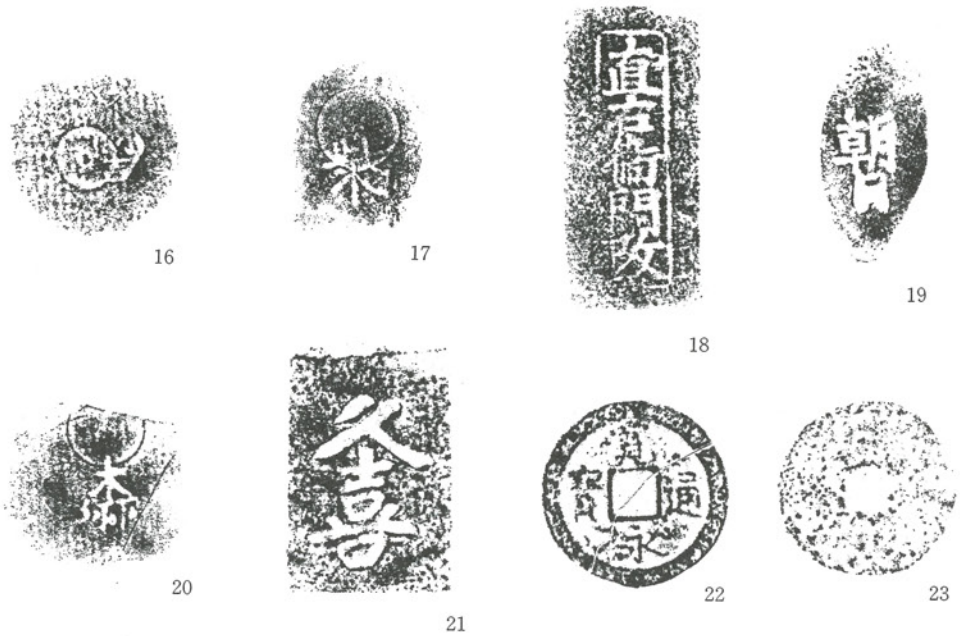
いずれも伊万里焼で，20は高台が低く体部がやや内傾した筒形を呈しており，藍色で松竹梅文を描いており，器形的に「肥前陶磁」P93・NO.732福岡県大通り遺跡と類似しており18世紀代か。21はやや薄手の球形を呈した胴部の破片であり，藍色で草文を描いており，18世紀代と思われる。

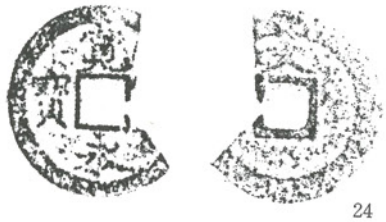
⑥　香炉

伊万里焼の外面淡緑色の青磁であり，蛇ノ目凹形高台で，体部は直立に立ち上がってお



第93図　古銭及び底裏面銘拓本その1 1.射場覆土上部№37　2～4射場覆土下部16№9,75,76 5.射場築地肩部№17　7,8武道館第1層№18,19　9～11武道館川跡覆土上部№37,142 143　12～15川跡覆土中位№14,27,28,48,16川跡





第94図　古銭及び底裏面銘拓本その２

16～18 武道館護岸杭№19,20,64

19～21 武道館川跡新段階・船着き場
№30,47,87

22.川跡築堤中段階№10

23,24.給水石垣溝・池跡№37,38

り，内面に墨書がみられるが書体は不明である。鉢の可能性もあり，時期不明。

⑦　仏飯具

体部が球形を呈し，脚部は短く「ハ」字形に大きく外反したベタ高台で，淡橙褐色の胎土に橙褐色の釉を施しており，焼き，時期とも不明。

⑧　徳利

いずれも大谷焼で，時期は18世紀後半～19世紀後半。24は底部で高台が外側に肥厚させた三角形を呈し，外面紫褐色釉を施している。25はやや太めの頸部の破片で口縁部は外側に折り返しており，茶褐色釉が施されている。25・26はいずれも肩部の破片で，25は「子亥」，26は「佐？」の焼成前ヘラ描きがみられる。

⑨　灯明皿

器高が低く，内面体部中頃に燈芯受部が巡らされており，半円の抉りの脂返し部が３か所つけられている。内面のみ褐釉が施されており，焼き・時期不明。

⑩　瓦

29は「卍」文の型押し成形で，瓦当面は高くしっかりしており，縁にしっくいの跡がみられる。30は巴文の型押し成形で尾が長く，珠文は直径0.9㎝であるが数は不明。18世紀前半か。31は「卍」文の型押し成形で，瓦当面は低く，周線幅は2.5㎝とやや広いものである。

以上31点について述べたが，18の唐津皿は，この徳島城が築城された当時の時代と合致しており，築城当初を証明する資料である。

6．調査のまとめ

調査当初刑務所と徳島市体育館工事等によって担当攪乱が入っており，しかも「御花畠」の庭園跡という場所からみて十分な成果が得られないと思われたが，当初の予想に反して遺構・遺物の両面にわたって色々な成果が得られた。

1　絵図との対比

まず，門跡，築地は寛永８～12年に作成された「忠英様御代御山下絵図」に西ノ丸御殿の隅櫓より斜めに北へ延び門跡をはさんで向きをかえて東西に延び石垣か築地で囲った図面とほぼ一致しており，絵図が正確であることの立証となりうる資料となった。

更に石垣船着き場をもった築堤新段階は，1691年に作図された「綱矩様御代御山下絵図」で西ノ丸御殿の隅櫓より大きく曲がり門跡付近から緩やかな曲線を描いており，この図面と一致するものであり，この絵図には船着き場は入っていないが，門跡の所在から考えれば，当然存在するものであり，絵図自体が主要建物の配置に主力を置いていることからみるならば，徳島城北東端にあたるこの地は簡略化されるのは当然と思われる。

護岸板列に伴う築堤は明治２～３年に作成された「徳島藩御域下絵図」に西ノ丸御殿隅櫓より斜めに少し立ち上がり直線的に東西に延びたもので当初の絵図と比べて助任川が狭くなっている図面と一致するものであり，以上３回の築堤はいずれも国立史料館に残された絵図と合致し，過去２回（いずれも徳島市教育委員会が実施）の調査と合わせて考えるならば絵図は非常に正確さをもって作成されているものと思われる。

築地及び門跡は築堤斜面より丸瓦，桟瓦，平瓦などが多数に出土していることからいずれも瓦を用いた塀であり相当丁寧な作りであったことがうかがえる。

現在まで徳島城内に関する調査は僅小な調査であったが，今回の調査によって城内の施設が思ったより保存状態の良い遺構が遺存している可能性が大きく，今後徳島城内における調査によって明確に解明されるものと思われる。

2　搬入土器について

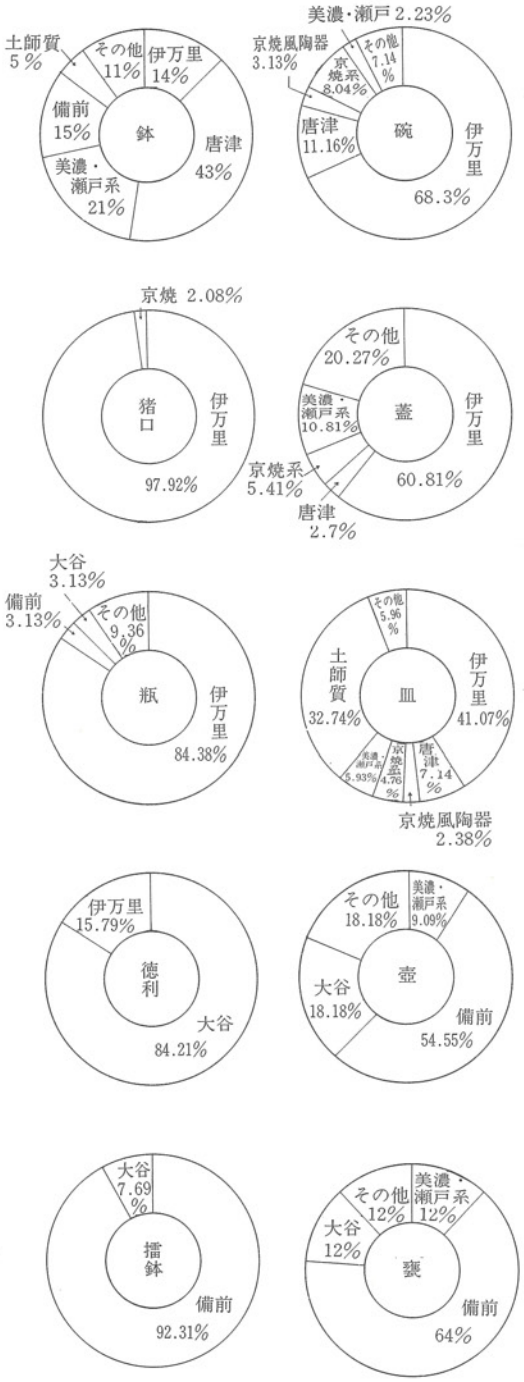
今回の調査で出土した土器の種別と産地別は第21・22表の円グラフのとおりである。この

表は出土総数全体のものでなく，図化したものを集計したものであるが，図化したものは均等に選び出している状況からみて比率自体に大差はないものと思われる。

まず碗は計224点図化しており，そのうち伊万里焼153点と全体の68.3％を占め唐津焼，京焼風陶器のいわゆる唐津系が32点と約16.3％であり肥前陶磁器が全体の84.6％を占めている。次いで京焼の８％，美濃・瀬戸系の2.3％となっており，碗のなかでの搬入産地は圧倒的に肥前系の出土例が多い。

蓋は計74点図化しており，伊万里焼45点で60.8％，唐津焼2.7％で肥前陶磁器が全体の63.5％を占めており，次いでその他が20.3％，次いで美濃・瀬戸系が10.9％となっている。碗に対して蓋の比率が肥前系が少ないことが上げられるが，用途及び器種によっては蓋の必要ないものも考えられ，碗に比べて比率は少ないがやはり肥前系が他の産地に比べて多く，次いで美濃・瀬戸系が多い。

皿は計168点図化しており，伊万里焼が41.1％，土師質(かわらけ)が32.8％，唐津焼が7.1％，美濃・瀬戸系が約６％，京焼系が4.8％，京焼風陶器が2.4％，その他６％となっており，肥前系陶磁器が約50％とほぼ半数で，次いでかわらけが32.8％となっている。このかわらけを除

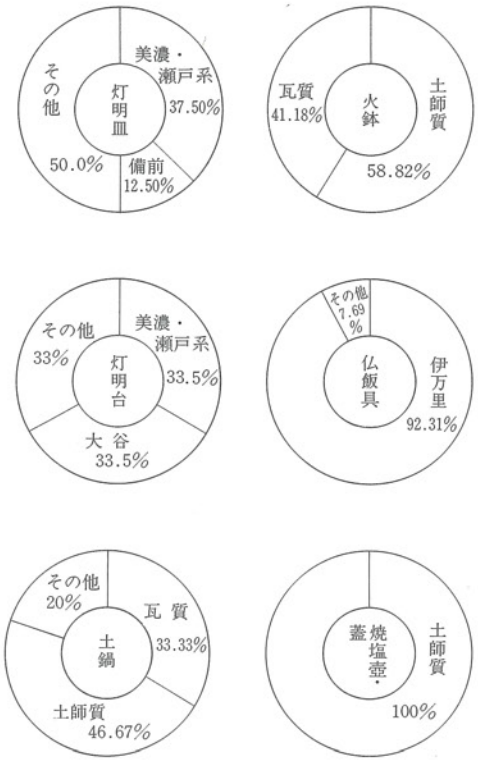


第18表　出土陶磁器産地別対比表その１

くとやはり肥前陶磁器の比率が高いようである。かわらけについては後で述べることにする。

壺は全部で11点を図化しており，内備前焼が54.6%，大谷焼が18.2%，その他18.2%，美濃・瀬戸系が９%となっており，備前焼の比率が高く，特に大物は全部備前焼である。大谷焼は窯の初源が18世紀後半であり，江戸中期以降に本物でもって比率が高くなっていると思われる。

甕は25点を図化しており，そのうち64%が備前焼で，美濃・瀬戸系12%，大谷焼12%，その他12%となっており，圧倒的に備前焼が多く，時代が下がると大谷焼がみられるようである。大谷焼出現以前は美濃・瀬戸系のものが多いようである。



第19表　出土陶磁器産地別対比表その２

鉢は109点を図化しており，唐津焼45%，美濃・瀬戸系21%，備前焼15%，伊万里14%，土師質５%，その他11%であり唐津焼，伊万里焼，美濃・瀬戸系が多い。特に唐津焼は象嵌三島手・刷毛目唐津が多く，江戸前期は唐津焼の比率が高いことがうかがえる。小さめの鉢は伊万里焼が多く鉢のなかでも日用雑器は備前・美濃・瀬戸系が多いようである。

猪口は48点図化しており，伊万里焼が97.9%，京焼が2.1%であり，小物である猪口の殆どが伊万里焼で，残りは京焼となっている。

灯明皿は計18点を図化しており，土師質が50%，美濃・瀬戸系が37.5%，備前が12.5%の３種類であり，いわゆるかわらけと呼ばれる土師質が圧倒的に多く，美濃・瀬戸系及び備前系の二通りに分けられており，用途の差があるものと思われる。

灯明皿は僅か６点のみ作図できており美濃・瀬戸系，大谷焼，産地不明が各々２点ずつであり，このうち大谷焼は江戸時代後半であり，それ以前は美濃・瀬戸系が主流を占めていたものと想定される。

土鍋は15点図化しており土師質が46.7%，瓦質が33.3%，その他が20%であり，土師質・

瓦質とも本県の産地で作られたものと思われる。

擂鉢は僅か13点図化しており，そのうち12点が備前焼で，他の１点が大谷焼である。大谷焼の擂鉢は小さく薄いことから使用範囲も限定され，何らかの特殊性が考えられ，他は備前焼が使用されたものである。

火鉢は計17点図化しており，土師質から58.8％，瓦質が41.2％となっており，いずれも本県で作られたものと思われる。火鉢は円形のものと角形は瓦質のものとなっている。特に瓦質のものは昭和初頭頃まで焼かれていたといわれる。本県の川島焼（麻植郡川島町）（註２５）の可能性が考えられるが筆者の浅学の為今後の検討を要する。

仏飯具は計13点が図化できており，そのうち12点が伊万里焼で，その他が１点となっており，伊万里焼によって占められている。

焼塩壺・焼塩壺蓋はすべて土師質であり，「泉湊伊織」・「御塩壺師堺湊伊織」の刻印がみられ，全て和泉・摂津産のものである。この焼塩壺の出土は，江戸時代の阿波藩において鳴門を中心に他藩へ多量に搬出するほどの製塩が行われており，塩の生産の盛んな本県へわざわざ小さな壺には入った少量の塩がもたらされていることは日常生活に用いるものでなく，「清め」・「秡」等の特別な儀式に用いられたと想定される塩が搬入されていることを物語っており興味深いものである。

瓶は計32点図化しており，そのうち27点の84.4％が伊万里焼，１点で3.1％で大谷焼と備前焼，産地不明が9.4％であり殆どが伊万里焼で，水瓶，花瓶の２通りに分けられる。

徳利は計19点図化しており，そのうち16点が大谷焼で残り３点が伊万里焼である。大谷焼の焼成開始時期が江戸時代中期後半であることから，それより以前は伊万里焼が用いられていたことを物語っている。

以上器種ごとに分けて比率を出してみた結果，碗・皿・猪口・鉢といった日常食器類は肥前陶磁器類の比率が高く，甕・壺・擂鉢といったものは備前焼，大谷焼が多くを占めている。土鍋・火鉢等常時火を加えるものについては在地のものが利用されていることがわかる。徳利は大谷焼ができるまでは伊万里焼が使用され，燈火具は美濃・瀬戸系と土師質のかわらけが用いられている。

かわらけは直径の大きさによって大・中・小に分けられ，直径12～13cm大きいものと10～11cm中ごろ大きさのものは非常に焼成が堅牢で，体部外面ヘラ削り行っており，口縁部に煤が付着しているものが多く灯明皿として使用したものと，何らかの特別な用途での使用方法が考えられる。直径８～９cm中ごろの小さいものと，７cm代より下の小さいものはいずれも

水簸した胎土でヨコナデを行い底部は板状圧痕が残っており，煤が付着していないことから大きめのものとは明らかに使用方法が異なる。又，7㎝以下のものの中には内面に「○」印の墨書がみられ，特別な意味をもつものかもしれない。

この徳島城における陶磁器の主流は，肥前系が大半を占め，次いで美濃・瀬戸系，京焼系，備前系，在地の大谷焼となっている。このうち江戸時代前半から肥前系の土器は多量に入っており，城主蜂須賀家の出身である美濃・瀬戸系が多いことも注目される。この点は今後の検討課題となるであろう。日常雑器のものは備前焼が圧倒的に多く，今回の調査で出土した土器は全て中部日本より西のもので地理状況から考えて当然の結果であろう。

徳島城築城と陶磁器との関係を肥前陶磁を中心に見てみると，徳島城の築城が天正13年（1585年）とされこの築城時期のものと考えられるものは，いずれも攪乱から出土した志野焼碗と唐津鉄釉皿がある。特に志野焼碗は二次加熱があることから，寛永元年（1624年）にこの徳島城が大火に合い，建物の大半が焼失したとされる時期には本城に所在していたことが明らかである。他に川跡から出土した碗・皿の中にも二次加熱を受けたものが数点みられる。

武道館地点第１層の整地層からは，17世紀前半の高台が低く，内面に胎土目痕をもつ唐津皿が出土しており，川跡からは伊万里焼の1640年代に比定される長吉谷窯系の皿，中国祥端の影響をもった皿，小皿など天正年間から幕末まで絶えることなく出土している。特に17世紀後半～18世紀代の出土が多く，伊万里焼・唐津焼の国内販路拡大の状況がそのままに現われた状態を示しており，特に波形打ち皿，くらわんか手，陶胎染め付け（唐津），広東形碗，伊万里青磁碗，京焼風陶器（唐津系），象嵌唐津鉢，唐津花生，唐津銅緑釉皿，唐津刷毛目碗など多種多様なものが出土しており，本県における肥前陶磁の搬入の変遷をとらえる上で貴重な資料となりうるものである。

京焼については，筆者の研究不足により底裏面の銘のないものについては判断しかねるが「粟田」・「朝日」の銘があり「粟田焼」・「朝日焼」などが確認され，小物の上手物が本県に搬入されていることが判明した。

3　在地の土器について

本県における代表的な焼きは大谷焼であり，今回の調査でも日常雑器を中心に出土している。大谷焼の起源は豊田進著「大谷焼」・「阿波の陶磁」によれば，安永９年（1780年）であり，現在も盛んに焼かれており，阿波藍染の甕として需用が高まり藩窯として保護された

ことが記録されており大甕を中心に，徳利，灯明台など陶土の性格から日常雑貨器を中心に生産が行われた。徳利のなかに「延」の字が刻印されたものがみられ「延」の字で考えられるのが蜂須賀の家老の別邸と言われた「延生軒」がありこの延生軒の延の字と考えられるが，延享年間（1744～47年）紀年銘を逆上って描かれた可能性，あるいは万延年間（1860年）の可能性もあり，今後の検討を要する。

火鉢，焙烙，土鍋については吉野川中流域において，「川島焼」がある。この川島焼は天明～文化年間（1781～1818年）頃に始められたとされており，瓦，焙烙，火鉢，土瓶，土釜，カマド，七輪，炬燵，植木鉢等が焼かれたとされている。今回出土した火を使用する容器，日曜雑貨器の土師質・瓦質のものは川島焼と思われる。川島焼については実体が十分つかめず，第二次世界大戦後は消滅し，正確な資料に欠けるため，推定の域を出ない。

参 考 文 献 （註 釈）

1　沖野舜二・秋山泰他「徳島県史」（第一巻）1964年３月・徳島県史編纂委員会

河野幸夫他「徳島市史」（第一巻）1978年10月・徳島市史編纂室

2　註１と同じ。他に

福井好行「徳島の歴史」1973年５月・山川出版社

三好昭一郎他「阿波の歴史」1975年５月・講談社

佃実夫「徳島の歴史散歩」1974年８月・創元社

徳島県高等学校教育研究会地歴学会編集「徳島県郷土事典」1974年１月・地歴学会事務局

3　「お花畠屋敷の庭園について」（徳島市史だより第３号）1977年３月・徳島市史編纂室

4　「忠英様御代御山下絵図」『徳島市史別巻地図絵集』1978年10月・徳島市史編纂室

5　註４に同じ

6　註４に同じ

7　佐賀県立九州陶磁文化館編「国内出土の肥前陶磁」1984年10月・佐賀県立九州陶磁文化館

8　佐賀県立九州陶磁文化館編「窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷」（肥前地区古窯跡調査報告書）1984３月

9　佐賀県立九州陶磁文化館編「百間窯・樋口窯」（肥前地区古窯跡調査報告書第２集）1985年３月

10　佐賀県立九州陶磁文化館編「南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯」（肥前地区古窯跡調査報告書第３集）1986年３月

11　佐賀県立九州陶磁文化館編「楠木谷窯・小溝上窯」（肥前地区古窯跡調査報告書第４集）1987年３月

12　佐賀県立九州陶磁文化館編「白磁の美」（中国・朝鮮・日本・現代）1986年10月・佐賀県立九州陶磁文化館

13　港区麻布台一丁目遺跡調査会「郵政省飯倉分館構内遺跡」1986年３月，五十嵐彰「瓦」の項

14　豊田進著「阿波の焼物・大谷焼」1969年４月・日本陶磁協会徳島支部

15　豊田進著「阿波の陶磁」（陶磁選書・５）1974年９月・雄山閣

16　古泉弘著「江戸の考古学」（考古学ライブラリー・48）1987年４月・ニューサイエンス社

17　大橋康二著「鍋島藩窯の京焼風陶器・上・中・下」1983～1984「セラミック九州７～９」・佐賀県立九州陶磁文化館

18　渡辺誠著「物資の流れ－江戸の焼塩壺」（季刊「考古学」第13号）1985年11月・雄山閣

19　河原正彦著「京焼」（陶磁体系26）1979年５月・平凡社

20　徳島県文化財調査概報「大鳴門橋架橋関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査」1985年１月・徳島県教育委員会

21　常石英明著「日本陶磁器の鑑定と観賞」1985年４月・金園社

22　註16に同じ

23　註16に同じ

24　註19に同じ

25　註15に同じ

7．文献からみた徳島城御花畠
―特に御殿と庭園について―

(1) 遺跡の位置

今般，徳島県武道館並びに弓道場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の対象となった御花畠は，旧徳島城西ノ丸の西側城壁の外側にあった。

東は徳島城西の丸に接し，北は助任川，南は寺島川（現在のJR徳島駅構内にあった川）に臨み，西は俗称「瓢箪堀」（ひょうたんぼり）をへだてて，出来島に続いていた。徳島城築城当時，この地区は「瓢箪島」といって，寺島・徳島・出来島・福島・住吉島・常三島と共に「阿波七島」と呼ばれて，徳島城下の中枢部を占めるところに位置していた。

(2) 遺跡の名称－御花畠の意義

一般に「御花畠」といえば，ここにあった庭園の事のように理解されている。

しかし，藩の編さんした『阿淡年表秘録』①（以下「秘録」と略称する）によると，御花畠と呼ばれた所には，庭園のほかに「御花畠御屋敷」とか，「御花畠御殿」とも呼ばれたかなり大規模の建物群があったことがわかる。『秘録』には，これらの建物を「御花畠御屋敷」又は「御花畠御殿」と書きあらわしているが，時には単に「御花畠」とのみ表記したものもある。しかし，その記述を読むと，それが庭園の意ではなく，御屋敷又は御殿を含めたもの，いわば御花畠全体を指す名称であることが容易に読みとることができる。

(3) 遺跡の歴史－その成立から消滅までの経過

御花畠の歴史に述べるに当たって，まず信頼のできる史料としては，前掲の『秘録』が唯一つあるにすぎない。

しかもこの『秘録』には，御花畠に関する記録が18項目あるが，その何れもが御屋敷あるいは御殿に関するものばかりで，庭園に関するものは一つもない。もちろん御屋敷とか御殿と表記されているなかに，そこにあった庭園も含まれているものと思われるが，具体的に庭園そのものを内容としたものはない。

それ故，庭園に関するものは別の史料によるとして，ここでは『秘録』の記録をたどって御屋敷（御殿）の成立から消滅までの歴史的経過を述べることとする。

① 藩体制時代の歴史的経過

まず，成立の時期であるが，『秘録』によると，

「南溟院殿（綱矩）　元禄元年（筆者註1688）9月　御花畠御普請出来」とある

これでおよその見当がつくが，ここでいう普請（ふしん）とは，当時は石垣，塀，堀，土塁などをつくる土木工事のことで，建物を建てる，いわゆる建築工事は「作事」（さくじ）といい分けていた。

いずれにしても，この時に御花畠と称せられる徳島城の一施設ができた事にはまちがいない。

ただ，作事つまり建築作業が，その後直ちに着手されたものと思われるが，正確な御屋敷建物の竣工の時期は，確定できない。

「宝永6年（注・1709）11月14日　下総守君②病気ノ為　御退身。万次郎ト御改名　御花畠御屋敷へ入リナサレル。」

とあるので，この頃には御屋敷が整備されて，公子の病気保養所となっていた事がわかる。

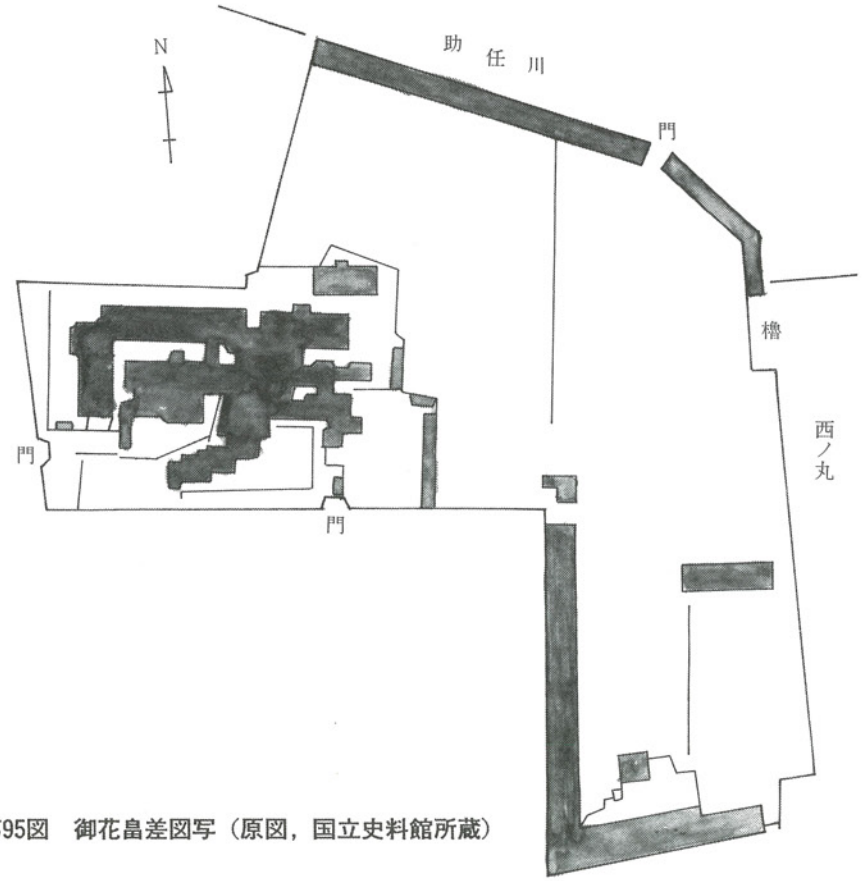
その後，12年ほどして，

「享保6年（1721）閏（うるう）7月朔日（1日）之夜丑刻（午前4時）瓢箪島青山助左衛門宅ヨリ出火，風烈シク御花畠御殿ヨリ西ノ丸御番所マデ焼失－中略－御花畠御長屋六軒焼失，南之方折廻リ御長屋ハ残ル－後略－」

とあって，御花畠御殿は南の折廻り長屋を残して全焼している。この記事から考えると，「御花畠差図③（第95図）は，焼失前の御屋敷の図であろうと思われ，この差図の作成時期もおおよその見当がつくようである。

「承国院殿「宗員」　享保13年（註1728）6月8日　公④御花畠へ入リナサレル」

とあるので，類火で焼失した御花畠の建物は，直ちに再建工事が行われて，復興されたもの



第95図　御花畠差図写（原図，国立史料館所蔵）

がわかる。

『秘録』の御花畠に関する記録は，

「良遷院殿（治昭）　文化８年（註・1811）蜂須賀本次郎君⑤御花畠御殿ヨリ当分徳島御屋敷へ御引移」

を最後として，それ以後はまったくわからない。そこで，別の史料⑥によってみると，

将軍家から迎えられて，徳島藩主となった斉裕は，幕府の陸軍総裁の要職につき，兵制の洋式化を推進した。当然の事ながら徳島藩でも外国から洋式兵器を購入し，徳島城内や城下に調練場を設けて，盛んに洋式調練を行った。

慶応３年（1867）英国公使パークスが来徳したとき，徳島城内に設けられた調練場でイギリス式調練を見せた。この城内の調練場が，かつての御花畠をこわして造成したものとすれば，御花畠の消滅時期は，徳島藩が洋式調練法を採り入れた安政４年（1857）か，あるいはそれに極めて近い時期ではなかったかということができる。

以上を要約すると

○1688年（元禄元）に基礎工事が完成した。

○その後２～３年のうちに御屋敷の建物が建ちそろった。

○1721年（享保６）に折廻り長屋を残して建物はすべて焼失した。

○数年を経ないうちに御屋敷は再建された。

○その後，1811年（文化８）まで，使用された記事が『秘録』に記載されている。

○確実な時期は特定できないが，1860年（万延１）ごろに，すべての施設をとりこわし，洋式調練場となった。

以上のような経過をたどって，明治初期の藩体制の解体を迎えた。

ただ，『秘録』の中に，次のような注目すべき記録がある。

「峻徳院殿（至鎮）　元和４年（注1618）閏正月６日　青山助左衛門秀頼ニ追腹⑦，妻慈照寺御花畠御屋敷へ召サルー後略」

これは，上掲の「御花畠御普請出来」の元禄元年よりさかのぼる70年前。徳島築城後70年，このころすでに御屋敷があって，それを御花畠と呼んでいたようである。「御花畠差図」にあるような大規模の御屋敷（御殿）ができる以前に，ここに何等かの建物があった事になる。（17世紀ごろの陶器片が多数出土した事と考え合わせて，見のがせない記録として，あえて付記した次第である。）

②　廃藩後，発掘調査にいたるまでの経過

藩体制の崩壊と同時に，旧徳島城の全施設は国有となり，陸軍省がこれを管轄した。ところが1875年（明治８），軍施設としては不用となったので，城の建物や用具類を競売に付して，民間に払い下げた。跡地は蜂須賀家が買収して，同家の私有地となった。ただ，調練場（旧御花畠）まで，その中に含まれていたかどうかは，定かでない。

徳島監獄の設置　1987年（明治22）５月，もとの御花畠跡の調練場に，徳島監獄（のちの徳島刑務所）が設置された。この工事で御花畠全域の遺構は，更にまた大きく攪乱されてし

まったものと考えられる。

徳島刑務所焼失　1945年（昭和20年）７月，第二次世界大戦の末期，米空軍機による徳島空襲のとき，刑務所の全施設は焼失した。間もなく現地で再建されたが，焼跡整理作業によって御花畠遺構は三たび攪乱を受けた。

徳島刑務所の移転と跡地整理　1971年（昭和46）徳島刑務所は入田町へ移転された。その跡地は再利用のため，レンガ積みの高塀の内にあった事務所，監房，工場，療養室，調理場，倉庫などの全施設は，ことごとく取りこわした。その廃材のうち可燃物は，各所に10×10m深さ10mの大穴を掘って，その中で焼却した。また，コンクリート片などは，大穴の中に投棄して埋めた。筆者もこの作業に立会したが，この撤去作業で，埋蔵されていたと思われる旧御花畠の遺構は，またまた大きな攪乱を受けたことになった。

市立体育館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施　この調査は徳島市教育委員会が実施したが，種々の事情によって，体育館建設予定地だけに限り，東西と南北の方向に直交する各一条のトレンチ（一部拡幅）を掘って調査したに止どまったにすぎなかった。

以上が，明治以後，今回の発掘調査にいたるまでの経過の概要である。

付　御花畠庭園

(A) 史　　料

御花畠にあったと伝えられる庭園に関する史料はきわめて少ない。そのうち信頼できるものとしては，

○　御花畠庭園十五勝（仮題）

これは藩儒新居水竹（1813～1870）が漢詩文で綴ったもの

○　御花畠景観目録

これは旧藩士で，かつて御仕置処書記を務めた板東源十郎喜吉が，廃藩後の1875（明治8）に書き残したもの

○　御花畠御屋舗差図

これは，旧藩時代御庭方御用を代々務めた旧藩士堤家（中小性格4人扶持支配10石）の家に伝わったもの。95cm×98cm

B 景　　観　　主要施設とその名称

御花畠景観目録には，合計53項目にわたる記載がある。これを私なりに分類してみると，

○　門

香風竇（こうふうとう）－竇とは埋め門のことで，西の丸と御花畠との間にある石垣の中に作った門。その遺構な今も石垣の中で見ることができる－

拉鬼門（らきもん）連理門（れんりもん）御待合御門　凌波門

○　堂や亭

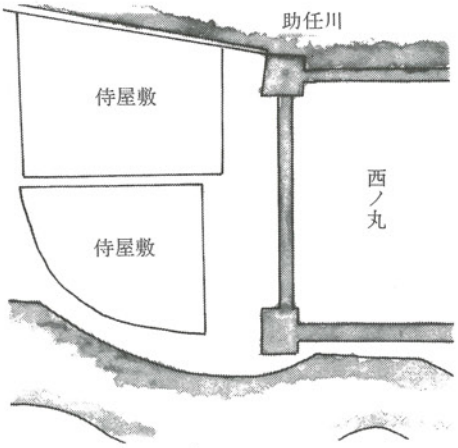
閑雲堂　尚素庵　幽致亭　千秋閣　勿棄庵（ぼっきあん）　玉虹亭　好暑亭　含霜堂　錦春楼　風琴閣　采芳（御茶屋）

○　橋

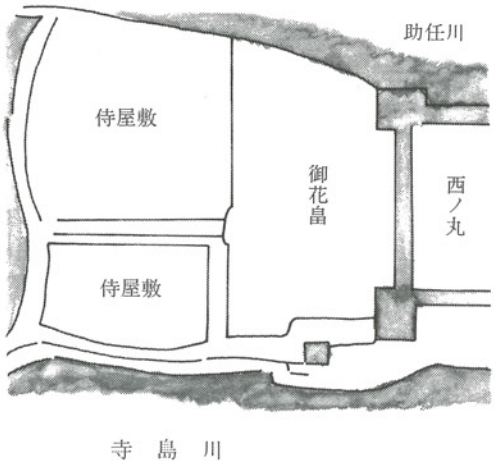
擬門橋（ぎもんきょう）　携琴橋（ていきんきょう）　知春橋（又の名鶯橋）　如箴橋（じょかんきょう）　模車橋　吹波橋　停車橋　祖谷見橋（いやみばし）

○　築山・坂・林

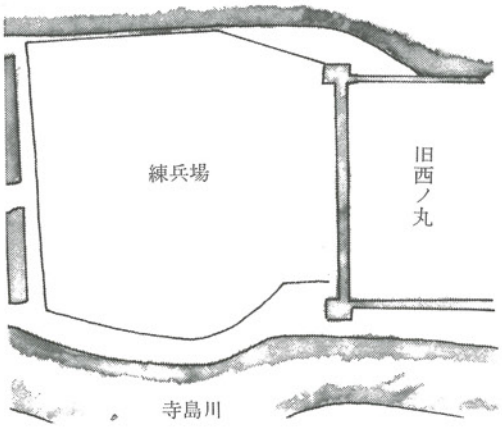
濯々坂（せんせんさか）　紅繡林（こうしゅうりん）　望旭峯（ぼうきょくほう）　弄珠台（ろうしゅだい）　鶴坂　香風台



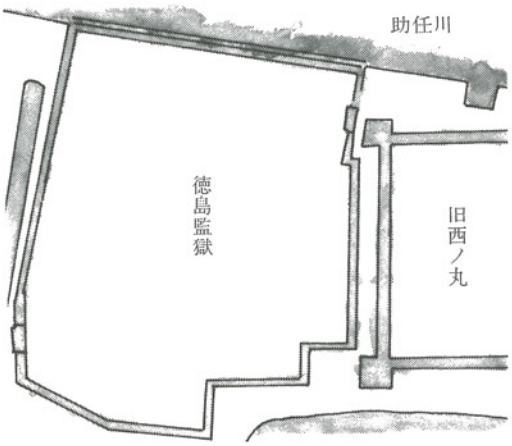
1.忠英様御代御山下絵図
（1620～1650年ごろ）



2.綱矩様御代御山下絵図
（1678～1727年ごろ）



3.徳島藩御城下絵図
（1870年ごろ）



4.新設当初の徳島監獄
（1889年）

第96図　御花畠と助任川岸線の変遷

○　その他

石敢当（せきかんとう）蓼嘯廬の碑　風月　団露　省耕　　如期夫（螺旋状の水車）碁盤石　諸国之松，泉，池，滝　御飼鳥囲場　御鷹部屋　御花壇など

さて，このような目録はあるが，それが御花畠のどこに，どのように配置されていたものか，一向にわからなかった。ところが今回の発掘調査現地説明会の際に，徳島県造園学会主宰の福原健生氏によって，詳細な庭園絵図が公開され，その全貌が明らかになった。

原図は新蔵町片山頼三氏所蔵，その写しが徳島市史編さん室にあるので，室長浜利喜雄氏のご好意を得て，借用することができた。

なお，その絵図の中から景観目録にあるものだけを抽出して，筆者が作図したのが第96図である。

注１　『阿淡年表秘録』　藩主斉昌の命を受けて，藩士中山茂純が編集した，天正13年（1585）から天保14年（1843）までの258年間の編年体の年表

注２　藩主光隆の弟隆喜の長子隆長で，のち父の兄隆重の養子となった。

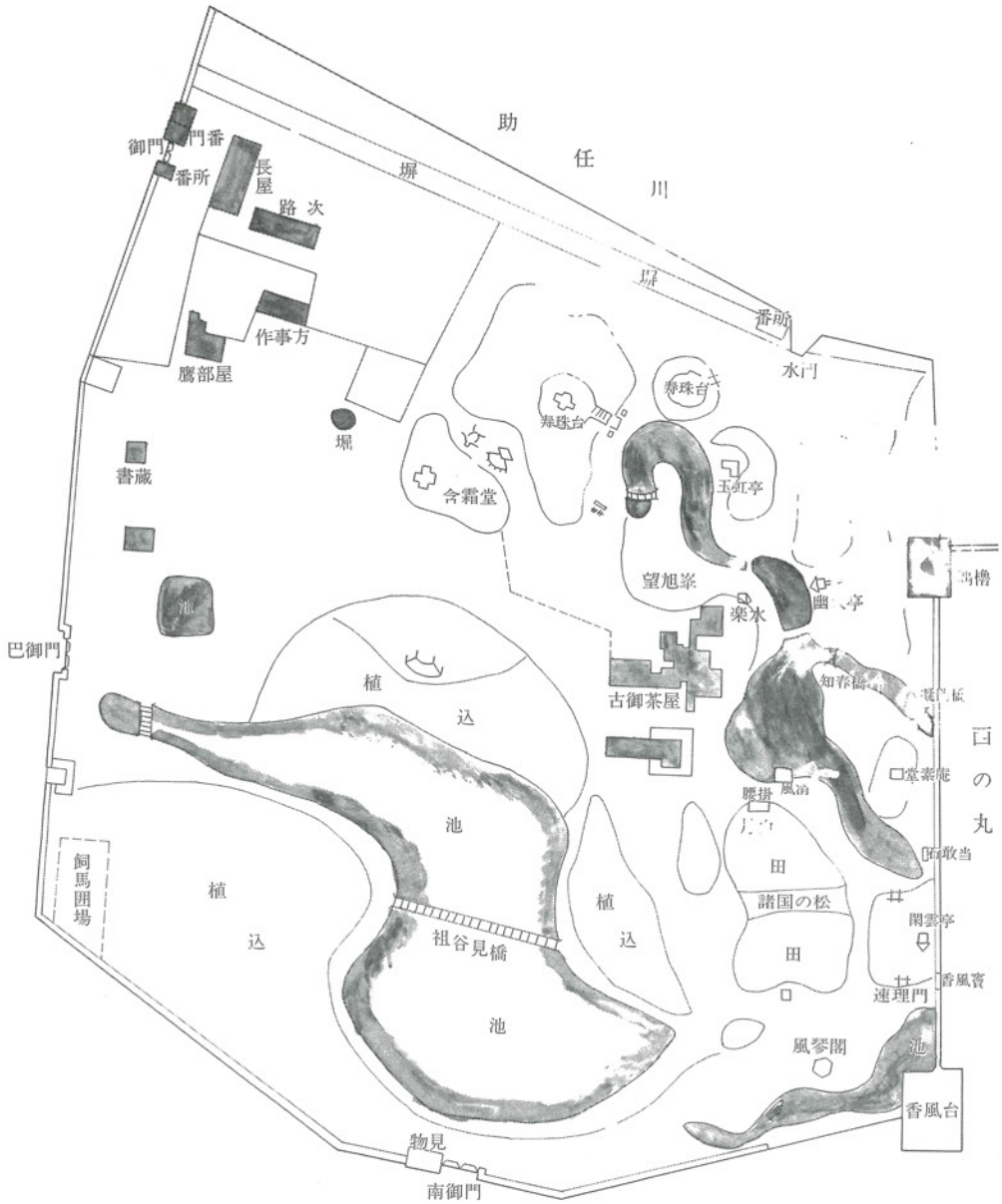
注３　国立史料館所蔵「蜂須賀家文書」第1300号

注４　藩主宗員

注５　藩主綱矩の五男隆寿の曽孫隆寛

注６　徳島史学会編集『とくしま歴史散歩』1972年発行　295Ｐ「文久二年に洋式調練」
　　徳島新聞社編『徳島近代史１幕末・維新編』1970年発行　213Ｐ「英公使徳島訪問」

注７　追腹とは腹を切って殉死すること



第97図　御花畠庭園絵図写（原図，片山頼三氏所蔵）

第1表　的　場　地　点

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	9.9 3.4 5.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，高台はやや内傾し，畳付も内傾している。呉須は藍色で磯付海草文。 18c代
2	碗	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや厚手でやや内湾しながら外上方に外反している。呉須は藍色で扇文，内面見込み渦巻文か？ 18c代
3	蓋	8.5 2.0(つまみ) 3.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	つまみを内面より内湾させ，端部を丸くおさめている。体部はやや内湾しながら外方に開いている。端部は丸くおさめている。呉須は群青がかった藍色，草花文，口縁内面墨吹手。 18c末～19c前半
4	蓋	8.6 3.0(つまみ) 2.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	つまみはやや内湾しながらまっすぐ立ち，端部は尖り気味に丸くおさめている。体部はゆるやかに内湾しながら外反し，端部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色で，こうもりと唐草文，内面見込み寿，口縁内面渦巻文。 18c末～19c前半
5	皿	14.0 9.8 3.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく外反し，斜上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色で，内面に笹と雪，外面唐草文，蛇ノ目凹形高台。 18c末～19c前半
6	皿	19.0 — —	黄灰色 (胎土に白砂黒粒を含む)	緑がかった黄灰色	瀬戸	体部は内湾しながら外上方に外反させ，口縁端部はやや肥厚させ，斜上方に平担面をつくっている。鉄釉の渦巻文馬の目皿。 18c代
7	皿	9.2 6.6 1.3	浅黄橙色 (胎土に石英クサリ礫を含む)		土師質	体部は内湾しながら外上方に開く，口縁端部は内側より丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，板状圧痕。
8	壺	6.9 — —	黄灰褐色	外面 灰白色 内面 黄褐色	京焼	体部はやや楕円形を呈した球形状を呈し，直した口縁部がつき，内面口縁部と体部境に水平の蓋受けの突起が取りつけられている。貫入がみられ，菊文。
9	甕	— 21.9 —	灰色 (胎土に黒粒白砂を含む)	外面 褐釉 (自然釉)	備前	ロクロ痕が明瞭に残っている。底部は上げ底で屈曲しながら外上方に開きながら立ち上っている。大甕の底部と思われる。底部は中央

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						が高い上げ底。
10	鉢	— 8.4 —	灰褐色	外面 オリーブ褐色 内面 灰褐色	瀬戸	見込み及び底部外面にロクロ痕を明瞭に残し，体部はやや内湾しながら上方に立ち上っている。底部は平底，体部下半に1条の段をもっている。
11	瓶	— 3.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，高台は上げ底気味，内面及び高台無釉。 呉須は藍色で草文か？
12	猪口	5.4 5.9 7.8	黄灰白色	緑灰色	京焼	体部は直線的に内傾し，口縁端部は内湾して丸くおさめる。底部は上げ底，口唇部釉ハギ体部下半が最大径の筒形。
13	擂鉢	22.2 — —	赤褐色		備前	体部はやや内湾して斜上方に立ち上がり，口縁部は上下に肥厚させて平担面を形成し，2条の凹線をめぐらしている。内面にも1条の凹線をめぐらしている。内面13条単位の櫛目描き。
14	徳利	— 7.4 —	赤褐色	外面 暗褐色	大谷	体部はやや内湾し，外上方に立ち上っている。高台は体部より屈曲させ，厚みをもった台形。釉は外面のみで，高台下半無釉，ロクロ痕を明瞭に残している。 18c後半～19c前半
15	灯明皿	9.8 4.0 1.7	黄灰白色	緑味をおびた黄褐色	美濃・瀬戸系	底部は平底で体部はゆるやかに内湾し外方に開いている。口縁端部は直線状に外反し，端部は丸くおさめている。燈芯受部は内面より大きく内湾し端部を三角形状に尖り気味に丸くおさめている。外面のみ施釉，貫入あり。
16	灯明台	6.4 — 5.2	赤褐色	暗褐色	大谷	脚部はやや細長く「ハ」字形にゆるく外反している。受部は脚部から大きく外反し，端部をかるくつまみ上げている。底部は上げ底。底面無釉。 18c後半～19c前半
17	灯明台	— 3.3 —	赤褐色	暗褐色	大谷	脚部は「ハ」字形に裾広がりで，底部はヘラ削りした直線状に外反する皿をつけており，端部は屈曲して，上方に立ち上がり端部を丸くおさめている。底部は上げ底，高台下半底面無釉。 18c後半～19c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
18	灯明台	6.4 5.0 4.5	黄灰褐色	緑灰黄色	美濃・瀬戸系	脚部下半より下は無釉，脚部は短かく上下に「ハ」字形に大きく開き，受部は外方に大きく広げ端部は丸くおさめている。高台は面取りを行って「く」字形を呈しており，底部は平底。釉は外面のみで貫入がみられる。
19	灯明台	— 5.4 —	黄灰褐色	淡緑黄褐色	美濃・瀬戸系	脚部は短かく「ハ」字形に大きく開き，底部をやや折りかえしている。底部は平底。釉は外面のみで高台無釉。
20	軒丸瓦	11.8（直径）	灰黒色		瓦	内区「卍」文のヘラ切り成形。瓦当部周縁は2cmで表面に銀粉塗布。
21	軒丸瓦	14.8（直径）	灰黒色 （石英，黒粒を含む）		瓦	内区「卍」文のヘラ切り成形。瓦当部周縁は2.1cmで表面に銀粉塗布。

第2表　射場地点　第1層

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	6.7 2.8 3.0	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	乳白色	伊万里	白磁小碗。体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は低く三角形。
2	皿	— 16.0 —	黄灰白色 （胎土に黒粒白砂，石英を含む）	オリーブ黄色	美濃・瀬戸	体部は大きく水平に広がり，高台は幅広く台形を呈している。高台無釉，内面見込み砂目跡がみられる。貫入あり。
3	徳利	— 7.9 —	赤褐色 （胎土に白砂雲母を含む）	黒褐色	大谷	体部はやや内湾しながら直線上に斜上方に立ち上っている。高台は体部より段をもって屈曲させ，内傾させた高台。内外面ともロクロナデの痕跡を残している。 18c末～19c前半

第3表　射　場　地　点　　川跡覆土上部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	— 5.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら外上方に開き，高台は内湾し，丸くおさめている。断面はU字形。呉須は藍色と朱色の赤絵，内面見込みに五弁花の唐草文，外面蓮弁文，底裏面に「富貴長春」の銘。 18c中頃
2	碗	9.1 4.9 6.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台付近は内湾し，体部中ごろよりわずかに内湾して上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台はやや内傾し，畳付を丸くおさめている。呉須は淡い藍色，鳥草文，高台底部釉ハギ 17c末
3	碗	11.6 4.5 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	やや厚手でゆるく内湾しながら外上方に立ち上がり，端部は丸くおさめている。高台は内湾している。釉は外面淡緑色，内面灰白色の青磁碗，呉須は藍色口縁内面四方襷文。 18c中
4	碗	8.7 4.1 5.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾しながら斜上方に立ち上っており，口縁端部は内側から丸くおさめている。高台は高くわずかに外反している。内外面とも貫入あり，呉須は青みがかった藍色，宝珠文。
5	碗	— 6.7 —	赤褐色 (胎土に黒粒を含む)	黒褐色	唐津	体部は球形状を呈し，高台は外面をヘラ削りにより下半は内傾している。釉は内面濃いこげ茶色。外面黒褐色刷毛目，削り出し高台。 18c代
6	碗	— 3.1 —	黄灰褐色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰褐色	京焼系	体部は球形を呈し，厚手。高台は上げ底高台内外面とも貫入あり。淡黒灰色と黒褐色でもって松文。
7	碗	11.2 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	京焼系	体部は球形を呈し，端部は丸くおさめている。内外面とも貫入あり。
8	碗	12.2 5.2 7.8	黄白色	淡黄色	美濃・瀬戸系	体部下半は内湾し，体部中ごろよりやや内湾しながら斜上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は高くやや外反し，畳付は丸くおさめている。内外面とも施釉，貫入あり。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
9	蓋	— 3.2 (つまみ) —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は薄く内湾しながら外反している。つまみは内面より内湾させ，外上方に開き，端部は内面より丸くおさめている。呉須は藍色で瓔珞文。 18c中
10	蓋	8.5 3.1 (つまみ) 1.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	つまみは内側より内湾させ垂直に立ち上っている。端部は内側より丸くおさめている。体部は球形状を呈し，端部は丸くおさめている。呉須は藍色で寿字霊雲文，口縁内面四方襷文。 18c末
11	蓋	12.0 — —	淡茶褐色	茶褐色	不明	体部はやや内湾しながら外方に開き端部は内側をやや肥厚させ，受部に平担面を作っている。
12	皿	— 12.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	厚手で体部は大きく外反し，直線的に延びている。高台は非常に低い。外面は緑色の青磁。高台底部は無釉で蛇ノ目高台。内面に木ノ葉の陰刻文。 17c中？
13	皿	11.8 6.4 3.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	白磁皿。体部は内湾しながら外上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。高台は大きく内湾させ畳付を丸くおさめている。型押し成形の口縁輪花，亀甲文，底部外面ハリ支えあり。 17c末～18c初
14	皿	12.8 4.2 3.6	灰白色 (胎土に黒粒白砂を含む)	オリーブ淡緑色	伊万里	体部はやや内湾しながら斜上方に開き，端部は丸くおさめている。高台は削り出しで内傾した台形。呉須は淡い群青色，草文。内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
15	皿	15.3 8.7 3.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青緑白色	伊万里	青磁皿。体部は2段に屈曲して斜め上方に立ち上がり，口縁部は屈曲させて上方に立ち上がり，端部は内側に折り丸くおさめている。高台は低く三角形。口縁輪花，底部外面にハリ支えが1か所あり。 18c
16	皿	12.2 7.6 2.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾し立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。高台は低く三角形。呉須は藍色で内面八卦文，外面星座文。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
						18c代
17	皿	10.2 7.2 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾し，口縁端部は丸くおさめている。高台は非常に低く蛇ノ目凹形高台。口縁輪花，呉須は藍色で内面見込み，松竹梅文と蓮弁文，内面側面蛸唐草文，外面唐草文，蛇ノ目凹形高台。 18c末～19c初
18	皿	9.7 6.2 1.3	黄橙色		土師質	体部はやや内湾して，体部中央で1段ゆるく屈曲させ，外上方に開いており，端部は尖り気味に丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底裏面に「三」の墨書。
19	皿	11.6 4.4 2.4	黄橙褐色		土師質	体部は内湾しながら外上方に開いている。口縁端部を丸くおさめている。内面に1条の沈線をめぐらしている。底部は平底。内外面ともロクロナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部外面ヘラ削り，口縁部ススト付着。
20	皿	9.4 6.6 1.3	黄橙褐色		土師質	体部はわずかに内湾して外方に開いて立ち上っている。口縁端部は，尖り気味，底部は平底。内外面ともロクロナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，圧痕がみられる。
21	皿	12.1 5.8 2.1	淡褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，端部は丸くおさめている。底部は凸凹を残した平底。内外面ともロクロナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部ヘラ削り，口縁部内外面ともスス付着。
22	皿	8.5 5.2 1.6	淡褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上っている。内面にロクロナデの痕がみられる。底部はやや丸底気味の平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
23	壺	11.5 － －	赤味がかった灰褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	黒茶褐色	美濃・瀬戸	体部はロクロ痕を残した球形を呈し，頸部は中段に稜をもってやや開き気味に立ち上っている。口縁部はやや外反させ，内面を肥厚させ，端部を丸くおさめている。内面は緑がかった灰褐釉。
24	壺	－ 9.6	赤褐色		備前	体部は球形を呈している。底部は平底でロクロ痕を残している。内外面ともナデ，外面に

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		—				黒斑あり。底部外面ロクロ糸切り離し。
25	鉢	40.2 — —	淡灰赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	褐色	唐津	褐釉の上に白釉の刷毛目鉢。体部はやや内湾させて上方に立ち上がり口縁部は「L」字形に外反させ，端部は稜をもってやや垂下させ，口唇部は外上方に丸めている。 17c後半～18c前半
26	鉢	— 8.8 —	黒灰色	赤味がかった褐色	京焼系	体部は内湾しながら外上方に立ち上っている。高台は高く，内面が傾斜した四角形。高台畳付砂付着。
27	鉢	13.2 — —	灰黄橙色 (胎土に黒粒を含む)	黒褐色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾しながら，底部に向って細くなる筒形を呈し「く」字形に大きく外反し，口縁部を内外に肥厚させている。口縁端部に2カ所の耳をつけている。注口はくびれ部に付着させている。釉は光輝のある黒褐釉。内外面ともロクロナデ。
28	鉢	22.2 — —	灰褐色 (胎土に雲母を含む)	茶褐色	美濃・瀬戸系	体部は内湾した球形を呈し，頸部はやや外反，口縁部は内外に大きく肥厚させ，口唇部に面を形成し，2条の凹線をめぐらしている。ロクロメを明瞭に残す。
29	鉢	15.7 — —	灰白色	黒褐色	不明	体部はゆるく内湾し，口縁部は体部より屈曲させ斜上方に開いている。端部は内面を肥厚させて丸くおさめている。外面釉だれがみられる。
30	猪口	— 3.6 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里系	体部はゆるく内湾しながら外上方に立ち上っている。高台は内面より傾斜したU字形。外面に釉ハゼがあり，小碗とも考えられる。
31	仏飯具	— 5.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	脚部は下方にやや広がっており，裾部は屈曲して大きく外反している。呉須は藍色，高台脚部に花弁文。凹形高台で高台内面施釉。 17c後半～18c前半
32	仏飯具	9.6 4.6 5.7	灰白色	明緑灰色	伊万里	身部は球形を呈し，口縁端部は丸くおさめている。脚部は短かく稜をもって「ハ」字形の脚。呉須は青灰色で，口縁部と体部下半に各々1条の線をめぐらしている。凹形高台。高台部分無釉。
33	土鍋	26.4	赤褐色		土師質	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
		— —	(胎土に黒粒白砂を含む)			は直線的に内傾し，端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，外面にスス付着。
34	焼塩壺蓋	7.9 5.5 2.1	赤褐色 (胎土に黒粒白砂を含む)		土師質	頂部はやや丸みをもち，体部は丸く外方に延びており，口縁端部は内湾し，受部に1段の稜をもつ。外面ナデ，内面に布目痕があり，型押し成形。 18c中
35	軒丸瓦		灰褐色 (胎土に白砂黒粒，雲母を含む)		瓦	内区は「巴」文でやや尾が長い。焼きはあまく瓦当部周縁欠損，連珠文は直径 0.9cmで推定18個並ぶ。 18c代
36	煙管雁首	長さ 6.0 火皿 1.7			銅	脂返しの湾曲は小さい，脂返しから肩部の太さは変らず直線的，火皿はやや変形。火皿の下から羅宇まで1枚の銅板を巻いて成形。古泉編年V期。 18c後半
37	銅銭	直径 2.4 厚さ 0.1 穴長 0.6			銅	「寛永通宝」周縁 2mm，六は角で 0.75mmの端取り，「通」の字「ユ」

第4表　射場地点　　川跡覆土下部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
1	碗	11.8 4.4 6.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	やや厚手で球形を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台はやや高く，内外面から傾斜したU字形，高台畳付砂付着。呉須はくすんだ藍色，芦文。内面見込み五弁花コンニャク判。 18c前半
2	碗	— 5.2 —	灰白色	灰色	伊万里	くらわんか手，陶胎染付か？体部はやや厚く球形状を呈している。高台はやや高く内湾した三角形。呉須はにごった藍色，山水文，内外面とも貫入あり。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
3	碗	－ 5.1 －	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里 (陶胎染付)	体部は球形を呈し，高台はやや高くやや外反した台形。釉は白釉のかけ流しで灰色を呈する。呉須はにごった藍色，唐草文，内外面とも貫入あり。 18c代
4	碗	11.6 6.8 6.2	青味をおびた灰白色	灰白色	伊万里	体部はやや内湾し外上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は高く畳付内面より削り。呉須はくすんだ青色と藍色，内外面及び内面見込み連木竹，高台部○×文底裏面「富貴長春」の銘。 18c後半
5	碗	9.8 3.6 5.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら，斜上方に立ち上がり，口縁部をゆるく内湾させて端部を丸くおさめている。高台は幅がせまく内湾させている。呉須は藍色，外面寿と蝙蝠，高台境蓮弁文内面見込み轡文。 18c後半
6	碗	11.0 4.4 6.5	褐灰色 (胎土に黒粒を含む)	黒褐色	唐津	黒褐色釉の上に白釉の刷毛目碗。体部はゆるく内湾しながら高台から外反し，大きく屈曲させて直線的に斜上方に立ち上がる。口縁端部は内傾より丸くおさめている。高台はやや湾曲させている。口縁部近くに明るい青の唐草文。 18c前半
7	碗	－ 4.2 －	灰色 (胎土に黒粒白砂を含む)	灰褐色	唐津	灰褐の上に白釉の刷毛目碗。体部は球形状を呈し，高台はやや外反したU字形を呈し，端部は丸くおさめている。高台畳付無釉。 18c代
8	碗	－ 4.4 －	赤褐色 (胎土に雲母を含む)	褐色	唐津	褐釉の上に白釉の刷毛目碗。体部はやや厚手でやや内湾しながら外上方に立ち上っている。高台は削り出し高台で内傾した台形，高台内面施釉，高台畳付砂付着。 18c代
9	碗	－ 5.2 －	灰白色	黄褐色	京焼風陶器	体部は内湾し，斜上方に立ち上っている。高台は低く内傾した台形。釉に貫入あり。底部外面に直径 0.8cmの円圏をめぐらし「新」の刻印がみられる。 17c後半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
10	碗	— 5.0 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄褐色	京焼風陶器	体部は内湾しながら，外上方に立ち上っている。高台はやや内湾した台形。釉に貫入あり。 17 c 後半
11	碗	11.0 — —	黄色がかった灰白色	黄色がかった灰白色	京焼風陶器	体部はやや厚手で下半は内湾している。体部上半はやや内湾して斜め上方に立ち上っており，口縁端部を反り気味に丸くおさめている。 17 c 後半
12	碗	11.5 5.4 7.6	黄褐色 (胎土に黒粒を含む)	黄褐色	京焼	体部下半は球形状，上半は斜上方に立ち上っている。高台は高く外反し，畳付付近は内湾している。
13	碗	11.2 — —	灰白色	緑灰白色	京焼	体部はゆるやかに内湾しながら上方に立ち上っており，口縁部はわずかに内傾させ，端部を丸くおさめている。釉に貫入あり，黒釉による岩に松文，外面にロクロ痕を明瞭に残している。
14	碗	— 5.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑灰白色	京焼	筒型腕。体部は高台より大きく開き，L字形に屈曲して上方に上っている。高台は低く幅の広い外面L字形にヘラ削り。畳付は平担。釉に貫入あり，高台無釉。
15	碗	— 5.0 —	灰褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	オリーブ灰黄色	京焼(?)	体部は内湾しながら斜上方に立ち上っており，高台は低く2段に内傾している。高台は削り出し高台。
16	蓋	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は水平に開き，口縁部付近で内湾している。つまみは木の葉文をつけている。呉須は藍色，菊唐草文，つまみ付近は花弁，つまみは木ノ葉。 18 c 代
17	蓋	10.0 1.5 (つまみ) 3.2	灰褐色	黒茶褐色	唐津	体部は直線的に外反し，端部に内傾させ受部は直径 3.6 cm，高さ 3 mmの円形状に肥厚させている。凝宝子状のつまみを有する。釉は外面のみ。中心部と外部を別づくり，底部糸切り離し。 17 c 後半
18	皿	15.0 5.4 3.4	灰白色	わずかに緑味をおびた灰白色	伊万里	全体にぽてっとした感じで体部はゆるく内湾しながら大きく外反し，口縁部付近で屈曲させて更に外反している。口縁端部は丸くおさめている。高台径は口縁の $\frac{1}{3}$ で内傾した高台，

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						高台畳付砂付着。呉須はにごった藍色で内面に渦巻文，見込みに牡丹の唐草文様。 17c前半。
19	皿	9.2 3.5 2.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら斜上方に大きく外反しており，口縁部はやや内湾し，端部を内傾したやや尖り気味。高台は内傾した台形。高台無釉，削り出し高台，見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半。
20	皿	11.0 4.2 2.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら，直線的に開き中ごろでゆるく屈曲して外反し，端部は丸くおさめている。高台は内傾した台形。高台は削り出し高台，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
21	皿	21.6 11.8 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら外上方に開き，端部は丸くおさめている。高台はやや高く，内傾したU字形を呈する。呉須は藍色，山水図。 17c末
22	皿	13.6 9.4 2.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に開いている。高台は低く内傾した三角形。呉須は藍色で内面流水文，外面四方襷文。 18c代
23	皿	13.6 8.4 3.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，斜上方に立ち上っている。口縁端部外側より丸くおさめている。高台は低く三角形，底部内面，中央にハリ支えが1か所ある。呉須は藍色，内面にひょうたん，外面唐草文，外面底部にハリ支え1か所。 18c後半
24	皿	— 14.7 1.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら大きく外反している。高台径 は大きく，低い内傾した高台。呉須は藍色，内面松竹梅と蛸唐草文，外面唐草文，底裏面に格子文，外面底部にハリ支え。 18c後半～19c前半
25	皿	12.5 4.8 3.4	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	赤黄褐色	唐津	銅緑釉皿。体部はゆるやかに内湾しながら外上方に開き，端部は丸くおさめている。高台は低く幅をもち台形，高台内面に兜巾あり。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，外面胴部下半無釉。 17c後半～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
26	皿	10.0 3.0 1.8	淡黒褐色	赤褐色	唐津	口縁端部は丸くおさめている。底部は平底でやや内湾しながら大きく開いている。釉は内面のみで褐釉，口縁部スス付着，灯明皿か？ロクロ成形で底部ロクロ糸切り離し。
27	皿	11.6 6.5 1.6	茶褐色	茶褐色	唐津	体部は内湾しながら湾曲して立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。内面および外面口縁部のみ施釉。底部は平底でロクロ痕を明瞭に残す。内面および外面口縁部のみ施釉。底部外面ロクロ糸切り離し。
28	皿	— 9.4 —	黄灰白色	乳白色	美濃・瀬戸系	体部は直線上に大きく開き，高台はやや高くU字形，高台畳付は丸くおさめている。釉に貫入あり，高台底部砂付着，二次焼成を受けている。
29	皿	13.8 7.7 2.2	浅黄灰白色 (胎土に雲母黒粒を含む)		土師質	体部は内湾しながら斜上方に大きく開き，口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部外面ヘラ削り，底部は平底。
30	皿	13.2 — 2.2	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部外面ヘラ削り，口縁部スス付着，灯明皿に使用か？
31	皿	13.1 7.8 2.0	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁端部を内側より丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部外面ヘラ削り，口縁部スス付着，灯明皿に使用か？，底部は平底。
32	皿	12.7 7.0 1.5	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部にスス付着，灯明皿に使用か？，底部は平底。
33	皿	12.0 5.5 2.4	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら大きく外反し，口縁端部は丸くおさめている。底部は凹凸があるが平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部にスス付着，灯明皿に使用か？。
34	皿	11.8 7.0 2.2	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁端部は丸くおさめている。底部は上げ底気味の平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						切り離し，底部外面板状圧痕，口縁部にスス付着，灯明皿に使用か？
35	皿	10.0 5.6 1.7	浅黄灰白色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口唇部をやや肥厚させ，端部を丸くおさめている。内面にロクロナデによる凹凸がみられる。底部はやや上げ底気味の平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
36	皿	9.8 7.4 1.3	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はわずかに内湾し，外上方に開き，口縁端部は内側より丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面板状圧痕，口縁部スス付着，灯明皿に使用か？
37	皿	9.8 6.5 1.6	浅黄灰白色 (胎土に石英黒粒・クサリ礫を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面板状圧痕，口縁部スス付着，灯明皿に使用か？
38	皿	9.6 6.2 1.5	浅黄灰白色 (胎土に黒粒雲母を含む)		土師質	体部はわずか内湾しながら外上方に立ち上っており，口縁端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底気味の凹凸。内外面ともナデ，内面指おさえ，底部外面ロクロ糸切り離し。
39	皿	6.6 4.3 1.0	浅黄灰白色 (胎土に黒粒石英を含む)		土師質	体部は直線的に斜上方に開き，口縁部を折り，外反させている。端部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。口縁部内外にスス付着。灯明皿に使用か？
40	皿	5.9 4.0 0.8	浅黄灰白色 (胎土に黒粒石英を含む)		土師質	体部はやや内湾し外上方に開く。口縁端部は内側より丸くおさめている。底部はやや上げ底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。内面見込み指おさえ。
41	壺	— 7.4 —	灰褐色 (胎土に黒粒白砂を含む)	褐色	備前	体部はやや内湾し，外上方に立ち上っている。高台は体部より屈曲させ厚みをもった台形。釉ハゼあり。内外面とも釉があり，釉ハゼがみられる。
42	甕	27.2 — —	灰褐色 (胎土に白砂黒粒，雲母を含む)	茶褐色	備前	体部は外下方に大きく開いている。外面にヘラによる削り痕が明瞭，口縁部は内外に肥厚させ平担面をつくっている。頸部は口縁部よ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
						り段をもって斜下方に広がる。内外面ともロクロ痕あり。
43	鉢	19.2 — —	乳白色 (胎土に黒粒を含む)	明緑灰色	伊万里	外面釉は明緑白色の青磁鉢。体部は球形を呈し，口縁端部は丸くおさめている。口縁外面に1条の稜線をめぐらしている。口縁部に1つの稜線がみられる。
44	鉢 (片口鉢)	17.5 7.9 9.8	赤褐色 (胎土に石英を含む)	暗褐色	唐津	体部は内湾しながら外上方に開き，体部中ごろより屈曲して上方に立ち上っている。口縁は外側へ折りかえして肥厚させ丸くおさめている。体部中ごろに注口がつけられている。高台は削り出し，高台下半に段をもった台形，暗褐色釉の上に褐色釉を施している。底部に砂付着，内面見込みに砂目痕3か所。 17c後半
45	鉢	22.0 9.5 8.4	赤褐色	褐色	唐津	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁部をやや外反させて端部は丸くおさめている。高台はやや内湾した台形，釉は鉄釉の上に白釉，銅緑釉の刷毛目，内面に砂胎土目。 17c後半
46	鉢	32.6 — —	赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	褐色	唐津	体部は内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁部は「L」字形に屈曲させ外方にのばし，上方をやや肥厚させゆるく丸めている。内外面とも褐釉の上に白釉。蓮弁文，菊文 縦線文の象嵌。 17c後半
47	鉢	— 13.3 —	紫茶褐色	黒褐色	唐津	体部は球形を呈し，高台は削り出し，四角形を呈する。釉は黒褐色の刷毛目，内面見込みに重ね積みの痕あり。 17c後半～18c代
48	鉢	21.1 — —	赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	褐色	唐津	体部は球形を呈し，口縁部は外側に折りまげて肥厚させており，端部は平担面を形成している。釉は内外面とも褐釉の上に白釉の刷毛目。 17c後半～18c代
49	鉢	19.5 — —	黒灰褐色 (胎土に白砂を含む)	黄色味がかった褐釉	唐津	体部は高台部より大きく外反し，体部中ごろで屈曲して斜上方に開いている。口縁部は屈曲させ，外方に開き端部を丸くおさめている。外面にロクロ痕を残す。 17c後半～18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
50	鉢	— 7.8 —	灰橙緑色 (胎土に黒粒雲母を含む)	オリーブ黄灰褐色	唐津	体部はやや内湾しながら外上方に開き高台は高く，外面より内傾した台形。高台内面施釉。17c後半～18c代
51	鉢	— 6.9 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑青色	不明	青磁鉢。体部は高台より斜上方に外反し，「く」字形に内湾して上方に立ち上っている。高台はU字形。貫入あり，内面見込み釉ハギ，砂付着，高台畳付砂目痕あり。
52	鉢	— 8.4 —	黄色がかった灰褐色 (胎土に雲母黒粒を含む)	黄灰褐色	京焼系	体部はわずかに内湾しながら，大きく外反し，高台は高く外面はゆるく内湾した台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，墨書によって釉ハギ部分を中心に波を描いている。
53	鉢	— 6.8 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黒褐色	美濃・瀬戸	体部は斜上方に直線的に外反している。内面にロクロ痕を明瞭に残しており，高台はやや高く内面は傾斜した削り出し台形。外面畳付は削り，内面無釉，底部外面ロクロ糸切り離し。
54	鉢	20.8 18.7 3.2	にぶい橙色 (胎土に石英雲母・黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に立ちあがり，口縁部はやや両端を丸め，口唇部に平担面を作っている。底部はやや上げ底。内外面ともナデ，底部に1条の凹線をめぐらしている。
55	猪口	— 2.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾し外上方に立ち上っている。高台は低くやや外反している。呉須は藍色で墨弾き，貫入がみられる。 17c中ごろ？
56	猪口	6.6 2.6 3.7	灰白色	わずかに青味をおびた灰白色	伊万里	体部は直線的に斜上方に立ち上がり，口縁部は外反し端部を丸くおさめている。高台はゆるく内傾している。呉須はわずかに青味をおびた灰色，雁文，端反り形。 17c後半～18c初
57	猪口	4.8 2.0 2.2	灰白色	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台は三角形。 17c後半～18c前半
58	猪口	7.0 3.0 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台付近は内湾し，体部中ごろよりやや内湾しながら外上方に立ち上っている。口縁部はやや外反させ端部を丸くおさめている。高台は低くやや内湾させた三角形。高台畳付に砂付着。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
59	猪口	— 2.1 —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上がる。呉須は藍色で松文，高台は碁底高台。
60	瓶	— 6.7 —	灰白色	灰白色	伊万里	体部は高台より逆「く」字形に屈曲しており，高台は外反したU字形，呉須はややにごった藍色，柳文。 18c初～18c中
61	瓶	— — —	灰白色	灰白色	伊万里	体部は「ハ」字形に外反し，折りかえして底部に向って狭くなる。内面無釉。
62	徳利	4.6 — —	灰白色 (胎土に白砂を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	筒形の頸部で体部は頸部より「ハ」字形に広く，口縁部は外に折りかえして端部を丸くおさめている。二次焼成を受けている。 18c代
63	盤	14.6 11.0 1.6	赤褐色		備前	体部は内面中央をくぼませ，ゆるく内湾しながら大きく外反し，端部は肥厚させて丸くおさめている。高台は低く内面より内傾した三角。底部内面にロクロ痕が残っている。外面上部ナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
64	擂鉢	30.9 14.0 10.7	茶灰色 (胎土に黒粒白砂を含む)	赤褐色	備前	体部はやや内湾しながら斜上方に開き，口縁部は外反させ，外方に肥厚させて，面をつくっている面に2条の凹線がめぐらされており，端部は丸くおさめている。内面に10条／2.3cmの櫛目描き。
65	灯明皿	9.4 7.5(受部) —	黒灰褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	茶褐色	美濃・瀬戸	体部はロクロ削りで水平に近く外反し，端部はゆるやかに内湾し，端部を外方に丸くおさめている。燈芯受部はやや高く外反し，端部を丸くおさめている。
66	焼塩壺蓋	5.0 8.3 2.5	橙色 (胎土に石英雲母・黒粒を含む)		土師質	上部はやや丸みをもち，体部は膨らみをもって下り，口縁部は受部に面取りのへこみがある。端部は尖り気味に丸くおさめている。外面ナデ，内面布目痕あり，型押し成形。 18c中
67	焼塩壺蓋	6.0 7.8 2.1	灰褐白色 (胎土に石英雲母・黒粒を含む)		土師質	上部は平担で体部境を屈曲させ，体部はふくらみをもっている。口縁部は受部を面取りしてへこませており，端部を丸くおさめている。外面ナデ，内面布目痕あり，型押し成形。 18c中

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
68	軒丸瓦	直径 15.4	黒灰色 (胎土に雲母を含む)		瓦	「巴」文。瓦当部分周縁幅 1.9cm，連珠文は直径 0.7 cmで18個と思われる。 18 c 代
69	軒丸瓦	直径 15.0	灰褐色 (胎土に白砂雲母を含む)	表面黒褐色	瓦	内区は「巴」文で尾が長い。瓦当部分周縁幅 1.9 cm，連珠文は直径 0.9 cmで18個か。 18 c 代
70	煙管 雁首	6.0 (長さ) 1.5 (火皿) 0.8 (肩部径)			銅	脂返しの湾曲は小さく，火皿の下から羅宇まで 1 枚の銅板を巻いて成形，火皿はやや小さく縦に深い。 古泉編年Ⅳ期，18 c 前半
71	煙管 雁首	3.4 (長さ) 1.4 (火皿) 1.0 (肩部径)			銅	火皿はやや小さく浅い。脂返しの湾曲はほとんどなく，直角にとりつけられ，短かい。1 枚の銅板を巻いて成形。 古泉編年Ⅵ期，19 c 代
72	煙管 雁首	5.0 (現長) — —			銅	火皿欠損，浅い。脂返しの湾曲はほとんどなく，直角にとりつけられている。1 枚の銅板を巻いて成形。 古泉編年Ⅵ期，19 c 代
73	煙管 吸口	6.2 (現長) 0.8 (肩部径) 0.4 (吸部径)			銅	肩部と吸口端欠損，肩部から吸口にかけてわずかに細くなっている。1 枚の銅板を巻いて成形。 古泉編年Ⅴ期，18 c 後半
74	煙管 吸口	5.8 (現長) 0.8 (肩部径) 0.3 (吸部径)			銅	吸口部欠損，肩部は水平で 1.3cm，肩部から吸口に向って細くなっている。1 枚の銅板を巻いて成形。 古泉編年Ⅴ期，18 c 後半
75	銅銭	2.45 (直径) 0.1 (厚さ) 0.6 (穴長)			銅	「寛永通宝」鋳くずれが激しい。穴は四角，0.5 mmの端取り。「通」の字「コ」になっている。
76	銅銭	2.35 (直径) 0.1 (厚さ) 0.6 (穴長)			銅	錆が激しく銘不明

第5表　射　場　地　点　　築　地　肩　部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	10.8 4.1 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状に外上方に立ち上っている。端部を丸くおさめている。 高台はやや内湾するU字形。呉須は藍色でコンニャク判による桐文と簡文，高台内「太明年製」銘，高台畳付削り。 17c末～18c前半
2	碗	9.6 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色で菊に唐草文。 18c代
3	碗	9.3 4.1 7.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台よりやや内湾しながら上方に立ち上がり，端部は丸くおさめている。高台はやや高く内傾しながらU字形を呈している。呉須はにごった藍色，文様不明。
4	碗	10.9 4.1 5.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形を呈し，端部は丸くおさめている。高台は低く内湾させている。呉須は藍色，内面見込み松竹梅，口縁内面四方襷文，外面七草手唐草に若松。 18c代
5	碗	8.0 2.4 5.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	筒形碗。体部は高台から水平に開き，L字形に屈曲して直線的に斜上方に立ち上っている。口縁部は内側より丸くおさめている。高台径は口径に比べて小さく内外面より内傾させた三角形。呉須は淡い藍色，竹文。 18c後半
6	碗	6.7 3.6 3.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	伊万里	体部はゆるく球形状を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台は低い。呉須はうすい藍色，コンニャク判の桐文，凹形高台。 18c後半
7	碗	— 6.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	やや厚手で体部は球形を呈し，高台はやや内傾したU字形。呉須はにごった藍色，内面見込み牡丹文，外面不明。
8	碗	11.4 4.1 7.3	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	褐釉に白釉の刷毛目碗。体部は内湾しながら外上方に立ち上っており，口縁端部は丸くおさめている。高台はやや外反し，畳付は削り出し，全体に貫入あり。 17c後半～18c前半
9	碗	— 5.2 —	褐灰色 (胎土に石英を含む)	褐色	唐津	褐釉に白釉の刷毛目碗。体部は内湾しながら，外上方に立ち上っている。高台は削り出し高台で三角形。高台下半無釉。 17c後半～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
10	碗	10.6 — —	灰茶褐色 (胎土に黒粒を含む)	褐橙色	唐津	褐釉に白釉の刷毛目碗。体部はわずかに内湾しながら外上方に立ち上っており，口縁端部を丸くおさめている。外面に貫入。 17c後半～18c前半
11	碗	— 5.1 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄色	京焼風陶器	体部は大きく内湾して立ち上がり上半部はわずかに内湾してほぼ上方に立ち上っている。高台は削り出し高台で台形。内外面とも細かい貫入あり。底部外面に直径0.8cmの円圏をめぐらし「森」の刻印。 17c後半
12	碗	11.6 — —	黄灰白色	オリーブ黄灰色	京焼	体部はやや内湾しながら上方に立ち上っており，体部上半に3段の浅い凹線がめぐらされている。口縁端部は丸くおさめている。黒褐色と藍色によりカキツバタ文，内外面とも貫入あり。
13	碗	11.3 — —	灰褐色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰褐色	京焼	体部下半は大きく内湾し，上半部はやや内湾しながら外上方に立ち上っている。口縁端部は内面より丸くおさめている。内外面とも細かい貫入がみられる。
14	碗	8.0 2.8 3.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	不明	体部は内湾しながら外上方に丸く立ち上っている。端部を丸くおさめている。高台は低く内湾している。内外面とも細かい貫入もみられる。
15	皿	13.4 4.8 3.3	灰白色	淡青色	伊万里	青磁皿。体部はやや内湾しながら大きく外反し，口縁端部を丸くおさめている。高台は幅広く台形を呈している。見込み蛇ノ目釉ハギ，削り出し高台，高台無釉。 17c中～後半
16	皿	— 9.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	体部は球形を呈している。底部は平底でロクロ痕を残している。見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
17	皿	— 4.4 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ淡褐色	京焼	体部は直線的に外反し，高台は削り出しで台形。内面貫入あり，高台内面に「粟田」印。
18	皿	— 10.0 —	黄色味がかった灰白色 (胎土に白砂黒粒を含む)	オリーブ黄色	京焼	体部は直線的に大きく開き高台は高くやや内傾した台形。底部外面釉なし。
19	皿	12.2	淡褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開いている。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		5.5 2.0				口縁端部は丸くおさめられている。内面ロクロ痕を残している。底部はやや凸凹を呈した平底。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部スス付着，灯明皿か？
20	皿	11.9 5.3 1.9	淡褐色		土師質	体部はゆるく内湾しながら，大きく外反し，口縁部は内側に内湾して丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，口縁部内外面ともスス付着，灯明皿か？
21	皿	11.2 7.5 1.9	褐灰色		土師質	体部は斜上方に直線的に開いている。口縁端部は丸くおさめている。内面体部と底部境に1条の稜線をめぐらしている。底部はやや上げ底である。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，板状圧痕。
22	皿	10.4 3.9 1.9	赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)		土師質	体部はゆるく内湾しながら立ち上がり，体部中ごろで内側に屈曲させて斜上方に立ち上がっている。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，底部外面ロクロ糸切り離し，外面にスス付着，灯明皿か？
23	皿	9.1 6.9 1.3	淡褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁端部は丸くおさめている。内面にロクロナデ痕の凹凸を明瞭に残している。底部はやや平底，内外面ともナデ，内面見込みにロクロナデ痕が明瞭。
24	皿	7.1 5.9 0.8	淡褐色		土師質	体部は斜め上方に直線的に立ち上がっている。端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底である。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部内面に円形の墨痕が1か所みられる。
25	皿	7.0 5.2 0.9	淡褐色		土師質	体部はやや内湾しながら斜め上方に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部内面に円形の墨痕が1か所みられる。
26	皿	6.5 4.6 0.8	黄橙褐色		土師質	体部はやや内湾して短かく立ち上がり端部はもち上げ気味に丸くおさめている。底部は上げ底気味で厚い。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
27	皿	6.2 5.0 0.7	淡褐色		土師質	体部は短かく内湾させており，口縁端部をつまみ上げ丸くおさめている。内面にロクロ痕を明瞭に残している。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，体部内面に円形の墨痕が1か所みられる。
28	壺	— 7.7 —	赤味がかった褐色 (胎土に白砂雲母，黒粒を含む)	赤褐色	備前	体部は角ばりながら縦長の球形を呈する。外面及び底部内外面ロクロ痕が明瞭。底部はやや上げ底気味。内外面ともロクロ痕が明瞭。
29	甕	44.9 — —	灰褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	紫がかった赤褐色	備前	体部は下半に向って直線的に外反し，口縁は内外に大きく肥厚させ口唇部に平担面をつくっている。口縁端部に3条の凹線をめぐらす。 18c代
30	鉢	— 11.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑色	伊万里	体部は直線的に大きく開き「L」字形に屈曲して外上方に立ち上がっている。高台は畳付部をヘラ削りした台形を呈する。高台畳付ヘラ削り，体部下半に砂胎土目跡4か所。
31	鉢	— 9.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，外上方に立ち上がっている。高台はやや高くU字形，呉須は藍色で竹文，内面に大きく貫入あり。
32	鉢	23.5 9.2 9.9	赤褐色 (胎土に黒粒石英を含む)	黒褐色	唐津	体部は内湾しながら外上方に開き，口縁部は外に折りかえして肥厚させ，口唇部に平担面を形成している。高台は台形を呈し，外面下半をヘラ削り。底部は中央部がやや上がっている。内外面とも鉄釉。 17c後半
33	鉢	30.8 — —	灰黒褐色	オリーブ褐色	唐津	体部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁は内外に大きく肥厚させている。口唇部は平担面をつくり，白釉の刷毛目を施している。胴部中央に獅子頭を配している。体部オリーブ褐色に白釉の象嵌刷毛目，口縁端部に白釉の波状刷毛目。 17c後半
34	鉢	24.8 23.0 3.6	茶褐色 (胎土に白砂黒粒，雲母を含む)		土師質	体部は直線的に斜上方に立ち上がっている。口縁端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底である。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面に焼けがみられる。
35	猪口	7.1 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	端反り樋型，体部はわずかに内湾して斜上方に立ち上がり，口縁部をわずかに外反させ，端部を丸くおさめている。高台部は欠損して

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						いる為不明。呉須は藍色，木の葉文。 17ｃ後半
36	猪口	5.9 2.9 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁端部をゆるやかに外反させ丸くおさめている。高台は低く内面より傾斜したU字形。呉須は藍色で紅葉と鹿。 17ｃ後半～18ｃ前半
37	猪口	6.6 2.7 4.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	端反り碗型。体部はやや内湾し，斜上方に立上がっており，口縁部は屈曲して外反している。口縁端部は丸くおさめている。高台は台形で畳付砂付着。 17ｃ後半～18ｃ前半
38	香炉	6.6 3.2 5.0	灰白色	緑色	不明	青磁。体部はロクロ痕の凹凸を明瞭に残し，ほぼ真上に立ち上がり，口縁部は内側に内平に折りまげ端部を丸くおさめている。高台の内面中央がでっぱった形になっている。外面貫入あり，高台に砂付着。蛇ノ目凹形高台。
39	火鉢	— 21.8 —	赤褐色 (胎土に白砂黒粒，雲母を含む)		土師質	体部はゆるやかな球形状を呈し，高台は外反し高台下半に1条の凹線をめぐらす。高台畳付は丸くおさめている。窓が1か所，把手が3か所つけられ，高台に1.2cmの穿孔。
40	火鉢	23.5 — —	橙褐色 (胎土に白砂を含む)		土師質	体部は薄く直線状に外反し，口縁部はやや内湾して上方に立ち上がっている。端部は内面より丸くおさめている。表面は橙褐色で内外面ともスス付着。
41	灯明皿	9.4 5.2 1.3	赤黒褐色		不明	体部はゆるく内湾しながら外上方に立ち上がっている。燈芯受部は内面より内湾して立ち上がり受部のくぼみが3か所つけられている。底部外面ロクロ糸切り離し，外面ヘラ削りの後ナデ，3か所の脂抜き部分がみられる。
42	ミニチュア	4.0 3.0 1.4	灰褐色	黄橙色	土師質	体部はゆるく内湾し，口縁部は内側に1条の凹線をめぐらしている。底部は平底。釉は内面のみ，おもちゃか？
43	軒瓦	8.2 (直径)	灰褐色 (胎土に白砂雲母を含む)		瓦	周縁はなく12弁の菊文の型押し成形で頂部は円形を呈している。丸部はやや平担な形をしている。焼成は堅牢。棰木先瓦か？
44	軒瓦	8.0 (直径)	灰褐色 (胎土に白砂雲母，黒粒を含む)		瓦	菊文でヘラ切り成形，焼成はあまく，丸部は水平になっている。周縁はなく，中房は放射状の刻み，21弁の菊文棰木先瓦か？

第6表　武道館地点　　第　1　層

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	— 3.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや青味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾して外上方に開き，高台は低く幅広い。呉須は藍色で梅文，蛇ノ目凹形高台。 18c代
2	碗	11.6 3.7 6.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや厚く，ゆるやかに内湾し，斜上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや外反したU字形。呉須は藍色，つる唐草文，内面見込み五弁花コンニャク判，高台畳付砂付着。 18c前半
3	碗	10.4 3.8 5.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら斜上方に立ち上っている。高台は畳付を丸くおさめた四角形。呉須は藍色，内外面及び見込み松竹梅文，底部内面「太明年製」，口縁内面四方襷文。 18c中～18c後半
4	碗	— 5.4 —	灰白色	明緑灰色	伊万里	陶胎染付か？体部は厚く内湾しながら斜上方に立ち上っている。高台は外面を内湾させた台形。高台畳付砂目痕。呉須は緑がかった藍色，草文。 18c代
5	碗	10.6 — —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや厚く内湾しながら外上方に立ち上っている。口縁端部は内外面とも丸くおさめている。呉須はやや薄い藍色，縦線文，口縁内面格子文。 18c末～19c初頭
6	碗	11.6 4.1 3.5	赤褐色	黄褐色	唐津	体部は2段に屈曲して2段に内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁部は湾曲し，やや内湾している。高台は低く，断面は台形。内面見込みに胎土目痕2か所，削り出し高台。 17c初頭
7	碗	— 5.4 —	赤褐色	乳白色	唐津	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がり，高台との境に1つの凹線をめぐらしている。高台はやや高く端部に丸みをもった台形。釉は外面乳白色，内面淡白褐色の白釉かけ，高台畳付無釉，兜巾高台。 17c中～17c後半
8	蓋	12.7 5.2 (つまみ) 3.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は水平に開き，屈曲して大きく内湾して斜下方に外反し，口縁部は外へ屈曲させている。つまみはやや高く外反し，端部は丸くお

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						さめている。釉は白色，赤紫，緑，青色の色絵。梅に斜格子文，つまみ内面に「福」。 17c後半
9	蓋	8.3 — 2.1（身のみ）	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	青味がかった灰白色	伊万里	つまみは帯状のものを山形に貼りつけたもので，体部はやや平担な面から体部中ごろで大きく湾曲して下方に延び，受部を屈曲させ，かえりを作っている。端部は内湾させて尖り気味である。呉須はうすい藍色，縦線文に寿，武道館地点川跡覆土上部No.111と合致。 17c後半～18c前半
10	蓋	— 4.6（つまみ） —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	青味がかった灰白色	伊万里	つまみはやや高く，内面より内湾させて外反させ，内側より端部を丸くおさめている。体部は大きく外反し，下半で屈曲し，下方におりている。呉須は藍色，唐草文，内面見込み松竹梅文。 18c中～18c後半
11	蓋	7.8 3.4（つまみ） 1.8	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	青味がかった灰白色	伊万里	つまみは薄く内面からゆるく内湾し，体部はゆるく内湾しながら外方にのびている。端部は丸くおさめている。呉須は藍色，外面くわい文，内面口縁渦巻文，つまみ内面「生田」銘。 19c初頭
12	皿	— 4.4 —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	明緑灰色	伊万里	青磁皿。体部はロクロナデによる凹凸を明瞭に残し，ゆるやかに内湾しながら外上方に開いている。高台径は狭く台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台無釉，畳付に砂付着。一部に鉄釉が付着。 17c中～18c前半
13	皿	— 4.5 —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	淡青緑色	伊万里	青磁皿。体部はわずかに内湾し，斜上方に開いている。高台は削り出し高台で台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台畳付砂付着。 17c後半～18c前半
14	皿	— 4.6 —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し外方に開いている。高台は内外面より傾斜した台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台畳付砂付着。 17c後半～18c前半
15	皿	12.8 7.6	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾し外上方に開き，口縁端部は丸くおさめている。高台は低く台形。口縁褐釉に

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		2.7				よる口紅。呉須は藍色で川蟬と魚のプリント。不明。
16	皿	— 5.0 —	灰褐色	浅黄色	唐津	体部は高台より斜上方に大きく開き，段をもって屈曲し，上方に開いている。高台は削り出しで内側より外傾した台形。内面ナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，兜巾高台，高台畳付砂目痕。 17c初～17c中
17	皿	— 3.8 —	灰褐色	褐色	唐津	体部は内湾しながら直線的に斜上方に外反している。高台は低く外反した台形。外面胴部下半無釉，内面見込みに3か所の砂目痕，兜巾高台。 17c前半
18	皿	— 6.2 —	灰褐色	灰黄褐色	京焼風陶器	体部はやや内湾しながら外上方に開いている。高台はまっすぐな台形。釉に貫入あり。高台内面に直径1.7cmの円圏をめぐらし，「小松吉」の刻印あり。 17c後半
19	皿	— 6.9 —	黄灰白色	浅黄橙色	京焼もしくは京焼風陶器	体部はやや内湾し斜上方に立ち上っている。高台は直下した台形。内面に1条の稜線をめぐらしている。釉は外面のみで，貫入あり。高台内面に直径1.5cmの円圏をめぐらし，くずした刻印がみられる。
20	皿	11.2 6.3 2.0	浅黄橙色		土師質	体部はやや内湾しながら屈曲して外上方に開いている。口縁部はゆるく屈曲して外反させ，端部を丸くおさめている。底部はやや上げ底気味の平底で，体部境で丸く段を取っている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し底部外面に板状圧痕。
21	皿	10.1 6.7 1.4	浅黄橙色		土師質	体部はやや内湾しながら斜上方に直線的に立ち上がり，口縁端部は内側より丸くおさめている。底部は平底で，体部近くに1条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面に板状圧痕。
22	皿	— 7.6 —	灰白褐色 (胎土にクサリ礫，黒粒を含む)		土師質	体部は内湾しながら斜上方に立ち上っている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
23	壺	23.1 — —	灰赤褐色 (胎土に石英,黒粒,雲母を含む)	茶褐色	備前	体部は湾曲しながら外反し，頸部は短く，斜下方に外傾している。口縁部は内外面両方に肥厚させ，丸くおさめている。口唇部に平担面をもつ。外面のみ施釉，内外面ともロクロ痕が明瞭に残る。
24	壺	— 9.6 —	赤褐色 (胎土に石英を含む)	黒褐色	大谷	体部はほぼ垂直で，1条の凹線をめぐらしている。頸部は「く」字形に内湾し，口縁部は外反し，端部を肥厚させ丸くおさめている。 19c前半
25	甕	— 17.2 —	淡赤褐色 (胎土に石英を含む)	紫褐色	備前	体部から内湾しながら立ち上っており，底部は低い台形でやや上げ底となっている。ロクロ成形痕がみられる。高台畳付及び高台底部無釉。
26	甕	14.0 — —	灰褐色	暗赤褐色	備前	体部はやや内湾し，口縁部は「く」字形に外反し，斜上方に立ち上がり，端部を丸くおさめている。釉は内面暗赤色，外面は暗赤褐色，内外面ともロクロナデ。
27	鉢	30.5 — —	赤褐色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	象嵌鉢。体部はゆるく内湾しながら斜上方に外反し，頸部で屈曲し大きく外反し，口縁端部は丸くおさめている。口縁内面に1条の凹線をめぐらしている。褐釉の上に白釉の刷毛目，口縁内面波文，体部唐草文の象嵌。 17c代
28	鉢	— 10.5 —	赤褐色	褐色	唐津	体部は直線的に斜上方に立ち上っている。高台は内側より外傾した台形で，畳付付近ヘラ削り。褐釉の上に白釉の刷毛目，貼りつけ高台。 17c後半～18c前半
29	鉢	— 7.2 —	灰赤色	暗赤灰色	唐津	体部はやや内湾しながら外上方に開いている。高台は途中でゆるく屈曲して直線的に畳付についている。内面褐釉の上に白釉の刷毛目，内面見込み重ね積み跡あり。 17c後半～18c前半
30	鉢	29.2 — —	灰赤褐色 (胎土に石英,黒粒を含む)		備前	体部は1つの稜線をもち，直線的に斜下方に内傾している。口縁端部に3条の凹線をめぐらしている。口縁部は斜下方に開き，外側を肥厚させて1つの面をつくっている。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
31	注口鉢	14.8 — —	黄灰白色	茶褐色	美濃・瀬戸	体部は内湾し，球形状を呈し，口縁部は体部から「く」字形に外反させ斜上方に立ち上がり，端部を内側に肥厚させ丸くおさめている。口縁端部に断面円形の把手がつけられている。外面ロクロ痕あり。
32	猪口	7.6 2.5 3.1	灰白色	緑がかった灰白色	伊万里	体部は大きく内湾し，外上方に湾曲しながら立ち上っている。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめている。高台は低く台形。呉須は淡い藍色で草花文，高台に砂付着。 17c中
33	猪口	6.8 3.2 4.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	伊万里	体部は直線的に斜上方に立ち上がり，口縁端部は屈曲して外反し，端部は丸くおさめている。高台は低く外反している。呉須は藍色，木の葉文，貫入あり，高台畳付砂付着。 17c後半～18c前半
34	猪口	7.9 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾させて立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。呉須はにごった藍色，外面蓮文，内面口縁四方襷文。 18c中～18c後半
35	香炉 (脚)	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡青緑色	伊万里	青磁の香炉の獣脚で，3脚で構成されているものと思われる。脚底面は斜めになり，陽刻による文様を施している。
36	仏飯具	— 3.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	伊万里	受部はやや内湾し大きく外反している。脚部は下方にやや外反し，裾部は「ハ」字形に大きく外反している。高台は凹形。呉須は淡緑色がかった藍色。 17c後半～18c初
37	擂鉢	25.9 — —	褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)		備前	体部はやや反りながら斜上方に延び，口縁部は外側に肥厚させて面をとっている。口縁端部は丸くおさめている。口縁端部に2条の凹線をめぐらしている。内面11条単位の櫛目描き。
38	擂鉢	— 17.3 —	赤褐色		備前	体部は直線的に外反している。底部はやや上げ底気味，高台畳付に一条の凹線をめぐらす。内面底部にヘラによる刺突あり，11条単位の櫛目描き。
39	土鍋	27.0 (つば径)	黄灰褐色		瓦質	体部は球形を呈し，幅2.2cmの鍔が体部に回さ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		— —				れている。内外面ともナデ。鍔部に1条の段をもっている。

第7表　武道館地点　　川跡覆土上部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	8.8 3.2 5.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台よりゆるく内湾し，外上方に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。高台は台形。呉須は藍色で梅花文。 17c中
2	碗	— 4.7 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	ややオリーブがかった青緑色	伊万里	青磁碗。体部は内湾し，高台は三角で畳付は平担。内面見込みに蓮花文の陰刻文，高台畳付無釉。 17c中
3	碗	9.9 3.8 5.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。体部は球形状に内湾し，口縁端部は丸くおさめている。高台はやや外反し，畳付は丸くおさめている。呉須は藍色で桐と井桁文のコンニャク判。内面見込み花文のコンニャク判。 17c末～18c中
4	碗	12.6 4.5 5.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	やや厚手で球形状を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台部は内傾し，台形。呉須はにごった藍色，つる草文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台畳付砂目痕。 17c末～18c前半
5	碗	— 4.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	体部は大きく内湾して立ち上がり，高台部分はゆるやかに内傾している。高台畳付は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，底部外面に「太明年製」。 18c前半
6	碗	— 5.0 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	㊥ 淡緑色 ㊦ 灰白色	伊万里	青磁碗。体部はやや外方に開き，屈曲して斜上方に直線的に立ち上っている。高台はやや外反し，畳付は丸く削られている。呉須は藍

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						色，内面見込み五弁花スタンプ文。底部外面渦福，高台畳付砂目痕。 18ｃ中
7	碗	— 4.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	㊥ 淡緑色 ㊦ 灰白色	伊万里	青磁碗。体部は厚手で球形状を呈し，高台は低く内面より内湾している。内面貫入あり，呉須は藍色，高台畳付は無釉。 18ｃ中
8	碗	— 4.5 —	灰白色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	㊥ 緑色 ㊦ 灰白色	伊万里	青磁碗。非常に厚手で球形状を呈し，高台は低く内側より内湾させて端部を丸くおさめている。呉須は藍色，内面見込み桜文，高台内砂付着。 18ｃ中
9	碗	— 3.4 —	灰白色	灰白色	伊万里	体部はやや内湾して立ち上がり，高台部はやや内傾しながら下り，端部はうすく丸くおさめている。呉須は藍色，外面芙容手，内面見込み立銀杏と露，底部外面「衾」の刻印あり。 18ｃ代
10	碗	10.9 4.4 6.7	やや黄色味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄灰白色	伊万里	陶胎染付。体部下半は内湾して外方に開き，屈曲してほぼ直線上に上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内湾気味の三角形。呉須はやや黒ずんだ藍色，口縁部外面四方襷文。 18ｃ代
11	碗	12.0 5.1 6.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は底部より斜上方に立ち上がり，体部上半はやや内湾しながら上方に立ち上っている。口縁端部はやや平担で丸くおさめている。高台は低く外反している。呉須は藍色，牡丹文，内面見込み松竹梅文，口縁部四方襷文，高台底部無釉。 18ｃ代
12	碗	9.9 4.4 4.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾し，口縁端部は外側より丸くおさめている。高台は低い三角形。呉須は藍色，唐草文，高台畳付無釉。 18ｃ代
13	碗	12.6 — —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑灰色	伊万里	陶胎染付。やや厚手で体部は斜上方に直線的にのびている。口縁端部は丸くおさめている。呉須は緑がかった藍色，唐草文。 18ｃ代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
14	碗	— 5.0 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑色	伊万里	青磁碗。体部は大きく内湾し，外上方に立ち上っている。高台は内傾した台形。底部外面ヘラ切り。内面ハリ支え5か所，高台底部無釉。 18c代～19c前半
15	碗	11.8 4.2 6.1	灰色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部はやや厚手でゆるやかに内湾し，口縁端部は内側より丸くおさめている。高台部は内側より内湾させた台形で畳付部は外面削り。底部外面角福か?,呉須は黒みがかった藍色，コンニャク判の丸文，底部砂付着。 18c後半
16	碗	11.2 4.6 5.1	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	くらわんか手。体部は球形状に内湾し，口縁端部は内側より丸くおさめている。高台部は内側が内湾した台形。見込み内面蛇ノ目釉ハギ。呉須は藍色，コンニャク判の丸文。 18c後半
17	碗	11.2 4.0 5.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台部より大きく開き，体部下半で大きく屈曲し，斜め上方にやや内湾しながら立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。内面見込みは中央部が上っている。高台部はやや外反し，畳付部は外面削り，呉須はにごった藍色，外面つる唐草文，口縁内面四方襷文，内面見込み五弁花コンニャク判。 18c後半
18	碗	7.6 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	筒形碗。体部はまっすぐに上り，口縁端部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，外面蛸唐草，口縁内面四方襷文。 18c中頃～末
19	碗	8.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	筒形碗。体部は垂直で口縁部は内面より丸くおさめている。呉須は藍色，窓絵，斜格子文，帆かけ船と菊文。口縁内面四方襷文。 18c後半～19c前半
20	碗	11.0 4.7 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部を内側より丸くおさめている。高台は大きく外反し畳付平担。呉須は藍色，外面垣根と芭蕉図，内面見込みひょうたんに軍配図，口縁内面四方襷文。 18c後半
21	碗	10.7 4.6	灰白色	灰白色	伊万里	体部下半は大きく内湾し，体部上半はやや直線的にのびている。高台畳付は内面より内湾

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		6.0	(胎土に黒粒を含む)			し外傾している。呉須は藍色，高台及び体部境蓮華文。体部及び内面見込み薊文。内面口縁四方襷文。 18c 末
22	碗	11.9 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部下半は球形状を呈し，上半はやや内湾しながらまっすぐ立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，寿字霊雲文，口縁内面四方襷文，射場地点川跡覆土上部No.10とペア 18c 末
23	碗	7.9 3.9 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	筒形碗。体部はほぼ水平に延び，ほぼ直角に屈曲し，上方に立ち上った筒形碗。口縁端部は丸くおさめている。高台は低くまっすぐ下りており，畳付は丸くおさめている。貫入あり，呉須は藍色，柳文。内面見込み五弁花。 18c 後半
24	碗	— 4.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。高台部は内傾し，内面は内湾した細長いU字形。呉須はやや青味がかった藍色，外面松文と唐花文様のくずし，内面見込み唐花文様のくずし，底裏面「太明年製」のくずし。 19c 前半
25	碗	— 3.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，高台はU字形を呈しており，畳付は丸くおさめている。呉須は濃い藍色，草文，底部外面「太明年製」。 19c 前半
26	碗	10.4 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は斜上方にまっすぐに開いている。口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色，外面波文，口縁内面格子波文。 19c 前半
27	碗	— 4.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら大きく外方に開いている。高台は内面より内湾した三角形。呉須は藍色，流水文，高台畳付無釉。高台内面「荒」のくずし文字。 19c 前半
28	碗	11.2 4.2 6.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部下半はゆるやかに内湾し，上半は直線状に立ち上がる。高台はまっすぐに下り，高台畳付外面削り，高台畳付に2か所の胎土痕あ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						り。呉須は黒っぽい藍色，並行文と笹文，内面見込み芝草文，口縁内面波文。 19c 前半
29	碗	11.1 4.4 5.1	灰白色	灰色	伊万里	体部はやや内湾しながら斜上方に開き，口縁部近くで屈曲しわずかに外反している。高台部は内側より外傾した台形。高台内面に切り離しの際の凹みがみられる。呉須はややにごった藍色，外面格子文，口縁内面斜格子文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台畳付砂付着。 19c 前半
30	碗	9.6 3.6 5.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部は大きく内湾して立ち上がり，体部中ごろよりやや内湾しながら斜め上方に開いている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台はやや高く外面下半削り。 19c 前半
31	碗	11.7 4.6 5.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，外上方に大きく開き，体部中央でやや内側に屈曲させて外上方に直線的に開いている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや高く外側に傾いたU字形。呉須はにごった藍色，格子文。 19c 前半
32	碗	— 4.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑色	不明	体部は球形を呈し，高台は台形。高台畳付無釉，砂付着，内外面とも貫入あり。
33	碗	11.3 4.8 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	不明	体部は高台部より大きく外反し，体部下半で内湾し，外上方に上り，口縁部付近で屈曲してやや外反する。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台部は内側より内湾し，畳付部分を丸くおさめている。赤褐，黄褐，黒灰色で鶴と花文。
34	碗	— 4.6 —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	陶胎染付。やや厚手で内湾しながら上方に立ち上っている。高台は内傾した台形。畳付砂付着。貫入あり，呉須はにごった藍色。 18c代
35	碗	— 3.6 —	黄灰色	オリーブ黄灰色	京焼系	体部はやや内湾しながら外上方に開いている。高台はやや外反する削り出し高台。内面はオリーブ黄灰色，外面は淡緑黄灰色，高台およ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						び脚部無釉，貫入あり，高台畳付砂付着。高台底部墨書あり。
36	碗	12.5 — —	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑黄色	京焼系	体部は球形状を呈し，口縁端部は丸くおさめている。貫入あり。外面白釉の平行文。
37	碗	— 4.8 —	黄白色 (胎土に黒粒を含む)	黒茶褐色	不明	天目風。体部はやや内湾しながら大きく外反している。高台部は幅広く台形。高台畳付及び高台下半無釉，高台内面施釉，高台畳付「上△」の刻印。
38	碗	11.2 5.2 7.6	黄灰色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	オリーブ黄色	不明	体部下半は球形状を呈し，上半は斜上方に直線的にのび，口縁部をわずかに外反し，端部を丸くおさめている。高台は内傾より外反させた台形，畳付外側より削り，貫入あり，削り出し高台。高台及び高台付近無釉。
39	碗	11.0 — —	黄白色 (胎土に雲母，黒粒を含む)	オリーブ黄色	不明	体部下半は球形状を呈し，上半部は直線上に上方にのびており，口縁端部は丸くおさめている。貫入あり。
40	碗	— 3.9 —	黄灰色 (胎土に白砂を含む)	オリーブ褐灰色	不明	体部はやや内湾しながら外上方にのびている。高台は内傾する台形。見込み内面中央部がもり上っている。内外面とも貫入あり，高台畳付砂付着。
41	蓋	— 4.5 (つまみ) —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はわずかに内湾して斜下方に外反している。つまみは内面より内傾させて端部は丸くおさめている。呉須はくすんだ藍色，外面蓮弁文と蛸唐草文，つまみ内面「富貴長春」銘。内面見込み松竹梅文。 18c代
42	蓋	9.6 4.2 (つまみ) 2.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	つまみは内面より内湾し，端部を外反させ丸くおさめている。体部はつまみから大きく外反し，中央で大きく屈曲させ，端部はやや内傾し丸くおさめている。呉須は藍色，外面雲と草文，内面口縁四方襷文，内面見込み文様があるが不明。 18c代
43	蓋	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は斜めにゆるやかに下り，口縁部付近で大きく屈曲し，直線的に下りている。つまみは内面よりゆるやかに内湾している。呉須は

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						藍色，外面蛸唐草文。高台付近波頭文，内面見込み松竹梅文，口縁内面四方襷文。 18c代
44	蓋	— 4.6（つまみ） —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	黄色味がかった灰白色	伊万里	つまみは内面より内湾させ，外方に開き，端部を丸くおさめている。体部は大きく外方に開き内湾させている。呉須はやや黒ずんだ藍色，市松文と丸文，内面見込み市松文。 18c後半
45	蓋	9.4 3.9 2.7	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はつまみ付近はゆるやかに下半は急傾斜で，下り口縁部を丸くおさめている。つまみ部はやや内湾しながら外上方に上り，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，外面かぶら文，内面見込みかぶら文。 18c代
46	蓋	9.5 4.4（つまみ） 2.5	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	つまみは内面より内湾しながら外反し丸くおさめている。体部はややゆるく傾斜し，口縁近くで大きく内湾して返りをつくっている。返りはほぼまっすぐに下り，端部は平担面をもつ。呉須は藍色，あやめと菊文。 18c代
47	蓋	12.2 3.1（つまみ） 3.2	灰褐色 （胎土に黒砂を含む。須恵質）	茶褐色	京焼系	ボタン状のつまみで中央部が凹んでいる。体部はやや内傾しながら大きく開き，口縁部は内面を肥厚させている。口縁部及び内面無釉。
48	蓋	7.2 — —	黄灰色	オリーブ黄色	美濃・瀬戸	体部は斜下方に大きく開き，口縁部は丸く平らにおさめている。受部はほぼ垂直であり，端部は丸くおさめている。貫入あり，内面無釉，本来はつまみがあるものと思われる。
49	蓋	8.8 4.0 1.9	黄橙色 （胎土に白砂，黒粒を含む）	乳白色	美濃・瀬戸系	体部はヘラ削りによって鋭角に2段に屈曲し，口縁部はやや下方に下り，端部は丸くおさめている。底部内面はやや上げ底でロクロ痕で明瞭に残している。つまみは粘土紐を交差させた8の字状を呈している。外面白釉の上に群青釉で彩色，ヘラ削り調整。
50	蓋	14.0 4.0（つまみ） 4.0	淡褐色 （胎土に石英を含む）	褐色	美濃・瀬戸	つまみはやや内湾しながら外方に開く。体部は直線的に開く，口縁部は体部より屈曲させて外下方に大きく開いている。櫛目描き，内面白釉あり。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
51	蓋	7.9 4.8 1.9	茶褐色	黒褐色	大谷	体部は斜め下方に延び，底辺付近でヘラ削り，口縁部は2段に段をもち，端部に向って斜下方に外反し，端部は丸くおさめている。内面見込みにひねったつまみをつけている。ロクロ成形，中央部につまみあり，内面無釉。 18c後半～19c前半
52	蓋	— 3.9 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに斜下方に湾曲させている。つまみ部は内湾しながら外反させている。呉須ににごった藍色，外面カブラ文，内面蝶文。 18c代
53	皿	13.8 4.2 3.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台部よりゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部近くで大きく外反し，端部は丸くおさめている。高台部は斜めに内傾し，ぼてっとした感じである。呉須はにごった藍色，山水図，口縁部蓮弁文。 17c後半～18c前半
54	皿	— 4.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾しており，高台部分は断面三角形で，外面より丸くおさめている。底部内面中央にわずかに兜巾状の痕跡がみられる。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台底部砂付着。 17c後半～18c前半
55	皿	12.8 4.8 3.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ淡緑色	伊万里	体部はやや内湾し外上方に外反させ，口縁部を丸くおさめている。高台はやや内傾した台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，削り出し高台，高台内部砂目痕。 17c後半～18c前半
56	皿	13.6 7.8 3.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾して立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。口縁は8～9弁の輪花文様。高台は大きく内傾している。呉須は藍色，外面唐草文，内面根付若松文，底部外面「渦福」，口縁輪花。 18c代
57	皿	— 8.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾して立ち上っており，高台部分は外面が斜め下方に湾曲しており，断面逆三角形を呈している。畳付部分は外側から内傾して削りがみられる。高台部に貫入あり，高台畳付のみ無釉。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
58	皿	11.2 6.0 2.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾しながら立ち上っている。口縁端部は外面より丸くおさめている。高台は低く三角高台。呉須は藍色，外面唐草文，内面秋草花文，底部砂付着。 18c代
59	皿	13.9 7.9 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	やや厚手でゆるやかに内湾し，外上方に開き，口縁端部は丸くおさめている。高台は低く三角形。畳付砂付着。呉須は藍色で宝づくし文，内面見込み五弁花コンニャク判。高台外面「渦福」，高台畳付砂付着，口縁輪花。 18c代
60	皿	20.0 11.0 4.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	厚手で体部は内湾し，球形状を呈している。口縁端部は丸くおさめている。高台は外側より内傾させた台形，畳付砂付着。呉須は藍色，内外面とも唐草文，内面はつる唐草文。 18c代
61	皿	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	角皿。体部は大きく内湾して立ち上がり，やや角ばった口縁端部を呈している。高台は内傾して端部を丸めている。呉須は藍色，内外面とも蛸唐草文，内面見込み唐草文，底部外面「奇…」銘。 18c代
62	皿	20.4 12.0 5.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	やや厚手で体部はゆるく内湾して，外上方に立ち上っている。口縁部は内側より丸くおさめている。高台は外方より内傾させた台形。高台畳付に4か所の砂付着。呉須は藍色，内面菊にアヤメ文，外面唐草文，底部外面「渦福」。 18c代
63	皿	— 5.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく外反し，高台は外方に開いている。畳付は削り。呉須は藍色，内面見込み花文，口縁内面四方襷文。外面蓮弁文と花文。 18c末
64	皿	10.8 6.0 2.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	不明	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。高台は内面より斜め下方に内湾させて三角高台。畳付外面削り，呉須は群青がかった藍色，七宝文，底部外面に「旭」の銘。口縁褐釉の口紅。 19c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
65	皿	— 5.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	不明	体部は球形状，高台は幅がやや広く台形。呉須は藍色，山水舟図，見込み中央部に円形のはりつけ，突起は中央うずまき状，口縁に向ってねじり輪花のようになっている。型押しか？，底裏面「生田」銘。
66	皿	12.0 4.7 3.5	灰淡赤褐色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ濃緑色	唐津	体部は高台からゆるやかに内湾し，口縁部近くでゆるやかに屈曲し，端部は丸くおさめている。高台部分は斜めに内傾し，内面はゆるやかに立ち上っている。内部内面兜巾の痕跡がみられる。貫入あり，体部下半無釉，底部外面砂胎土目痕あり。 16c末～17c初頭
67	皿	— 4.1 —	淡灰褐色	(外) 白釉 (内) 灰色がかった白釉	唐津	体部はやや内湾しながら直線状に外反し，高台は削り出し高台。高台畳付砂付着。兜巾高台の痕跡あり。 17c後半か？
68	皿	— 5.2 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ褐灰色	京焼もしくは京焼風陶器	体部はやや内湾しながら大きく外反し，高台は台形。内面見込みに円圏をめぐらしている。内外面とも貫入あり，緑黒色と赤紫色で梅文，高台下半及び高台外面無釉，兜巾高台。 17c末か？
69	皿	11.2 4.0 2.2	やや黄色味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	美濃・瀬戸系	体部はわずかに内湾し，大きく外反。口縁端部を丸くおさめている。内面及び外面口縁部のみ施釉，体部外面ヘラ削り，外面スス付着，灯明皿か？
70	皿	15.2 8.0 3.6	黄灰色 (胎土に黒粒石英を含む)	オリーブ黄白色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾しながら外上方にまっすぐ立ち上がり，口縁部は斜め上方に内傾。高台は丸く内湾。高台内面にロクロ切り離し痕が明瞭。底裏面「〇」の墨書あり，口縁部スス付着。二次焼成を受けている。
71	皿	— 9.8 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上っている。高台部分に直線的にゆるやかに内傾している。貫入あり，内面見込みに重ね積み痕あり，底部外面ロクロ糸切り離し，底裏面に「トタ」の墨書銘あり。
72	皿	9.0 4.0 1.3	褐色	茶褐色	不明	体部はゆるやかに内湾し大きく開いており，口縁端部は内側より丸くおさめている。底部は平底。底部外面ロクロ糸切り離し。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
73	甕	27.2 — —	褐黄色 (胎土に石英,黒粒を含む)	褐色	備前	体部はゆるやかに外方に開いており，ヘラによる平行線がつけられている。ロクロ痕が明瞭に残っている。口縁部は内面よりゆるやかに外傾し，内外面とも肥厚させて，口唇部に4条の凹線をめぐらしている。釉ハゼあり，内外面ともナデ。
74	甕	49.2 (最大径) — —	茶褐色 (胎土に石英,雲母を含む)	紫褐色	備前	体部外面をヘラで平行線を描いている。球形状を呈し，ロクロ痕を明瞭に残す。ロクロ成形で釉ハゼあり。
75	甕	43.2 — —	黄橙灰色 (胎土に石英,黒粒を含む)	やや黒ずんだ褐色	備前	体部は外方へ大きく開いている。ロクロ痕を明瞭に残している。口縁端部は内側より傾斜し，3条の凹線をめぐらす。口縁部は内外に大きく肥厚させ，頸部を屈曲させている。口縁部に4条の凹線をめぐらしている。ロクロ成形。
76	甕	9.8 — —	赤褐色	黒褐色	大谷	最大径が胴部上半にあり，下半は斜めにゆるく内傾している。口縁部は体部から逆「L」字形に外反させ，端部を丸くおさめている。ロクロ成形。 18c後半～19c前半
77	甕	12.0 — —	赤褐色	黒茶褐色	大谷	最大径が体部中ほどにあり，口縁部から内湾しながらゆるやかに開いている。口縁部はやや外反し，端部は平担。内外面ともナデ。内面にロクロ痕を残している。 18c後半～19c前半
78	甕	6.8 — —	黒褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	黒褐色	大谷	最大径が体部中ほどにあり，球形状を呈している。口縁部「く」字状に外反し，端部は丸くおさめている。ロクロ成形。 18c後半～19c前半
79	鉢	27.2 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑色	伊万里	青磁鉢。体部は口縁部から大きく内傾し，口縁部は屈曲し稜をもち，口縁部を下方に延ばしており，端部は丸くおさめている。 17c後半か？
80	鉢	20.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑色	伊万里	青磁鉢。体部はやや内湾しながら直線状に外反する。口縁端部は丸くおさめている。内面陽刻による菊花文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
81	鉢	15.8 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑灰色	伊万里	青磁鉢。体部はゆるやかな「く」字形を呈し，やや内湾している。口縁部は内側へ大きく折り曲げ，端部を丸くおさめている。口縁部に鉄釉，体部に陰刻による唐草，縦線文，波文，ロクロナデ。 17c後半～18c前半
82	鉢	16.2 12.6 5.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部下半は斜上方に立ち上がり，途中で屈曲しまっすぐに立ち上がる。口縁端部は平担。高台は内傾した台形。呉須は淡い藍色で山水図，貫入あり，口縁内面釉ハギで蓋受けをつくっている。 17c後半
83	鉢	14.6 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	濃緑色	伊万里系	球形状の体部から大きく外反し，端部はやや内湾気味に丸くおさめている。口縁はやや波状がかった輪花，陽刻の菊花文。
84	鉢	— 10.6 —	灰褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部は丸く内湾して立ち上がり，高台部分は直線的に下っている。高台畳付部分は水平外面下半をヘラ削りを行っている。外面褐釉，黒釉，白釉の刷毛目，内面褐釉，黒釉の刷毛目，高台下半及び畳付無釉。 17c後半～18c前半
85	鉢	17.6 8.5 8.6	赤黒褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部は球形状を呈し，口縁端部は外側より丸くおさめている。高台はやや高く外反した台形，畳付外面削り，外面白釉，褐釉，オリーブ褐釉の刷毛目。内面褐釉の上に白釉の刷毛目，高台下半及び畳付無釉。 17c末～18c前半
86	鉢	32.3 — —	紫褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	オリーブ黄色	唐津	象嵌鉢。体部は直線的にやや内傾しながら下り，口縁部は斜上方に折りまげ，口縁外面を三角形に垂下させている。口縁端部は内側より斜下方に開き，丸くおさめている。外面唐草，口縁部蓮弁文。 17c後半～18c前半
87	鉢	25.5 — —	黄茶褐色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ灰褐色	唐津	体部は斜上方に直線的に上り，口縁部は内面に段を有し，端部をつまみあげ，丸くおさめている。ロクロ成形。植木鉢か？
88	鉢	26.6 15.2	赤褐色		備前	体部はやや湾曲し，ほぼ斜上方に開いている。口縁端部は平担で内面をやや肥厚させ，内側

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		13.5	(胎土に白砂,雲母,黒粒を含む)			から外側へ傾斜している。底部は平底で，体部，底部ともロクロ痕を明瞭に残している。体部上半に黒褐色の自然釉がみられる。
89	鉢	25.6 — —	赤褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)		備前	体部は外上方に開き，口縁部で大きく屈曲させ，口縁部を広く上方につまみ上げている。口縁部外面に2条の凹線，内面に1条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデ。
90	小鉢	7.8 5.3 3.7	黄灰色	黄灰色	美濃・瀬戸系	体部は直線的に上方にのびている。口縁部は内側にやや肥厚させている。内外面とも貫入あり，底部は上げ底で体部下半ヘラ削り。
91	鉢	16.0 9.3 13.9	黄灰白色 (胎土に雲母,黒粒を含む)	オリーブ黄緑色	美濃・瀬戸系	植木鉢。体部はゆるやかに外反し，口縁部は逆「L」字形に屈曲させ外反し，端部は斜めに内傾し，丸くおさめている。高台は台形で，2か所に半円形の抉りがある。貫入あり，底部に直径2cmの穿孔あり。 18c後半
92	鉢	29.8 — —	黄灰白色	濃緑色	美濃・瀬戸系	体部は外下方にまっすぐに下りており，口縁部はやや外反している。口縁内側を肥厚させ，口唇部を凹ませている。口縁部下に文様があるが不明。
93	鉢	23.9 — —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄灰白色	美濃・瀬戸系	体部は球形を呈し，最大径は体部上半にある。口縁部は外側に肥厚させ，端部は平担である。貫入あり。
94	鉢	— 17.6 —	黄灰色 (胎土に石英を含む)	オリーブ黄緑色	美濃・瀬戸系	体部は斜上方に開き，大きく屈曲して上方に立ち上っている。高台は幅広く低い台形。内面見込み砂目痕あり。
95	鉢	22.6 — —	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	黄橙白色	美濃・瀬戸系	底部より2段に屈曲して立ち上がり，口縁端部はやや外上方に広げられている。本来高台がつくものと思われる。内外面とも貫入あり。
96	注口鉢	17.6 — —	黒褐色	黒褐色	不明	体部は球形状を呈し，口縁部は体部より「く」字状にやや内湾させながら外反し，口縁端部を丸く肥厚させている。注口部は口縁部と体部の境につくられている。ロクロ成形，体部下半無釉。 18c後半～19c前半
97	注口鉢	14.6	赤褐色	褐色	不明	体部は底部付近は球形状，上半はほぼ垂直に

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
		— —	(胎土に石英,黒粒を含む)			立ち上っている。口縁部は体部より「く」字形にゆるやかに内湾して外反し，端部は肥厚させている。注口部は口縁部との境につけられている。内外面ともナデ。
98	猪口	4.5 2.0 1.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾しながら立ち上がり，口縁端部を外方に折りまげて丸くおさめている。高台は低く内側より内傾させている。呉須は藍色，草文，高台砂付着。 17c中
99	猪口	— 4.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	ややにごった灰白色	伊万里	体部は底部より直線的に斜上方に立ち上っている。高台は三角形で底部は水平。呉須はややにごった藍色，笹文。 17c後半～18c前半
100	猪口	4.8 3.0 3.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや反った筒形を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台は体部から内傾した三角形。呉須は藍色で瓔珞文，樋型，碁笥底に近い高台。高台畳付無釉。 18c末
101	猪口	5.5 2.6 2.7	灰色がかった灰白色	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は外方に広がり，屈曲して斜上方に立ち上っている。口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。高台は低く丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，本と銀杏文，口縁内面釉ハギ。 18c代
102	瓶	5.3 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑色	伊万里	青磁。頸部から口縁部に向って逆「ハ」字状に開き，口縁端部は水平に外反して丸くおさめている。ロクロ成形。 17c末～18c
103	瓶	2.3 — —	やや黄色味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	頸部はほぼ直線的であり，口縁部は「く」の字状に外反し，端部は丸くおさめている。貫入あり，内面頸部まで施釉。 18c代
104	瓶	— 4.3 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部下半が最大径で球形状を呈して，上半に上って大きく内傾している。高台底部は台形。呉須は黒ずんだ藍色，松竹梅文，高台底部砂付着。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
105	瓶	－ － －	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青緑色	伊万里	青磁。瓶の頸部で下部は胴部に向ってやや開き気味。上部はこれより上で大きく外反するものと思われる。内面ロクロナデ痕がみられる。内面無釉。 18c代
106	瓶	－ 6.9 －	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状。呉須は藍色，七宝つなぎ文。高台底部無釉，蛇ノ目凹形高台。内面見込み砂付着。 18c後半～19c初
107	瓶	－ 11.8 －	茶褐色	黒褐色	大谷	体部はやや内傾し，直線状に立ち上っている。高台は体部からそのまま下しており台形。底面にロクロ痕あり。削りによる笹文，外面のみ施釉。 18c後半～19c初
108	水差	6.7（現長） 4.0（現幅） 3.5（現高）	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	色絵。粘土板を貼り合わせて成形，水差の注口部，内面指おさえの跡が明瞭に残る。底部がややへこんでいる。赤褐色と緑色で熊か龍か猪を表現。
109	水差	－ － －	黄灰褐色	褐色	不明	体部下半が最大径で上部は内傾し，口縁端部はやや外反。口縁部1か所を折り曲げ，注口部を作っている。体部上半に外反させた受部を回しており，把手が1か所つけられている。釉は褐釉に白釉のタスキがけ，首の部分に穿孔が1か所あり，内面ロクロ痕あり。
110	香炉 (蓋付鉢？)	11.6 8.4 10.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	乳白色	伊万里	体部は高台より斜上方に外反し，屈曲してまっすぐ立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。高台は垂直で両面より削り。口縁内面釉ハギ，蓋受けをつくっている。底裏面に釉がかっていない所で，呉須の元の色が残っている。呉須はあざやかな藍色，山水図。 17c後半
111	香炉 (蓋付碗？)	8.9 5.1 4.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台より斜めにやや内湾しながら外反し，体部下半で湾曲し，斜上方に直線的に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は三角形。呉須は藍色，寿と平行文。武道館地点，第1層No.9と合致。 17c後半～18c前半
112	仏飯具	10.0	灰白色	灰白色	伊万里	身部は脚部より大きく内湾しながら立ち上が

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		6.0 9.8	(胎土に黒粒を含む)			り，口縁端部は大きく外反して丸くおさめている。脚部は中央がふくらんだ筒形を呈している。高台部は大きく外反し，端部は内傾している。高台内面は蛇ノ目凹形高台で凹面は施釉。呉須は藍色，菊文と鋸歯文。 18ｃ後半
113	仏飯具	— 3.5 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾し，頸部はほぼまっすぐで，脚部下半は「ハ」字形に開いている。高台部はややまっすぐに内傾している。高台底部は蛇ノ目凹形高台。呉須は藍色，高台畳付無釉。 18ｃ後半
114	擂鉢	32.7 — —	こげ茶色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	こげ茶色	備前	体部はやや内湾気味に立ち上がり，口縁部は上下に肥厚させて面を形成し，口縁部に1条の凹線をめぐらす。口縁部内面はやや内側に傾斜し，端部を丸くおさめている。内面11条単位の櫛目描き。
115	擂鉢	17.4 6.8 8.1	灰赤色	黒褐色	大谷	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁部を肥厚させ，2条の凹線をめぐらしている。口縁の1か所を外に折りまげて注口部を形成。内面，底部，高台部分無釉，内面7条単位の櫛目描き。 19ｃ前半
116	徳利	3.8 — —	赤褐色 (胎土に黒粒，雲母を含む)	黒褐色	大谷	口縁端部は台形状であり，頸部は下方に向ってややふくらみをもち，胴部は大きく外反している。内面にロクロによるナデを明瞭に残している。ヘラ切りによる銘文あり。ロクロ成形，口縁内面及び頸部上半施釉。 18ｃ後半～19ｃ前半
117	徳利	— — —	赤褐色	黒褐色	大谷	外面釉ハゼがみられる。体部上半までゆるやかに外半し肩で大きく屈曲し，底部に向ってゆるやかに内湾している。内面にロクロ痕を明瞭に残している。ヘラにより「六」の字が削りこまれている。 18ｃ後半～19ｃ前半
118	徳利	— 7.4 —	茶褐色 (胎土に石英を含む)	茶褐色	大谷	体部は高台底部から直線的に斜上方に延びており，体部と高台境に1条の凹線をめぐらしている。高台は台形，畳付外面は削り。釉は外面のみ施釉。 18ｃ後半～19ｃ前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
119	徳利	— — —	赤褐色	黒褐色	大谷	体部は大きく外反し，肩部から大きく内湾し斜め下半に下りていくものと思われる。内面にロクロ痕を明瞭に残している。「金」のヘラ削りがみられる。ロクロ成形。 18c後半～19c前半
120	火鉢	16.2 16.0 15.8	淡褐色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁端部は平担で内側に折りかえして肥厚させている。高台に5角形の脚を3か所つけている。内部に円筒形状のものを貼りつけており，外部に1か所，内部に2か所の窓があけられている。外部の外面に「桜湯」のヘラ削りがみられる。ヘラ磨きの後ナデ，底部回転ヘラ切り離し。
121	火鉢	21.0 — —	淡褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)		土師質	体部は球形を呈し，口縁端部は平担で，内面を肥厚させている。外面ヘラ磨きの後ナデ，内面ナデ，鍋受け3か所，窓3か所，口縁部内面スス付着。
122	火鉢	23.8 — —	褐色 (胎土に石英雲母・黒粒を含む)		土師質	体部は楕円形を呈し，口縁部は内面を肥厚させ平担面をつくっている。外面ヘラ磨きの後ナデ，内面ナデ，突起3か所，窓3か所，口縁部内面スス付着。
123	火鉢	— 19.8 —	淡褐色 (胎土に石英黒粒を含む)		土師質	体部は内湾して立ち上がり，高台部はやや内湾しながら外反している。高台下半に1条の凹線をめぐらし，直径8mmの穴が穿孔されている。内外面ともナデ。
124	火鉢	— 10.1 —	灰褐色 (胎土に白砂を含む)		瓦質	口縁端部はほぼ平担で内面は丸く肥厚させている。脚は四隅に逆台形状にヘラ切りした状態で削り出している。底部内面はナデ，外面はヘラ削りの後ナデ，外面は黒褐色，内面櫛目描き。
125	土鍋	17.6 — —	黄橙色 (胎土に石英雲母を含む)	オリーブ黄白色	美濃・瀬戸系	体部はゆるやかに内湾し下方に内傾している。口縁部は体部より「く」字形に外反し，端部を肥厚させ，丸くおさめられている。口縁部に断面円形の把手をつけている。無釉の部分にスス付着。
126	土鍋	25.9 (鍔径) — —	黒灰色 (胎土に黒粒石英を含む)		瓦質	体部は球形状を呈し，体部中央に幅2cmの鍔がつけられている。内外面ともナデ，鍔より下半スス付着。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
127	土瓶	8.4 — —	淡赤褐色	褐色	美濃・瀬戸系	体部は球形状を呈し，口縁は短く外反し，口唇部は平担，注口部は口縁部近くに取りつけられ3つの穴が穿孔されている。櫛目平行文。
128	土瓶	6.4 7.6 7.4	赤橙色 (胎土に黒粒を含む)	明褐色	美濃・瀬戸系	体部は算盤玉を呈し，口縁部やや立ち上がって肥厚させている。体部上半に2か所の耳がとりつけられている。底部はやや上げ底，注口部の穿孔は2つ。体部下半無釉。
129	灯明皿	10.5 3.4 1.7	灰褐色	オリーブ黄褐色	美濃・瀬戸	体部はわずかに内湾しながら斜め上方に立ち上がっており，口縁部は外側より丸くおさめている。燈芯受部は内側より丸くおさめられている。底部は上げ底になっている。貫入あり，外面口縁部のみ施釉，スス付着。
130	灯明皿	8.4 3.8 1.7	灰褐色	褐色	不明	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は内側より丸くおさめている。燈芯受部は丸く外反し，体部内面中央部につけられている。底部は平底。ロクロメを残す。口縁内面スス付着。
131	皿 (灯明皿)	10.2 4.0 1.7	黒褐色		不明	体部は大きく外反して斜めに立ち上がっている。口縁端部は丸くおさめている。底部は丸底がかった平底。内外面ともロクロナデ，口縁部スス付着。
132	灯明皿	7.2 4.4 —	赤黒褐色	黒褐色	大谷	脚部は裾広がりで，口縁部は外方に開き，端部を丸くおさめている。底部は直線的に斜上方に開き，端部を内側に折りまげて丸くおさめている。底部外面ロクロ痕あり。 18c後半～19c前半
133	焼塩壺	6.1 — —	褐色 (胎土に石英黒粒，雲母を含む)		土師質	体部はやや内湾し，筒形を呈し，ヘラ削りを行っている。受部は段を有し，内傾し端部を丸くおさめている。内面布目痕あり。丸棒成形，外面ナデ。 18c中
134	焼塩壺	5.2 5.4 9.7	褐色 (胎土に石英クサリ礫，黒粒を含む)		土師質	体部はゆるやかに内湾した筒形を呈し，受部は段をもって内傾し，端部を丸くおさめている。外面に刻印がみられるが磨滅している為不明。 18c中
135	焼塩壺	6.1	赤褐色		土師質	体部はやや反り気味に直線的にのびている。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		5.4 8.3	(胎土に石英雲母，黒粒を含む)			口縁部は大きく抉りをもち，蓋受けを形成し，端部は丸くおさめている。内面布目痕あり，丸棒成形，底部円盤充塡，体部中央に「泉湊伊織」の刻印。 18c後半
136	軒丸瓦	15.7(直径)	黒灰色 (胎土に白砂を含む)		瓦	「卍」文。瓦当部分周縁は幅2.1cm，内区に「卍」文を范型押している。丸部分を瓦当に押しあてて接合しており，手づくね押しの部分が明瞭にみられる。銀粉塗布。
137	軒丸瓦	10.0(直径)	黒灰色		瓦	「卍」文はヘラ切り，内面布目痕あり，銀粉塗布，瓦当部周縁幅2.1cm，丸瓦部分はヘラ切り。
138	軒丸瓦 (棰木先瓦)	8.4(直径)	淡灰色		瓦	菊文の棰木瓦，18弁，周縁はなし。
139	桟瓦	8.8(直径)	黄灰色		瓦	丸瓦部分「卍」文，平瓦部分「唐草文」型押し成形，内面布目痕あり，軒丸部瓦当部周縁は幅1.2cm，平瓦部分はヘラ切りの後ナデ，丸部分に平部分を取りつけている。 18c後半～
140	鳥衾瓦		黒灰色 (胎土に石英黒粒を含む)		瓦	唐草文。周縁部は幅1cmで上部は花弁状の山形を呈し，下部は半円状を呈している。丸部の上に指おさえによって接合している。両端部を欠損している為，大きさは不明。内外面ともナデ。
141	煙管吸口	6.0(長さ) 0.9(肩部径) 0.4(吸口径)			銅	肩部は水平で1.4cm，肩部から吸口に向って細くなっている。吸口はわずかに膨らんでいる。1枚の銅板で円形に成形。羅宇との接合部は斜めに薄く削平，古泉編年V期。 18c後半
142	銅銭	2.3(直径) 0.09(厚さ) 0.6(穴長)			銅	「寛永通宝」やや細目の字。周縁2mm，穴は四角で0.5mmの端取り，「通」の字「コ」。
143	銅銭	2.4(直径) 0.1(厚さ) 0.4(穴長)			銅	「寛永通宝」周縁2.1mm，穴は四角0.5mmの端取り，「通」の字「コ」。

第8表　武道館地点　　川跡覆土中部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	11.4 4.3 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。体部はやや厚手で球形状を呈している。口縁端部は丸くおさめている。高台部はやや外反し，畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，菊と井桁文，見込み菊文のコンニャク判。口縁内面四方襷文。 17c後半～18c中頃
2	碗	— 4.2 —	灰白褐色 (胎土に黒粒を含む)	やや褐色がかった灰色	伊万里	体部はやや肥厚しており，球形状に湾曲している。高台はやや内傾した台形。呉須は褐色がかった藍色，草花文，底裏面「太明年製」高台畳付砂自痕。 17c末～18c中
3	碗	11.2 — —	やや黒ずんだ灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	伊万里	体部よりやや内湾しながら直線的に外上方へ延び内側より丸くおさめている。口縁部に1か所耳状の突起がみられる。呉須はやや黒ずんだ藍色，浜辺松図，貫入あり。 18c代
4	碗	11.7 4.6 7.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は球形を呈し，口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。高台はやや内傾した台形，呉須は藍色，外面連木竹，蓮弁文，口縁内面四方襷文，内面見込み軍配図，内外面とも貫入あり。 18c代
5	碗	10.4 4.4 7.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄味がかった灰白色	伊万里	陶胎染付。体部下半は球形状を呈し，上半はやや内湾しながら上方に上っている。口縁端部を丸くおさめている。高台はやや肥厚させた三角形で端部を丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，山水文，口縁外面四方襷文，貫入あり。 18c代
6	小碗	8.2 3.1 4.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾し，口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は台形，呉須は藍色，梅文。 18c代
7	碗	11.1 — —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	陶胎染付。やや厚手で体部下半は球形状を呈し，体部中央よりまっすぐ立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。呉須はやや黒ずんだ黒藍色，山水文，貫入あり。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
8	碗	10.4 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	陶胎染付。体部下半は大きく内湾し，体部上半はゆるやかに内湾し立ち上っている。口縁端部は平担面をもち丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，柳下一屋図，口縁外面四方襷文。 18c代
9	碗	11.6 4.2 4.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に直線的に開き端部を丸くおさめている。高台は外方に開き，貫付付近外面削り。呉須は群青がかった藍色，並草葉文。 19c前半
10	碗	10.0 3.8 5.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら立ち上がり，体部下半で内側に傾き，斜上方に直線上に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は低く外傾した台形。呉須は藍色，外面格子文。 19c前半
11	碗	11.2 4.0 5.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部下半はゆるく内湾し，体部中央部より直線的に斜上方に開いている。口縁端部は丸くおさめている。高台は三角形で畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，格子目文，口縁内面格子文，内面見込み斜格子文。高台畳付砂付着。 19c前半
12	碗	— 4.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾し，体部上半は直線的に外上方に延びている。高台はまっすぐに下りており，畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，菊花文，内面見込み「寿」 19c前半
13	碗	10.2 4.4 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部近くで屈曲して外反し，口縁端部は丸くおさめている。高台はやや高く外反し，畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，斜格子文，内面見込み草文。 19c前半
14	碗	— 4.0 —	やや黄色味がかった灰色	オリーブ黄灰色	京焼	体部は内湾しながら外上方に立ち上がる。高台は台形で外反している。錦光山焼，貫入多し，高台部及び体部高台付近無釉，底銘「錦光山」の刻印あり。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
						18c後半
15	碗	— 3.4 —	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	京焼系	体部は球形状に内湾し，高台部は斜め下方に外反し，畳付部は平担。高台畳付墨痕。
16	碗	— 5.2 —	黄灰色 (胎土に石英黒粒を含む)	オリーブ黄色	美濃・瀬戸系(?)	やや厚手で大きく内湾し，高台はやや高く，内面より内湾して畳付は平担である。内面に貫入あり，高台底部砂付着。
17	蓋	9.5 3.1 (つまみ) 3.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	つまみは内側より内湾しながら立ち上がり，端部は丸くおさめている。体部は1段の稜をもち，外方に大きく開き，端部は丸くおさめている。呉須はにごった藍色，井桁文のコンニャク判。 17c後半～18c前半
18	蓋	9.5 3.6 (つまみ) 3.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	つまみは内面よりやや内傾して丸くおさめている。体部はやや傾斜をもって大きく内湾し，端部は丸くおさめている。呉須はやや黒ずんだ藍色，外面あやめ文，口縁内面四方襷文，内面見込み「寿」 18c中～後半
19	蓋	10.1 4.1 (つまみ) 2.8	白っぽい灰白色	灰白色	伊万里	つまみは内面より内湾しながら斜上方に上がり端部は丸くおさめている。体部は内湾しながら口縁部近くで更に内湾させている。端部は丸くおさめている。呉須は藍色，カブラ文，つまみ頂部に砂付着。武道館川跡覆土上部No.45と同一品。 18c代
20	蓋	10.4 — —	灰色	オリーブ緑色	京焼	体部は中ごろで内側に屈曲し，口縁部は屈曲させ，斜下方に広げている。端部は丸くおさめている。貫入あり，外面口縁部のみ施釉，中央部につまみがつくものと思われる。
21	蓋	8.4 4.4 1.6	灰黄橙色 (胎土に石英黒粒を含む)	黄緑黒色	美濃・瀬戸	体部は底部より直線的に斜上方に立ち上がり，口縁部は大きく外反し，端部を上方から丸くおさめている。底部はやや上げ底で糸切り離し痕あり，内面に山形のつまみ。内面に褐釉が部分的にある。ロクロ成形。
22	皿	21.3 14.7	白色	灰白色	伊万里	八角皿，体部はやや内湾し，斜上方に直線的に開き，口縁端部は平担面をもち，鉄釉の口

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		2.6	(胎土に黒粒を含む)			紅皿。高台は低く台形。呉須は明るい藍色，外面唐草花文，内面山水及び笹文，長吉谷窯か。 17c前半
23	皿	11.2 6.8 2.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	角皿，体部はわずかに内湾し，斜上方に開き，口縁端部は内側より，丸くおさめている。角を1つの稜をもっている。高台はやや高く内傾した台形。呉須は藍色，内面見込み草花文，肩部陽刻による×文と唐草文。高台畳付砂付着，長吉谷窯か。 17c中
24	皿	12.2 5.0 3.3	やや黄味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾しながら斜上方に開いている。口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめている。高台はやや内傾した低い三角形。呉須は藍色，外面草文，内面宝珠文。 17c後半
25	皿	13.6 5.0 4.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった緑白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に大きく開く。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内面より斜め下方に開いた三角形。畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，松葉折文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台砂付着。 17c後半～18c前半
26	皿	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	赤絵皿。体部の一部のみで内湾している。呉須はにごった赤色，斜格子文。
27	皿	— 8.9 —	オリーブ灰黄色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ灰黄色	京焼風陶器	体部は直線的に斜上方に開き，底部面は平らで，裏面に直径0.9cmの円圏をめぐらしている。黒釉と赤褐釉でもって文様構成。底裏面「木下弥」の刻印。 17c後半
28	皿	— 5.3 —	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	京焼風陶器	体部はゆるやかに内湾し外方に開く。高台は台形でやや外方に開く。緑色と褐色の松竹梅文，見込みと体部境に稜をもつ内外面とも貫入あり，底部外面に「清水」の刻印。 17c後半
29	皿	— 4.6 —	黄灰色	オリーブ黄色	美濃・瀬戸	体部はわずかに内湾し斜上方に大きく開いている。高台は1段の稜をもつ三角形。内面見込み砂目痕3カ所。高台畳付砂目痕4カ所。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
30	皿	— 10.2 —	灰茶褐色 (胎土に黒粒を含む)	灰紫褐色	不明	体部はごくわずかに内湾し，外上方に開いている。高台は内傾した削り出し高台。呉須は黒と淡褐色，高台畳付無釉。
31	甕	31.2 — —	灰褐色 (胎土に雲母，クサリ礫を含む)	褐色	備前	体部はやや内湾しながら外反している。ロクロ成形，口縁端部を内外に大きく肥厚させ，4条の凹線をめぐらしている。
32	甕	36.2 — —	黄灰褐色 (胎土に雲母，クサリ礫，黒粒を含む)		土師質	口縁部は大きく外反し，肥厚させ丸くおさめている。頸部以下は直線的に斜下方にのびていると思われる。内外面ともロクロナデ。
33	鉢	— 10.6 —	赤橙褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目鉢，体部は斜上方に直線的にのび，高台は削り出しで鋭角に2段に面取りをしており，高台中央に1条の凹線をめぐらしている。畳付は平担，褐釉の上に白釉がけ。 17c後半～18c前半
34	鉢	— 13.4 —	赤褐色		備前	体部はやや外反しながら斜上方に直線的に立ち上っている。底部は平底。ロクロ成形，ナデ，底部外面にロクロメを残す。底部外面に穿孔途中の穴あり。
35	鉢	15.2 — —	灰色	オリーブ緑黄色	京焼系	体部は口縁部からまっすぐに下り，下半で大きく内湾している。口縁部は球形に内湾し，端部をつまみ上げて丸くおさめている。ヘラによる刻み目文，口縁部に受け部がある。
36	鉢	22.8 8.6 6.1	オリーブ灰褐色	オリーブ黄灰色	京焼風陶器	体部は大きく外反し，体部中央で屈曲し，口縁部は大きく外反している。体部に6カ所の凹みがつけられている。高台は台形の削り出し高台。底裏面に「新」の刻印の一部がみられる。貫入あり。呉須は黒緑色で山水図。 17c後半
37	鉢	16.5 — —	やや黒味がかった灰褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	黒褐色	京焼系	体部は斜上方にまっすぐ上り，口縁部は外反させ肥厚させ端部は丸くおさめている。ロクロ痕が明瞭。内面体部上半まで施釉。内外面ともナデ。
38	鉢	18.2 — —	黄橙褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	褐色	不明	体部は口縁部から「く」字形を呈し，ゆるやかに内湾している。口縁部は内側に向って傾斜し内面を肥厚させている。
39	猪口	6.6	灰白色	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，斜上方に立ち上っ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		2.8 2.8	(胎土に黒粒を含む)			ている。口縁端部は丸くおさめている。高台は低く内傾している。呉須は藍色，草花文，高台畳付無釉。 17c末～18c前半
40	猪口	6.8 3.1 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部はゆるく内湾し，外上方に立ち上がり口縁部付近でゆるく外反している。口縁端部は丸くおさめている。高台は低く内面より内湾しており丸くおさめている。高台に砂付着。 17c後半～18c前半
41	猪口	— 3.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	白色	伊万里	体部は高台から斜め上方に直線的に開いており，高台は内面から内湾した三角形。 17c後半
42	瓶	1.8 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	非常に細くまっすぐな頸部で，口縁部は外方に折りまげ端部を丸くおさめている。呉須は藍色，草花文，ロクロ成形が明瞭。 17c後半
43	瓶	1.8 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部は卵形を呈し，頸部はゆるやかに内傾し，口縁部はわずかに外反し肥厚している。呉須はややにごった藍色，草花文，内面にロクロ成形が明瞭。 18c前半
44	水滴	10.0(最大径) 7.4 —	黒灰色		備前	体部は斜上方に開き，体部下半で大きく屈曲して大きく内傾している。頸部は細い。外面櫛目描き，ロクロ成形。
45	徳利	— 7.0 —	黒褐色	黒褐色	大谷	高台は外側に段をもって肥厚させ，内傾させた台形，畳付けは平担，高台底部砂付着。 18c後半～19c前半
46	徳利	— 7.8 —	やや赤味がかった褐色 (胎土に石英を含む)	黒褐色	大谷	体部はゆるく内湾し，外上方へ上っている。高台は段をもって厚みをもち，断面は台形，畳付は平担。ロクロ痕を明瞭にもつ。高台畳付砂付着。 18c後半～19c前半
47	火鉢	21.6 — —	黄灰色 (胎土に石英，雲母を含む)		瓦質	体部はまっすぐに延び，頸部はくびれ，口縁部は内外面を肥厚させ，丸くおさめている。外面黒色，内面黄灰色，ヘラによる山形文がある。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
48	火鉢	— — —	やや黄色味がかった茶褐色 (胎土に石英,雲母,黒粒を含む)		土師質	火鉢の一角のみで，外面はヘラ削りの後ナデ，内面に山形の突起がつけられている。内面にハケメ，突起がみられる。内面にスス付着。
49	味噌焼皿	6.8 4.8 (つまみ) 2.5	赤褐色	黒褐色	不明	つまみはやや外反し，体部は斜下方に傾斜し，口縁部付近で内湾し，端部は丸くおさめている。内面はゆるやかに傾斜している。ロクロ成形。
50	灯明皿	10.2 5.6 1.4	赤褐色 (胎土に黒粒を含む)		不明	体部はゆるく内湾しながら外上方に立ち上っている。口縁端部は外側より丸めている。底部は平底でロクロ痕あり，燈心受部は大きく内湾し，尖り気味に端部をおさめている。内外面ともナデ，口縁内外ともスス付着。
51	灯明皿	11.1 4.2 1.9	灰白色	オリーブ黄緑色	美濃・瀬戸	体部はほぼ直線上に開き口縁端部を丸くおさめる。底部はやや上げ底でロクロ痕を明瞭に残しており，体部はヘラ削り，外面口縁部のみ施釉，内面に菊文，外面スス付着。
52	灯明皿	10.0 5.0 1.1	灰褐色	褐色	不明	体部はわずかに内湾し，外方に大きく開いている。口縁端部は内側より丸くおさめている。燈心受部は中央部より端部をへこませ，内湾しながら口縁は尖り気味に丸くおさめている。
53	灯明皿	10.2 9.2 1.2	褐色 (胎土に石英,雲母を含む)	褐色	不明	体部は内湾しながら立ち上がり，口縁端部を丸くおさめている。底部は平底でロクロ痕を明瞭に残している。燈心受部は内面より内湾しながら立ち上がり斜上方に丸くおさめている。内外面ともナデ，口縁部外面スス付着。
54	灯明皿	11.1 — —	赤黒褐色 (胎土に石英を含む)	褐色	不明	体部はゆるく内湾しながら外上方に開き，口縁端部は内側より丸くおさめている。内面褐釉のハケナデ，外面無釉，底部ロクロ成形，口縁部スス付着。
55	漆塗り碗	12.6 6.4 5.2				広葉樹系でロクロ削り成形，体部に1段の面をもち器高はやや低く，器壁は厚く内面は球形を呈している。高台高1cmに対して高台内のえぐりは0.7cmである。高台はやや内傾したもので，内外面とも漆が塗られている。 18c代か

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
56	下駄	22.8（長さ） 7.8（幅） 1.2（厚さ）				材質不明，刳り下駄，歯の方に樹幹の中心を取っており，四隅は丸くおさめている。後の歯が磨滅して低くなっている。前壺はやや後に傾斜し，後壺は前方へ傾斜している。
57	下駄	14.3（長さ） 6.4（幅） 2.2（厚さ）				針葉樹，柾目材，刳り下駄（露路下駄）で四方を丸く削りこんでいる。四隅は丸く削りこんでいる。歯は幅2cm，高さ1.3cmで底面は使用痕の磨滅がある。壺は直径0.7cmのものが前に1か所，後に2か所穿孔されている。後壺は前方に向って穿孔されている。
58	下駄	21.3（長さ） 7.5（幅） 2.3（厚さ）				材質不明，差歯下駄（陰卯下駄）で，底面中央部が山形に厚くなっている。差歯の部分は2か所ともはずれて不明。前の方に3か所釘が上からうたれている。壺の部分は破損して不明。
59	箱形	12.7（たて） 7.4（横） 5.8（高）				針葉樹，板目材，厚さ0.8cmの板を側面は4枚，底面1枚の板で作っており，長辺を外側に底面は片方を側面と合わせ，片方は側面を底面に竹釘で打ちつけている。竹釘は直径0.2cmで底面2個ずつ2か所，側面は3か所。
60	栓	8.3（長さ） 4.5（最大幅） 2.5（最小幅）				針葉樹，柾目材，円形のものを斜めに削りこみ平担面が残っている。樽，桶等の栓である。
61	栓	7.2（長さ） 2.0（幅） 1.9（厚さ）				広葉樹で片方の先端を削り，尖らせている。胴部中央には表皮が残っており基部は破損しているため不明，樽の栓と思われる。
62	引手	16.0（長さ） 8.3（幅） 0.9（厚さ）				針葉樹，板目材，中央部にハート形の抉り抜きがあり，両側に幅0.5cmの浅い溝が取りつけられている。溝境に直径0.7cmの穴が斜めに穿孔されており釘止めと思われる。下段両端は円形に削られている。片面及びハートの抉り部分の断面に漆が塗られている。
63	敷居	11.6（長さ） 10.6（幅） 4.1（厚さ）				針葉樹，柾目材，上面に幅1.2cm，深さ1.2cmの溝を2本並行に削りこんである。敷居材の断片。
64	楔	10.3（長さ） 2.0（幅）				杉，板目材，三角形を呈し，片方を斜めに削りこんだものである。壁の芯になる横板を柱

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		3.3（厚さ）				に止める楔で，先端部中程から使用痕のくぼみが両側に見られる。
65	たがしめ具	8.7（長さ） 4.1（幅） 0.6（厚さ）				杉，板目材，外面は自然面を残し，内面は桶材に合わせて円形に削り端部は内面を斜めに削りこんでいる。端部に使用痕があり磨消している。樽，桶等のたがしめ用具である。
66	砥石台	29.8（長さ） 9.3（幅） 2.2（厚さ）				栗，柾目材，長方形を呈し，中央部に長さ18cm，幅7.9cm，深さ1.4cmの長方形に切りこんでおり，砥石を固定するようにしている。上面両端は斜めに削っている。底面はアーチ状に内面を抉りこみ，底面中央に左右に三角形状の抉りがある。
67	ヘラ状工具	28.0（長さ） 8.8（先幅） 5.6（元幅） 1.2（厚さ）				針葉樹，板目材，羽子板状を呈し，外面はやや丸みをもち内面は平担，基部より8cmの間は両端を直線的に削っている。壁土を上へ持ち上げるヘラ状工具と思われる。
68	船形木製品	6.5（長さ） 1.8（幅） 1.0（厚さ）				広葉樹の細い棒状を半截したもので，外面に表皮が残っている。舳先は両側から削りこんで先端を尖らせてあり，艫はやや丸くおさめている。内面は中央部をわずかに抉りこんでいる。ミニチュアの船。
69	木刀(?)	38.4（現長） 3.4（幅） 1.8（厚さ）				広葉樹系，柾目材，断面は楕円形を呈し，四隅を丸く面取りしたように削っている。基部は片方を斜めに削りこんでいることから木刀と思われる。
70	曲物	46.0（円周） 6.1（幅） 0.2（厚み）				大きく破損している為原形は分からないが，直径15cm前後のもので破片をつなぐと円形になるものと思われる。檜の薄板を丸め桜の皮で止めているものであろう。
71	曲物底	7.1（長さ） 3.4（現幅） 0.2（厚さ）				針葉樹，板目材，直径推定7cmの円形で，端は斜めに削られている。小さな曲物の底と思われる。
72	曲物底	5.8（直径） 0.5（厚さ）				針葉樹，板目材，厚さ0.5cmの板を円形に削り出したもので端部をやや斜めに削っている。中央部はやや凹んでいる。小さい曲物の底と思われる。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
73	曲物底	17.2（現長） 11.0（現幅） 0.7（厚さ）				針葉樹，板目材，半円のみで両端が欠損，断面はややひずんでいる端部を斜めに削り丸くおさめている。曲物の底と思われる。
74	底板	17.2（現長） 11.0（現幅） 0.7（厚さ）				針葉樹，板目材，円形に削り端部は丸く削っている。中央部に直径0.4cmの釘がとりつけられており，提燈の底板と思われる。
75	底板	13.0（直径） 0.8（厚さ）				杉，板目材，円形に削り端部両端をわずかに丸めている。桶等の底板と思われるが両端が丸められているので中蓋の可能性もある。
76	底板	17.2（直径） 1.7（厚さ）				針葉樹，板目材，片方をやや欠損した円形のもので，片方の端部を丸くおさめているので桶底と思われる。
77	底板	21.2（現長） 6.7（現幅） 1.2（厚さ）				針葉樹，板目材，杉板を丸く削り，端部は斜めに削っている。桶の底と思われる。底面はややそっている。
78	底板	22.6（長さ） 7.0（現幅）				材質不明，板目材，板を円形に削り，端部はやや斜めに傾斜をかけて削っている。内面に長径0.8cmの長方形の釘穴が2か所みられることから板を貼り合わせたものである。桶底と思われる。
79	桶材	26.6（長さ） 7.0（幅）				針葉樹，板目材，円形に内湾し，両端を斜めに削りこんでいる。上端部右側を斜めに削りこんでいる。左側上端より約2cmの所で0.5cmの角釘でもって隣の桶材とつないでいる。上端部も内側へ傾斜させて削っている。下より2.5cmと5.5cmの所に底板接着跡がみられる。
80	桶材	26.4（長さ） 7.4（上幅） 6.4（下幅） 0.9（厚さ）				檜，柾目材，両端及び上端を内側に向って斜めに削っている。上端より2cm下の所に両側面に長径0.5cmの穴があり隣の桶材との接合の釘穴と思われる。断面は弓状を呈している。底部より2.4cmの所に底板接着痕がみられる。
81	桶材	21.2（長さ） 3.9（幅） 0.6（厚さ）				杉，柾目材，円形に内湾させて削りこみ，両側及び上端部を内側に向って斜めに削りこんでいる。底より3.4cmの所に底板接着痕がみられる。
82	建築材	44.6（長さ）				材質不明，板目材，角材の片方を基部で幅2.0

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		4.7（幅） 3.7（厚さ）				cm先端で2.4cmに切りこんだもので，組み込み材と思われる。中央部に1か所釘が打ちこまれている。
83	板状木製品	58.8（現長） 6.6（幅） 2.2（厚さ）				針葉樹，柾目材，長方形のもので片方に鋸痕が残っている。端より4cmの所に釘痕が2か所あり建築部材と思われる。
84	板状木製品	20.1（現長） 9.2（幅） 1.2（厚さ）				針葉樹，板目材，やや中央がへこんだ状態に湾曲している。片方を半円状にくぼませており，引戸の凹みと思われるが用途は不明。
85	板状木製品	17.2（現長） 5.0（幅） 1.9（厚さ）				針葉樹，板目材，四角の板に上端より2.2cmの内側の中央部に1辺1.2cmの四角い穴が穿孔され，その穴の中に同じ材質の角材がはめこまれている。用途不明。
86	板状木製品	17.4（現長） 7.9（幅） 3.3（厚さ）				広葉樹，柾目材，四角の材の中央部に深さ1.5cmの台形のホゾを切りこんでいる。上端に幅1.2cmと幅3.4cmの溝を切りこんでいる。用途は不明。
87	板状木製品	20.7（長さ） 5.5（幅） 2.2（厚さ）				材質不明，板目材，厚さ2.2cmの板に幅3.7cm深さ0.7cmの切りこみを入れており，切りこみ中央部に角釘が1か所打たれており，直角に交差させた部材と思われる。
88	板状木製品	27.0（現長） 16.5（現幅） 0.3（厚さ）				針葉樹，板目材，非常に薄手のもので端部は丸く削られている。2か所程穴が穿孔されている。用途は不明。
89	板状木製品	29.3（長さ） 4.0（幅） 0.6（厚さ）				檜，板目材，全体にやや内湾し，両側を斜めに削っている。ヘラ状工具とも思われるが用途は不明。
90	板状木製品	29.5（長さ） 11.8（幅） 3.0（厚さ）				檜，柾目材，片方を斜めに削り，中程で長さ12cmにわたって台形に切りこんでおり，何らかの建築部材の組材と思われる。
91	板状木製品	44.8（長さ） 33.2（幅） 2.6（厚さ）				材質不明，板目材，異なった2枚の板を接合したもので，やや内側にそっている。狭い方に幅2cmの抉りこみがみられる直径0.6cmの釘跡が5か所程みられ，底面に何らかの付属物があったものと思われる。用途は不明。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
92	板状木製品	66.1（現長） 6.5（幅） 1.7（厚さ）				針葉樹，柾目材，板の片方の先端を片側から斜めに削り尖らせている。片面に幅10cm，深さ0.2cmの抉りこみが2か所みられる。片方の抉りこみには直径0.3～0.5cmの穴があけられているが貫通していない。
93	板状木製品	87.6（現長） 7.6（幅） 1.2（厚さ）				針葉樹，板目材，本来は両端を丸めた長方形の板であるが片方が破損し，三角形となっている。長さ11cm，深さ1cmの台形状の切りこみがある。断面は片方がやや厚い。
94	棒状木製品	15.9（現長） 1.2（幅） 1.8（最大厚） 1.2（最小厚）				檜，柾目材，頭を四角に面取りし，片方はまっすぐ削り片方は斜めに削り幅を広げた後，L字形に削りこんでいる。木目のつんだ木を使用し非常にていねいに削っている。片方の先端は欠損，用途は不明。
95	棒状木製品	16.0（長さ） 2.5（幅） 2.5（厚み）				針葉樹，板目材，直径3.5cmの円形の面を八角形に面取りしている。用途は不明。
96	棒状木製品	46.9（長さ） 1.9（幅） 1.5（厚さ）				針葉樹，柾目材，横幅がやや広い角材で両端に直径0.4cmの穴が穿孔されており，釘止めがなされていたと思われ，枠材か，障子等の桟と思われる。
97	棒状木製品	52.3（現長） 1.7（幅） 1.7（厚み）				針葉樹，柾目材，ほぼ正方形の棒で，片方の先端を約4cmにわたって斜めに削り尖らせている。
98	不明木製品	3.2（直径） 3.5（高さ）				材質不明，棒状に削った上端部に直径1.6cm，深さ1.6cmのU字形の穴が掘りこまれている。用途は不明であるが，円形の先の尖ったものを差しこんだものと思われる。
99	不明木製品	6.9（長さ） 4.0（幅） 4.8（高さ）				針葉樹，板目材，角材で各角を少し丸めている。上部中央に幅2cm，深さ1cmの溝が「ノミ」によって切りこまれている。用途は不明。
100	不明木製品	13.8（長さ） 3.5（幅） 3.1（現厚）				針葉樹，板目材，四角の材の上端部を丸みをもたせ，やや中央からはずれた部分を弓状に削りこんでいる。底部に幅2.0cm，深さ0.7cmの「コ」字形に切りこみが入れられている。用途は不明。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
101	不明木製品	8.3（たて） 15.0（横） 3.3（厚さ）				針葉樹，柾目材，断面はやや丸みをもった細長い五角形を基本に底部および両側を弓状に削りこんでいる。両側面底部付近中央部に直径0.5cmの穴が深さ0.5cmまで2か所あけられている。用途は不明。
102	不明木製品	20.5（たて） 10.8（横） 6.2（厚さ）				針葉樹，柾目材，底面は四角形で平担，頂部はたて10cm，横2.8cmの長方形から底部に向って四方に弓状にていねいに削っている。底部付近で斜めに段を形成している。用途は不明。
103	不明木製品	21.5（長さ） 12.1（幅） 3.6（厚さ）				材質不明，長方形のやや厚い板で隅を丸く削りこんでいる。中央に一辺2cmの正方形の穴が貫通しており角棒を立てるか，さしこんだ状態で使用されたものと思われる。用途は不明。一部焼成を受けている。
104	角材	35.2（現長） 3.1（幅） 3.3（現厚）				針葉樹，柾目材，角材の中程に直径4mmと6mmの溝が貫通しており，銹跡がみられることから釘等の金属が打ちこまれていたものと思われる。

第9表　武道館地点　　川跡覆土下部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	8.8 3.2 4.1	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	全体にぼてっとした感じで体部は球形に近く口縁端部は丸くおさめられている。高台は畳付付近で内傾し丸くおさめられている。呉須は黒ずんだ藍色，井桁式武田菱文のコンニャク判。 17c末～18c代
2	碗	— 4.5 —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾して立ち上っている。高台は台形を呈し，骨付は外側から削り，呉須はややにごった藍色。井桁文のコンニャク判。 17c末～18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
3	碗	11.3 2.3 6.1	灰白色	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，外上方に直線的に開いている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は斜め下方に内傾している。畳付は内面より丸くおさめられ平担である。呉須は藍色，外面菊文，内面見込み五弁花コンニャク判，底部外面の銘不明，底部に砂付着。 18c代
4	碗	9.3 4.2 5.2	灰白色	緑がかった灰色	伊万里	陶胎染付，くらわんか手。非常に厚手でゆるやかに内湾し，口縁端部は丸くおさめている。高台は三角高台で内面見込みはほぼ水平となっている。 18c代
5	碗	11.6 4.6 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。やや厚手で体部はやや内湾しながら直線的に立ち上っている。端部は尖り気味に丸くおさめている。高台はほぼまっすぐで畳付は平担。呉須は藍色，丸文のコンニャク判，底部に砂付着。 18c代
6	碗	10.4 4.6 5.9	灰白色	灰白色	伊万里	体部は高台部よりやや大きく内湾し，体部中央部から口縁にかけてはゆるやかに内湾して端部は丸くおさめている。高台外面は直線的であり，内面は底部に向って内湾している。呉須は澄んだ藍色，山水文，高台外面「太明年製」 18c前半
7	碗	10.8 4.2 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾し口縁端部は丸くおさめている。高台は「ハ」字形に外反し，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，外面および内面見込みくずし寿字禅文，口縁内面四方襷文。 18c代
8	碗	10.4 4.2 4.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。非常に厚手でゆるやかに内湾しながら立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや内湾し，畳付部は外側を削っている。呉須は藍色，梅花文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，底部砂付着。
9	碗	— 4.6 —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	伊万里	陶胎染付。体部は大きく内湾し，体部上半はまっすぐに上方にのびていると思われる。高台はやや内湾した断面台形。呉須は黒みがか

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						った藍色。貫入あり，高台底部砂付着。 18c代
10	碗	11.8 4.7 6.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。やや厚手で大きく内湾して立ち上がり口縁端部は丸くおさめている。高台もぼってりした感じで丸くおさめている。呉須は淡い藍色，外面野菊文，高台外面「寿」のくずし文字，内面見込み「荒」の略字，口縁内面四方襷文，高台畳付砂付着。 18c代
11	碗	— 4.0 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら大きく開いている。高台は内側に向って傾斜している。呉須は明るい藍色，松文，高台底部外面「太明成化年製」の銘。 18c後半
12	碗	7.9 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は直線上に立ち上がる筒形碗で底部に銘があるが不明。口縁端部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，外面蛸唐草文，口縁内面四方襷文。 18c後半
13	碗	— 4.0 —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はゆるやかに大きく内湾，高台部は斜めに外反している。高台内部は内湾，畳付に砂付着。呉須は藍色，クワイ図，高台付近蓮弁文。 18c後半
14	碗	11.5 4.3 6.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部は球形状に内湾し口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。高台はやや内側へ傾いた台形。高台畳付は平担。呉須はやや黒ずんだ藍色，笹文，口縁内面斜格子襷文，内面見込み五弁花コンニャク判，高台畳付砂付着。 18c代
15	碗	11.2 5.7 7.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	広東型碗で内面は大きく内湾し外面はほぼ直線上に外上方に上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は高くまっすぐである。畳付部は丸くおさめている。呉須は藍色，蝶と草花文，内面見込み「荒」の略字，高台畳付砂付着。 19c初頭
16	碗	—	灰白色	灰色	伊万里	陶胎染付，広東形碗。体部は球形状に丸くな

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		— —	(胎土に黒粒を含む)			っている。つまみは内面から内湾しながら外上方へのび，端部は丸くおさめている。釉は灰色の上に白釉，呉須は藍色，蝶と草花文。 19c初頭
17	碗	— 3.4 —	白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は高台より大きく開き，体部下半で大きく内湾し，そこからほぼ直線的にまっすぐ延びている。高台部は低く三角形で体部に比べて小さい。呉須は藍色，外面七宝つなぎ文，斜格子文，内面見込み五弁花。 18c末～19c初
18	碗	10.6 3.6 5.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかな屈曲をもちながら立ち上っており，口縁部付近でゆるやかな屈曲をもちながら立ち上っており口縁部付近でゆるやかに外反し，端部は丸くおさめている。高台はゆるやかに外反している。呉須は藍色，こうもりとシュロ文。 18c末～19c前半
19	碗	9.8 3.9 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台より大きく内湾し，体部上半でやや外反し，端部は丸くおさめている。高台はまっすぐに下り，高台畳付は外側を削りをかけている。呉須は青味がかった藍色，外面亀甲つなぎ文，内面見込み船に島。 19c前半
20	碗	11.3 3.9 4.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾気味に直線上に立ち上がり縁部はやや外方に開く感じで丸くおさめている。高台部は内側より外側へ向って丸くおさめている。呉須は群青がかった藍色，外面牡丹と菊花文，内面なりもの図。高台外面に銘あるが不明。 19c前半
21	碗	11.8 4.4 4.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら大きく外上方に開いている。口縁端部は丸くおさめている。高台は外に開き気味であり畳付けはヘラ削り。呉須は群青がかった藍色で牡丹文。 19c前半
22	碗	11.5 4.0 5.0	にごった灰色 (胎土に黒粒を含む)	にごった灰色	伊万里	体部はやや内湾し，外上方に直線的に大きく開き口縁端部は丸くおさめている。高台は低く外方にやや開いている。呉須は群青がかった藍色，牡丹に草文。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
						19c 前半
23	碗	8.7 3.2 4.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	白色	伊万里	体部は内湾しながら外上方に立ち上がり口縁部付近でわずかに外反する。高台は中央部がややくぼんでいる。端部は丸くおさめている。外面明るい藍色の瑠璃碗，高台内面毛彫り「キ」の銘。
24	小碗	3.0 2.6 1.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部は丸くおさめている。高台は逆台形高台である。紅入れ等の用途が考えられる。呉須は緑がかった藍色で草花文。 18c 代
25	小碗	7.8 3.6 4.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台部より大きく内湾し，体部中ごろより口縁部に向ってゆるやかに外上方に上っている。口縁端部は内面より丸くおさめている。高台部は内傾した三角高台。呉須は藍色宝くずし文，高台畳付砂目痕。 19c 初
26	碗	10.4 — —	黒褐色 (胎土に白砂を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗，体部はゆるやかに内湾して立ち上っており口縁部は外方より丸くおさめている。外面は波状の刷毛目，内面は縦縞状刷毛目で木ノ葉を表しているのか？褐釉の上に白釉の刷毛目。 17c 後半～18c 前半
27	碗	— 3.8 —	赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗，体部は球形状に内湾している。高台は畳付付近で外側を削りとった高台，内面に砂が付着。釉は褐釉の上に白釉の刷毛目，高台畳付砂付着，内面見込み砂目積み，高台内部施釉。 17c 後半～18c 前半
28	碗	11.4 4.4 6.4	橙褐色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	天目風，やや厚手のもので球形状に内湾して立ち上がり口縁端部は丸くおさめている。高台は削り出し高台で面取りが明瞭になっている。内外面とも褐釉の上にこげ茶色の黒釉を刷毛目がけしている。
29	碗	11.7 4.6 8.2	やや黒ずんだ灰色	緑灰色	唐津	体部は大きく内湾して立ち上がり口縁部付近はわずかに内湾している。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台ははぼ垂直の台形で内面は内湾し高台内面に兜巾を明瞭に残し

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						ている。輪積みロクロ仕上げ，底部に細かい貫入あり，胴部高台付近及び高台無釉。 18c
30	碗	11.6 — —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブがかった黄灰白色	京焼	体部は下半が大きく内湾し，上部はわずかに内湾している。やや薄手。呉須はやや黒みがかった赤，淡緑色，淡青色，えび図，内外面とも貫入あり。
31	碗	— 6.0 —	黄橙白色 (胎土に黒粒を含む)	黄灰色	志野	筒形碗，体部はほぼまっすぐに立ち上っており角は1つの稜線をもっている。底部内面は円形状の凹みの上げ底となっている。内外面とも細い貫入あり，内面にロクロ痕を残す。底部外面砂目痕。
32	碗	— 9.9 —	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	黄灰白色	不明	体部はゆるやかに球形状に内湾し，口縁部付近はまっすぐに近い。口縁端部は丸くおさめている。呉須は黒褐色，内外面とも細かい貫入あり。
33	蓋	— 4.6 (つまみ) —	やや黄色味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	ややかった灰白色	伊万里	体部は球形状に丸くなっている。つまみは内面から内湾しながら外上方へのび，端部は丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，外面山水図。内面見込み梅文。 18c前半
34	蓋	22.1 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	上部は平担気味で口縁部付近は大きく内湾して受部へとつながっている。受部は斜めに内傾しており，端部は丸くおさめられている。受部は無釉である。呉須は藍色，蛸唐草文。 18c代
35	蓋	11.4 4.4 (つまみ) 3.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は大きく外反し，体部中ごろより大きく内湾している口縁端部は丸くおさめている。つまみは内面より外反し，端部は丸くおさめている。呉須は黒ずんだ藍色，山水図，松梅文内面見込み雁山水図，口縁部四方襷文。 18c代
36	蓋	9.1 5.4 (つまみ) 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は丸く球形状に内湾している。つまみ部は中央部がやや持ち上がり，つまみ部はやや外反して尖り気味に丸くおさめている。呉須は藍色，蝶とつる草文，内面見込み「寿」のくずし文。 18c後半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
37	蓋	— 4.6（つまみ） —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾している。つまみは内面からゆるやかに内湾し，体部に近づくにつれて狭くなっている。呉須は藍色，内面見込みに「寿」の銘，寿字霊雲文。 18c末
38	蓋	9.2 5.1 2.5	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾し端部は丸くおさめている。つまみ部内面は大きく切りこんでいる。呉須は黒灰色，鉄線花文，内面見込み「巻」文。 18c末～19c前半
39	蓋	— 3.8（つまみ）	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はわずかに外反している。つまみ部はゆるやかに内湾し，外面端部を丸くおさめている。呉須はくすんだ藍色，外面暦文，内面見込み「寿」のくずし文，高台畳付砂付着。 19c前半
40	蓋	8.3 3.2（つまみ） 2.8	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はやや「く」字状に屈曲し，外方に開いており端部は丸くおさめている。つまみは内面中央が高く直線上に立ち上がり，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，花文，内面見込みつる草文，口縁雷文。つまみ内面「吉」の銘。 19c前半
41	蓋	9.8 4.0（つまみ） 2.9	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾し斜め下方に開いている。口縁端部は外面より丸くおさめている。つまみ部は高く内面は大きく内湾して立ち上がり，端部は丸くおさめている。呉須は群青がかった藍色，草文。 19c前半
42	蓋	9.2 3.8（つまみ） 2.7	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はやや内湾して直線状に開く。端部は内側より丸くおさめている。呉須は群青がかった藍色，外面菊花文，口縁内面斜格子文，見込み「大化年製」の銘。 19c前半
43	蓋	5.4 5.6 0.9	白色 （胎土に黒粒を含む）	白色	伊万里	上部はほぼ水平でほぼ直角に屈曲し受部は水平，内面中央部がとがった感じである。呉須は赤，青，黄色，緑色は退色，武田菱と扇文，体部に梅文。
44	蓋	— 8.2（長径）	灰白色	灰白色	伊万里	角形。角は丸くおさめられており，体部はほぼ直線的におりており，短軸の方は一般の屈

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
			(胎土に黒粒を含む)			曲面がみられる。呉須は藍色，野菊文。
45	蓋	5.8 — —	茶褐色 (胎土に白砂，雲母を含む)	緑黄褐色	唐津	本来つまみがあったものと思われ，体部は水平からやや端部でゆるやかに下方へ傾斜している。受部は外面がほぼ垂直で内面が傾斜している。端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，本来は中央部につまみがあったものと思われる。
46	蓋	11.0 5.4 2.3	灰色 (胎土に石英，黒粒を含む)	灰白色	京焼系	体部外面はヘラ削りによって3段に面取りしており，端部は水平につまみ出して端部を丸くおさめている。底部は平底でロクロ痕を残している。外面は白釉と緑釉。ロクロ成形。
47	蓋	8.0 — 2.2	灰黄褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	灰色がかった白色	京焼系	体部はやや内湾しながら横に直線状に開く。受部は高くやや内湾し，端部は丸くおさめている。つまみは犬を取りつけている。
48	蓋	— 6.9 1.8	黄灰白色 (胎土に石英を含む)	オリーブ褐灰色	美濃・瀬戸	つまみは変形三角つまみで平底で，体部はヘラ削りによりシャープに立ち上っている。内面はゆるやかに内湾している。つまみはひねり上げ，外面ロクロ切り離し。
49	蓋	11.9 2.6 (つまみ) 2.5	灰黄色	黒ずんだ褐色	美濃・瀬戸	体部はゆるやかに内湾して受部に至っている。受部はやや上に向って傾斜し，折りかえしたようになっている。内面無釉，ぼたん状つまみがつけられている。
50	蓋	7.0 5.6 2.2	黄灰白色	黒褐色	美濃・瀬戸	体部はヘラ削りによって鋭角な形であり，口縁部は水平で外面に2段の稜をもってやや下がっている。底部は平底。外面無釉，受け部ヘラ削り，底部ロクロ成形。
51	蓋	8.4 2.0 2.1	黄橙色 (胎土に黒粒を含む)	黒ずんだ褐色	大谷	体部はヘラ削りで鋭角に段をもってやや外上方に立ち上っている。口縁部は2段の稜線をもって外反し，端部は水平で外面に2段の稜をもってやや下がっている。底部は平底。内面無釉。 18c後半～19c前半
52	蓋	8.5 — 3.1	褐橙色 (胎土に白砂を含む)		不明	上部はほぼ水平で垂直に近く下り口縁部は水平に近い。端部は斜めに内傾している。口縁内面に布目痕がみられることから范型押し技

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						法と思われる。つまみは海老，手づくねで指おさえの痕が明瞭，内面に布目痕がみられ型押し成形と思われる。
53	蓋	9.0 6.4 1.9	黒灰色		瓦質	体部はやや内湾し，直線上に斜め上方に上り，口縁部は屈曲して水平に開く。端部は丸くおさめている。内面見込み中央部に宝珠の変形化したつまみがつけられている。外面に銀粉塗布，内外面ともナデ。
54	皿	— 4.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾して立ち上がるものと思われる。底部はゆるやかに凹んでいる。高台部内面より削りこみがみられる。呉須はやや黒ずんだ藍色，底部外面に「福」，高台畳付砂付着。 17c中
55	皿	12.2 4.2 3.3	灰白色 (胎土に白砂黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら大きく開いている。口縁端部は丸くおさめている。高台は削り出し高台で削り痕が明瞭である。内外面とも貫入あり，削り出し高台，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
56	皿	29.7 19.2 5.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾しながら立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。高台部は低く丸くおさめている。口径に対して高台径が広い。高台内面に中央に向って下っている。呉須は藍色，内面牡丹唐草文，内面見込み唐草束ね熨斗文，外面唐草文，高台外面「太明成化年製」銘。 17c後半
57	皿	31.6 19.4 4.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら大きく外反しながら立ち上がり，口縁部近くで段をもち外反している。高台は低く丸く内傾をしている。口縁輪花，呉須は藍色，墨弾き技法，雲文南画風笹舟人物画，底部外面「嵩弓」の字，ハリ支え6か所。 19c前半
58	皿	10.6 6.2 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁部はやや内湾気味に丸くおさめている。口縁輪花，呉須はややにごった藍色，内外面とも唐草文，内面見込み松竹梅文，高台外面「成化年製」，高台は低く三角形。 18c後半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
59	皿	21.7 13.4 3.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑灰色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁部は屈曲してやや内側に内湾し端部は丸くおさめている。口縁輪花，外面南天図，内面見込み雲文。 18c後半
60	皿	14.0 7.8 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，外上方にのびる口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内傾し三角形。高台内面に一条の円圏に施している。呉須はやや黒ずんだ藍色，内面墨弾き波文様，外面唐草文，高台畳付無釉。 18c末～19c初
61	皿	10.6 5.6 2.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台部よりやや内湾しながら立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。高台内面はほぼ水平に作られている。高台部は畳付に向って内傾し，畳付部でやや外方に丸くおさめられている。呉須は藍色で草と瓶，内外面に銘文があるが不明。 19c前半
62	皿	14.0 7.4 3.6	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	高台部よりやや大きく外反し，腰部より内湾して立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。口縁部は口紅を施し28弁の輪花となっている。高台はやや高く内面は直線的。外面はやや内湾し，高台畳付外側を斜めに削り出している。呉須はにごった藍色，内面帆かけ船，梅に牡丹図，外面松折葉文，蛇ノ目凹形高台。 19c前半
63	皿	11.6 6.5 3.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに外反し，口縁部近くで大きく内湾し端部は丸くおさめている。高台は低く台形。口縁口紅（呉須）は群青がかった藍色，蓮根文。 19c前半
64	皿	— 4.7 —	やや灰色がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾して立ち上っている。高台は低く幅広く，畳付は内側より外側へ向って傾斜している。呉須は藍色，草花をアレンジした熨斗文，内面見込み「末道君与意香口笑公」の銘，高台無釉，蛇ノ目高台。
65	皿	13.0 — —	黄灰色 (胎土に白砂，黒粒を含む)	オリーブ淡緑色	美濃・瀬戸	体部は内湾しながら大きく外反し，底部は凹形高台で畳付は内側から外へ向って傾斜している。内面見込みに砂目積み跡5か所あり。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
66	皿	9.3 4.8 1.6	赤褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	赤褐色	不明	体部は「ハ」字形に開き，底部は外面から指でおし上げられ中央部が凹んでいる。底部にロクロ痕を残している。口縁内外面にスス付着，灯明皿として使用？
67	皿	8.3 4.0 1.2	赤褐色 (胎土に白砂を含む)	褐色	不明	体部はゆるやかに内湾して大きく外反している。口縁端部は丸くおさめている。底部は平底。底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部スス付着，灯明皿として使用。
68	甕	32.8 — —	淡黄灰色 (胎土に石英,黒砂を含む)	茶褐色	備前	体部は頸部から大きく外反しており，頸部は「く」字形に屈曲している。口縁部は内外に大きく肥厚させ，「T」字形を呈している。内外面ともナデ。
69	甕	20.8 — —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黒味がかった褐色	美濃・瀬戸	頸部は大きく「く」字形に屈曲して外反し，口縁端部はわずかに丸みをもっている。口縁内面は大きく内湾し，口縁端部を肥厚させている。ロクロ成形。
70	鉢	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	厚手のもので，体部は内湾して外上方に立ち上っている。高台は台形と思われるが不明。呉須はややにごった藍色，八ツ手文。 18c 前半
71	鉢	15.2 — —	灰白色 (胎土に黒粒に含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾して立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色，唐草文，口縁内面四方襷文。 18c 代
72	鉢	14.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部がまっすぐの筒形で，口縁端部は水平で無釉。蓋がとりつけられているものと思われる。内面に淡青色の釉調あり。呉須は藍色，格子文に竹の葉。
73	鉢	— 5.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は斜上方に直線的に開き，大きく屈曲して上方に直線的に大きく屈曲して上方に直線的に上っている。高台は台形，畳付は平担。呉須はにごった藍色，笹文，高台内部及び畳付無釉。
74	鉢	— 14.4 —	淡赤褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)		唐津	象嵌唐津。体部は高台から直線的に大きく開いている。高台は削り出し高台で台形。縦線文と蓮弁文。 17c 後半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
75	鉢	— 10.8 —	赤褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	(外)褐色 (内)白色	唐津	体部はゆるやかに内湾して立ち上っている。高台外面は膨らみをもち，段をもって端部を内傾している。高台外面は直線となっている。底部内面ロクロ痕を明瞭に残している。 17c後半
76	鉢	— 10.4 —	灰褐色 (胎土に黒粒を含む)	(外)白色 (内)黒色	唐津	体部は内湾しながら立ち上っている。底部は内傾し，畳付は平担。畳付部に現状で3か所の砂胎土目痕がみられる。高台畳付砂目痕。 17c後半
77	鉢	12.9 7.8 7.2	赤褐色	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部はゆるやかに内湾し，外上方に大きく開いている。口縁端部は外側より丸くおさめている。高台は高く台形。高台内面に墨痕あり。褐釉の上に白釉の刷毛目，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c後半
78	鉢	— 12.8 —	赤褐色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部は直線的に斜上方に開いている。高台は削り出し高台で外面は2段に内傾している。褐釉の上に白釉の刷毛目，内面見込みに重ねづみ跡あり。高台底部砂胎土目跡7か所。 17c末～18c前半
79	鉢	38.8 — —	やや黒ずんだ褐色 (胎土に石英,黒砂を含む)	褐色	唐津	体部は稜をもちながら屈曲して外反し，頸部で大きく「く」字状に外反し，口縁内部に1条の凹線をもって端部をつまみ上げ気味に行っている。褐釉の上に白釉を施している。 17c後半～18c前半
80	鉢	— 12.0 —	灰褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	オリーブ 淡褐色	唐津	体部は直線的に外上方に開いている。高台は削り出しで段をもったぶ厚く，2条の凹線をめぐらしている。砂胎土目がみられる。 17c末～18c前半
81	鉢	— 7.3 —	褐橙色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	茶灰褐色	唐津	刷毛目唐津。体部は球形状に内湾し，高台はやや高く畳付部分の外側を削っている。畳付は平担，底部内面はロクロ痕を残している。褐釉の上に白釉の刷毛目，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
82	鉢	— 6.0	赤褐色	褐色	唐津	体部は直線的に大きく開いており，高台はやや高く外方に開き気味の台形。外面に褐釉，

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		— —	(胎土に黒粒を含む)			内面及び高台内無釉。
83	鉢	23.1 — —	黒茶褐色 (胎土に黒粒を含む)	白褐色	唐津	口縁端部は平担で頸部に向って「く」字形に屈曲し，頸部はほぼまっすぐになり，頸部下半で屈曲して体部は直線的に下りている。ロクロ痕を明瞭に残している。内面は頸部以下オリーブ緑褐色，外面頸部から体部にかけて鉄釉の文様あり。 18c代
84	鉢	— 13.0 —	赤褐色 (胎土に石英，雲母，黒粒を含む)	やや黒味がかった赤褐色	備前	体部はほぼ直線的に立ち上がり，途中1条の凹線をめぐらしている。底部はやや上げ底。内外面ともナデ。
85	鉢	25.8 — —	黄白色	オリーブ黄色	美濃・瀬戸系	体部はゆるやかに内湾し，口縁部が最大径で，口縁部が最大径で，口縁部をおりかえして端部を丸くおさめている。小さい貫入あり。外面緑釉の流しかけが見られる。
86	鉢	12.7 10.8 7.9	黄橙色 (胎土に雲母，黒粒を含む)	黄橙色	美濃・瀬戸系	体部はやや外反した筒形で，口縁部は内側に折り返して肥厚させている。高台畳付に4か所の抉りこみがある。底部は上げ底。呉須は黒釉と白釉の梅文，貫入あり，内面口唇部のみ施釉。
87	鉢	23.6 — —	淡黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ淡黄緑色	美濃・瀬戸系	体部がほぼ垂直の筒形で，口縁端部は内外に肥厚させ，中央部が凹んでいる。内外面ともロクロ痕が明瞭に残っている。呉須は褐釉と黒褐釉による竜文。
88	鉢	19.8 18.8 4.1	黄灰褐色 (胎土に石英，雲母を含む)		土師質	体部は底部より「く」字形にゆるやかに内湾して，口縁端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底気味の平底。外面ヘラ削りの後ナデ，内面ナデ。
89	鉢	14.5 13.6 2.4	褐灰色 (胎土に石英，雲母，クサリ礫を含む)		土師質	体部は底部よりやや傾斜をもって斜上方に立ち上っている。内面はゆるやかに内湾して端部を丸くおさめている。底部は平底で，内面に木片状の押さえ跡がみられ，その後ナデを施こしている。内外面ともナデ，底部外面火を受けた痕がみられる。
90	猪口	— 4.0	灰白色	白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾しながら外上方に立ち上っており，高台はゆるく内湾しながら丸く

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		—	(胎土に黒粒を含む)			おさめている。呉須は藍色，芙容手及び竹草文，底部外面「宣明年製」の銘。 17c末
91	猪口	8.2 2.6 3.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	乳白色	伊万里	体部は斜上方にやや内湾して立ち上がり，口縁部は薄く丸くおさめられている。高台径は口径に比して小さく「く」字形にやや外反している。高台畳付無釉。 19c初頭
92	猪口	6.6 3.8 6.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台付近でゆるやかに内湾し，ほぼ直線上に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は薄く内面より丸くおさめた三角形。呉須は青みがかった藍色，草花文，外面は花文，口縁内面雷文。 19c前半
93	香炉	8.4 8.5 6.3	灰色	灰白色	京焼	体部は高台付近よりやや内傾しながら立ち上がり，高台部はわずかに凹んだ状態でありロクロメと明瞭に残している。口縁部は内側に折りかえした口縁である。高台部は8か所のくぼみを作っている。呉須はこげ茶と淡青色，梅文，貫入あり，内面上半まで施釉，ロクロ成形。
94	合子	11.3 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	胴張り状の体部で，口縁部を水平に内側に折りかえしており，端部は丸くおさめている。呉須は明るい藍色，蛸唐草文，内面は無釉。
95	瓶	— 3.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はずんぐりとした形で最大径は胴下半部にあり，上に向って内傾し頸部へと次第に細くなっている。高台はやや外反し，畳付部分に砂が多く付着している。釉は藍色，蛸唐草文。 18c後半
96	瓶	5.4 — —	灰色がかった灰白色	灰色がかった灰白色	伊万里	細い頸部で外反し，口縁部は朝顔状に開口し，端部は丸くおさめている。ロクロ成形。 18c末～19c初
97	徳利	— 7.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	ややぽてっとしたつくりで，体部はやや内湾しながら立ち上っている。高台はやや外反して畳付は平担で4か所に砂目痕あり。高台内面は中央部に向って下っている。呉須は藍色。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
98	徳利	— 7.4 —	褐色	茶褐色	大谷	体部はやや内湾しながら直線的に外上方に延びており，高台は体部より屈曲し，直線的に内傾している。内面にロクロ痕を明瞭に残している。内面無釉，底部外面に砂目痕が5か所見られる。 18c後半～19c前半
99	徳利	— 7.8 —	赤褐色	赤褐色	大谷	体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上っている。高台部は体部より屈曲させ，一段の段をもって外へ広げ，内傾させた三角形。 18c後半～19c前半
100	徳利	4.5 — —	黒褐色	黒褐色	大谷	頸部は下半に向って少し太くなっている。口縁部は外側に折りかえして肥厚させている。釉ハゼがみられる。 18c後半～19c前半
101	徳利	— 7.8 —	茶褐色 (胎土に石英を含む)	黒褐色	大谷	体部はやや内湾しながら外上方に延びている。底部は平底。内面にロクロ痕を残している。ロクロ成形。 18c後半～19c前半
102	仏飯具	8.1 4.4 5.9	白色 (胎土に黒粒を含む)	白色	伊万里	体部上半はゆるやかに上っている。口縁端部は外方より丸めこまれている。杯部は下半で大きく内湾し，脚部は「ハ」字状に開き蛇ノ目凹形高台。口縁部口紅，高台内部も施釉。 17c後半～18c前半
103	擂鉢	— 14.2 —	赤褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)		備前	高台底部内面より球形状に内湾して立ち上っている。高台は貼りつけ高台で体部より「く」字形に取りつけられており，内面から丸くおさめている。内面に10～11条単位の櫛目描き。
104	土瓶	— 8.7 —	褐色 (胎土に石英，雲母を含む)	オリーブ黄緑色	不明	体部中ごろよりやや内湾している。底部から斜め上方に立ち上がり底部は大きく上げ底となっている。呉須は群青がかった藍色，竹文。
105	火鉢	21.0 — —	灰色 (胎土に石英，黒粒を含む)		瓦質	口縁部は折りかえし，口縁はナデ，口縁部の一部はヘラ磨きを施している。色調は黒色で内外面ともナデ。
106	火鉢	22.4 — —	灰黄白色 (胎土に白砂，雲母を含む)		瓦質	頸部は大きく屈曲し，口縁部は肥厚した折りかえし口縁である。口縁端部はヘラ磨きを行っている。色調は外面黒色，内面灰黄白色，内外面ともナデ。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
107	火鉢	— 24.6 —	褐色 (胎土に白砂,雲母,黒粒を含む)		土師質	高台部はわずかに内湾し底部近くに1条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデ。
108	火鉢	25.2 — —	黄灰白色 (胎土に白砂,黒砂を含む)		瓦質	体部は直線的で口縁部は外反させ肥厚している。外面黒灰色,内外面ともナデ。
109	火鉢	13.2 — —	黄灰白色 (胎土に白砂,雲母,黒粒を含む)		瓦質	体部は球形状に大きく内湾し,口縁端部は内側に向って丸くおさめている。色調は黒色,内外面ともナデ。外面漆の痕跡あり。
110	火鉢	19.2 — —	黄灰白色 (胎土に白砂,黒粒を含む)		瓦質	体部は直線的で頸部は「く」字形に内傾し,口縁部は外反し,肥厚させている。外面黒灰色,内外面ともナデ。
111	ス(ロストル)	14.7 — 1.4	やや赤味がかった褐灰色 (胎土に白砂,雲母,黒粒を含む)		土師質	内外面ともナデ。穿孔は焼成前に斜傾をもって穿孔されており,二次焼成が行われている。直径1.4cmの孔が何か所かあけられており,火鉢のロストルとして使用。
112	焼塩壺	6.9 8.2 (最大径) —	淡赤褐色 (胎土に白砂,雲母,黒粒を含む)		土師質	体部はゆるやかに湾曲している。内面に布目痕がみられることから丸棒成形であり,受部はやや内側に傾斜し端部は平担。外面指おさえの後ナデ,内面布目痕があり棒形成形,「御壺塩師堺湊伊織」の刻印あり。 18c前半
113	味噌焼皿	6.6 — —	赤褐色	黒褐色	不明	体部は斜め下方に開き,口縁端部は内側に向って丸くおさめられている。内面は中央部がへこんでいる。ロクロ成形。
114	味噌焼皿	7.4 5.4 2.4	橙褐色	茶褐色	不明	つまみ部は直線的に立ち上がり端部は丸くおさめている。受部内面はほぼ平担で口縁部はやや内湾し,端部に丸くおさめている。内面に貫入あり,外面ナデ。
115	灯明皿	11.0 3.6 2.0	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ褐色	美濃・瀬戸	体部はゆるやかに内湾し,口縁端部は丸くおさめている。底部は上げ底気味の平底。内面火の熱を受けて変色している。外面スス付着。
116	灯明皿	12.0 4.5 2.6	橙黄色	橙黄灰色	美濃・瀬戸	体部は逆「ハ」字状に直線的にのびており,体部中ごろよりやや外反しており,口縁部付近でやや内側にまげられている。燈心受部は大きく内湾して端部は丸くおさめている。貫

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						入あり，内外面ともススト付着，底部外面ロクロヘラ切り離し。
117	灯明皿	9.9 — —	赤褐色		備前(?)	体部は内湾しながら立ち上っている。口縁端部は外方より斜めに丸くおさめている。内面より丸く立ち上っている。燈心受部に3か所の円形の抉りこみがみられる。外面ヘラ削り，底部外面ロクロ糸切り，口縁部外面に褐釉がみられる。
118	灯明台	10.1 6.4 2.2	黒褐色	黒ずんだ褐色	備前	体部は直線的に外反し，口縁部は端部を上につまみ上げている。燈芯受部は底部内面より斜め外方に上げている。底部はやや上げ底気味の平底，底部ロクロ痕が明瞭。外面は口縁部以外は無釉，ススト付着。
119	墨壺	9.3（長さ） 7.7（幅） 3.7（高さ）	赤褐色		土師質	アブミ形を呈し，墨を入れる壺の部分は大きく内湾しており内面に墨が付着している。壺の底面は平担である。底部外面は平底。糸を受ける部分は破損し不明。底面の袋部は重ね合わせて成形している。
120	土錘	6.8（長さ） 3.2（幅） 1.1（穴径）	やや黒味がかった褐色 （胎土に白砂，クサリ礫，片岩，黒粒を含む）		土師質	棒状のものに粘土を巻きつけて作ったものと思われ，指おさえヘラ削りの痕がわずかにみられる。両面穿孔。
121	土製品	4.2（現高） 3.6（現幅） 1.8（現厚）	黄橙色 （胎土にクサリ礫，黒粒を含む）		土師質	大黒像。底部中央に直径6mmの穿孔あり。棒をさしこんで立てたものか？
122	土製品	— — —	褐色 （胎土に白砂，雲母，黒粒を含む）		土師質	下に向って「ハ」字状にゆるやかに開き，内部はしぼり目が明瞭に残っている。外面に指おさえの後ナデ。上部に直径1.5cm，深さ1.3cmの円形の孔がみられる。
123	土製品	5.2 7.2 3.6	橙褐色 （胎土に石英，黒粒を含む）		土師質	体部は厚い作りで体部から口縁にかけて大きく内湾している。底部は上げ底気味の平底。内外面ともナデ，焼塩壺と思われる。
124	土製品	— 2.9 —	褐色 （胎土に雲母，黒粒を含む）		土師質	体部は底部より内傾し，口縁部で大きく屈曲し，外反している。内面はやや袋状を呈している。内面手づくね痕あり。ミニチュアで，外面ナデ，内面指おさえ。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
125	土製品	3.6 2.5 1.4	赤褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)		陶質	体部はやや内湾しながら外上方に延びている。底部は平底。内外面ともナデ。
126	硯	11.6（現長） 7.5（幅） 2.6（厚さ）	灰黒色		石製品	長方形のもので底面は平底，陸の部分のみで海の部分は欠損している。摺り部は一部使用によりへこんでいる。材質不明。
127	硯	11.1（長さ） 7.2（幅） 1.7（高さ）	紫褐色		石製品	長方形で隅は斜めに面取りをしている。底部内面を削りこんでへこましている。内面海部は1.1cmの凹みがつけられている。材質不明，両面に凹みがみられ，墨痕がある。
128	瓶	6.0 — —			ガラス	体部はわずかに外方に開く筒形。底部は大きく山形になった上げ底で片方に傾いている。黒褐色で上げ底，上げ底は一定でなく片方へ上っている。外面逆「L」字形。
129	軒丸瓦	10.9（直径） 1.6（厚さ）	灰色 (胎土に黒粒を含む)		瓦	「卍」文。内面ナデ，瓦当部の周縁は2.0cm。ヘラ切り成形，表面黒灰色で銀粉塗布。
130	軒丸瓦	9.2（直径）	灰色 (胎土に白砂,雲母，黒粒を含む)		瓦	「卍」文押型成形。瓦当部は正円でなく横はやや広い。周縁は幅1.4cm，軒平部分は唐草文。平瓦部分はヘラ削り，表面黒灰色。
131	軒丸瓦	15.5（直径）	白灰色		瓦	「巴」文瓦。瓦当の周縁は幅1.9cm尾のやや長い巴文で連珠文は直径8mmでやや大きめである。珠文は18個。表面黒灰色。 18c代
132	軒丸瓦	15.8（直径）	灰褐色 (胎土に雲母,黒粒を含む)		瓦	「巴」文瓦。瓦当部は完形で周縁は幅2.0cm，巴はやや尾が長い。連珠文は直径1.0cmありやや大きい。珠文は20個。 18c代
133	軒丸瓦	15.1（直径）	灰白色 (胎土に白砂を含む)		瓦	「巴」文瓦。瓦当部はやや大きく周縁は2.0cm。連珠文は直径0.8cmでやや低い。やや尾の長い巴文。色調黒褐色。 18c代
134	軒丸瓦	14.4（直径）	灰褐色 (胎土に雲母,黒粒を含む)		瓦	「巴」文瓦。瓦当部は周縁2.3cm，連珠文は直径1.3cmでやや低い。内区は巴文で尾はやや長い。丸部分との接合はヘラ描き痕があり，接着しやすいようにしてある。珠文は13個。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
						18ｃ代
135	軒丸瓦	13.9（直径）	白褐色 （胎土に白砂，雲母，黒粒を含む）		瓦	「巴」文瓦。周縁幅1.7cm，尾の長い巴文，連珠文は0.6cmで他に比べて小さい。珠文は32個。表面ヘラ削り。 18ｃ前半
136	軒丸瓦	9.8（直径）	黒灰褐色 （胎土に白砂を含む）		瓦	「巴」文瓦。瓦当部分円縁は幅1.3cmで，連珠文は直径6mmのやや高い形である。巴の尾はやや短い。丸瓦部分内面に模骨の跡がみられる。表面に銀粉塗布。 18ｃ代
137	軒丸瓦	8.0（直径）	灰白色 （胎土に白砂，雲母を含む）		瓦	「巴」文瓦。瓦当部は周縁1.1cm。内区は連珠文はなくやや尾の短い巴文である。表面黒灰色で銀粉塗布。 18ｃ代
138	軒丸瓦	14.4（直径）	灰褐色 （胎土に雲母，黒粒を含む）		瓦	「巴」文瓦。瓦当部周縁1.6cm，連珠文0.8cmで15個。巴の尾は非常に長い。 18ｃ前半
139	棰木先瓦	7.0（直径）	灰色 （胎土に石英，黒粒を含む）		瓦	中房は直径2cmで中央部がややへこんでいる。菊文で21弁。
140	桟瓦	9.3（直径）	灰褐色 （胎土に石英，黒粒を含む）		瓦	軒丸部分「卍」文，軒平部分「唐草文」。瓦当部周縁は1.3cm～1.4cmで，「卍」部分はヘラ削りにより作成。ロクロナデ及び端部はヘラ削りを行っている。表面黒褐色で銀粉塗布。 18ｃ後半～
141	桟瓦	9.3（直径）	灰白色 （胎土に石英，黒粒を含む）		瓦	軒丸部分「卍」文，軒平部分「唐草文」。瓦当部分周縁1.4cm，内区「卍」は范型押技法。瓦当と平瓦部分は平行沈線ヘラ描きによって接着させている。内外面ともナデ。表面は黒灰色で銀粉塗布。 18ｃ後半～
142	軒平瓦		灰白色 （胎土に雲母を含む）		瓦	瓦当文様は唐草文，周縁は上が1cm，下が0.7cm，左右が4.6cmナデ調整。表面黒灰色で銀粉塗布。
143	煙管雁首	6.6（長さ） 1.7（火皿）			銅	火皿部分はやや大きく，脂返しが大きく湾曲し，「河骨形」肩部は帯をもつ，肩部に「本

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		1.2（肩部径）				大仏」の彫刻，脂返し部分に金箔が残っている。古泉編年Ⅱ期。 17c前半
144	金具	4.9（縦長） 3.8（横長） 0.2（厚さ）			鉄	長方形の鉄板の四隅を丸く端取りし，中央に長軸1.5cm，短軸1.1cmの孔，建物部材の金具として使用されたものか？
145	金具	5.2（辺）			銅	一辺5.2cmの銅板を角をもって折り曲げたもので隅に稜をもたせ，釘穴が各辺に2個ずつ穿孔し，建具等の隅飾金具と思われる。

第10表　武道館地点　　川跡護岸板列

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	— 4.4 —	白っぽい灰白色 （胎土に黒粒を含む）	白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に外反している。高台はせまくやや内湾している。高台畳付無釉，長吉谷窯か。 17c後半
2	碗	4.1 3.9 4.2	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，体部上半は直線的に斜上方にのびている。口縁端部は丸くおさめている。高台部はやや内傾し，平担面を形成している。呉須はややにごった藍色。 17c後半
3	碗	9.7 3.9 4.9	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾し，外上方に立ち上がり，口縁部はやや外反し，端部は外方へ開き丸くおさめている。高台はやや内傾した三角形。呉須はやや黒みがかった藍色，高台下半ヘラ削り，無釉。 17c後半
4	碗	10.8 4.2 6.0	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，斜め上方に上がっている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや内湾した台形。呉須は明るい藍色，山水文。高台裏面「太明年製」の銘。高台畳付砂付着。 17c末～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
5	碗	10.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁部はやや内湾し丸くおさめている。呉須は藍色。桐文のコンニャク判。 17c末～18c代
6	碗	9.6 5.5 3.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台は内面より傾きをもった台形。呉須は藍色，菊に唐草文のコンニャク判。高台裏面「太明年製」の銘。 17c末～18c代
7	碗	8.3 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾して斜上方に開いて，口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色，巴文と唐草文，コンニャク判。 17c末～18c代
8	碗	9.4 — —	白色 (胎土に黒粒を含む)	白色	伊万里	体部はまっすぐに斜上方に開き，口縁部は屈曲して外反した端反り型。 17c後半～18c前半
9	碗	10.5 5.1 5.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾して斜上方に開いて，口縁端部は丸くおさめている。呉須は藍色，菊花文のコンニャク判。高台裏面「太明年製」の銘。 17c末～18c前半
10	碗	12.2 5.7 6.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	にごった灰白色	伊万里	体部はやや肥厚しており，ゆるく内湾して斜め上方に立ち上っている。高台はやや高く端部は外面よりおさめている。呉須はにごった藍色，菊文と丸文。内面見込み五弁花コンニャク判。底部砂付着。 17c末～18c代
11	碗	11.1 — —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	青磁碗。体部下半は内湾し，中ごろよりややまっすぐに上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。緑がかった青磁。呉須はにごった藍色で口縁内面四方襷文。 18c中～
12	碗	8.4 3.2 4.8	灰白色	灰白色	伊万里	陶胎染付。体部はゆるやかに内湾し，斜め上方に外反している。口縁端部は外面より丸くおさめている。高台部は内面より内湾させた三角形。釉は白釉かけ流し，呉須は黒藍色の唐草文。 18c代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
13	碗	11.0 5.0 7.7	灰白色	灰色	伊万里	陶胎染付。くらわん手。体部は高台部より内湾して立ち上がり，下半で屈曲してゆるやかに内湾しながら上方に立ち上がっている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台はやや外反して畳付は丸くおさめている。釉は白釉のかけ流し，呉須は緑がかった藍色，草花文。 18c代
14	碗	— 6.4 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや青味がかった灰白色	伊万里	広東形碗。体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がっている。高台は高くやや内傾し，畳付は内面削り傾斜している。呉須はあざやかな藍色。松葉文。内面見込み鷺図。 18c末～19c初
15	碗	13.4 — —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗。体部は内湾し，下半で屈曲して直線的に斜上方へ延びている。口縁部はやや外反させ，尖り気味に丸くおさめている。高台は外反させた台形。褐釉の上に白釉の刷毛目。コバルトブルーによる木の葉とススキ文。 17c後半～18c前半
16	碗	11.7 4.8 7.1	赤褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗。体部はやや厚手で内湾しながら斜上方に立ち上がり，上半部はほぼまっすぐに斜め上方外反している。口縁端部は丸くおさめている。高台は内側が傾斜した台形。底部内面に兜巾を残している。褐釉の上に白釉の刷毛目，高台畳付無釉。 17c後半～18c前半
17	碗	11.0 4.5 7.7	灰色	褐色	唐津	刷毛目碗。体部は内湾し，体部下半で大きく屈曲し，斜上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや高く外反している。褐釉の上ににぶい黄橙色の刷毛目。指おさえ痕あり。 17c後半～18c前半
18	碗	11.5 4.5 6.0	灰色 (胎土に黒粒を含む)	黒灰色	唐津	天目風。体部は球形状を呈し口縁部付近で屈曲し，口縁部は外反して端部を丸くおさめている。高台は内側から傾斜した台形。削り出し高台。 18c前半
19	碗	— 5.3	黄灰褐色	黄褐色	京焼風陶器	体部は内湾して斜上方に立ち上っている。高台は低くせまい台形。高台内面に0.8cmの円圏

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		—				をめぐらしている。内外面とも貫入あり。底裏面「小松吉」の刻印。底部外面ロクロヘラ切り離し。 17c後半
20	碗	— 5.6 —	黄灰褐色	黄橙色	京焼風陶器	体部は内湾しながら大きく外反しており，高台は低く外反した台形。高台内面に直径1cmの円圏をめぐらし，「柴」の刻印を施している。高台無釉。 17c中～後半
21	碗	— 4.5 —	灰色	オリーブ黄灰色	京焼	体部は球形状を呈し，高台はやや高くやや内湾したU字形。貫入あり。高台無釉，砂付着。
22	碗	— 4.9 —	やや黄色味がかった白色	黄色	美濃・瀬戸系	体部は球形状を呈し，高台は高く外反している。畳付部分外面より削り。内外面とも貫入あり，高台底部無釉，高台底部砂目痕あり。
23	蓋	9.8 1.5（つまみ） 3.8	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	青灰白色	伊万里	乳頭状のつまみを施し，体部は水平から中ごろで斜下方に内湾させ，端部外方に開いている。受部は大きく内傾させ端部は丸くおさめている。呉須は藍色，草花文。
24	蓋	13.0 — —	褐色	黒褐色	不明	内湾した傾斜の急な体部から屈曲させて，ゆるやかな口縁部をつくっている。受部は内面をやや湾曲させている。中央部につまみがつくものと思われる。
25	蓋	8.6 4.6 1.9	灰褐色	褐色	不明	体部はヘラ削りによって鋭角に段を取り，底部はやや上げ底気味の平底。口縁部は体部から直角に外反し，上端部に肥厚させ2段の稜線をめぐらしている。外面ロクロヘラ削り，内面無釉，つまみがつくものと思われる。
26	皿	12.9 — —	白色	灰白色	伊万里	型打ち皿，体部は斜め上方に直線的にのび，体部上半で内側に屈曲し，内面より丸くおさめている。呉須は藍色，唐草文。 17c中
27	皿	— 8.4 —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾し外反しており，底部は平担。高台は内傾した低い高台。呉須は藍色，南画風山水図，底部中央にハリ支え1か所。 17c後半～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
28	皿	— 3.2 —	灰白色	淡緑色	伊万里	青磁皿。内面見込みが盛り上がり，体部をやや内湾させながら大きく開いている。高台は内外面下半に削りをした台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，高台畳付砂付着。 17c後半～18c前半
29	皿	— 13.6 —	灰白色	やや灰色がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，口縁部は内側へやや湾曲して端部を丸くおさめている。呉須は青味がかった藍色，草花文。 17c後半～18c前半
30	皿	21.4 13.6 3.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，口縁部付近で屈曲し，外反し，端部は内面より外側へ向って丸くおさめている。高台は内側へ向って丸くおさめている。呉須は藍色，内面花唐草文，内面見込み五弁花。 18c初～18c前半
31	皿	14.0 8.4 3.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は底部よりやや内湾して立ち上がり，上半部は斜め上方に開く。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は低く蛇ノ目凹形高台。呉須は藍色，外面唐草文，内面花唐草文。 18c後半
32	皿	26.8 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部から大きく内湾して立ち上がり，口縁端部は外側より丸くおさめている。波状の細かい輪花，断面に焼継ぎの跡がみられ，二次焼成による呉須の濁りがみられる。呉須は黒ずんだ藍色，つる唐草文。 18c後半
33	皿	11.2 5.9 1.8	灰白色	白色	伊万里	波型打ち皿。体部はやや内湾しながら斜上方に開き，口縁部は大きく外反させ端部を丸くおさめている。高台は台形。高台畳付砂目痕。 17c後半
34	皿	13.6 4.6 4.7	赤褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	灰褐色	唐津	体部は非常に厚手でやや内湾し屈曲して立ち上がり，口縁端部は上方につまみ上げており，端部は丸くおさめている。高台は削り出し高台で鋭角に削り内傾している。高台内面に兜巾高台。内面見込みに胎土目3か所。高台無釉，砂目痕あり，高台を2段に削り。 17c初頭
35	皿	—	やや黄色味	橙黄色	京焼	体部はやや内湾し，大きく外反している。高

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		3.8 —				台は低く内外面が傾斜した台形。高台無釉。白釉による松文，内外面とも貫入あり。
36	皿	13.6 6.0 2.5	浅黄橙色		土師質	灯明皿。体部はゆるやかに内湾しながら外方に立ち上っている。口縁部は丸くおさめている。底部はやや上げ底気味の平底。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部内外面スス付着。
37	皿	11.8 6.4 2.6	浅黄橙色		土師質	灯明皿。体部はやや内湾しながら斜上方に開けている。口縁端部は内側より丸くおさめている。底部はやや上げ底。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，底部内面スス付着。
38	皿	9.7 6.8 1.4	灰褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外方へ開き，口縁部はそのまま丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面板状圧痕。
39	皿	6.5 4.8 0.7	浅黄橙色		土師質	体部は内湾しながら外上方へ立ち上がり，端部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部外面板状圧痕。
40	壺	2.8 3.2 4.1	灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ茶褐色	唐津	体部下半に最大径をもつ球形状を呈している。口縁部は内面で丸くおさめている。底部は平底，高台底部無釉。 18c代
41	甕	39.8	淡褐色 (胎土に石英，クサリ礫を含む)		備前	体部はやや内湾しながら外方に開き，口縁部は頸部を「く」字形に屈曲させ，内外に大きく肥厚させ，唇部に面をつくっている。端部に3条の凹線をめぐらしている。
42	甕	20.3	褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)		備前	体部は頸部より内湾しながら斜下方に下りており，頸部は短く直線的に外反し，口縁部は外側を肥厚させ，端部は上面に平担面をつくっている。外面ヘラによるカキメ。
43	鉢	— 11.3 —	やや黄色味がかった橙褐色 (胎土に石英，黒粒を含む)	褐色	唐津	緑釉と黒釉による二彩唐津。体部はゆるやかに内湾し，外上方に開いている。高台は削り出し高台で台形。釉は黄釉，白釉，褐釉。 17c後半
44	鉢	31.2	赤褐色	褐色	唐津	二彩唐津。体部はやや内湾させ，大きく開き

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		11.6 7.5	(胎土に石英,雲母,黒粒を含む)			ながら立ち上がり体部上半で屈曲させ，口縁部を外反させている。口縁端部は上の方に肥厚させ，丸くおさめている。高台は削り出し高台で外側を内傾させた台形。刷毛目，外面褐釉に白釉のかけ流し，内面褐釉に白釉の刷毛目，褐釉による松文。 17c後半～18c初頭
45	鉢	34.2 — —	赤褐色 (胎土に石英,黒粒を含む)	褐色	唐津	象嵌唐津。体部はやや内湾しながら外上方に延び，頸部で屈曲して外反し，口縁端部を丸くおさめている。口縁内面に1条の凹線をめぐらしている。口縁部オリーブ黒褐色，体部下半褐釉。 17c後半～18c初
46	鉢	31.0 — —	やや赤味がかった褐色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	二彩唐津。体部はゆるやかに内湾しながら段をもって外反し，頸部で「く」字形に外反し，口縁端部は持ち上げて丸くおさめている。外面褐釉に緑釉。内面褐釉に白釉。 17c後半～18c初
47	片口鉢	21.6 10.4 11.2	赤褐色 (胎土に石英,黒粒を含む)	褐色	唐津	体部は球形状を呈し，口縁部は外側に折り返して肥厚させている。口縁端部は丸くおさめている。注口部は体部と口縁境に接着している。高台は削り出し高台で台形。刷毛目，褐釉の上に白釉の刷毛目。 17c後半～18c前半
48	鉢	— 12.6 —	灰褐色 (胎土に白砂,黒粒を含む)	暗灰褐色	備前	体部は底部から斜めに上り大きく屈曲させ，上方にまっすぐ立ち上っている。内外面ともにロクロ痕を残している。
49	鉢	12.2 — —	黄灰褐色	オリーブ黄色	美濃・瀬戸系	体部は大きく内湾しながら立ち上っている。高台は低く幅広い。内面見込みに砂付着。
50	土鍋(鉢)	20.3 18.8 3.2	やや黒ずんだ褐色 (胎土に白砂,クサリ礫を含む)		土師質	体部はやや内湾し，端部を丸くおさめている。底部外面縁辺部に一条の凹線をめぐらしている。底部は平底でやや上げ底気味。内外面ともナデ。
51	猪口	5.5 2.6 3.8	灰白色	灰白色	伊万里	体部下半は内湾し，体部中ごろより斜上方に立ち上がり，端部はやや内湾し丸くおさめている。高台は狭くやや外反気味。呉須はすんだ藍色。高台畳付砂付着。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						17c後半～18c前半
52	猪口	— 3.2 —	乳白色 (胎土に黒粒を含む)	白色	伊万里	体部はわずかに屈曲し，斜上方に立ち上っている。高台は狭く台形。底部内面砂付着。 18c代
53	猪口	5.7 2.9 1.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。やや厚手で体部はやや内湾しながら外反し，体部中ごろより屈曲しまっすぐに外上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は低く内傾した台形。呉須はやや濁った藍色，草花文。 18c代
54	猪口	— 2.0 —	灰白色	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は内湾しながら開いている。高台は低く内外面より傾斜した三角形。呉須はやや緑がかった藍色。内面見込み文様不明。高台内無釉。
55	猪口	— 2.5 —	やや黄色味がかった灰白色	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら斜上方に立ち上っている。高台は低く内面より外傾した台形。高台畳付無釉，砂付着。
56	瓶	— 4.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや厚手で球形を呈し，高台は低く畳付付近外側を削り，内傾した高台。呉須はややにごった藍色，外面貫入あり，渦巻文と唐草文，外面高台削り。 17c中
57	瓶	7.1 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ緑色	伊万里	青磁。胴部は球形を呈し，頸部は筒形で口縁部は朝顔形に開き，口縁端部を丸くおさめている。頸部は渦巻状の耳を2か所取りつけている。 18c代
58	擂鉢	29.6 15.3 13.0	やや黒ずんだ赤褐色 (胎土に白砂，黒粒を含む)		備前	体部はやや内湾して外上方に開き，口縁部を外側に開き上下に肥厚させて平担面を形成している。口縁に2条の凹線をめぐらしている。底部は平底。内外面ともナデ，内面12条単位の櫛目描き。
59	擂鉢	33.8 — —	茶褐色 (胎土に白砂を含む)		備前	体部は斜めに直線的に外反し，口縁部は上下に肥厚させ面を形成している。口縁に2条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデ，内面8～10条単位の櫛目描き。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
60	擂鉢	19.8 — —	黒赤褐色	黒味がかった赤褐色	備前	体部は直線的に斜め上方に外反し，口縁部は屈曲して上下に肥厚して面取りを行い，2条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデ，6条単位の櫛目描き。
61	火鉢	32.9 — —	黄橙褐色		土師質	体部は斜め下方に外反し，口縁部は内側へ肥厚させ，端部は平担。ロクロミズビキ成形，口縁部スス付着。
62	焼塩壺	— 6.0 —	褐色 (胎土に白砂，雲母を含む)		土師質	体部はゆるく内湾し，体部中央が最大径，底部は上げ底で円盤充塡部が欠損。内面指おさえ，布目痕あり，丸棒成形，外面ナデ。 18c中
63	焼塩壺蓋	7.9 7.0 2.1	褐色 (胎土に白砂，雲母を含む)		土師質	体部はまっすぐに下り，端部は内面より丸くおさめている。内面に布目痕があることから型押し成形の後ナデを行っている。頂部は平担。 18c中
64	平瓦	—			瓦	ゆるく内湾した平瓦で裏面にヘラによる刻みを入れ接着しやすくしている。内外面ともナデ。「直右衛門改」の銘あり。
65	硯	13.8（現長） 7.1（現幅） 3.1（現高）		黄橙褐色		中央部に使用痕の凹みがあり，底部は平担。四隅を面取りした長方形。陸は約0.5cmの深さで刻りこんでいる。海の部分は欠損。
66	髪抜	17.9（長さ） 0.3（径）			鉄	鉄製で金箔がみられる。先端はするどく尖っている。基部は1つの稜をもち，玉止めを作っている。基部の先端は丸くまとめている。断面はやや角ばった円形。
67	板	100（現長） 15.5（幅） 2.4（厚さ）				針葉樹，板目材，川跡の護岸用板に使用されたもので，片方の面にチョウナの削り跡が明瞭に残っている。
68	杭	113.8（現長） 9.2（直径）				杉材で自然の丸太の先端を尖らせたもので，護岸杭に使用。1か所に幅13cmの半円形の切り込みがあり，他の用途に使われていたものを転用したものと思われる。

第11表　武道館地点　築堤新段階・船着き場

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	11.2 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	体部はゆるく内湾しながら立ち立がり体部上半は外上方に直線的に開く，口縁端部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，松・梅・格子文。 17c後半
2	碗	— 5.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，筒形に近い，高台は低く内傾した三角形。呉須は藍色,草花文，外面に貫入あり。 17c後半
3	碗	8.8 5.5 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色っぽい 灰白色	伊万里	体部をやや内湾させ筒形状を呈している。高台は低くU字形で畳付は内面より丸くおさめている。呉須はあざやかな藍色，鳥文，底裏面「太明年製」の銘。 17c後半～18c前半
4	碗	9.8 4.2 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。高台部は外面をヘラ削りして内傾している。内面中央部が出ており兜巾高台の名残りを残している。3か所の砂目痕がみられる。呉須はにごった藍色，丸文，菱形文，内面見込み五弁花コンニャク判，高台畳付砂目痕4か所。 18c後半
5	碗	8.7 5.7 5.7	灰白色	明緑灰色	伊万里	体部はゆるく内湾し上方に立ち上っている。口縁端部は口唇部をやや内湾させ丸くおさめている。高台は径が広くやや内傾した高台。呉須は淡い藍色，松文，底部砂付着。 17c末～18c中
6	碗	9.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は薄手で球形状を呈している。呉須は藍色，雨降り柳と雷文，型紙摺。 18c前半
7	碗	8.6 3.4 4.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾しながら立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。高台部はやや内傾し，畳付は水平，3か所の砂目痕がある。呉須は藍色，雨降り柳，型紙摺，底部に砂目痕。 18c前半
8	碗	— 4.1	灰白色	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，高台はやや外反して，畳付は平趄，呉須は藍色，源氏車文，底裏面

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		—	(胎土に黒粒を含む)			「太明年製」の銘。内外面とも細かい貫入あり，高台畳付砂付着。 18c前半
9	碗	11.7 4.1 6.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡緑色 (内) 灰白色	伊万里	青磁碗。くらわんか手。体部は球形状に内湾し，口縁端部は丸くおさめている。高台部は内側より丸くおさめている。呉須は藍色，内面見込五弁花，口縁内面四方襷文，底裏面「渦福」，内外面とも貫入あり。 18c中～
10	碗	11.5 4.8 6.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，体部上半はほぼ直線的に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台部はほぼまっすぐ内側より丸くおさめている。呉須は藍色，内面見込み五弁花，口縁内面四方襷文，底裏面「渦福」。 18c中～
11	碗	10.1 4.6 6.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡青緑色 (内) 灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，斜上方に立ち上っている。端部は尖り気味に丸くおさめている。高台は低く三角で畳付は丸くおさめている。内面梅花文，呉須は藍色。 18c中頃
12	碗	11.5 4.7 6.2	灰色	緑灰色	伊万里	くらわんか手。体部はやや厚く球形状を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台はやや内傾した台形。呉須はにごった藍色，外面丸文コンニャク判，内面見込み五弁花コンニャク判。高台畳付砂付着。 18c代
13	碗	10.4 4.2 6.9	灰色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰色	伊万里	陶胎染付。厚手で内湾しながら立ち上がり，口縁部をややくぼませた後，外反させ端部を丸くおさめている。高台は外反させた台形で畳付は平坦面をもつ。呉須は淡い藍色，唐草文，貫入あり，高台砂付着。 18c代
14	碗	11.6 4.6 7.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台から斜上方に大きく開き大きく屈曲してやや反り気味に斜上方に上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台はやや内湾した三角形で砂が付着。 18c代
15	碗	—	灰白色	(外) 淡緑色	伊万里	体部は直線上に斜上方に開き，屈曲して垂直

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
		6.9 —	(胎土に黒粒を含む)	(内) 灰白色		に上っている。底部は幅広く低い蛇ノ目高台。ハリ支えあり。 18 c 代
16	碗	— 3.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は高台よりほぼ水平に近く外反し，大きく屈曲してやや内湾して外上方に立ち上っている。高台は低く三角形，呉須は藍色，赤褐色，黄橙色，淡黄緑色，内面見込みシダ文，高台外面蓮弁文。 18 c 代
17	碗	11.1 4.6 6.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部下半は球形状を呈し，上半部はやや内湾しながら外反している。口縁端部は丸くおさめている。高台部は内湾気味に外反している。呉須は黒っぽい藍色，窓絵に雲龍文，内面見込み松竹梅，口縁内面四方襷文。 18 c 代
18	碗	11.6 4.6 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	くらわんか手，高台と体部が明瞭に分れずそのまま体部がやや内湾気味に外上方に開いている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台部は台形状を呈し，内側は内湾した感じである。呉須はやや黒ずんだ藍色，バラ文，内面見込み「寿」文，高台畳付砂付着。 18 c 代
19	碗	11.2 4.6 6.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	くらわんか手。体部はやや内湾気味に上方に立ち上っている。高台は斜めに内傾した細長い台形。高台畳付全体に砂付着。呉須はにごった藍色，外面菊花文，内面見込み五弁花コンニャク判，底裏面「渦福」。 18 c 代
20	碗	11.3 4.4 5.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかに内湾し，ややいびつな形であり，体部上半は直線的に広がる。高台はまっすぐ下りており，端部は外面から丸くおさめている。呉須はにごった藍色，しだれ柳，内面見込み「寿」文，高台畳付砂付着。 18 c 後半
21	碗	11.3 5.1 5.2	灰色がかった灰白色	やや黄色味がかった灰色	伊万里	くらわんか手。体部はゆるやかに内湾し，上半で直線的に開く。高台は内傾した三角形。呉須はにごった藍色，丸文，内面見込み五弁花コンニャク判。 18 c 代

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
22	碗	— 6.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	広東型碗。体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がり，高台は高くやや外傾し，畳付部を丸くおさめている。呉須はやや黒ずんだ黒藍色，内面貫入あり，高台砂付着。 19c初
23	碗	10.5 4.0 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状に内湾し，口縁付近でゆるやかに外反している。高台部は「ハ」字状に外反，端部は丸くおさめている。呉須はにごった藍色，外面波格子文，内面見込み草文，高台畳付砂付着。 18c末〜19c初
24	碗	11.9 5.8 6.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	広東型碗。体部はやや内湾しながら外上方に上がっている。高台は高くほぼ直線的である。高台畳付は削り。呉須はにごった藍色，松文，内面見込み「寿」のくずし文，高台畳付砂付着。 19c前半
25	小碗	6.4 3.2 3.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。体部は大きく内湾しながら立ち上がり，口縁部近くはほぼ直線的に立ち上っている。端部は丸くおさめている。高台は逆三角形を呈し，畳付部は無釉。高台内面はほぼ水平を保っている。呉須は黒ずんだ藍色高台畳付砂付着。 18c代
26	碗	— 4.1 —	赤褐色 (胎土に雲母・黒粒を含む)	褐灰色	唐津	刷毛目碗。体部は内湾しながら斜上方に開いている。高台は高く内面が傾斜した三角形。褐釉の上に白釉の刷毛目。高台砂付着。 17c後半〜18c前半
27	碗	11.6 4.2 5.0	灰色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗。体部はゆるやかに内湾し，体部下半より直線的に外上向に延びている。口縁端部は内側から丸くおさめている。高台部はやや屈曲しながら畳付は丸くおさめている。外面褐釉に白釉刷毛目の木の葉文，内面褐釉に白釉の刷毛目，貫入あり。 17c後半〜18c前半
28	碗	— 4.0 —	淡赤褐色	暗褐色	唐津	天目風。やや厚手で体部は球形を呈し，高台は削りにより鋭角な面をもつ台形。高台内面に兜巾の跡がみられる。削り出し高台。 17c後半〜18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
29	碗	9.2 4.3 6.9	褐色	オリーブ黒緑色	唐津	天目風。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上っている。口縁部は丸くおさめている。高台はゆるやかに外反している。高台は兜巾高台。内面貫入あり。外面体部下半無釉。 17c後半～18c前半
30	碗	12.0 4.2 5.5	灰白色	ややにごった濃緑色	京焼	体部は球形状を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台は低く厚手で内面より外傾している。底裏面に「朝日」の定印。底部に4か所の砂目痕。 18c代
31	碗	12.2 5.2 8.0	黄橙色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄色	美濃・瀬戸	体部は高台部より大きく内湾して立ち上がり口縁端部は丸くおさめている。高台部はやや高く外に向って開き気味で内面より丸くおさめている。高台内面に兜巾の痕跡を残している。貫入あり。高台畳付のみ無釉。
32	碗	11.0 — —	黄灰褐色 (胎土に黒粒を含む)		土師質	体部は大きく内湾し，屈曲して口縁部はやや内湾させ，端部は尖り気味に丸くおさめている。内外面ともロクロミズビキナデ，体部外面に指痕が残る。
33	碗	8.2 3.7 6.3	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡褐色 (内) 淡緑色	不明	体部は腰部が内湾し，体部中ごろよりほぼまっすぐに立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。高台は低く断面は台形に近く畳付は平坦である。内面貫入あり。高台畳付砂着。ヘラによる竹節文。
34	蓋	10.3 4.2 (つまみ) 3.0	白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら外方へのびており，端部は尖り気味に丸くおさめている。つまみは内側より斜めに外反し，端部は丸くおさめている。呉須は淡藍色，外面唐草文と蓮弁文，内面見込み松竹梅文，口縁内面四方襷文，つまみ内面「太明年製」。 17c後半～18c前半
35	蓋	10.0 4.4 2.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡緑色 (内) 灰白色	伊万里	青磁。つまみは内面から内湾し，端部を丸くおさめている。体部はほぼ真横になり，体部中ごろより斜め外方に内湾している。呉須はにごった藍色，内面見込み唐花文，口縁内面四方襷文，つまみ内面「渦福」。 18c中～後半
36	蓋	10.4	灰白色	灰白色	伊万里	青磁。体部は球形状に内湾し，口縁端部を丸

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		3.8 2.8	(胎土に黒粒を含む)			くおさめている。つまみ部は内面より外上方に立ち上がり，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，内面見込み五弁花，口縁内面四方襷文，つまみ内面「渦福」。 18 c 中～後半
37	蓋	9.6 4.3 3.1	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	青磁。体部は球形を呈し，端部を丸くおさめている。つまみは内側より斜めに上げ，端部を丸くおさめている。呉須は藍色，口縁内面四方襷文，つまみ内面「渦福」。 18 c 中～後半
38	蓋	10.2 5.5 3.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった灰白色	伊万里	体部は大きく内湾している。端部は丸くおさめている。つまみはやや外方に傾いている。呉須は藍色，外面鷺と沼，芦文，内面見込み文様あるが不明。内外面とも細かい貫入めり。 19 c 初
39	蓋	8.7（外径） 7.1（内径） —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	明緑灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾し，外方に延びており，口縁部は屈曲して外反している。受部はやや内傾して端部は丸くおさめている。呉須はにぶい藍色，扇と花文，つまみは欠損。
40	蓋	9.7 1.6（つまみ） 4.7	赤褐色 (胎土に白砂を多く含む)	黒褐色	備前	体部は球形状に内湾し，口縁部は直線状に外反している。端部は丸くおさめている。受部は口縁部から屈曲し，やや内傾している。内面にロクロ痕を明瞭に残している。やや外反したつまみをもつ。内外面ともロクロナデ。
41	蓋	— 6.6 1.7	灰褐色 (胎土に雲母黒粒を含む)		瓦質	体部は内湾しながら斜上方に上がり，口縁部は水平になっており，端部はわずかに丸められている。つまみは凝宝子。外部底面に「へ」か「L」の押し型がみられる。底部は中央部が凹んでいる。表面は灰黒色。
42	皿	— 5.6 —	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，外方に開いている。高台は幅広く低い削り出し高台。全体にぼてっとした感じである。呉須はやや黒ずんだ藍色，梅枝折文，内面釉ハゼめり。 17 c 前半
43	皿	11.3 6.8 2.2	灰白色	灰白色	伊万里	変形型打ち皿。体部はやや内湾し外上方に開いており，端部は丸くおさめている。口縁部は銹釉の口紅皿。高台は内傾した三角で，隅丸菱形を呈した四角皿。呉須は藍色，内面

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						を2つに分け呉須による濃みの格子文と陽刻の唐草文，底裏面に「太明」の銘，長吉谷窯。 17c中
44	皿	12.6 9.2 3.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾し，斜上方にまっすぐのびている。高台径は広く断面三角形。呉須は明緑灰色，ひょうたん図。底部ハリ支えあり。 18c代
45	皿	12.4 4.4 3.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はほぼ直線的に斜上方に外反させ，端部をやや内傾させ尖り気味に丸くおさめている。高台は削り出し，高台で内面を傾斜させた台形。呉須はにごった藍色，見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
46	皿	13.3 4.6 3.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は直線的に斜め上方に外反し，端部はやや内湾させ丸くおさめている。高台は削り出し高台で台形。高台内面に尖りある兜巾高台。呉須はやや青味がかった藍色，草花文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。高台内部砂付着。 17c後半～18c前半
47	皿	— 5.0 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄灰色	京焼風陶器	体部は高台より内湾して立ち上っている。高台部分は外側はやや湾曲し，内面は斜め下方は傾斜した台形状を呈している。底部内面中央に円圏がある。底裏面「木下弥」の刻印。高台部無釉。 17c後半
48	皿	13.3 4.8 3.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青緑色	唐津	銅緑釉皿。体部はわずかに内湾しながら斜め上方に直線的にのびている。口縁部はやや内傾させ端部を丸くおさめている。高台は低く幅広い削り出し高台。高台内面に兜巾がみられる。外面黄釉の上に銅緑釉，内面銅緑釉，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
49	皿	13.4 5.0 3.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青緑色	唐津	銅緑釉皿。体部はやや内湾させながら斜め上方に開いている。口縁端部を内側より丸くおさめている。高台は低く幅広い削り出し高台で台形。内面銅緑釉，外面白釉，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，見込み砂付着。 17c後半～18前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
50	皿	11.8 6.1 2.0	褐色	黒褐色	唐津	灯明皿。刷毛目。底部は平底でゆるやかに内湾して大きく開いている。口縁端部はやや内湾させ丸くおさめている。黒褐釉と褐釉の刷毛目，底部外面ロクロ糸切り離し，外面ロクロヘラ削り，口縁部スス付着。 17c後半～18c前半
51	皿	12.2 4.7 2.7	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄白色	美濃・瀬戸系	灯明皿。底部はやや上げ底気味で内側はやや内湾しながら外反し，口縁端部はややつまみ上げて丸くおさめている。内面及び外面口縁部施釉，内面に陽刻の菊文とヘラによる燈芯受けの斜格子文，外面スス付着。
52	皿	— 7.6 —	淡黄褐色	緑がかった灰白色	美濃・瀬戸系	体部は直線的に外反し高台はやや幅をもち内傾し畳付部を丸くおさめている。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，貼りつけ高台。
53	皿	13.1 4.7 4.0	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄色	京焼(?)	体部は内湾しながら立ち上っており，口縁端部は薄く丸くおさめている。高台は段をもつ竹節高台で高台内側に無釉のところがみられる。高台畳付に4か所の砂胎土目痕がみられる。内面見込みに砂目痕が3か所，高台底部砂目痕4か所。
54	皿	— 6.7 —	黄灰褐色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ褐色	不明	体部は斜上方に開いている。底部内面に重ね積みの跡がみられ凸凹がみられる。貫入あり，内外面とも重ね積み跡あり。
55	皿	6.8 5.0 1.3	黄灰白色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)		土師質	体部は内湾しながら外上方に立ち上がり端部を丸くおさめている。内面指おさえの後なで，底部は平底，内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
56	皿	9.7 5.0 1.4	橙褐色 (胎土に雲母黒粒を含む)		土師質	体部はわずかに内湾しながら，直線的に外上方に立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。内面に蟻線状ロクロナデがみられる。底部はやや上げ底気味。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
57	皿	11.4 7.4 2.2	灰茶褐色 (胎土に黒粒を含む)		土師質	灯明皿。体部は内湾しながら外上方へのびている。体部中ばに1条の凹線がめぐらされている。端部は内側より丸くおさめている。底部はやや上げ底気味。内外面ともナデ，内面指おさえ，口縁部スス付着。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
58	皿	11.8 6.3 2.1	黄褐色 (胎土に白砂・雲母・クサリ礫・黒粒を含む)		土師質	灯明皿。体部はゆるやかに内湾して立ち上がり，口縁端部は外方に丸くおさめている。内外面ともナデ，外面体部ヘラ削り，口縁部内外面ともスス付着。
59	甕	— 9.3 —	黒褐色	褐色	備前	体部はゆるやかに内湾し，斜め上方に外反している。高台は体部境に一条の凹線をもち，削り出しによって2段の面取りを行った。高台は台形。ロクロ成形，高台外面削り及び指おさえ，内面はやや黒みがかる。
60	甕	— 11.9 —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黒褐色	美濃・瀬戸系	底部からゆるやかに湾曲し，胴部下半が最大径となるロクロ痕が明瞭に残っている。底部はやや上げ底。ロクロ成形，底部無釉。
61	甕	25.0 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	褐色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾させて，まっすぐに下りている。口縁部は屈曲させ，下方に肥厚させ端部を丸くおさめている。ロクロ成形。
62	鉢	— 12.7 —	赤褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	褐色	唐津	象嵌鉢。体部は高台よりやや内湾しながら斜上方に開いており，口縁部付近で外反している。高台は幅広い台形で両側より内傾している。削り出し高台。外面褐釉の上に白釉の刷毛目，内面象嵌の白釉，象嵌は縦線文・菊文・唐草文。 17c前半～後半
63	鉢	— 13.6 —	灰褐色	褐色	唐津	象嵌鉢。体部はわずかに内湾し，斜上方に直線的に大きく開く高台は削り出し高台で畳付は内外面とも削り。外面褐釉の刷毛目，内面象嵌の白釉かけ，象嵌は縦線文，内面見込みに砂目痕。 17c前半～後半
64	鉢	18.8 — —	黄淡褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部はゆるやかに内湾し，大きく開いている。口縁端部は丸くおさめている。外面褐釉，内面褐釉に白釉の刷毛目。 17c後半～18c前半
65	鉢	18.0 — —	褐色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)	褐色	備前	体部はわずかに内湾し，垂下している。口縁部は丸くおさめている。外面に波状のヘラ掘りが一条みられる。
66	鉢	22.4 12.2	赤褐色		備前	体部中央でややへこみほぼまっすぐに外上方に上っており，口縁端部は外反し，口唇部は

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		14.1	(胎土に砂利・黒粒を含む)			平坦である。口縁部内面はやや内湾しふくらみをもたせてある。内外面ともロクロ痕が明瞭。底部は上げ底で肥厚させてある。内外面ともロクロ成形，体部中央に「芝」の横書き墨書あり。
67	鉢	— 14.8 —	赤褐色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)		備前	体部は斜上方にまっすぐ立ち上っている。ロクロ痕を明瞭に残している。底部はほぼ平底。ロクロ成形，底部外面板状圧痕。
68	鉢	— 11.4 —	茶灰色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)	褐色	備前	体部はゆるく「く」字形を呈し，外反している。ロクロ痕を明瞭に残している。ロクロ成形，底部はやや上げ底。
69	鉢	31.6 — —	赤味をおびた褐色 (胆土に石英・黒粒・雲母を含む)		備前	体部はやや内湾しながらわずかに内傾している。口縁部は内面を肥厚させ口唇部に面をつくり3条の凹線文がめぐらされている。外面は変色し灰褐色，内面はやや黒みがかった赤褐色。
70	鉢	27.3 12.5 17.3	黄灰色	オリーブ黄灰色	美濃・瀬戸系	植木鉢。体部はわずかに内湾しながら斜め上方に立ち上がり，口縁は体部から「L」字状に水平に広がり端部は丸くおさめている。底部中央に直径1.8cmの焼成前の穿孔がある。高台部分に3か所の扶りがみられる。焼成前に外側より穿孔，口縁部オリーブ青緑色，体部オリーブ黄灰色，内面無釉。
71	鉢	20.2 — —	黄灰色 (胎土に白砂を含む)	オリーブ黄灰色	美濃・瀬戸系	体部はゆるやかに内湾しながら，次第に細くなっている。口縁は折り返し口縁で肥厚させている。最大径は口縁部。
72	鉢	22.0 — —	黄灰白色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	オリーブ黄色	美濃・瀬戸系	体部は底部よりゆるやかに内湾して立ち上がり口縁部近くで大きく外反し，口縁端部はやや下方へ折りまげて，丸くおさめている。本来，高台がついているものと思われる。貫入あり。
73	鉢	35.6 — —	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	こげ茶色	美濃・瀬戸系	体部は斜め上方に直線的に上がり口縁部は両側に肥厚させている。端部は平らにまとめられている。ロクロ痕がみられる。ロクロ成形，底裏面に「ま」の墨書。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
74	鉢	— 9.4 —	黄橙色	やや黄色味がかった褐色	不明	体部は高台部より斜めに外方へ開き，一段屈曲して上方に直線的に延びている。高台部はやや高く畳付部は丸くおさめている。呉須はオリーブ緑色の山水一屋図，高台畳付無釉。
75	猪口	— 2.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑色をおびた灰白色	伊万里	体部は卵形を呈し，高台は内面から傾斜した台形。高台内面は兜巾を残す。高台無釉，高台底部砂付着，内面見込み砂付着。 17c前半
76	猪口	6.0 4.4 3.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡黄白色	伊万里	全体にぼてっとした感じで，体部は内湾させ端部を尖り気味に丸くおさめている。高台は低く幅をもち，内傾させている。呉須は淡い藍色，荒磯，秋草文，外面こうもり図。底裏面「太明」，貫入あり。 17c中
77	猪口	5.7 — —	灰白色	灰色がかった灰白色	伊万里	縁反り型。体部は内湾しながら，外上方に立ち上がり口縁は外反する。 17c後半
78	猪口	7.2 4.2 5.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は低く，外面より内傾している。呉須は明るい藍色，鳥文，底裏面「太明年製」，高台畳付無釉，砂付着。 17c後半～18c前半
79	猪口	6.4 2.8 3.1	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台は内外面より内傾した台形。呉須は藍色，菊のコンニャク判，松葉文，高台畳付無釉。 18c代
80	猪口	7.1 3.2 3.6	灰白色	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら，外上方に立ち上がり口縁端部は丸くおさめている。高台は低くやや内傾した台形。呉須はややにごった藍色，山水文，高台畳付砂付着。 18c代
81	瓶	— 4.9 —	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	底部よりゆるやかに外反し，最大径よりゆるやかに内反している。最大径は胴部下半にあり，底部は上げ底。呉須はにごった藍色。松葉くずしに松竹梅文，高台畳付砂付着。 17c末

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
82	瓶	8.8 5.5 15.7	灰色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑色	伊万里	青磁。ややずんどうの胴部から内側に屈曲させ太い頸部から「ハ」字形に外反し，口縁部は段を有し上方にのびている。口縁端部はつまみ上げられ1つの稜線をもっている。内面は丸くおさめている。胴部と頸部境に2か所耳の退化したものがつけられている。高台は幅広く低く削り出し高台で内面は削りがみられる。内面ロクロ輪積み痕あり，底部砂付着，高台内面釉ハギ。 18c代
83	瓶	— 3.1 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	体部はゆるやかな球形を呈し，高台は内湾した幅広い台形。高台底部砂付着，内面無釉。 18c代
84	瓶	8.7 5.8 14.5	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	最大径は口縁部で胴部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，胴部上半で大きく内傾し，頸部はやや太めで，口縁部にむかって大きく外反し，朝顔形開口となっている。胴部上半に2段の稜がみられ，2か所に耳（双耳）がつけられている。高台は「く」字形になり，畳付部は水平で多量の砂が付着している。呉須は灰緑色，芦文，くびれ部につまみ2か所。 18c末～19c初
85	瓶	— 7.5 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈しており，高台の内面は内湾しながら丸くおさめている。内面にロクロナデが明瞭に残っている。呉須は藍色，草花文，内面無釉，高台畳付砂付着。
86	瓶	— 8.2 —	灰褐色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)	茶褐色	備前	最大径が胴部下半にあり底部に向って内湾している。頸部に2か所の耳（双耳）がつけられている。底部は平底，内面，砂が取り除けない為不明。
87	擂鉢	36.5 17.8 14.0	赤褐色 (胎土に白砂を含む)		備前	体部外面はほぼ直線的に斜下方に開き，口縁部を肥厚させ，2条の凹線をめぐらしている。内面はゆるやかに湾曲しながら立ち上がり，端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底。内面に11条の櫛目描き，外面腰部に「久喜」の刻印あり。
88	擂鉢	31.8 — —	褐色 (胎土に石英・黒粒を含む)		備前	体部はやや外湾しながら斜め上方に開き，口縁部は斜め上方に肥厚させ，内湾しながら丸くおさめている。口縁部に2条の凹線をめぐ

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						らしている。内面10～11条単位の櫛目描き。
89	擂鉢	28.7 — —	赤褐色 (胎土に石英黒粒を含む)		備前	体部は斜め上方にまっすぐに外反し，口縁部は屈曲してまっすぐに立ち上がり，上へ向って肥厚させ，端部は尖り気味。内外面ともナデ，口縁部に2条の凹線，5条単位の櫛目描き。
90	徳利	— 6.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるやかな球形を呈し，高台は外反し，畳付は外面削り。呉須は藍色，縞連文，内面無釉，高台畳付砂付着。 18c中～後半
91	火鉢	— 21.4 —	赤橙色 (胎土に白砂黒粒を含む)		土師質	体部は内湾しながら立ち上がり，高台部はゆるやかに外反し，下半部に1条の凹線をめぐらしている。畳付部は丸くおさめている。内外面ともナデ。
92	土鍋	22.0 — —	灰白色 (胎土に白砂雲母・黒粒を含む)		瓦質	口縁部から球形状を呈しており，最大径の所につば状の縁をめぐらしている。表面黒灰色，内外面ともナデ。
93	土鍋	10.2 — —	灰黄色 (胎土に白砂黒粒を含む)		瓦質	口縁部は斜め下部に「ハ」字形に開き，胴部境で1段の稜をもち，球形状に膨らんでいる。楕円形の耳が取りつけられている。口縁部は体部に比べて肥厚させている。表面黒灰色，菊と竹文を施文。
94	土鍋	30.1 — —	茶褐色 (胎土に石英黒粒・クサリ礫を含む)		土師質	体部はまっすぐに下りており，体部下半は斜め下方に屈曲させている。口縁部を外側に肥厚させる。内外面ともナデ，内面にスス付着。
95	灯明台	— 4.5 —	明るい茶褐色 (胎土に白砂雲母を含む)	オリーブ黄緑色	不明	皿の体部は内湾しながら斜め上方に立ち上がり，外側より丸くおさめている。燈火部分はほぼまっすぐに斜上方に立ち上っている。内面見込みは中央部がもち上っている。底部は平底。外面無釉，底部外面ロクロ糸切り離し。
96	焼塩壺	8.6 (最大径) 5.6 —	褐色 (胎土に白砂クサリ礫・黒粒を含む)		土師質	体部はやや丸みをもった筒形を呈している。内面に布目痕，丸棒成形，底部外面板状圧痕，外面に細かいナデ。 18c中
97	焼塩壺	7.6	黄色味がか		土師質	体部はやや丸みをおびた筒形を呈し，口縁部

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		— —	った褐色 (胎土に白砂雲母・黒粒を含む)			は段をもって受部をつくっている。内面に布目痕，押型成形，外面細かいナデ。 18c中
98	焼塩壺 蓋	8.0 — —	褐色 (胎土に白砂雲母・黒粒を含む)		土師質	体部は直線的に下っており，外面中央部はやや凹んでいる。内面に布目痕，押型成形，外面ナデ。 18c末～19c初
99	玩具	1.9（全長） 0.9（幅） 1.9（高）	灰白色	灰白色	伊万里（？）	手びねりで犬をつくっている。脚部と頭部欠損。
100	軒丸瓦	13.5（直径）	灰白褐色 (胎土に白砂雲母を含む)		瓦	表面灰褐色「卍」文周縁は幅2cm「卍」は笵型押し成形と思われ隅が丸くなっている。
101	軒丸瓦	15.8（直径）	灰白褐色 (胎土に白砂雲母を含む)		瓦	表面灰褐色，「巴」文，珠文は16個配置。周縁は2.2cm，連珠文は16個，内区はやや尾の長い巴文。 18c前半
102	軒平瓦	3.9（瓦当口）	灰黒色 (胎土に白砂雲母を含む)		瓦	瓦当「唐草文」，瓦当部分周縁上1.0cm，下0.5cm，左右3.5cm。簡略化した唐草文，瓦当部両側面ヘラ切りの後ナデ。
103	煙管 雁首	6.8（現長） 1.0（肩部径）			銅	火皿部分を欠損，脂返し部分の湾曲がやや小さい「河骨形」。1枚の銅板を巻いて作成。古泉編年Ⅳ期。 18c前半。

第12表　武道館地点　　築堤中段階

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	10.0 3.2 4.5	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部は球形を呈し，口縁端部は丸くおさめている。高台は低く三角形。呉須は藍色，内外面とも牡丹唐草文。 18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
2	皿	— 4.4 —	灰白色	緑がかった灰白色	伊万里	やや厚手で体部はやや内湾しながら外上方へ大きく開いている。高台は削り出し高台で屈曲し，畳付は平担。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，砂付着，削り出し高台，高台底部砂付着。17c後半〜18c前半
3	皿	13.5 9.3 2.0	灰褐色		土師質	体部はヘラ削りにより内湾しながら外上方に開いており，口縁部はやや内湾し，端部はつまみ上げられ丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ。
4	皿	11.8 6.2 2.1	灰褐色		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に開き，口縁部はそのまま丸くおさめている。やや厚手で底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
5	皿	9.9 6.6 1.4	灰褐色		土師質	体部はやや内湾し，外上方に開いている。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
6	鉢	16.2 — —	灰褐色	褐色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾しながら立ち上がり，頸部で大きく屈曲して外反し，口縁部は更に屈曲させ肥厚し，内面に蓋の受部を形成している。端部は丸くおさめている。ロクロ輪積み，内外面ともナデ。
7	鉢	— 19.7 —	黄褐色 (胎土に白砂・雲母・クサリ礫を含む)		土師質	体部はほぼ垂直に立ち上がると思われる。底部は平底，内外面ともナデ。
8	徳利	3.2 — —	こげ茶色	黒褐色	備前	筒形の頸部で口縁部は斜め上方に外反させ，端部を丸くおさめている。頸部上端に1条の稜線をもつ。頸部下半はやや外反させている。ロクロ輪積成形。
9	土鍋	26.4 — —	赤褐色		土師質	口縁部はほぼ垂直で体部は大きく屈曲し，内傾している。口縁端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，外面スス付着。
10	銅銭	2.4（直径） 0.1（厚さ） 0.6（穴長）			銅	「寛永通宝」2つに欠損，周縁2mm，穴は四角0.75mmの端取り，「通」の字「ユ」，細目の字。

第13表　武道館地点　　築堤古段階

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	9.8 4.3 5.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台はやや高く垂直に下り，畳付は内面より丸くおさめている。呉須は青灰色，桐文，コンニャク判。 18c前半
2	碗	9.4 5.6 5.9	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	薄手で高台付近は内湾し屈曲してほぼ上方にまっすぐ延びている。口縁部は丸くおさめている。高台は低くU字形。呉須は淡い藍色，紅葉文，底裏面銘があるが不明。 18c前半
3	碗	11.8 5.2 7.8	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	明緑灰色	伊万里	陶胎染付。体部は内湾し下半で屈曲してやや内湾しながら直線上に立ち上っている。口縁端部を丸くおさめている。高台はやや高くU字形。呉須は緑灰色がかった藍色，底部砂付着。 18c代
4	碗	11.2 4.8 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら外上方にまっすぐ立ち上っている。端部は丸くおさめている。高台はやや高く内面より丸くおさめている。呉須は淡い藍色，梅花文，草文。 18c代
5	碗	11.8 5.2 8.0	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	明オリーブ灰色	伊万里	陶胎染付。体部はゆるく内湾し上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台はやや厚手で内湾しながら傾斜する三角形。呉須はにごった藍色，山水文。 18c代
6	碗	10.4 4.8 7.2	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	赤黒色	唐津	天目風唐津。体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上がり，体部中ごろで屈曲して真上に立ち上がり，口縁端部をゆるく外反させている。端部は丸くおさめている。高台はやや高くU字形。高台無釉，兜巾高台。 17c中
7	碗	11.3 4.4 7.0	橙褐色 (胎土に石英を含む)	褐色	唐津	刷毛目碗。体部下半は内湾し屈曲して直線的にまっすぐ上方に立ち上っている。口縁部をやや外反させ丸くおさめている。高台はやや高くゆるやかに外反した台形。内外面とも褐釉に白釉の刷毛目。 17c後半～18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
8	碗	10.3 4.8 6.6	黄灰白色 (胎土に黒粒を含む)	にぶい褐色	唐津	刷毛目碗。体部は内湾し球形を呈し，端部は丸くおさめている。高台はやや外反し，畳付部分は内外面削り尖り気味である。にぶい褐色に白釉の刷毛目，貫入あり。 17c後半〜18c前半
9	碗	9.4 5.7 5.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	不明	体部は球形状を呈し，口縁端部は尖り気味に丸くおさめている。高台は高くやや外反している。高台畳付無釉。砂目痕あり。
10	皿	20.4 10.6 5.6	灰白色	やや黄色がかった灰色	不明	体部は内湾し，口縁端部は丸くおさめている。高台は高くやや内傾した台形。呉須は緑灰色，山水文，貫入あり，高台無釉。
11	皿	11.5 5.1 2.0	黒褐色 (胎土に白砂・雲母を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら大きく外反しており，口縁部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り。
12	皿	10.9 6.5 1.9	浅黄橙色		土師質	体部は直線的に外反させており端部は丸くおさめている。内面にロクロによる指ナデ痕を明瞭に残している。底部は平底。内外面ともナデ。底部外面にロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
13	皿	10.8 6.4 1.5	灰白色 (胎土に石英・クサリ礫を含む)		土師質	体部はやや内湾させながら外方に開いている。口縁端部は内側より外方へ丸くおさめている。内面にロクロナデの凸凹がみられる。底部はやや凹ませた平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
14	皿	9.8 6.4 1.5	浅黄橙色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		土師質	体部が斜上方に直線的に開き，端部を丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
15	皿	9.6 7.1 1.5	灰白色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上っており，端部は丸くおさめている。内面に指おさえによる凸凹がみられる。底部は平底。内外面ともナデ，内面指おさえ。
16	皿	9.5 6.8 1.5	浅黄橙色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		土師質	体部は内湾して立ち上がり，口縁端部はやや尖り気味平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
17	鉢	17.2	褐灰色		備前	体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上って

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
		— —	(胎土に白砂を含む)			いる。口縁部は体部よりやや屈曲させ外面に肥厚させており，端部を丸くおさめている。端部に砂が付着しており，逆さにして焼成したものと思われる。ロクロナデ痕が明瞭。
18	猪口	6.6 2.7 4.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はゆるく内湾しながら外上方にまっすぐ立ち上っている。高台は狭くやや内傾している。呉須は明青色，芙容手で草花文。 17c後半〜末
19	猪口	7.6 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がり口縁部はゆるく屈曲して外反させ，端部は丸くおさめている。呉須は淡い藍色。 17c後半〜18c前半
20	仏飯具	— 4.8 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はわずかに内湾し，直線状に外反する。脚部は短かく「ハ」字形に外反している。畳付は平坦で内面をわずかに凹ませた凹形高台。呉須は藍色。
21	仏飯具	— 4.0 —	やや黄色味がかった灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はやや厚手で内湾しながら斜上方に外反している。脚部は厚く「ハ」字形にゆるく外反している。内面は内湾しながら下方に開いている。底部内面は傾斜をもち平坦面は形成されていない。呉須は暗青灰色。 18c中
22	水差	— 5.0 —	褐色 (胎土に白砂を含む)	暗赤色	備前	体部は球形状を呈し，底部はやや上げ底気味の平底。外面暗赤色，赤黒色，浅黄色の釉を施している。
23	焼塩壷 蓋	7.0 7.0 2.6	浅黄色 (胎土に白砂・クサリ礫・黒粒を含む)		土師質	上面はやや丸みをおびた平担面を呈し，体部はまっすぐに下りている。端部は内側より内湾して丸くおさめている。外面ナデ，内面布目痕，型押し成形。 18c前半

第14表　武道館地点　　築　地　跡

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	10.2 6.0 5.7	灰白色	灰色がかった灰白色	伊万里	体部下半は内湾し，体部上半は直線的に立ち上っており，筒形に近い口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内傾した台形。高台畳付無釉。 17c後半
2	碗	9.4 5.2 6.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部下半は内湾し，体部中ごろよりやや内湾しながらまっすぐ立ち上っている。高台は狭くやや内傾して，畳付は外側より丸くおさめている。呉須は藍色，草花文，底裏面「太明年製」，高台畳付砂付着。 17c後半
3	碗	10.3 4.2 5.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった緑色	伊万里	青磁碗。体部はやや内湾しながら体部中ごろより直線的に外上方に開き，端部は内側より丸くおさめている。高台は低く三角形。呉須はやや黒ずんだ藍色，内面竹梅文，底裏面「渦福」。 18c中頃
4	碗	10.5 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	くらわんか手。体部はやや厚手で球形状を呈し，端部は丸くおさめている。呉須はにごった藍色，草花文。 18c代
5	碗	— 4.6 —	黄茶褐色 (胎土に石英・黒粒を含む)	黄灰色	京焼風陶器(?)	体部は丸形状を呈し，高台は外反させた台形。外面体部下半より高台部分は無釉，細かい貫入あり。
6	碗	11.9 — —	灰黄色	オリーブ黄灰色	京焼	体部は口縁部からゆるやかに内湾している。口縁端部は丸くおさめている。貫入あり。呉須は褐白色，雪中出舟の図。
7	碗	— 3.6 —	浅黄褐色 (胎土に黒粒を含む)	黄白色	京焼	体部は球形状を呈し，高台はやや内面より傾斜した三角形。呉須はややにごった藍色と若緑色，松文。
8	碗	— 5.2 —	やや黄色味がかった黄灰色 (胎土に石英・黒粒を含む)	黄色	美濃・瀬戸系	体部はやや厚手で球形状を呈し，高台はやや高くやや外反し，畳付外面付近は削り。内外面とも貫入あり。内面ハリ支え2か所。
9	蓋	5.2 — 1.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった白色	伊万里	つまみは帯状のものを山形にはりつけ，体部は平坦な面から大きく内湾し，受部は大きくえぐりこみ三角形。呉須は藍色，草花文，貫

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						入あり。 18c代
10	皿	11.2 3.8 3.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は直線上に斜上方に外反し，口縁端部はやや内湾している。高台は削り出し，高台は内傾し，断面は台形。呉須は藍色，草花文，内面見込み蛇ノ目釉ハギ，底部外面ヘラ切り離し，削り出し高台。 17c後半～18c前半
11	皿	12.4 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	体部はわずかに内湾し外上方に開いている。口縁端部は丸くおさめている。口縁部内面に褐釉の文様，内面見込み蛇ノ目釉ハギ。 17c後半～18c前半
12	皿	— 10.0 —	橙褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	オリーブ褐色	美濃・瀬戸系	体部はやや内湾し大きく外反している。高台は高く内側より，内湾させ畳付を丸くおさめている。
13	皿	11.2 5.4 2.1	褐色	茶色がかった黒褐色	不明	体部は逆「ハ」字状に外反して口縁端部を丸くおさめている。底部は平底。外面口唇部のみ釉がけ。底部ロクロ糸切り離し。
14	皿	12.4 9.0 1.8	灰褐色 (胎土に石英・黒粒・クサリ礫を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら斜上方に外反し，口縁端部は内側より丸くおさめている。底部はやや上げ底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
15	皿	10.7 6.6 1.8	灰褐色 (胎土に石英・黒粒・クサリ礫を含む)		土師質	体部はゆるやかに内湾し，外上方に開き端部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
16	皿	8.4 5.2 1.4	灰褐色 (胎土に石英・黒粒を含む)		土師質	体部はやや内湾しながら大きく外反している。底部はやや上げ底気味。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部板状圧痕。
17	壺	— 7.2 —	茶褐色 (胎土に石英・黒粒を含む)	褐色	備前	体部は算盤球を呈し，底部は平底。ロクロ成形。底部外面ロクロ糸切り離し。
18	甕	46.6 — —	黄褐色 (胎土に白砂・雲母・クサリ礫・黒粒を含む)	茶褐色	備前	体部は口縁部より屈曲して外反し，口縁部は内外に肥厚させ，口唇部に面をもっている。3条の凹線文をめぐらしている。ロクロ成形。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
19	甕	— 24.8 —	褐色 (胎土に雲母石英を多く含む)	赤紫色	備前	体部はわずかに屈曲しながら，外上方に開いている。底部は平底。
20	甕	— — —	淡灰褐色		須恵器	外面平行タタキメ。内面青梅波文のタタキメを施しており，甕の胴部の破片とおもわれる。
21	鉢	18.2 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部はわずかに内湾しながら斜め上方に立ち上がり，口縁部付近で屈曲して上方に立ち上っている。口縁部は内側より丸くおさめている。口縁は「輪花」で「凌ぎ」がみられる。呉須は藍色，草花文。 17c後半
22	鉢	— 10.8 —	赤褐色	褐色	唐津	象嵌鉢。体部は内湾しながら立ち上っている。内面は斜下方に直線的に開いている。高台はヘラ削りにより，2段に内傾している。 17c後半
23	鉢	28.6 — —	黒褐色 (胎土に石英を含む)	黒褐色	唐津	刷毛目鉢，体部はまっすぐに下り，口縁部は大きく屈曲させ下方を肥厚させて丸くおさめている。褐釉の上に白釉の刷毛目。 17c後半〜18c前半
24	鉢	15.7 9.9 11.6	黄橙色	黄緑白色	美濃・瀬戸	蓋付鉢。体部はやや内湾し，斜上方にゆるやかに外反して，口縁部で内側に大きく屈曲し，口縁部は内傾し，蓋の受部を作っている。高台はやや厚みをもった三角形で外面より丸くおさめている。内外面とも貫入あり。
25	猪口	5.4 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	墨弾き技法。体部はゆるやかに内湾し，やや直線上に立ち上っている。口縁端部はやや外反させ丸くおさめている。雁図。 17c前半
26	猪口	4.8 2.0 2.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑がかった白色	伊万里	体部は球形状を呈し，端部を丸くおさめている。高台は三角形。長吉谷窯か？ 17c中頃〜後半
27	猪口	— 3.2 —	やや黄色味がかった灰白色	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はやや厚手でゆるやかに内湾している。高台は内傾した三角形。呉須はやや黒みがかった藍色，草花文。 17c後半〜18c前半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
28	猪口	6.6 2.5 4.3	黄色味がかった黄灰色	黄色味がかった黄灰色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部を丸くおさめている。高台は低く台形を呈する。呉須はやや黒みをおびた藍色と灰釉，草花文。
29	瓶	— 2.8 —	灰白色	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，高台は内傾した台形。呉須はにごった藍色，笹文。 17c後半
30	瓶	— 9.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は垂直で高台は内面が傾斜した台形の凹形高台。呉須はややうすい藍色。
31	水差	— 7.2 —	赤褐色	褐色	備前	体部は内湾しながら大きく内傾し，口縁部は屈曲させやや外反させている。底部はやや上げ底でロクロ痕を残す。底部外面ヘラ切り離し，底部砂付着。
32	花生け	30.2 — —	赤褐色	褐色	唐津	刷毛目，皿部と高台部は別に作り，接合している。脚部はほぼ垂直で2か所に耳をつけている。皿部は直線上に外上方に開き，口唇部を上につまみ上げている。脚部下半は不明。内面皿部分のみ施釉。 17c後半
33	仏飯具	8.0 3.8 4.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，端部はやや内湾し丸くおさめている。高台は「ハ」字形に外反している。呉須は青味がかった藍色，柳文，高台底部に砂目痕。 18c代
34	仏飯具	— — —	やや黄色味がかった灰白色 (胎土に黒粒を含む)	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら外方に開いている。呉須は黒ずんだ藍色，呉須による3条の平行線をめぐらしている。 18c代
35	仏飯具	8.4 4.0 5.5	やや褐色がかった黄灰白色	やや黄色味がかった灰白色	伊万里	体部は球形状を呈し，口縁端部はやや内湾し端部を丸くおさめている。脚部は短かく据が広がっており，高台は凹形高台。内外面とも貫入あり。高台畳付無釉。 18c後〜19c初
36	土鍋	26.0 — —	赤褐色 (胎土に石英・雲母を含む)		土師質	体部は内湾して斜め上方に外反して立ち上がり1段の稜をもって内湾しながら立ち上がり端部は丸くおさめている。ロクロナデ。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
37	焼塩壺	5.3 5.8 9.2	赤褐色 (胎土に石英・黒粒・クサリ礫を含む)		土師質	底面がやや狭い筒形を呈し，受部は段を有し，内傾していて端部に丸みをもつが平担，板状圧痕あり，内面布目痕，丸棒成形，輪積み痕を残し，底部は円盤充塡，刻印はあるが剝落して不明。18c後半
38	軒丸瓦	16.0（直径）	灰黒色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)		瓦	「巴」文型押し成形。周縁は幅2.1cmで，珠文は直径0.9cmでやや高い。18個か？，巴の尾はやや長い。 18c代
39	軒丸瓦	15.0（直径）	灰黒色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		瓦	「巴」文型押し成形。周縁幅は1.8cmで低い，珠文は0.9cmで18個か？，瓦当に丸瓦を取りつけており接合痕が明瞭。 18c代
40	軒丸瓦	16.0（直径）	黄灰白色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)		瓦	「巴」文型押し成形。周縁幅は1.8cmで低い，珠文は0.9cmで18個か？巴は尾が非常に長い，接合部に指おさえの跡が明瞭。 18c前半
41	煙管 雁首	5.8（長さ） 0.1（厚さ）			銅	火皿部分を欠損，脂返しがやや湾曲して，1枚の銅板を巻いて成形。古泉編年Ⅳ期。 18c前半

第15表　武道館地点　　石垣溝・池跡

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
1	碗	10.2 — —	灰白色	灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら，斜上方に立ち上っている。呉須は藍色，牡丹唐草文。 18c代
2	碗	10.1 — —	灰白色	灰白色	伊万里	体部はやや内傾しながら外上方に立ち上っている。呉須はややにごった藍色，花文，高台部欠損。 19c初

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
3	蓋	10.2 4.0 (つまみ) 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	つまみは「く」字形に立ち上がり，内面見込みより内湾し，端部は内側より丸くおさめている。体部はつまみより下方に大きく外反し，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，松に帆かけ船，内面見込み帆かけ船図，口縁内面四方襷文。 18c後半
4	蓋	3.2 3.2 1.6	灰白褐色	灰黄褐色	伊万里	ボタン状のつまみを有し，稜をもちながら大きく開いている。口縁部付近で段を有し，端部は丸くおさめている。受部は狭くやや外反して下りており端部は丸くおさめている。呉須は緑がかった褐色，松葉文，貫入あり。内面無釉。
5	蓋	16.7 — —	黄色味がかった灰白色	灰白色	伊万里	傾斜の大きい体部で口縁部は屈曲して外方に開いている。受部は「く」字形に屈曲し丸くおさめている。呉須はやや黒ずんだ藍色，草木文。
6	皿	— 4.5 —	灰白色	灰色がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾しながら斜め上方に大きく開き，高台は削り出し高台で外面内傾した台形。内面見込み蛇ノ目釉ハギ，体部下半および高台一部無釉，高台畳付及び高台内無釉。 17c後半～18c前半
7	皿	12.6 8.1 2.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は大きく内湾しながら立ち上がり口縁部は丸くおさめている。高台部分は内傾しながら丸くおさめている。高台内面中央部は凹んで施釉している。呉須は藍色，草花立湧文，外面星座文，蛇ノ目凹形高台。 19c前半
8	皿	13.8 10.1 2.3	灰褐色		土師質	灯明皿。体部はヘラ削りされやや内湾しながら外上方に開いている。口縁端部は丸くおさめている。底部は平底，内外面ともナデ，体部外面ヘラ削り，底部スス付着。
9	皿	9.6 6.0 1.4	灰褐色		土師質	灯明皿。体部はやや内湾しながら外上方に立ち上がり，口縁部はゆるく屈曲して外反している。端部は丸くおさめている。底部は平底。内外面ともナデ，底部外面板状圧痕，口縁部スス付着。
10	皿	6.5 5.2	灰褐色		土師質	体部は短かくわずかに内湾して立ち上がり，端部は丸くおさめている。底部は平底，内外

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
		0.8				面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し。
11	壺	3.0 — —	灰褐色	褐色	備前	頸部はやや内湾した筒形で口縁部をやや外反させ端部を丸くおさめている。ロクロ輪積み痕が明瞭。
12	甕	43.0 — —	赤褐色 (胎土に白砂・雲母・クサリ礫を含む)		備前	体部は口縁部から「く」字形に屈曲させ斜下方に外反させている。口縁部は内外とも大きく肥厚させやや斜傾した面をつくっている。口唇部に3条の凹線をめぐらしている。外面ヘラによる平行線が施されている。
13	甕	24.5 — —	灰褐色 (胎土に石英・黒粒を含む)	黒褐色	不明	口縁部よりゆるやかな屈曲をもち，まっすぐに下げている。口縁部は内側を肥厚させ，口唇部に面を形成し，3条の凹線文がめぐらされている。口縁部は黒褐色，体部は黄緑褐色。
14	鉢	— 5.6 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	緑色	伊万里	青磁鉢。体部はやや内湾しながら外上方へ大きく開き，高台は幅広く下半外面を削った蛇ノ目凹形高台。内面無釉，赤褐釉を施している。 18c代
15	鉢	— 6.4 —	赤褐色	褐色	唐津	体部は斜め上方にやや内湾しながら立ち上がり，中ごろで内側に少し屈曲させて上方に開いている。高台は2段に屈曲して畳付になっている。外面褐釉，内面黒褐釉，外面刷毛目， 17c中
16	鉢	27.0 — —	黒茶褐色 (胎土に白砂を含む)	オリーブ褐色	唐津	象嵌鉢。体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上がり，口縁付近で屈曲して1段の稜をもち，直線上に外反し，口縁端部は上から丸くおさめている。口縁内面に1条の凹線をめぐらしている。内面に四方襷文と唐草文の象嵌。 17c後半
17	鉢	20.2 — —	黒褐色	深緑褐色	唐津	体部はゆるく内湾しながら斜め上方に外反し，口縁部は体部より屈曲して外反している。端部は丸くおさめている。外面体部上半施釉，内面施釉。 18c代
18	鉢	15.6 — —	褐色	黒褐色	備前	体部はやや屈曲しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内外に肥厚させており，端部はやや丸くおさめている。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
19	鉢	— 14.6 —	褐色		備前	体部はほぼ垂直に立ち上っている。底部はやや上げ底でロクロ痕を明瞭に残している。外面ヘラ掘りによって木の表皮肌を表現。内面輪積み痕。
20	猪口	— 3.5 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)		伊万里	体部は底部より屈曲し直線的に斜上方に立ち上っている。高台はせまく内傾している。呉須はやや黒味がかった藍色，草花文。 17c後半〜18c前半
21	猪口	7.7 3.1 5.3	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部は高台より内湾しながら外上方に立ち上がり，端部で屈曲し外反させている。口縁端部は丸くおさめている。高台は外面より内傾した三角形，呉須はややくすんだ藍色，草花文，松文，高台内部に砂付着。 17c後半〜18c前半
22	猪口	7.2 4.2 5.6	灰白色	青味がかった灰白色	伊万里	体部はやや内湾気味に斜上方に立ち上がり，口縁部付近で屈曲して外反している。口縁内面はやや内湾し，端部は丸くおさめている。高台部は低く体部からそのまま内傾している。呉須はすんだ藍色，草花文，高台畳付砂付着。 17c後半〜18c前半
23	猪口	— 2.6 —	乳白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は厚手で球形状を呈し，高台はせまくやや外反している。呉須は藍色，草文，高台畳付砂付着。 18c代
24	猪口	8.5 4.0 4.2	乳白色	灰白色	伊万里	薄手で球形状を呈し，端部は丸くおさめている。高台はやや外反して丸くおさめている。呉須は藍色，桐文。 18c代
25	猪口	7.5 3.5 5.3	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	体部は高台より大きく外反し，L字形に屈曲してやや内傾しながら上方にまっすぐ立ち上っている筒形，口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内側より傾斜した三角形，呉須はややにごった藍色，外面アヤメ文，見込み文様はあるが不明。 18c末
26	猪口	4.6 2.5 2.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部は高台畳付よりそのままま っすぐ外上方に立ち上がり，口縁部でやや外反させている。口縁端部は尖り気味に外反させている。高台

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						は低く体部との境はつけられていない。 18c末〜19c初
27	瓶	1.5 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	ほぼ垂直に立ち上がるもので，端部は丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，おもとらしき草文，口縁部内面上部釉かけ。 18c中
28	瓶	— — —	灰白褐色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	体部下半で大きく「く」字形に内反し，直線的に斜上方に挟まっている。内面にロクロ痕を明瞭に残している。呉須はややうすい藍色，草文，外面釉ハゼ，釉はかけ流し。 18c代
29	土鍋	31.4 — —	茶褐色		瓦質	体部は大きく内湾し，口縁部は体部より大きく屈曲し，水平に外反しており，端部はやや肥厚させ斜め下方に折り曲げ丸くおさめている。内外面とも黒色，内外面ともナデ。
30	土鍋	33.0 — —	赤褐色		土師質	体部はゆるく内湾しながら立ち上がり，口縁部は内傾し，端部は丸くおさめている。内外面ともナデ，外面スス付着。
31	灯明皿	8.6 5.2 1.2	茶褐色		不明	体部はゆるく内湾して外上方に開き，口縁内部に1条の凹線をめぐらしている。燈芯受部は内面より内湾して尖り気味に丸くおさめている。平底。芯受けが3か所見られる。底部外面ロクロ糸切り離し，口縁部にスス付着。
32	焼塩壺	— 5.2 —	赤褐色		土師質	体部はやや円形を呈した筒形。内面布目痕，丸棒成形，外面ナデ。 18c中
33	焼塩壺	6.6 6.0 9.8	赤褐色 (胎土に白砂黒粒を含む)		土師質	体部は底部から弓状になっており，胴部上半が最大径である。受部は段をもち，口縁に向って内傾し，口縁端部は内傾している。底部は円盤充塡か？内面布目痕，丸棒成形，外面ナデ，底部欠落。 18c中
34	焼塩壺 蓋	7.5 — —	褐色		土師質	上面は平担で屈曲し，体部は丸く下っている。内面布目痕，型押し成形，外面ロクロナデ。 18c後半

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
35	焼塩壺 蓋	8.0 7.5 1.9	赤褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		土師質	内面布目痕，型押し成形，外面ナデ。 18c末～19c初
36	砥石	6.7（現長） 5.1（現幅） 1.5（現厚）	黄褐色		粘板岩	長方形を呈し外面は削り落している。表面は使用痕がみられる。片面使用痕あり。
37	銅銭	2.3（直径） 0.1（厚さ） 0.5（穴長）			銅	錆が激しく銘不明，穴は四角。
38	銅銭	2.5（直径） 0.1（厚さ） 0.6（穴長）			銅	「寛永通宝」,通の部分を欠損，裏面背に「文」の字，穴は四角,0.5 mmの端取り。
39	鉄砲玉	1.2（直径）			銅	直径1.2cmの球形を呈し，表面に細かな凹凸がみられる。火縄銃の砲玉と思われる。

第16表　武道館地点　門　跡

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	12.6 — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青味がかった灰白色	伊万里	陶胎染付。くらわんか手，高台部より内湾しながら立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。呉須はややにごった藍色，唐草文。 18c代
2	皿	12.4 5.1 2.9	黄灰色 (胎土に黒粒を含む)	オリーブ黄灰色	京焼系	角皿。体部は内湾しながら立ち上がり，口縁部は丸くおさめられている。角皿の四隅はつまんで広げられている。呉須はこげ茶色と淡青色の梅文，貫入あり。兜巾高台。
3	皿	11.3 6.4 1.8	淡褐色 (胎土に黒粒を含む)		土師質	体部はわずかに内湾しながら外上方へ立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。底部はやや上げ底気味である。内外面ともナデ，底部外面ロクロ糸切り離し，底部指おさえ痕あり。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
4	鉢	18.5 — —	赤褐色	褐色	唐津	刷毛目鉢。体部はやや内湾気味に直線状に上方に立ち上がる。口縁部近くで1段ゆるく屈曲させている。口縁端部は丸くおさめている。内面に1条の凹線をめぐらしている。外面褐釉の上に白釉の平行刷毛目，内面褐釉の上に白釉の波状刷毛目。 17c後半〜18c前半
5	鉢	— 20.0 —	黒褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	茶褐色	備前	体部はやや内湾気味に外上方に立ち上っている。高台は台形で畳付部も施釉されており，貼りつけ高台，内面および高台内面は無釉。
6	軒丸瓦	14.4（直径）	黄褐色 (胎土に白砂・雲母・黒粒を含む)		瓦	「巴」文。周縁部幅は1.8cmであり，内区は尾の長い巴文である。瓦当の接合部はヘラによって刻みを入れ，接合部を押し込んだ痕がみられる。珠文15個，表面は黒褐色で銀粉塗布。 18c前半

第17表　武道館地点　攪　乱

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
1	碗	— 3.7 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は高台から大きく外反し，腰部下半から内湾していく。高台部分はわずかに内湾し，畳付は内傾しながら丸くおさめている。呉須はにごった藍色，底裏面「太明成化年製」のくずし銘。 17c後半
2	碗	12.1 4.1 6.6	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡青色 (内) 黄色がかった灰白色	伊万里	青磁碗。体部は内湾気味に立ち上っており，口縁部は丸くおさめている。呉須は藍色。 18c中
3	碗	11.6 4.4 6.4	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	(外) 淡青色 (内) 青味がかった灰白色	伊万里	青磁碗。くらわんか手。体部は大きく内湾しながら立ち上っている。口縁端部は丸くおさめている。やや高い高台をつけており，高台畳付に4か所の砂目がみられる。呉須はにごった藍色，口縁内面四方襷文，内面見込み五弁花，底裏面「渦福」。 18c中

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
4	碗	10.1 4.1 5.7	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰白色	伊万里	体部は内湾し，中ごろより外上方に立ち上っている。口縁端部は内側より丸くおさめている。高台は内傾した三角形。呉須は藍色，流水文，花文，底裏面「渦福」。 18c代
5	碗	11.1 7.3 6.2	灰白色	やや緑がかった灰白色	伊万里	筒形碗。体部がまっすぐに立ち上がる。口縁端部は内面釉ハギを施し，端部は内面より丸くおさめている。高台は低く三角形。呉須は藍色，連木竹と花文。 18c後半
6	碗	11.8 4.5 6.3	灰色 (胎土に黒粒を含む)	灰色	伊万里	陶胎染付。体部下半は大きく内湾しながら，立ち上がり，口縁部は丸くおさめている。高台は内湾気味の台形高台で，畳付部分に砂が多く付着している。呉須は暗い藍色，口縁外面四方襷文，体部雲文。 18c代
7	碗	— 4.3 —	淡橙褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)	オリーブ淡緑色	唐津	体部は厚くやや内湾しながら斜上方に開き，下半で屈曲して上方に開いている。高台は低く削り出しである。内面オリーブ淡緑色，外面オリーブ淡緑色と白釉，兜巾高台。 17c前半
8	碗	— 5.3 —	黄灰色	褐色がかった灰色	志野	体部は高台付近から斜めに外反し大きく屈曲させて斜上方に立ち上がり，口縁部は外反させている。高台は作り出し高台で，やや上げ底気味となっている。褐色釉により「軍配文」，底部外面に4か所胎土目痕，二次焼成をうけている。 16c代
9	蓋	11.0 4.2 (つまみ) 3.1	灰白色	(外) 青緑色 (内) 灰白色	伊万里	青磁碗蓋。体部はわずかに傾斜をもって水平に開き，体部中ごろより大きく内湾させ，端部は丸くおさめている。つまみは内湾しながら垂直に立ち上がり，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，つまみ内面「渦福」。 18c中
10	蓋	10.4 4.5 (つまみ) 3.2	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	青緑色	伊万里	青磁碗蓋。体部は球形状に開き，端部は丸くおさめている。つまみはやや低く，内面より内湾させて外反させ，端部は丸くおさめている。呉須は藍色，口縁内面四方襷文。 18c中頃

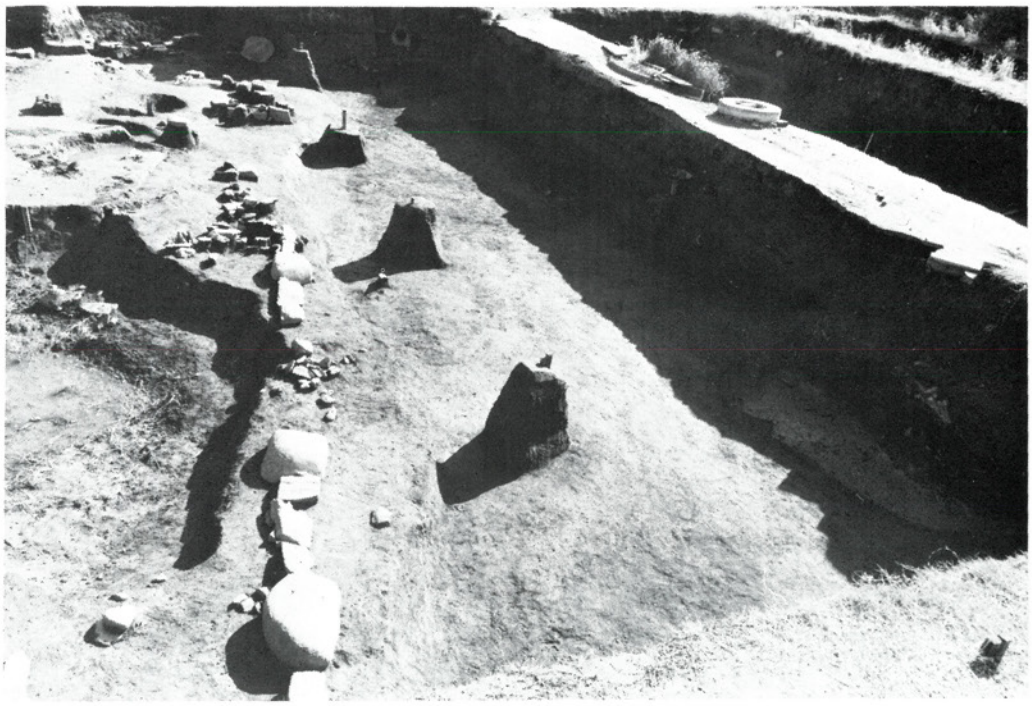
番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調	種別	備考
11	蓋	9.8 4.0（つまみ） 2.8	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部は内湾しながら外方に開き，中ごろより屈曲して垂下し，端部は丸くおさめている。つまみは内湾しながらまっすぐ上方に立ち上がり，端部を丸くおさめている。呉須は藍色，並草葉文，口縁内面雷文，内面見込み「太明年製」の銘。 19c初頭
12	蓋	8.8 0.9（つまみ） 2.2	黄灰白色 （胎土に黒粒を含む）	緑青色	美濃・瀬戸系	受部はやや外反しており，端部は丸くおさめている。蓋のつまみは凝宝子状のやや崩れた形を呈している。ロクロ水引き成形でナデが明瞭に残っている。内面無釉，底部外面ロクロ切り離し。
13	蓋	13.8 4.2 3.2	黄灰白色 （胎土に白砂・黒粒を含む）		不明	体部は中ごろで稜をもち大きく外反し，口縁部は屈曲させて水平に開げている。受部は口縁部よりゆるやかに内湾させ，内面より屈曲させている。つまみ部は内面中央が高く下方へ下りながら内湾し，端部は斜めに傾斜した平坦面をつくる。白釉がかった花びらと，群青がかった藍色の松葉文。
14	蓋	8.1 1.4（つまみ） 3.0	赤褐色	赤茶褐色	不明	受部は外傾し，端部は丸くおさめている。蓋の部分はやや下方に向ってゆるやかに傾斜している。陶質のものでつまみは凝宝子状であり，内外面ともナデ。
15	皿	11.1 3.6 3.1	灰白色 （胎土に黒粒を含む）		伊万里	体部は内湾しながら外上方に開く，端部は丸くおさめている。高台はヘラ削りによってく字形を呈しており，内面畳付も削りにより外傾している。見込蛇ノ目釉ハギ，底部砂付着。削り出し高台。呉須はオリーブ緑色で草文。 17c後半〜18c前半
16	皿	— 8.0 —	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	灰白色	伊万里	体部はわずかに内湾しながら外方に開いている。高台はやや高くわずかに外反し，畳付は丸くおさめている。呉須は藍色，外面蓮弁文，内面見込み松竹梅，櫛目高台。 18c後半
17	皿	14.6 8.8 3.5	灰白色 （胎土に黒粒を含む）	青みがかった灰色	伊万里	体部は高台部より外反し，屈曲してやや内湾して外上方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめている。高台は内傾し断面三角形。呉須はにごった藍色，外面唐草文，内面牡丹唐草文，内面見込み松竹梅，蛇ノ目凹形高台。

番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						18c代
18	皿	— 5.6 —	茶灰色	暗緑色	唐津	厚くやや内湾しながら外方に開いている。高台は台形で高台内面に兜巾を明瞭に残している。鉄釉の草文。 16c後半
19	鉢	— 7.6 —	赤褐色 (胎土に雲母・黒粒を含む)	褐色	唐津	体部は高台部から内傾しながら立ち上っている。高台部は下半で内傾するように，ヘラ削りが行われており，高台内面は斜め下方に向って直線的に開いている。内外面ともロクロナデが明瞭に残っている。 17c後半〜18c前半
20	瓶	9.0 (最大径) 6.9 —	灰白色	灰白色	伊万里	体部はごくわずかに内湾しながら内傾しており，高台部付近で段をもってふくらませ，高台は屈曲して内湾させており，丸みをもたせている。呉須は藍色，松竹梅文，高台畳付に砂付着。 18c代
21	瓶	— — —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	灰色がかった灰白色	伊万里	球形状を呈した瓶。呉須はややにごった藍色，草文，内面にロクロ痕を残している。 18c代
22	香炉	— 7.2 —	灰白色 (胎土に黒粒を含む)	淡緑色	伊万里	青磁香炉。体部はわずかに内湾しながら，ほぼ直線的に上方へ立ち上っている。高台部は2段に中の広い蛇ノ目高台である。内面見込みに墨書がみられるがよみとれない。多量の砂が付着。高台畳付砂付着。 18c代
23	仏飯具	— 4.2 —	淡橙褐色	橙褐色	不明	杯部はやや内湾しながら立ち上っている。脚部中央に1段のふくらみをもっており，高台部は，中央に向ってやや凹んだ状態でロクロメを明瞭に残している。高台無釉。べた高台。
24	徳利	— 8.0 —	黒褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		大谷	体部はやや内湾しながら斜上方に立ち上がり，高台は屈曲して外反し，肥厚させた三角形。内外面ともロクロナデ。 18c後半〜19c初頭
25	徳利	— 4.0 —	黒褐色	茶褐色	大谷	体部はやや内湾した筒形を呈し，口縁部は外側に折りまげて肥厚させ，端部を丸くおさめている。ロクロ痕が明瞭に残っている。

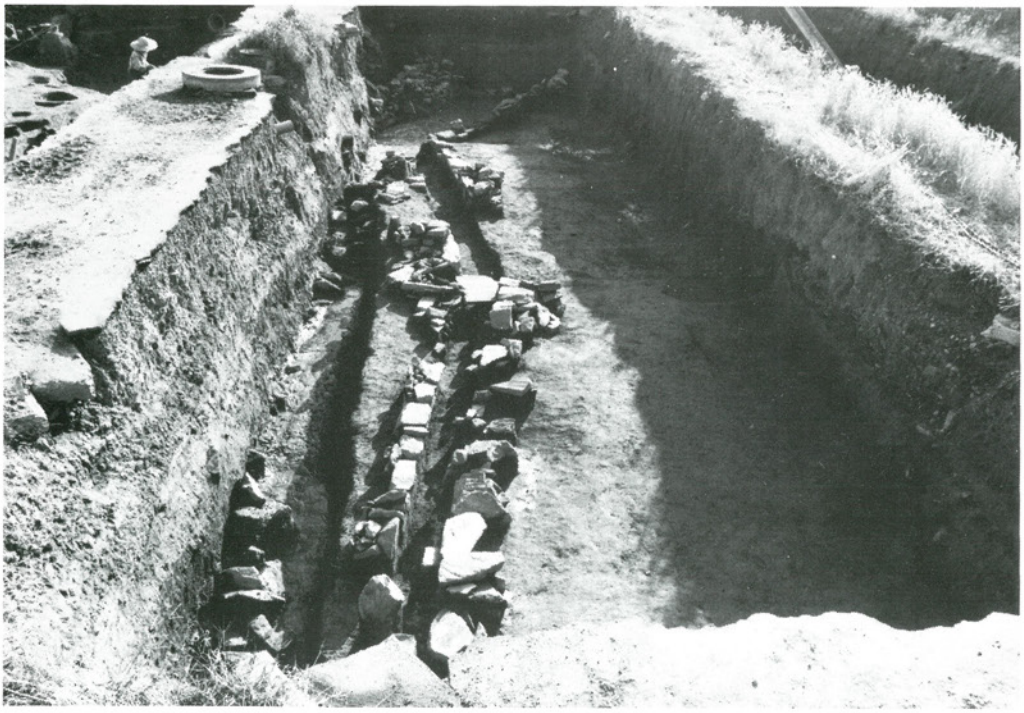
番号	器種	法量(cm) 口径 底径 器高	色調 胎土	色調 色調	種別	備考
						18c後半～19c初頭
26	徳利	— — —	黒灰褐色	黒褐色	大谷	筒形の頸部よりやや内湾しながら外反している。ロクロ成形，「子亥」のヘラ彫り刻印。 18c後半～19c初頭
27	徳利	— — —	赤褐色	黒褐色	大谷	体部は頸部よりやや内湾しながら大きく外反し，体部の肩より屈曲して内湾すると思われる。外面釉ハゼがみられる。ロクロ成形,「佐…」のヘラ彫りの刻印。 18c後半～19初頭
28	灯明皿	9.5 5.0 1.2	赤褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		備前	体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部はやや開き気味に丸くおさめている。シンを置く部分は内面見込みからややくぼんだ状態となり，それより内湾しながら立ち上っている。3か所にシンを置く凹みがあるものと思われる。底部はやや上げ底気味。ロクロナデ。
29	軒丸瓦	16.0（直径）	灰褐色 (胎土に白砂・黒粒を含む)		瓦	「卍」文，型押し成形。瓦当面は高くしっかりしている。表面黒灰褐色，周縁幅2.2cm，縁にしっくいの跡がみられる。
30	軒丸瓦		灰褐色		瓦	「巴」文，瓦当部周縁は欠落の為不明。連珠文は直径0.9cm，数不明。
31	軒丸瓦	14.6（直径）	灰黒色		瓦	「卍」文，型押し成形。瓦当面は低く周縁幅は2.5cmであり，丸部は後からはりつけている。

図　　版

写真図版２　門跡検出状況



写真図版 3　上，築地跡掘り上げ状況（東より撮影）
下，同上基礎部掘り上げ状況（西より撮影）

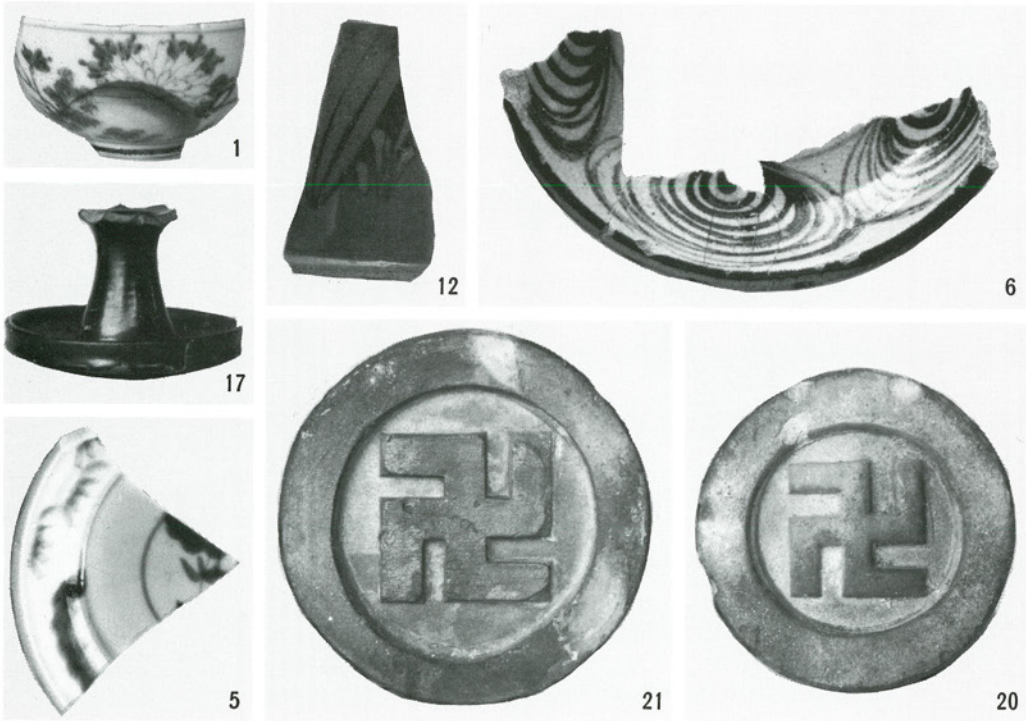


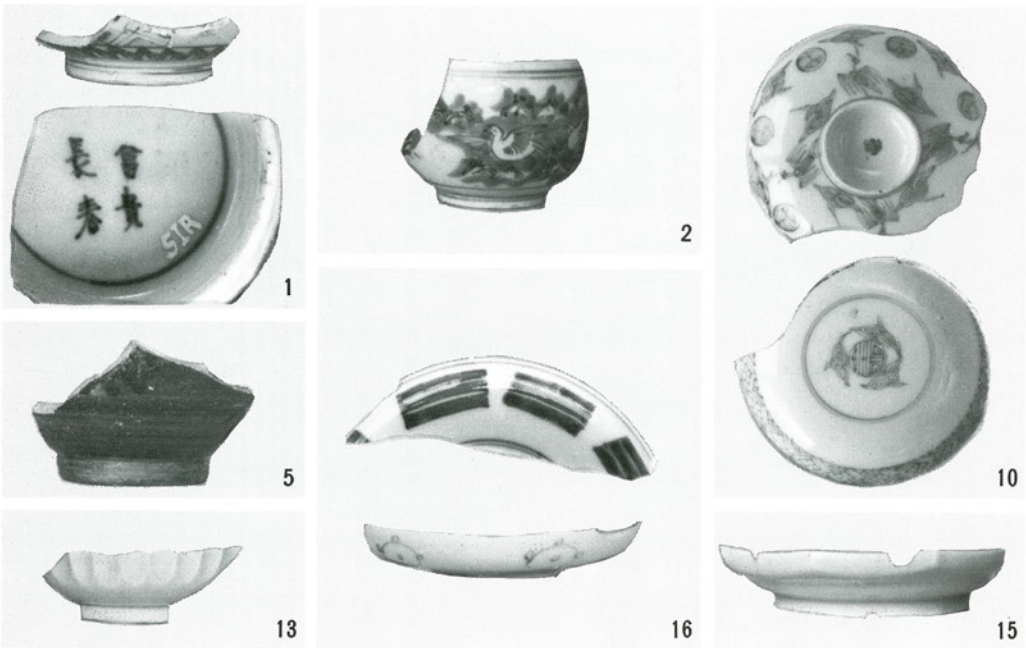
写真図版 4　上，石垣溝跡検出状況（西より撮影）
下，池跡掘り上げ状況（西より撮影）

写真図版 5　上，船着き場掘り上げ状況（東より撮影）
下，　同　　上　（西より撮影）

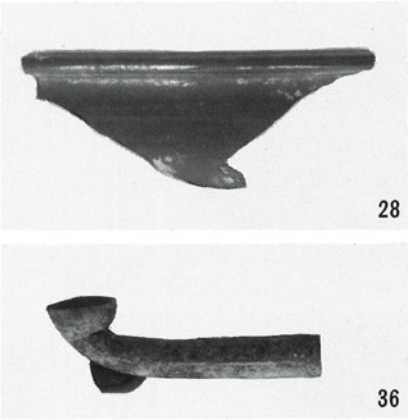
写真図版 6　上，護岸用板列検出状況（西より撮影）
下，　同　上　及び木製品出土状況（北東より撮影）

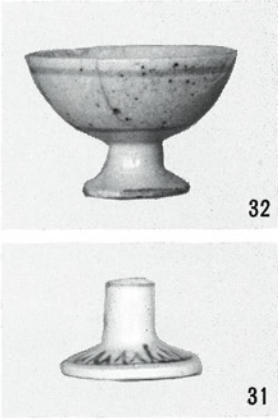
写真図版 7　上，階段状船着き場検出状況（東より撮影）
下，　同　　上　　（北より撮影）

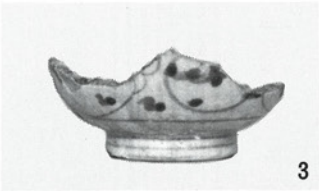


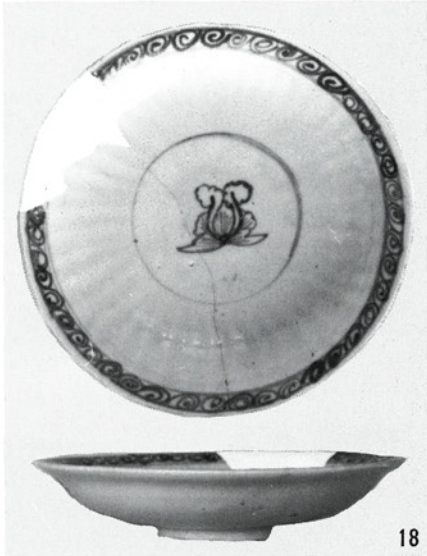


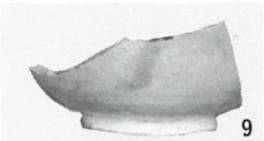
写真図版 8　上，的場地点
下，射場地点川跡覆土上部　その 1

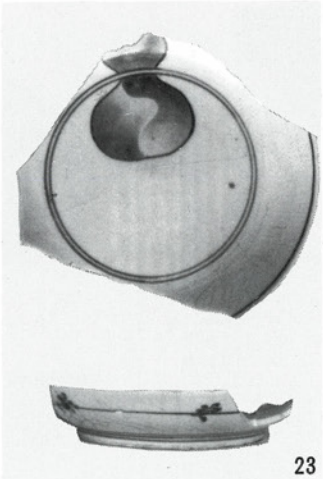


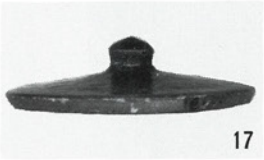


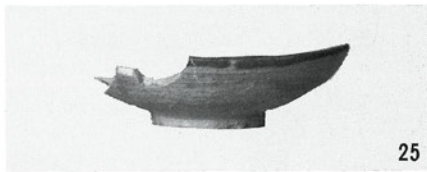


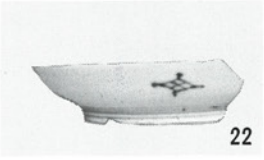




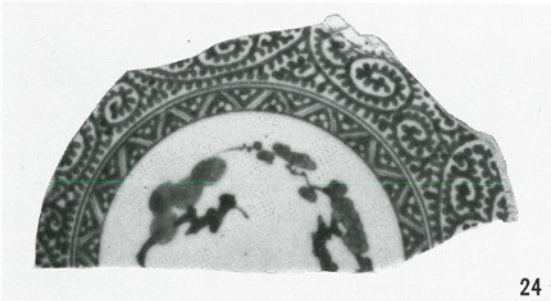


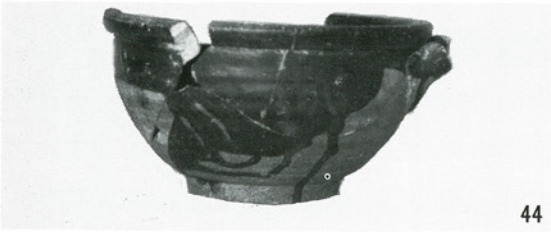


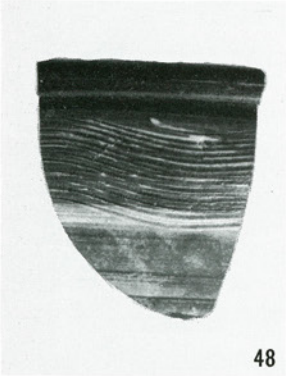


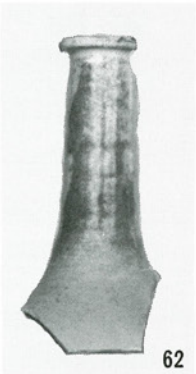


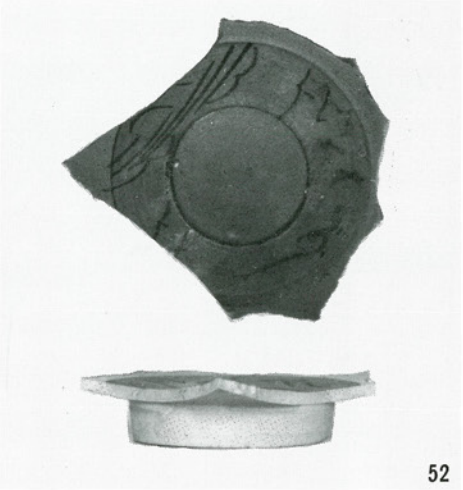
写真図版 9　上，射場地点川跡覆土上部
下，射場地点川跡覆土下部　その 1



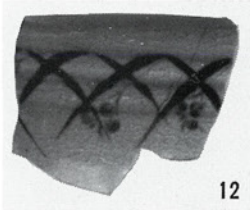


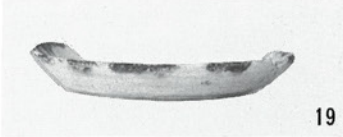


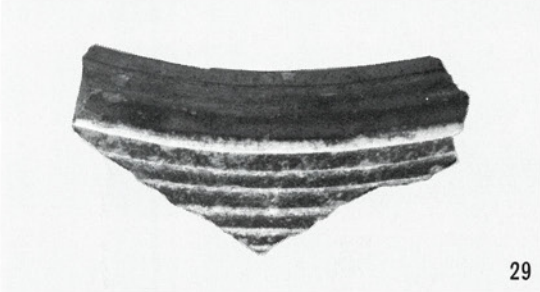


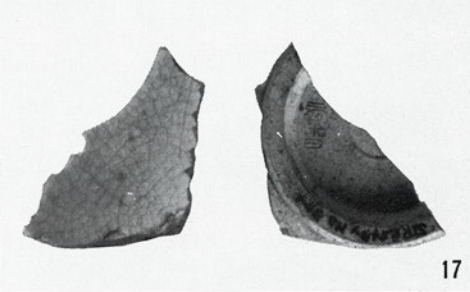


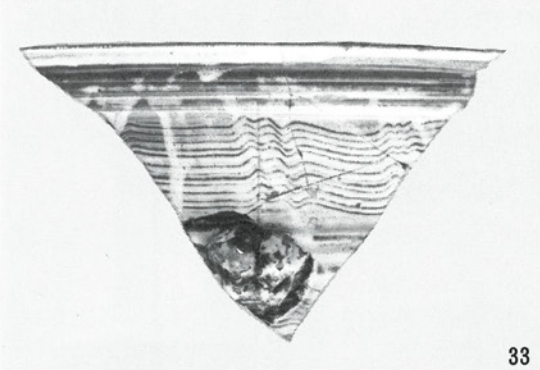
写真図版10　射場地点川跡覆土下部 その２

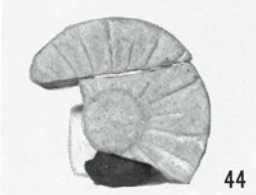


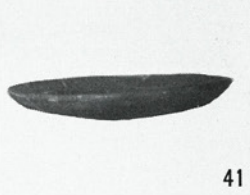




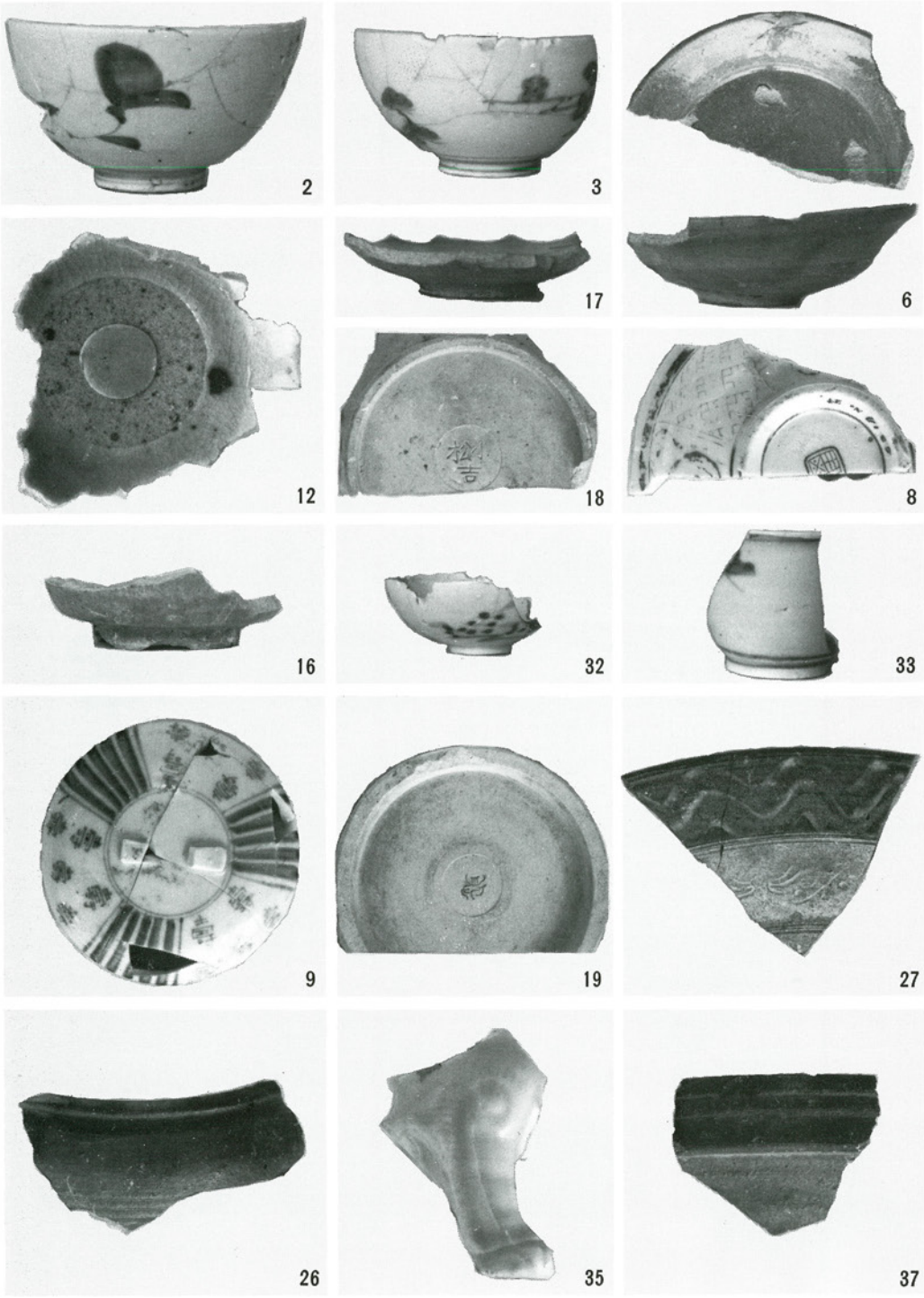






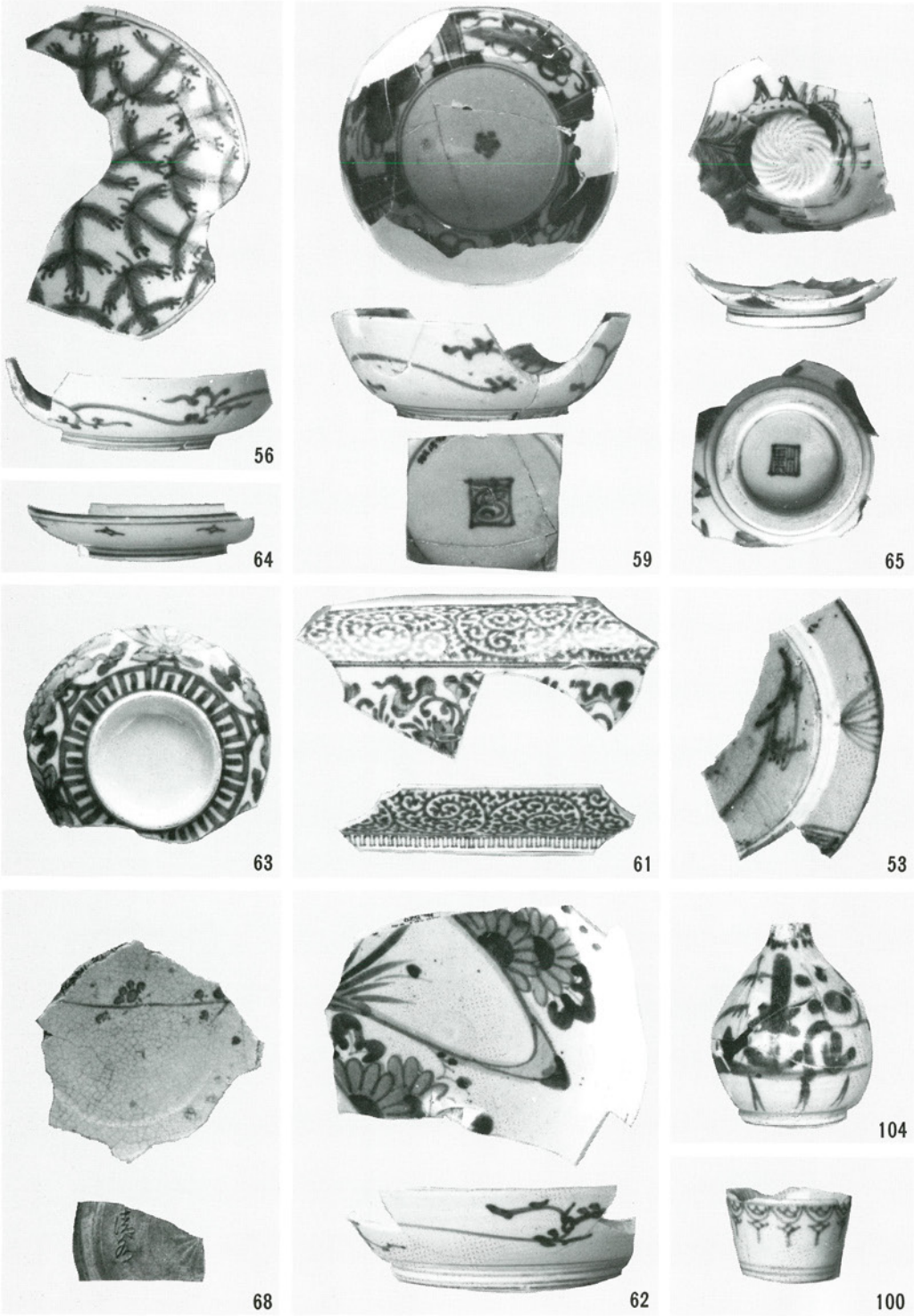


写真図版11　射場地点築提肩部

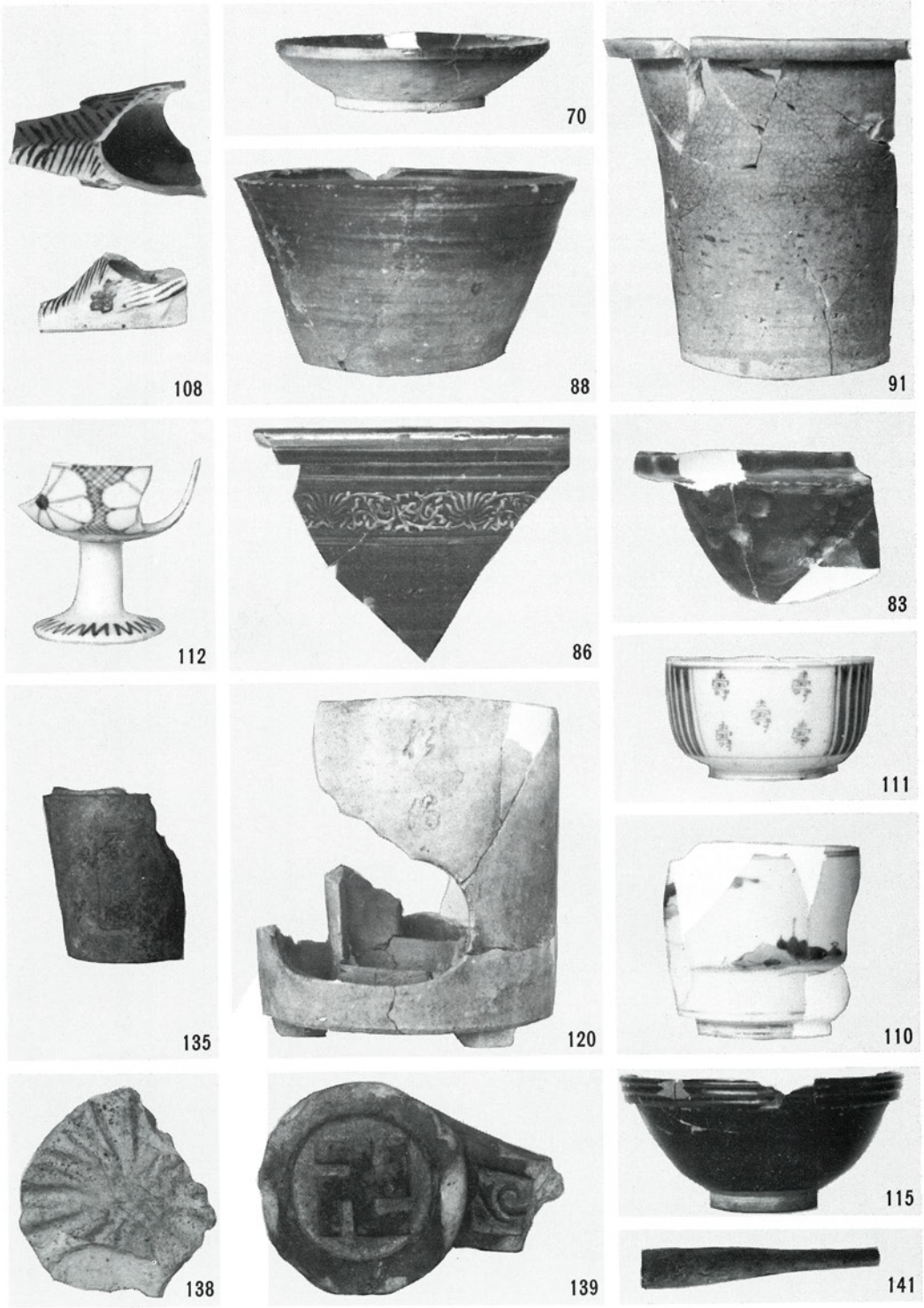


写真図版12　武道館地点第１層

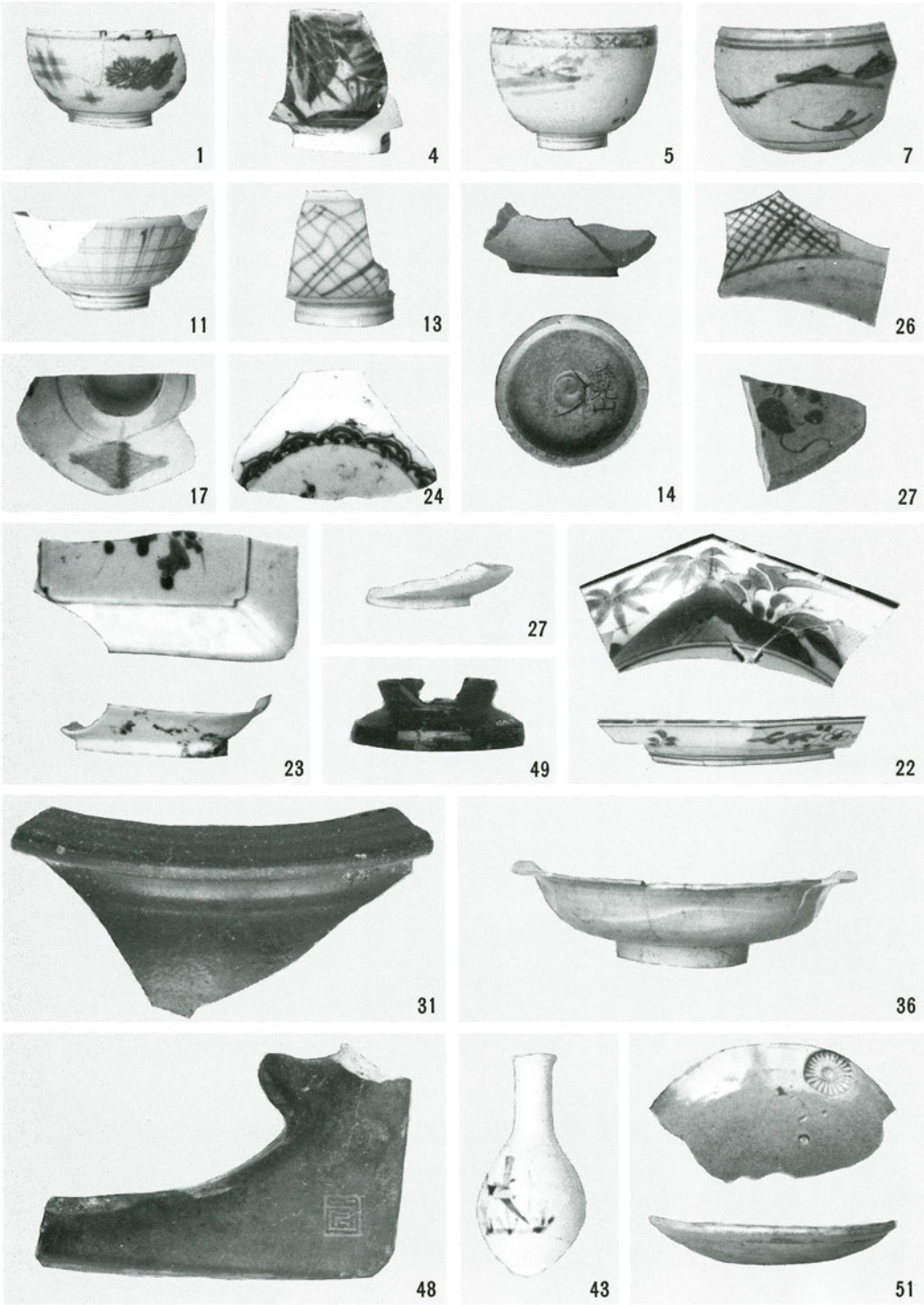
写真図版13　武道館地点川跡覆土上部 その1



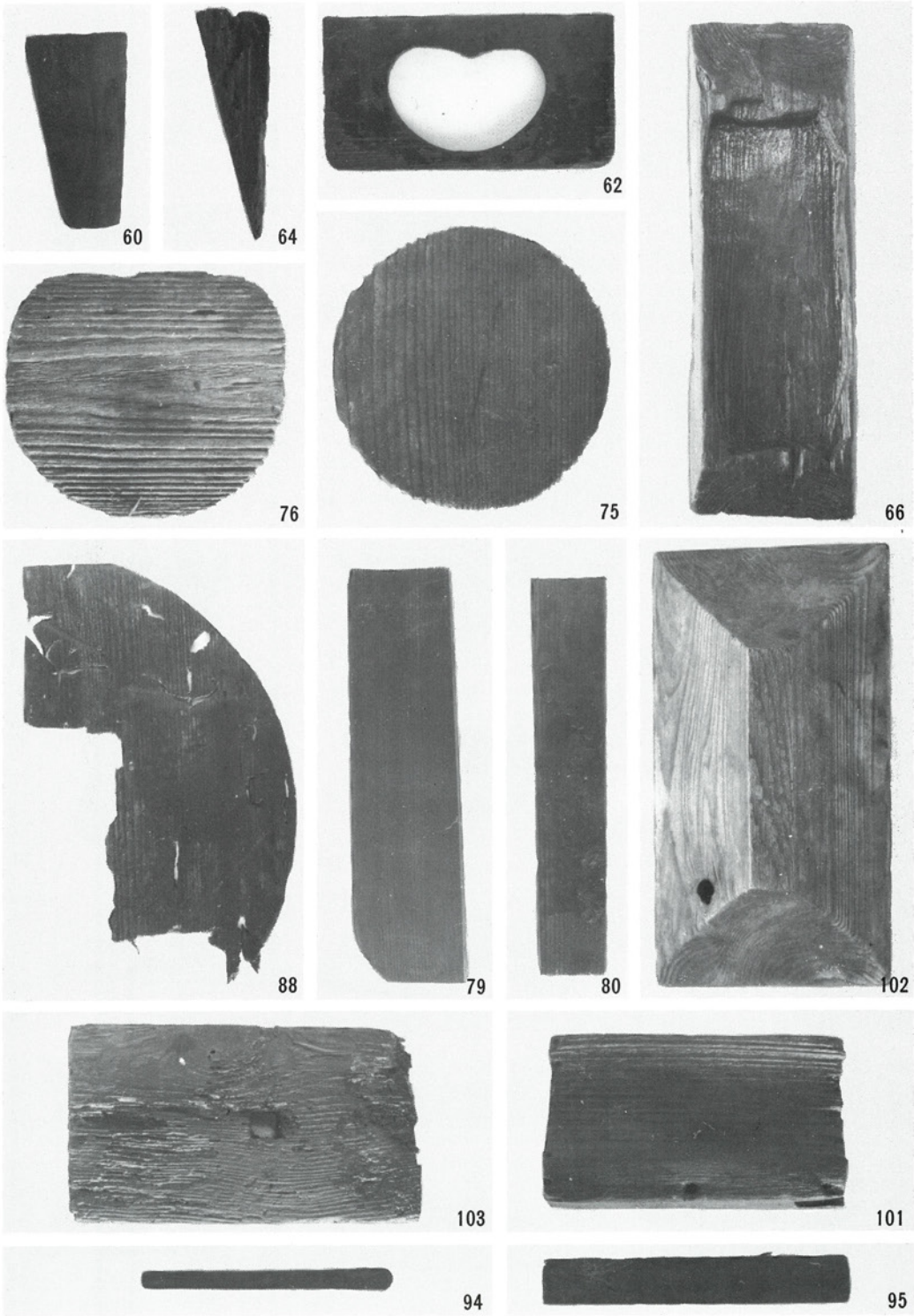
写真図版14　武道館地点川跡覆土上部 その２



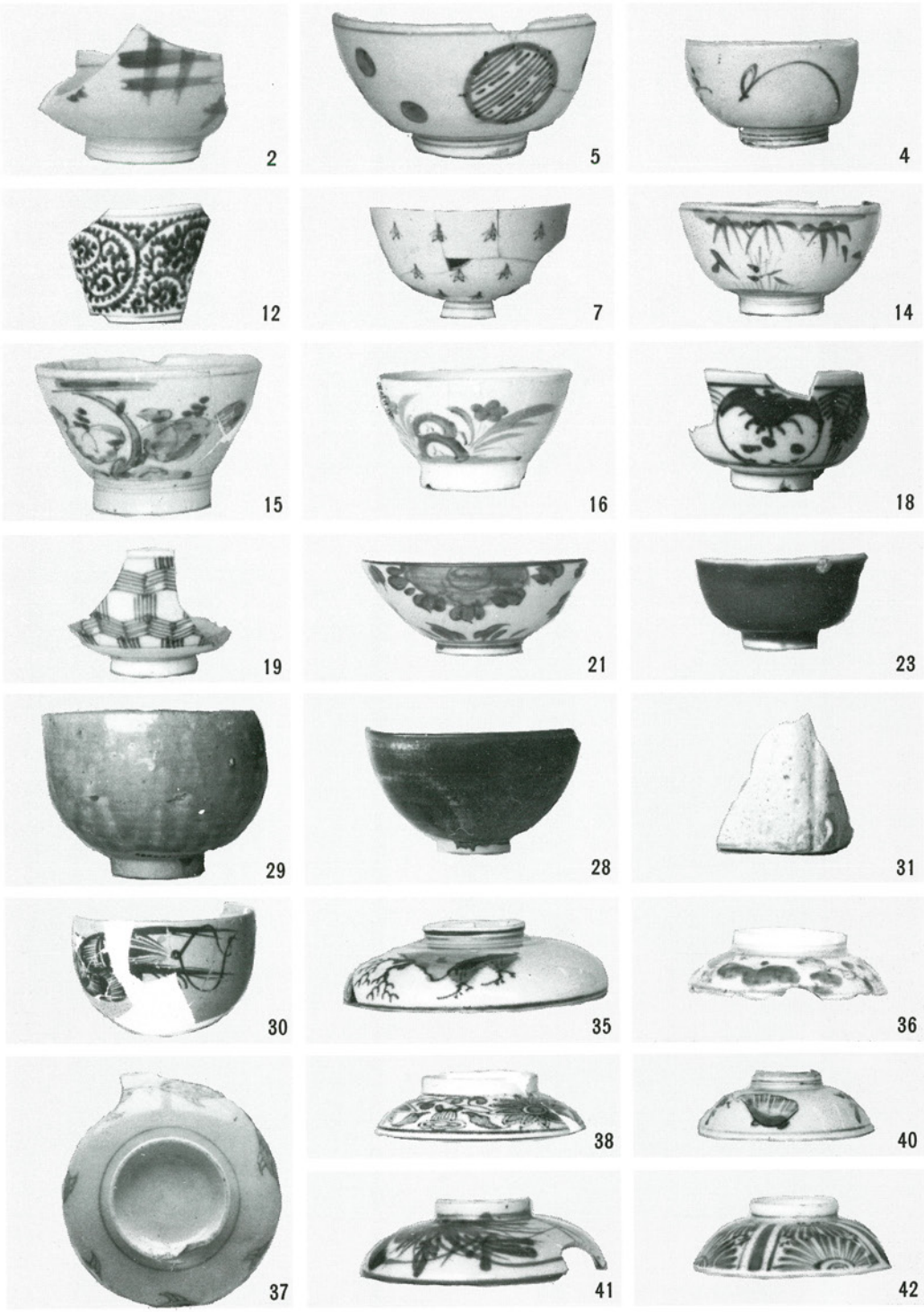
写真図版15　武道館地点川跡覆土上部　その3



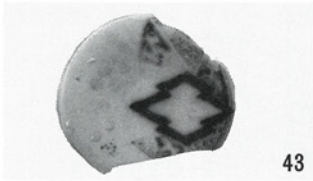
写真図版16　武道館川跡覆土中部 その1

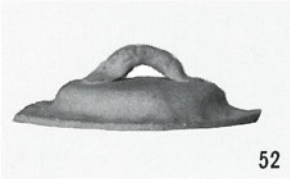


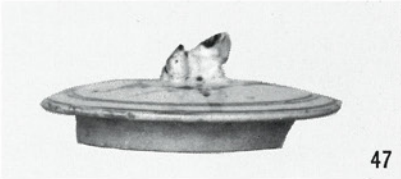
写真図版17　武道館地点川跡覆土中部　その２

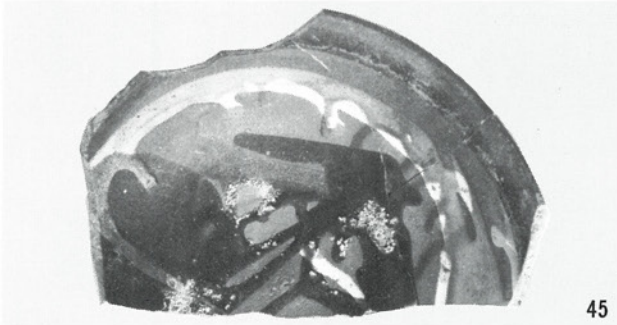


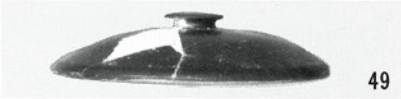
写真図版18　武道館地点川跡覆土下部 その1

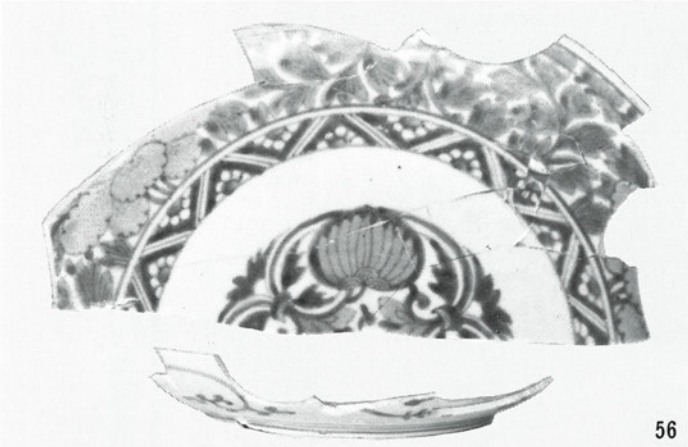


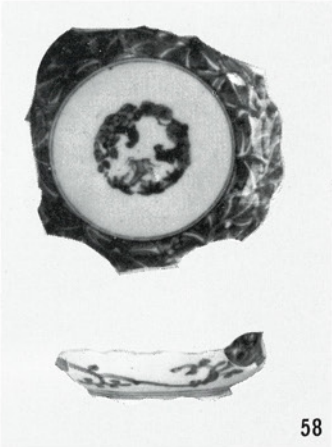


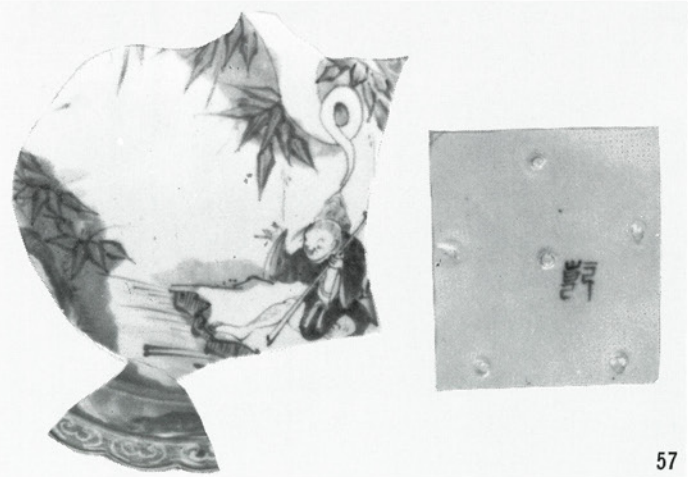




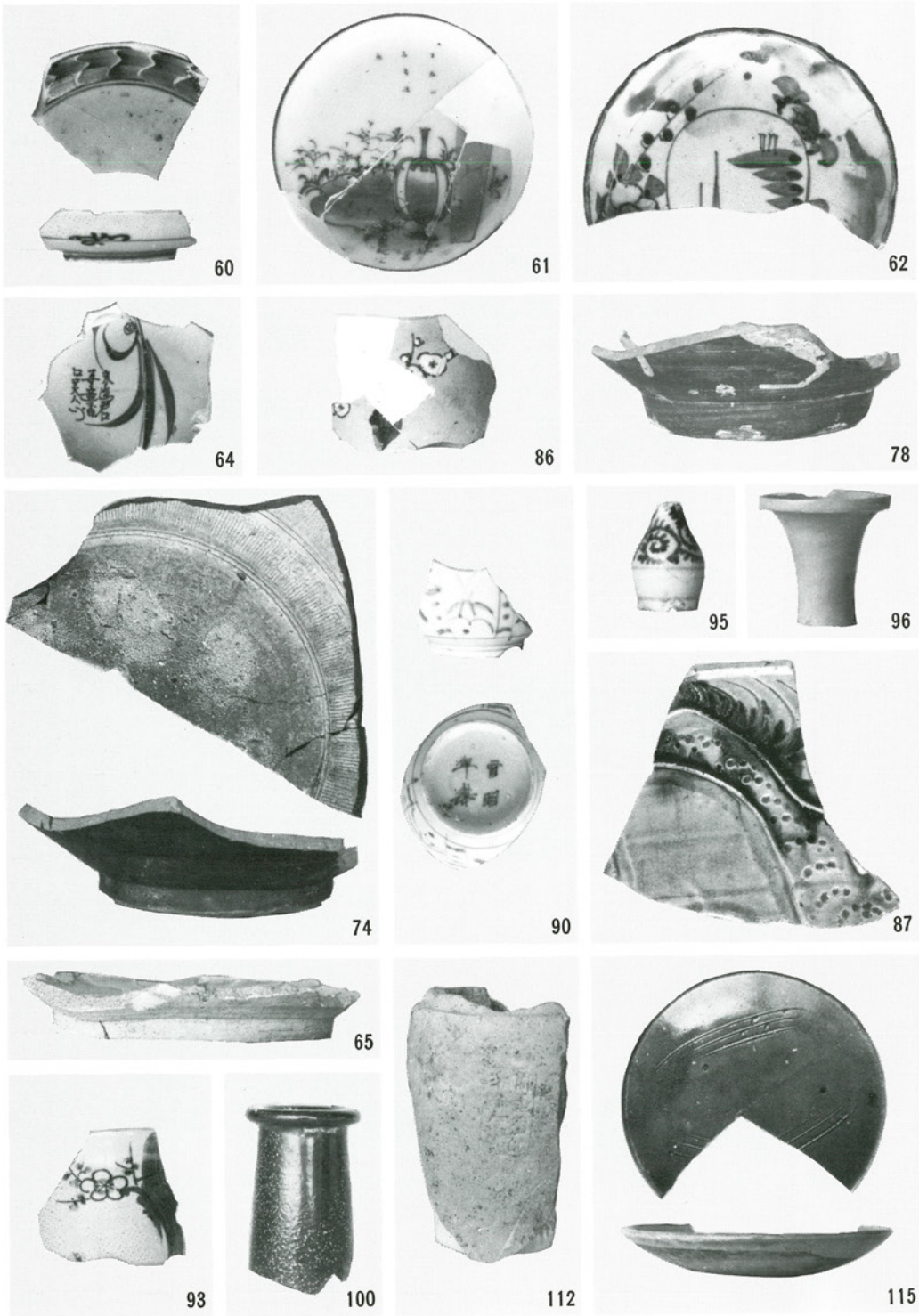




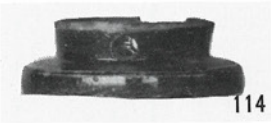


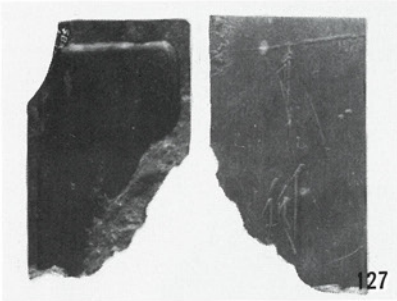


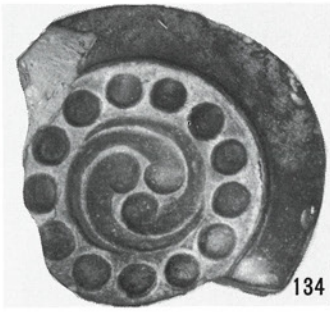
写真図版19　武道館地点川跡覆土下部　その２

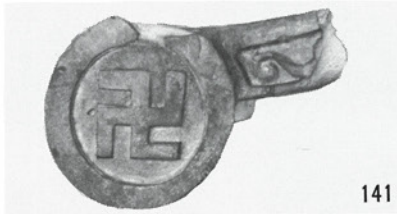


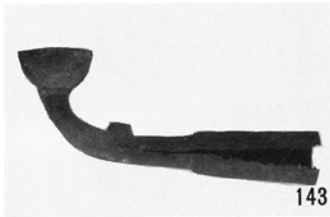
写真図版20　武道館地点川跡覆土下部　その３



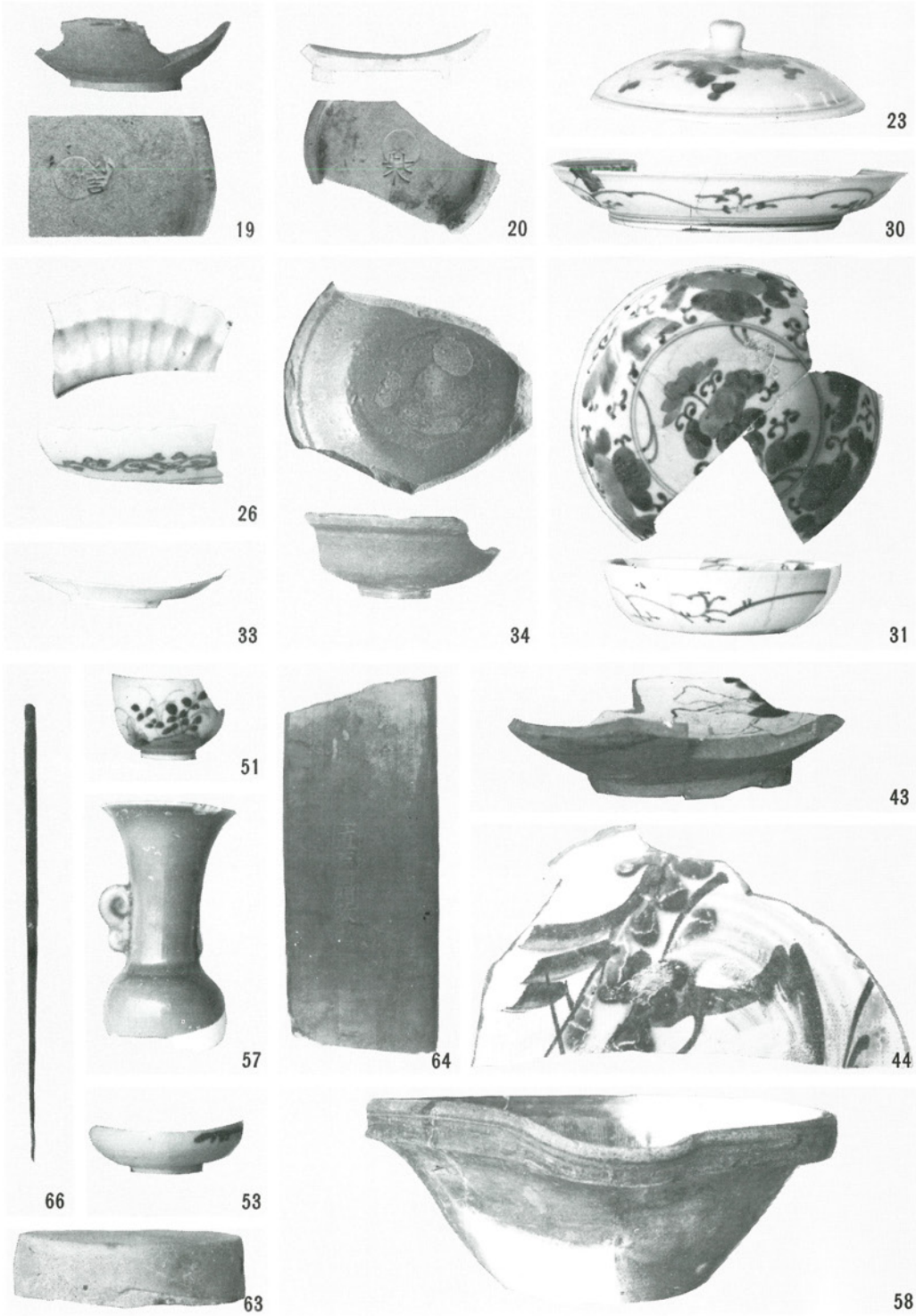






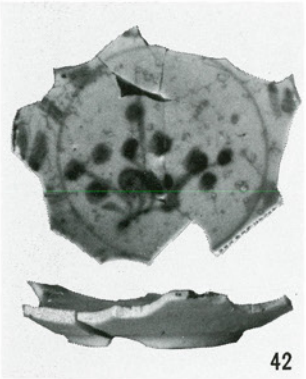


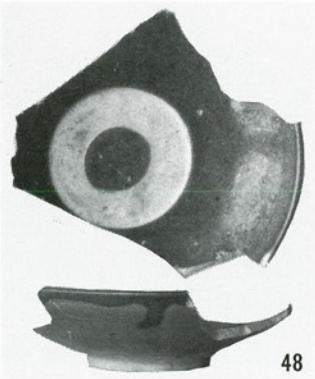
写真図版21　上，武道館地点川跡川跡覆土下部　その4
下，武道館地点護岸板列　その1

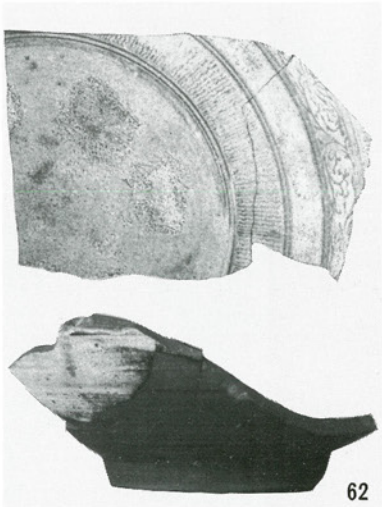


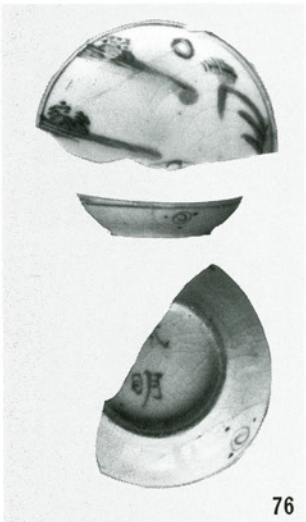
写真図版22　武道館地点護岸板列 その２

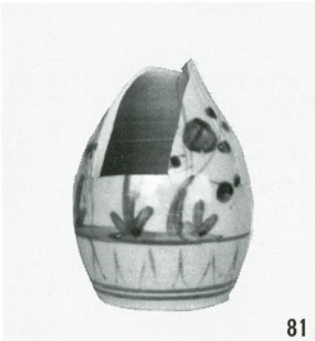
写真図版23　武道館地点築提新段階・船着き場 その1

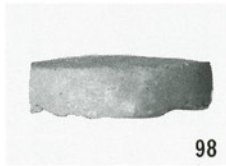


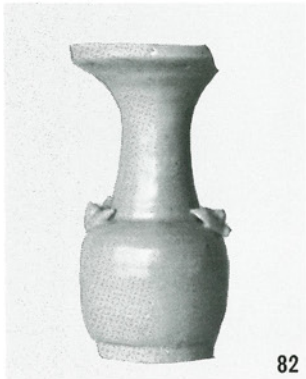


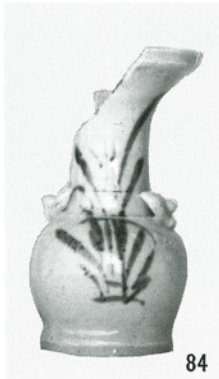




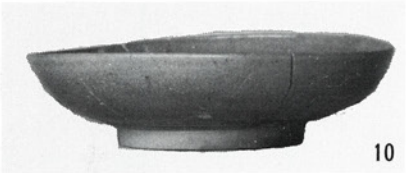


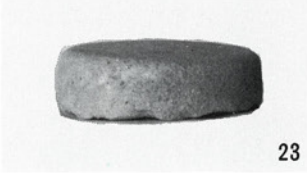


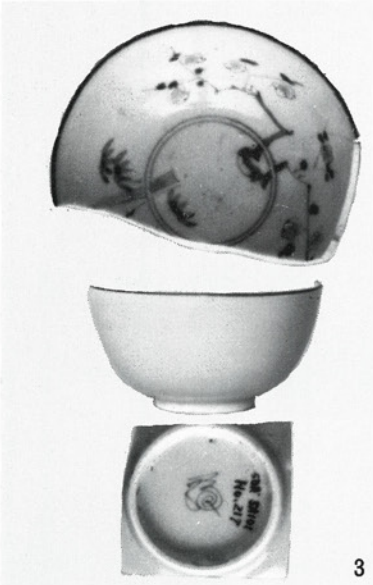


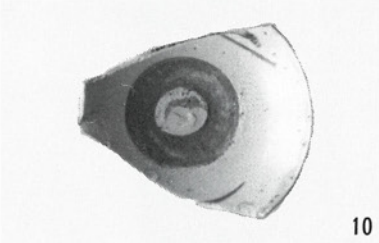


写真図版24　武道館地点築提新段階・船着き場 その２

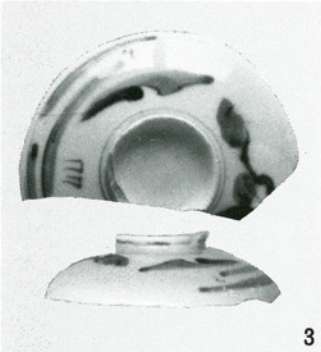


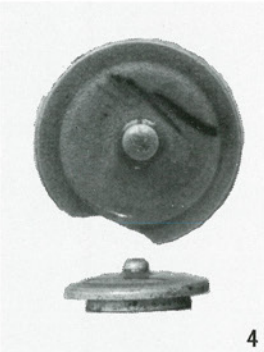


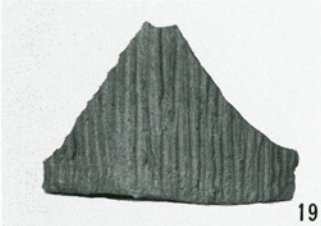


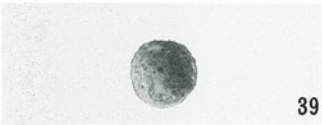


写真図版25　左上　武道館地点築提中段階
中　武道館地点築提古段階
下　武道館地点築地　その1

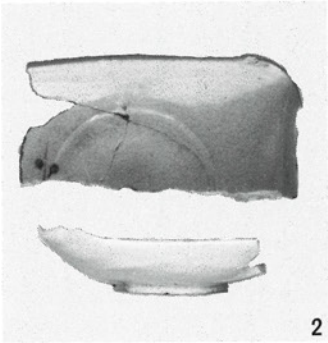


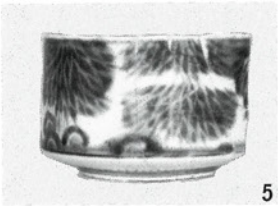


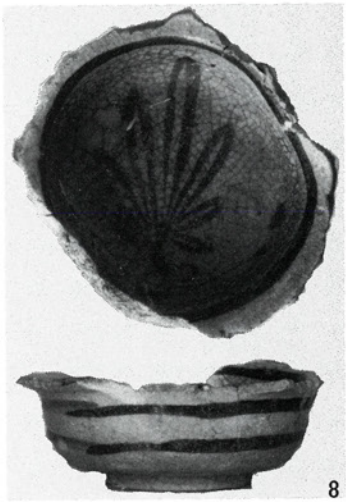


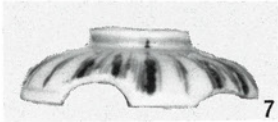


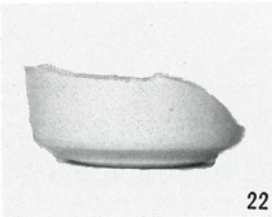
写真図版26　上，武道館地点築地 その２
下，武道館地点石垣溝・池跡











写真図版27　左上　武道館地点門跡
　　中　武道館地点攪乱
　　右下　その他

城ノ内遺跡徳島城跡
お花畠地点発掘調査報告書

（県武道館・弓道場に伴う発掘調査報告書）

昭和63年3月
（1988）

発行年月日	昭和63年1月30日
編集	徳島県教育委員会文化課
発行	徳島県教育委員会
印刷	（協）徳島印刷センター